

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市一1

2 0 0 7

中日本高速道路株式会社 横浜支社
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市一1

2 0 0 7

中日本高速道路株式会社 横浜支社
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路は約170kmにわたって静岡県内を東西につらぬく形で建設が予定されている。本書は、その建設に伴い実施された、静岡市葵区小瀬戸・飯間に所在する小瀬戸遺跡と栗ヶ沢遺跡の発掘調査報告書である。

静岡市域では、周知の遺跡である内牧城跡や庵原城跡においても第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われ、別に報告がなされる予定である。本書で報告されている小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡は、今回の調査で新たに発見された縄文時代～中世の遺跡である。静岡市域の中でも、薺科川中流域の遺跡は、そのほとんどが土器片の出土が報じられているにすぎず、本格的な発掘調査により遺跡の内容が明確となったのは、この小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡が初めてである。

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡が所在する薺科川中流域は、沖積地においては薺科川とその支流による堆積物が厚く、遺跡のあり方が判然としない地域であった。また、丘陵部においては縄文時代の遺跡が散在する地域もある。このような、遺跡を明確に把握し難い要素を含む地域における調査成果は、今後の調査・研究の進展につながる資料を提供したことになるだろう。山間部の道を介して志太平野や川根地域との交通もできる場所ということもあり、静岡市域のみならず、周辺地域との関わりのなかで今回の調査の成果が活かされることを期待するものである。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社横浜支社、静岡市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げる。最後に、現地調査、資料整理に関わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第である。

平成19年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

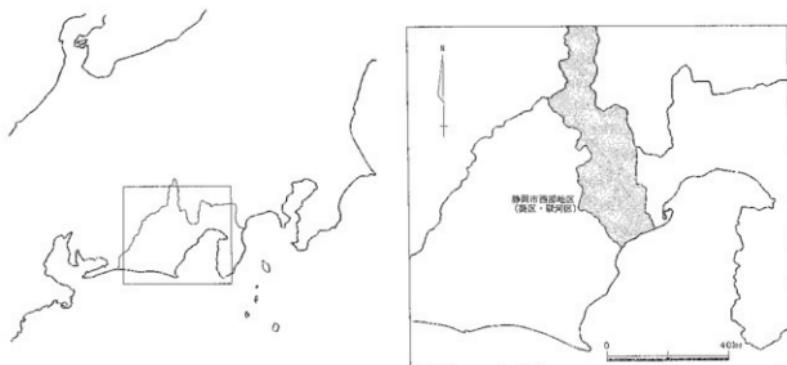
1. 本書は、静岡市葵区域における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県静岡市葵区小瀬戸に所在する小瀬戸遺跡及び同小瀬戸・飯間に所在する栗ヶ沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位で実施している。静岡市域では本書が第1冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　静岡市一
1」とした。
3. 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、静岡市教育委員会社会教育課（現静岡市文化スポーツ部文化財課）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
4. 現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第1章に明記した。
 - (1) 小瀬戸遺跡

確認調査：平成11年4月～7月　青木　修
本調査：平成14年2月～平成16年3月　川上　努、大畑　要、三井文洋、増田充弘
資料整理・報告書作成：平成16年4月～平成17年3月　川上　努
平成17年4月～平成18年3月　河合　修、鈴木淑子（7月～）
平成18年4月～平成19年3月　河合　修、鈴木淑子
 - (2) 栗ヶ沢遺跡

確認調査：平成13年5月～8月　大畑　要、大林　元
平成14年11月～12月　川上　努
本調査：平成13年4月～12月　大畑　要、大林　元
資料整理・報告書作成：平成16年4月～平成17年3月　川上　努
平成17年4月～平成18年3月　河合　修、鈴木淑子（7月～）
平成18年4月～平成19年3月　河合　修、鈴木淑子
5. 本書の執筆は第1章第1節を及川 司が、第2章第4節、第5節2・4・6・8・10、第4章1・2を諂谷昌彦が、第1章第1節2の一部（古墳時代）、第2章第5節11の一部（銭貨、石器・石製品）を鈴木淑子が、他を河合が行った。
6. 調査における協力者等は、文末に記載した。
7. 国産陶器については井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）、藤沢良祐氏（愛知学院大学）に、貿易陶磁については小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）に指導いただいた。
8. 現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。
9. 本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。
10. 脆弱遺物の取り上げ及び保存処理、木製品の樹種同定は、当研究所保存処理室が実施した。
11. 調査の概要是、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
12. 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
13. 発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1. 座標は平面直角座標第Ⅲ区系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2. 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。
例) SF16 (SF: 遺構の種別 16: 遺跡内の遺構種類別通し番号)
SB: 壴穴住居跡 SH: 挖立柱建物跡 SD: 溝状遺構 SF: 土坑
SP: SB外の小穴 P: SB内のピット
3. 遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。
4. 遺物番号は、種類ごとに通し番号を付している。
5. 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1992）を使用した。
6. 本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



目 次

序／例言／凡例／目次

第1章 総 論	1
第1節 静岡市西部地区の位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
第2節 調査に至る経緯	9
第3節 確認調査	11
1 調査の体制	11
2 確認調査の方法と経過	11
3 各地点の概要	13
第4節 本調査	18
1 本調査の方法と経過	18
2 本調査の概要	18
第5節 資料整理	19
1 資料整理の体制	19
2 資料整理の方法と経過	20
第2章 小瀬戸遺跡（第二束名N473—3地点）	21
第1節 位置と環境	21
1 位置と地理的環境	21
2 歴史的環境と調査歴	21
第2節 調査の方法と経過	22
1 発掘調査の方法	22
2 発掘調査の経過	23
3 資料整理の方法と経過	25
第3節 概 要	25
1 地 形	25
2 土 層	25
3 遺構・遺物の概要	27
第4節 下層遺構と出土遺物	27
1 下層遺構	29
2 下層遺構出土の遺物	49
第5節 上層遺構と出土遺物	65
1 A区水田	65
2 A区水田面出土の遺物	75
3 B区水田	77

4	B区水田面出土の遺物	82
5	C区水田	82
6	C区水田面出土の遺物	85
7	D区水田	85
8	D区水田面出土の遺物	87
9	E区水田	88
10	E区水田面出土の遺物	97
11	その他の遺物	102
第3章 栗ヶ沢遺跡 (第二東名No.74—2地点)		152
第1節 位置と環境		152
1	位置と地理的環境	152
2	歴史的環境と調査歴	152
第2節 調査の方法と経過		152
1	発掘調査の方法と経過	152
2	資料整理の方法と経過	153
第3節 概要		154
1	地形と土層	154
2	遺構・遺物の概要	154
第4節 遺構と遺物		154
1	A区の遺構と出土遺物	154
2	B区の遺構と出土遺物	156
3	C区の遺構と出土遺物	158
4	D—1区の遺構と出土遺物	158
5	D—2区の遺構	162
第4章まとめ		163
1	E区下層遺構の性格と年代	163
2	E区下層遺構出土遺物について	164
3	戦国時代の水田遺構	166
4	丘陵部の縄文時代遺構	166

写真図版

抄録

挿図目次

総 論

第1図	静岡市南部の地質	1
第2図	静岡市南部の地形と地名	2
第3図	周辺の遺跡分布図	7
第4図	第二東名の路線と対象地点	12
第5図	各地点対象位置図1	14
第6図	各地点対象位置図2	16
小瀬戸遺跡		
第7図	本調査の位置と周辺の遺跡	21
第8図	調査区と周辺地形図	23
第9図	グリッド配置図	24
第10図	A～E区土層相関図	26
第11図	下層遺構全体図	28
第12図	掘立柱建物SH 1・3付近平面図	29
第13図	掘立柱建物SH 1 平面・断面図1	30
第14図	掘立柱建物SH 1 平面・断面図2	31
第15図	掘立柱建物SH 2・6付近平面図	32
第16図	掘立柱建物SH 4・5付近平面図	33
第17図	掘立柱建物SH 2 平面・断面図	34
第18図	掘立柱建物SH 3 平面・断面図	35
第19図	掘立柱建物SH 4 平面・断面図1	36
第20図	掘立柱建物SH 4 平面・断面図2	37
第21図	掘立柱建物SH 5 平面・断面図	38
第22図	掘立柱建物SH 6 平面・断面図	39
第23図	道状遺構・土手状遺構等配置図	41
第24図	土坑SF 2 平面・断面図	43
第25図	土坑SF 3 平面・断面図	44
第26図	小穴SP251平面・断面図	46
第27図	小穴SP299平面・断面図	47
第28図	掘立柱建物SH 1付近遺物出土状況	48
第29図	掘立柱建物SH 2付近遺物出土状況	49
第30図	掘立柱建物SH 3～5付近遺物出土状況	50
第31図	道状遺構遺物出土状況	51
第32図	E区遺構出土遺物区分図	52
第33図	下層遺構流路・遊水池区分図	53
第34図	出土遺物実測図1（土器1）	56
第35図	出土遺物実測図2（土器2）	57
第36図	出土遺物実測図3（土器3）	58
第37図	出土遺物実測図4（土器4）	59

第38図	出土遺物実測図5（土器5）	60
第39図	出土遺物実測図6（土器6）	61
第40図	出土遺物実測図7（土器7）	62
第41図	出土遺物実測図8（土器8）	63
第42図	出土遺物実測図9（土器9）	64
第43図	上層遺構全体図	66
第44図	遺構検出面の地形	67
第45図	大畦畔位置図	68
第46図	大畦畔と田面位置図	69
第47図	等高線に直交する畦畔断面図1	70
第48図	等高線に直交する畦畔断面図2	71
第49図	A区トレントチ土層柱状図	72
第50図	A区大畦畔に伴う杭列位置図1	73
第51図	A区杭列断面図	74
第52図	A区大畦畔に伴う杭列位置図2	75
第53図	出土遺物実測図10（土器10）	76
第54図	B区トレントチ土層柱状図・断面図	78
第55図	B区大畦畔に伴う杭列位置図	79
第56図	B区杭列断面図	80
第57図	出土遺物実測図11（土器11）	81
第58図	C区トレントチ土層断面図	83
第59図	D区トレントチ土層断面図	86
第60図	D区大畦畔に伴う杭列位置図	87
第61図	D・E区トレントチ土層断面図1	89
第62図	D・E区トレントチ土層断面図2	90
第63図	E区トレントチ土層断面図1	92
第64図	E区トレントチ土層断面図2	93
第65図	E区大畦畔に伴う杭列位置図	95
第66図	出土遺物実測図12（土器12）	96
第67図	出土遺物実測図13（土器13）	98
第68図	出土遺物実測図14（土器14）	99
第69図	出土遺物実測図15（土器15）	101
第70図	出土遺物実測図16（土器16）	103
第71図	出土遺物実測図17（土器17）	104
第72図	出土遺物実測図18（木製品1）	105
第73図	出土遺物実測図19（木製品2）	106
第74図	出土遺物実測図20（木製品3）	107
第75図	出土遺物実測図21（木製品4）	108
第76図	出土遺物実測図22（木製品5）	109

第77図	出土遺物実測図23（金属製品1）	111	第82図	A区遺構分布図	155
第78図	出土遺物実測図24（金属製品2）	112	第83図	B・C区遺構分布図	156
第79図	錢貨拓影	113	第84図	B区SD 1土層断面図	157
第80図	出土遺物実測図25（石器・石製品）	114	第85図	D-1区遺構分布図	159
栗ヶ沢遺跡			第86図	D-2区遺構分布図	160
第81図	周辺地形と各調査区	153	第87図	出土遺物実測図	161

挿表目次

総 論

第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	静岡地区現地調査の体制	10
第3表	調査実施期間	17
第4表	静岡地区資料整理の体制	20
小瀬戸遺跡		
第5表	土器・陶磁器觀察表	116
第6表	木製品一覧表	145
第7表	金属製品一覧表	146
第8表	錢貨觀察表	147
第9表	石器・石製品一覧表	147
第10表	掘立柱建物(SH) 計測表	147

第11表	溝(SD) 計測表	148
第12表	流路(SR) 計測表	148
第13表	土手状遺構計測表	148
第14表	道状遺構計測表	148
第15表	小穴(SP) 計測表	149
第16表	畦畔(SK) 計測表	151
栗ヶ沢遺跡		
第17表	土器觀察表	162
第18表	石器・石製品一覧表	162
第19表	金属製品一覧表	162
第20表	錢貨觀察表	162

写真目次

総 論

写真1	本調査の状況（小瀬戸遺跡）	18	写真2	整理作業の状況	20
-----	---------------	----	-----	---------	----

写真図版目次

小瀬戸遺跡

図版1	小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡遠景（南より）
	下層遺構全景
図版2	SH 1・3、道状遺構2（西より）
	SH 2、SD16～22、道状遺構3（北西より）
図版3	SH 4・5（西より）
	SH 6、SD21、道状遺構6（西より）
図版4	SD14（西より）
	土手状遺構1・2、SR8（南東より）
図版5	SP251半截状況（南より）
	SP299充掘状況
	遺物出土状況（灰釉陶器）

遺物出土状況（灰釉陶器）

図版6	A区水田面全景
	SK 1・4・5
図版7	SK 2・3、SD 1～3（西より）
	SR 9、SD 4（南より）
図版8	SK 8（西より）
	杭列断面（北より）
図版9	B区水田面全景
	SK10・11、SR4、SD 5～7（東より）
図版10	SK10全景
	SK10近景

- 図版11 SK10杭列断面
　　遺物出土状況（漆椀）
　　遺物出土状況（付札状木製品）
- 図版12 C区水田面全景
　　SK14・15（東より）
- 図版13 SK16、SR5
　　杭列断面（南東より）
- 図版14 D区水田面全景
　　SR 6、SK17（北より）
- 図版15 SK17、SD 8（東より）
　　E区水田面全景
- 図版16 E区南端部水田完掘状況（西より）
　　SR 7（西より）
- 図版17 E区北端部水田完掘状況（東より）
　　SF 1 貯水穴、SD 9 導水溝（南東より）
- 図版18 出土遺物 1（土器1）
- 図版19 出土遺物 2（貿易陶磁）
- 図版20 出土遺物 3（土器2）
　　出土遺物 4（土器3）
- 図版21 出土遺物 5（土器4）
　　出土遺物 6（土器5）
- 図版22 出土遺物 7（土器6）
　　出土遺物 8（土器7）
- 図版23 出土遺物 9（土器8）
　　出土遺物10（土器9）
- 図版24 出土遺物11（土器10）
　　出土遺物12（土器11）
- 図版25 出土遺物13（土器12）
- 出土遺物14（土器13）
- 図版26 出土遺物15（土器14）
　　出土遺物16（土器15）
- 図版27 出土遺物17（土器16）
　　出土遺物18（土器17）
- 図版28 出土遺物19（土器18）
　　出土遺物20（土器19）
- 図版29 墨書き器
　　石器・石製品
- 図版30 木製品（付札状木製品・栓・箸・曲物）
- 図版31 木製品（漆椀・桶・板材）
- 図版32 木製品（板材）
- 図版33 木製品（板材・柱根）
- 図版34 金属製品（鉄鎌・釘・鉄砲玉・刀子）
- 図版35 金属製品（キセル・火打金・火箸・釘・こうがい・銭貨）
- 図版36 銭貨
- 栗ヶ沢遺跡
- 図版37 SF 1・2（西より）
　　SX 1（西より）
- 図版38 SD 1 遠景（西より）
　　SD 1 近景（北より）
- 図版39 SD 2（東より）
　　SF 5（北西より）
- 図版40 出土土器
　　出土金属製品
　　出土石器

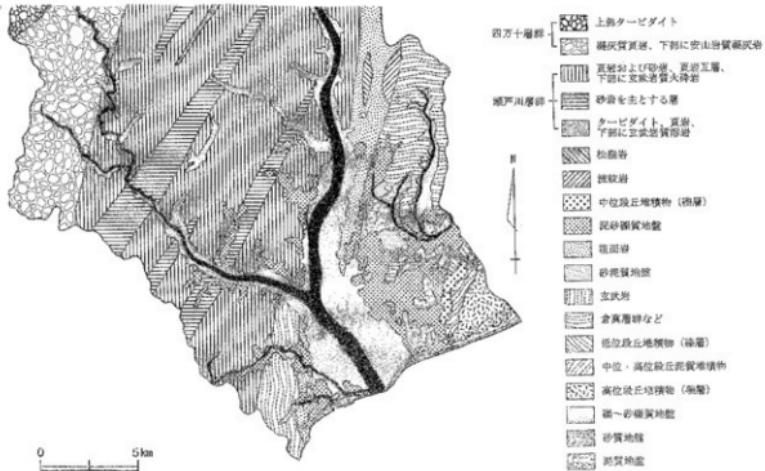
第1章 総論

第1節 静岡市西部地区の位置と環境

1 地理的環境

静岡市西部地区（静岡市葵区・駿河区）は、静岡県のほぼ中央に位置する。この地域は、最北端を間ノ岳（3,189.3m）に代表される3,000m前後から2,000m台後半の急峻な山脈（赤石山脈）とし、最南端を安倍川・藁科川が形成した扇状地とする、南北におよそ100kmを測る広大な地域である。行政界としては、北側に長野県・山梨県、東に静岡市東部地区（静岡市清水区）、西に川根本町や川根町・藤枝市・岡部町、南に焼津市と接している。人口集中地区は市域の約5.4%にあたり、南部に広がる静岡平野に集中している。

丘陵部の、奥側にあたる篠山構造線以北の部分は、約1億年前に形成された中生界白亜系四十万層群に属する層で構成されている。北側は千枚岩質黒色頁岩、下部ターピタイト・下部に玄武岩質溶岩を主体とし、南側では凝灰質頁岩・下部に安山岩質凝灰岩を主体とする。これらの層は破碎しやすく、河川に大量の土砂を供給する原因ともなっている。なお、藁科川の源流は、この地域の南側にある。平野部にはほど近い部分は新第三系中新統と約5,000万年前に形成された古第三系瀬戸川層群に属する層で構成されており、安倍川東岸に走る十枚山構造線と糸魚川一静岡構造線によって、大きく三つの地域に分けることができる。十枚山構造線以西の丘陵は古第三系瀬戸川層群の頁岩および砂岩、頁岩互層、下部に玄武岩質火砕流に砂岩を主とする層が縞状に入る地域が南側に広くあり、北側を黒色頁岩で構成される。十枚山構造線と糸魚川一静岡構造線間に、新第三系中新統の粗面岩が主となり、北に行くにしたがって粗面岩や流紋岩から主として火山破屑物からなる層（御坂層群など）に変化する。安倍川の源流はこの地域にある。糸魚川一静岡構造線以東は、倉真層群や礫岩、砂岩、シルト岩、それらの互層（相良層群など）によって構成される。一方、安倍川下流西岸にある高草山山塊の南側は玄武岩からなり、駿河湾



第1図 静岡市南部の地質(国土庁ほか『土地保全図』22より再トレース)

に面する部分には枕状溶岩が観察される。これらの地質で構成される丘陵は、平野部の周辺でも標高400m前後と比較的高く、小河川によって解析された谷を多く持つ複雑な地形を呈している。これら丘陵部の植生は、高山を除く地域ではヤツツバキ、ブナ、ミズナラ、クリ等の広葉樹林に、スギ、ヒノキなどの針葉樹の人工林とが交互に入り込み、さらに低位の斜面部を中心としてミカン、茶などの畠に利用されている。

平野部は安倍川と薬科川の合流点以南から、平野部に突出した戦機山を東に回りこむようなかたちで発達した扇状地である。これらの河川からもたらされた砂礫やシルトが厚さ100m以上にわたって堆積しているとされ、その扇頂部にあたる戦機山丘陵南麓付近の標高はおよそ28mを測る。安倍川の流路に平行する南向きにはおよそ0.4%の傾斜を持って下り、海岸線から0.5kmで標高5m程度となる。安倍川河口部から東側の海岸線には、安倍川から供給された砂礫が再堆積したと思われる砂堤が発達する地域がある。一方、これに直交する東向きでは0.3%程度とやや緩い傾斜となり、主に巴川の堆積による清水平野につながる。扇頂部の北東側、すなわち戦機山丘陵の東側は、丘陵に遮蔽されて安倍川・薬科川の堆積物が充分に行き届かなかつた部分であり、捕鉢状に窪んで広く低湿地を形成している。その中心にあるのが巴川の源流ともなる浅畠沼である。これら平野部は、扇頂部や自然堤防上を中心に広く市街地化されている。後背湿地においても、農業振興地域以外の農地は次第に市街地の中に取り残されて維持が困難になり、徐々に宅地等に開発されている。

平野を形成した河川のひとつである安倍川は、静岡市街地から北へおよそ34km遡った梅ヶ島の奥にある安倍峠から発するサカリ川や、大谷崩から発する大谷川などを源流とする一級河川である。平野部での川幅は500～700mで、0.5～0.7%の勾配で南に流下する。中流域の平均水位は1.81mであり、多量の土砂を供給している。安倍川の最大の支流は、安倍川との合流点から北北西に24km遡った七ヶ峰（標高1,533.2m）南側にある大間付近を源流とする一級河川薬科川である。川幅は200～300mで、中流域の平均水位は1.72mである。また、安倍川との合流点からおよそ2km上流の川原ほぼ中央には、『枕草子』にも記された県指定名勝木枯森が茂っている。この二つの河川は静岡市街地の北西侧約2.5kmで合流し、南東向きに流れを変えておよそ6kmで駿河湾に至る。



第2図 静岡市南部の地形と地名(地名は主なもののみ抜粋)

2 歷史的環境

静岡市西部地区では繩文時代中期以降、遺跡が把握されるようになる。弥生時代中期までの遺跡は、主に丘陵尾根部へ裾部に分布する。弥生時代後期以降は、沖積地の自然堤防上を中心に遺跡が把握されている。ここでは、静岡平野を含んだ概要を述べるとともに、小瀬戸遺跡の主体となる歴史時代に重點を置くこととする。

旧石器時代・縄文時代 静岡市西部の遺跡から旧石器時代の遺物が得られたという報告は、今のところ極めて乏しい。静岡・清水平野一円でも、現在

までに把握されている旧石器時代の遺跡は、有度丘陵上の北向き緩斜面上にある日本平遺跡、有度丘陵の西麓にある宮川遺跡、庵原地区の牛王堂山古墳群・大乘寺遺跡など数例にとどまる。

縄文時代の遺跡についても、他地域に比べれば決して多くはない。調査が行われていない遺跡が多く、時期的な変遷を把握することは困難であるが、縄文時代全般を通じてみれば、その分布は①安倍川・藁科川流域、②浅畠沼周辺、③有度山麓の3箇所に分けることができる。

①の地域は、河岸段丘の発達が大井川ほど進んでいないために、ごく狭小な河岸段丘上や丘陵の尾根、丘陵裾部の緩斜面などを利用して小さな集落を営む傾向が窺える。最も山深い位置にあるのが中期の野田ノ段遺跡（静岡市葵区日向）であり、藁科川を南に臨む丘陵斜面にある。藁科川筋では中流域の遺跡が把握できておらず、これに最も近い位置でもおよそ13km下流の養源山遺跡（葵区小瀬戸）となる。この遺跡は西へは富士城（川根本町）を経て大井川流域へ、東へは本杉峠を越えて安倍川の支流伝いに交通が可能な場所にある。藁科川下流域にある養源山遺跡、羽鳥遺跡（葵区羽鳥）、吉津遺跡（同吉津）はおよそ3kmの範囲に分布する。この地域は、安倍川下流域の遺跡にも程近い。また、縄文時代遺跡が比較的密集する朝比奈川上流域（岡部町）とも、小瀬戸谷を遡った西又峠や飯間谷を遡った野田沢峠を介して比較的容易に交流することが可能な地域でもある。一方安倍川流域では、中流域に比較的広範囲に及ぶ別所平遺跡（葵区松野別所平）がある。北に近接する津渡野段遺跡（同津渡野）との関係も想定される。これよりおよそ4km下流にある八十岡遺跡（同足久保口組）は、安倍川の支流である足久保川を北に望む遺跡である。ここから東へ安倍川を渡河し、賤機山の付け根にあたる現在の桜村付近を越えれば、浅畠沼一帯へ通じることができる位置にある。このように、安倍川・藁科川流域の縄文集落はいずれも、流域はもとより山間部ルートを介して近接地域と接することができる位置に営まれていることが特徴である。

②の地域は、静岡平野北側の丘陵裾部に集落が営まれる。ここは賤機山に阻まれることにより安倍川・藁科川の堆積作用が十分に及ばなかったことに起因する低湿地帯（浅畠沼）が広がっている。遺跡はこの低湿地帯の周囲に位置するため、相互の立地は水上交通も絡めた有機的なかかわりを持っていると考えられる。つまり、これらの集落に生活する人々の生業は、他の地域に比べれば淡水湖における漁労に偏重していたことが想定される。

③の地域は、有度山の緩斜面から山裾にかけて営まれる集落であり、静岡市西部では、最も縄文時代遺跡が発達している。これには、有度山の駿河湾に面する南側斜面は急に切り立ち、他では縄文時代遺跡が営まれ易いや広めの緩斜面が頻繁に見られるといった地理的な有利性が働いている。小河川によって開析された谷に区切られた緩斜面は上下に比較的広いため、他の地域に比べれば広範囲に及ぶ遺跡が発達しやすい環境にある。この地域の遺跡は比較的古くから注目されてきた（静岡県1930、静岡市1930、大澤1935）。1984～88に発掘調査が実施された神明原・元宮川遺跡からは後～晩期の土器とともに、クスノキ製の丸木舟や櫂、ヤスが出土している。これは、活発に漁労を行っていたことを示すものであるが、集落自体が丘陵上～丘陵裾部から次第に自然堤防上に移ってきたことをも示唆しているのだろう。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、安倍川・藁科川の中・上流域には分布が把握できない特徴があり、出現期である中期の遺跡は丘陵部に位置しながら、沖積地上にも分布し始める傾向がある。中期前半の遺跡がみられるのは安倍川下流域西岸にある丘陵上で、セイゾウ山遺跡（駿河区丸子）がよく知られている。この遺跡は1938年に行われた調査によって内容が確認されたものである（安本1939）。出土した条痕文系土器を「縄紋式文化を持った土臺に彌生式文化の接触を受けた民族によって焼成された土器」と位置づけ、この一群を「丸子式」としている。中期後半に至ると、体部上半から口縁部にかけて縄文を施す壺や、新たな器種としての高杯を伴う「有東式」が平野部の遺跡に出現する。この標識となる有東道跡（駿河区有東）は登呂遺跡の北北東に位置する遺跡で、丘陵上にあるセイゾウ山遺跡より格段に広く、

沖積地上への本格的な進出を窺わせる遺跡である。この様な傾向は、巴川製紙工場内遺跡（駿河区用宗巴町）や駿府城内遺跡（葵区駿府公園ほか）瀬名遺跡（葵区瀬名）、川合遺跡（同川合）等にもみられ、沖積地、特に自然堤防上に居住に適するようになったという自然的な変化、水田を積極的に用いる生業的な転化が、彼等に住まい方の転換を求めていった結果と捉えられる。

弥生時代後期に至ると、専ら自然堤防上に遺跡が分布するので、沖積地上に集落を営む傾向は定着したものと思われる。生産域である水田と、住居のある居住域が連続して検出されている遺跡で代表的なものは登呂遺跡（駿河区登呂）である。この遺跡は承知のとおり、戦時中に行われた軍需工場の造成によった発見され、戦後の弥生時代研究の嚆矢となった遺跡であり、現在は特別史跡として保存・活用が図られている。この他、豊田遺跡、小黒遺跡、有明遺跡、汐入遺跡など、静岡平野南部の広範囲に遺跡があらわれる。

古墳時代 古墳時代の遺跡は、人々の埋葬施設である古墳が平野を取り囲む丘陵部に盛んに造られる。一方で、それらを造り、葬られた人々が暮らす集落も依然として沖積地上を主体に営まれている。

静岡平野と東隣の清水平野（以後「静清平野」という。）では、古墳時代前期より神明山1号墳（全長71m）・牛王堂山3号墳（全長81m）・三池平古墳（全長79m）など庵原川・巴川流域に前方後円墳や前方後方墳が造られ始めた。一方4世紀後半、谷津山山頂に静清平野で最大の前方後円墳である谷津山1号墳（全長110m）が築かれている。これらの立地から、この時期に中央政権とつながりをもち静清平野を治めていた有力者は、当初庵原川・巴川流域に勢力基盤があったことが窺える。

古墳時代中期後半には、古墳群の盟主墳として小型前方後円墳が複数の地域に造られたことから、勢力が小地域に分散して存在するようになったことがわかる。5世紀末頃の前方後円墳としては、有度山北麓に西の原1号墳（全長45.8m）、巴川上流の瀬名丘陵上に瀬名5号墳（全長30m）がある。瀬名5号墳を含む瀬名古墳群は後期まで継続する。これらとほぼ同時期に、安倍川西岸・薗科川流域の尾根上にも古墳が造られ始めた。

安倍川西岸の丘陵上には、5世紀末～6世紀に宗小路1号墳（全長37m）・猿郷1号墳（全長55m）・徳願寺山1号墳（全長36m）が築造された。いずれも、二段築成の小型前方後円墳で、小規模古墳群の中の盟主墳であると考えられる。このうち猿郷1号墳と徳願寺山1号墳には、静清平野のこれまでの古墳では採用されていなかった埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）が配置されていたところに特徴がある。また、6世紀中頃には有力者を示す墳形として方墳が造られるようになる。佐渡山2号墳は、横穴式石室を持つ方墳で畿内との関係を示す古墳である。埴輪・方墳など静清平野の他地域には見られなかった文化が採用された安倍川西岸地域には、中央政権と関係が深い新しい技術者集団の流入または移入があったという推測ができる。5世紀後半～6世紀にかけて、寒冷期で河川氾濫が激化していた安倍川流域では砂礫の堆積が進み、可耕地が拡大したといわれている。安倍川西岸に新たに広がった平地は、庵原川・巴川流域の旧勢力の影響が薄く、新文化を取り入れて発展した新興地域と考えられ、有力古墳の被葬者も旧勢力とは別系列の首長であったと推測される。

このような状況から、古墳中期後半～後期前半にかけては、静清全域が政治的・文化的には均一に統一されてはおらず、それぞれの小地域が独立してそれぞれの文化圏を形成していた、という姿が浮かび上がってくる。つまり、静清全域を階層的に支配する盟主は存在せず、各小勢力が同列な位置づけでそれぞれの小地域を治めていたと考えられ、新興地域が直接正権に組み入れられていったことを示しているとも言えよう。その中にあって、6世紀中頃に造られた駿機山3号墳は、その規模と大和政権の上流階級に匹敵する内容の副葬品を有することから、静清地方を越える政治的権力を持った被葬者を考えることができ、大和朝廷による地方の直接支配を示唆する。

古墳時代後期後半になると、下層階級まで古墳を造営するようになり、群集墳が爆発的に増加する。

丘陵の尾根上ののみならず丘陵奥地まで小規模古墳が密集して分布するようになる。これらの群集墳は、いくつかの地域ごとに分けられる。東久佐奈岐古墳群（庵原川流域）・三瀬ヶ谷古墳群（巴川流域）・谷田古墳群（有度山北麓域）・小鹿古墳群（有度山西麓域）・平城古墳群（安倍川西岸域）などが代表的である。安倍川西岸域の群集墳は千代古墳群・羽鳥古墳群・牧ヶ谷古墳群など、安倍川や薦科川に面した丘陵の突端や谷上、または小支谷の開口する部分に造られている。また、丸子の東海道筋に面した丘陵上には大新古墳群や稻荷神社古墳群などが、用宗海岸沿いの丘陵上には石部古墳群などが営まれている。なお、安倍川中流域右岸には半兵衛奥古墳・西ヶ谷古墳のように、群集墳を構成せず単独で築かれる後期古墳が複数存在し、他地域とはちがったあり方を感じさせる。

さて、これらの古墳を築造した人々の集落に関しては、現時点では不明な点が多い。人々は、安倍川や巴川によって形成された自然堤防上に住居を営み、水田を經營する生活を弥生時代から続けていた。断続的に古墳時代全般に渡って続く集落（駿府城内遺跡・川合遺跡・鷹ノ道遺跡・神明原元宮川遺跡など）と、弥生後期から継続し古墳前期で廃絶してしまう集落（豊田遺跡・登呂遺跡・上ノ山遺跡など）、古墳後期になって開始される集落とが知られているが、中期の様相ははっきりしていない。集落の立地が洪水などの災害による自然環境の変化に大きく左右されめまぐるしく変わっていたのであろうと推測される。なお、古墳後期の有力な集落が、後の官衙遺跡へと発展していったと考えられる。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の遺跡も、やはり冲積地上に営まれる傾向がある。古代の静岡平野には、安倍郡と有度郡が所在する。これらは曲金北遺跡で検出された古代の東海道を境とするため、平野部の北部地域が安倍郡に、南部地域が有度郡に含まれる。

駿河国の政治の中心をなす国衙の比定地は、安倍川の扇状地の最高所付近に位置する駿府城内遺跡と、これより北西へ500mほど離れた静岡高校校地内遺跡（葵区長谷町）がある。前者からは、特に遺跡の南東側で古代の遺物を多く出土する地域が認められており興味深い。後者ではまとまった資料が得られていないため、状況は明らかでない。

安倍郡衙に関連と考えられる遺跡は内荒遺跡・宮下遺跡・川合遺跡である。これらは静岡平野と清水平野の接点付近の川合丘陵と長尾川に挟まれた一帯にあり、古代においてはここが平野部の中でもっとも安定していた地域のひとつであったことが窺える。最も古く位置づけられるものは川合遺跡八反田地区であり、掘立柱建物群とともに人名墨書きのある土師器やものさしが出土している。内荒遺跡からは、溝と柵列によって囲まれた掘立柱建物群が検出されている。ここからは9世紀前半の助宗窯（藤枝市）産の須恵器や、尾張産の灰釉陶器が多量に出土している。これらには「建」・「岡」・「主」・「川万呂」などの墨書きが多く残されている。また、「造大神印」銅印や鉄帶金具が注目される。宮下遺跡は内荒遺跡の東側に接する遺跡である。ここからは小規模な掘立柱建物や内荒遺跡で検出されたものに類する溝をもつ掘立柱建物が検出されている。遺物は、内荒遺跡とほぼ同時期である9世紀前半から見られるが、10世紀代までが主体となるため、内荒遺跡よりもやや新しい段階まで利用されていたことがわかる。また、墨書きも頻繁に見られる。

有度郡衙に関連と考えられる遺跡は、安倍川の自然堤防上に位置するケイセイ遺跡（駿河区中田三丁目）である。真北を指向する掘立柱建物や礎石建物、柵列が検出され、8世紀中頃～10世紀代の遺物が出土している。注目されるのは9世紀代前半の尾張産の灰釉陶器や洛北産の綠釉陶器、「有厨」墨書きのある土師器の坯である。神明原・元宮川遺跡（駿河区大谷）では、同時期の祭祀遺構が検出されている。

古代の交通の要衝をなす駅は横田駅が知られており、地名からも谷津山西麓の地域に比定されるが、その実態は明らかでない。これからおよそ1km東にある曲金B遺跡（駿河区曲金一丁目）からは、建物跡や井戸が検出され、瓦が出土していることからも、横田駅に関する遺跡であると考えられている。

駿河国分寺として有力視されるのは片山庵寺（駿河区大谷）である。東名高速道路の建設に先立って

発掘調査が実施され、8世紀後半から10世紀前半の、一辺二町を測る寺域の中に配置される金堂・講堂・僧房など主要な施設が明らかになっている。ここに瓦を供給するために作られたのが宮川瓦窯である。これら一群の遺跡は、国指定史跡となって保存されている。

以上のような、地域支配の要となる部分については、徐々にその内容が把握されつつある。一方で、一般民衆が暮らした集落は余り目立っていない。このころすでに安定していた安倍川の自然堤防上に集落は営まれていたと考えられる。

中世 12世紀以降、東遠江～西駿河地域でも山茶椀生産が活発に行われて静岡市域にも盛んに搬入される。この普遍的に出土する山茶椀が、11世紀代よりも遺跡の存在を格段に把握しやすくなっている。

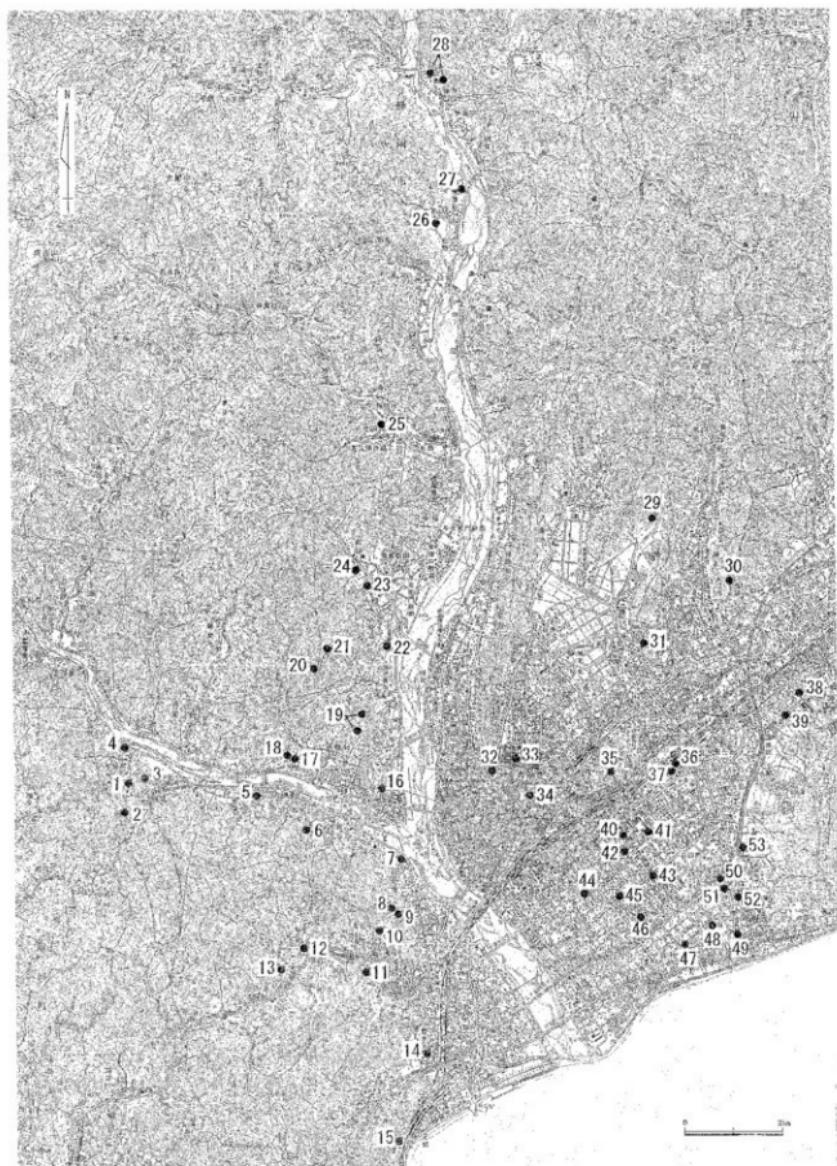
一方、東遠江～西駿河地域での山茶椀生産が終焉とする13世紀末ごろを境に出土遺物量が激減するため、14～15世紀前半で遺跡として明らかにすることは、いまだ模索されている段階である。したがって現在では、人々の動きの多くを文献の成果に求めざるを得ない。

南北朝期には北朝方の今川範囲が守護となり、駿府に入ったものとされている。当時南朝勢力は、今川方から「安倍御敵」と呼ばれた狩野氏が、安倍川・薬科川流域の山間部を拠点として活動していた。狩野氏は伊豆狩野氏の一派であり、建武新政時には貞長が武者所に勤番している。建武3年(1336)、南北朝に分裂し騒乱状態になるに際して駿河に戻った貞長は、以後南朝勢力の一角を担うことになる。

狩野氏の拠点は、從来から安倍城であるといわれてきた。沼館愛三は、安倍川と薬科川に挟まれた丘陵部の最高所でもある標高435.4mに築かれた本城を中心に、尾根伝いの久住砦・羽鳥砦・千代砦・内牧城を含む城砦群を、狩野氏が築いた安倍城と解釈している(沼館1933)。小和田哲男は、狩野氏が駿河の南朝方の拠点としてこのような広大な城砦群を持って今川と対峙し得たのは、大覺寺統に伝承された服部荘を基盤として後醍醐天皇が孫にあたる煥良親王を派遣したことの要因に位置付けている(小和田1981)。現在、城の遺構は本城や久住砦において観察することができるが、数段の曲輪、尾根を遮断する堀切で構成され部分的に石積みを持つことから、今見る遺構は室町時代～戦国初期に改修されたものと考えられる。このように現在では南北朝期の城の構造を知ることは極めて困難であるが、比較的の高所でおかづ尾根を伝って広域にわたる連絡が可能な要害地形を「城」としていたことが想像される。

第1表 局地遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	小瀬ヶ谷遺跡(NW73-3地点)	古代・中近世	集落	29	三瀬ヶ谷古墳群	古墳後期	古墳
2	黒ヶ沢遺跡(NW71-2地点)	绳文	集落	30	瀬名5号墳	古墳中期	古墳
3	小瀬ヶ谷(向山勢)	中世	城跡		瀬名古墳群	古墳	
4	美濃ヶ谷跡	绳文	散布地	31	川合遺跡	弥生～近世	集落・墓
5	吉浦遺跡	绳文	散布地		内荒遺跡	古代	官衙
6	牧ヶ谷古墳群	古墳後期	古墳		宮下遺跡	古代	集落
7	駿郷1号墳	古墳中期・後期	古墳	32	鍛冶山3号墳	古墳後期	古墳
8	平坂1号墳	古墳後期	古墳	33	藤岡高校校地内遺跡	平安	集落
9	徳源寺山1号墳	古墳中期・後期	古墳	34	駿府城内遺跡	弥生～古代	集落
10	宗小路1号墳	古墳後期	古墳	35	登神山1号墳	古墳前期	古墳
11	セイワ山遺跡	弥生中期	散布地	36	雪舟山古墳群	弥生～中世	古墳・道路
12	鶴原神社古墳群	古墳後期	古墳	37	南金3号墳	古墳・古代	集落・官衙
13	大野ヶ原群	古墳後期	古墳	38	瀬の原1号墳	古墳	古墳
14	巴川製陶工場内遺跡	弥生中期	散布地	39	豊田古墳群	古墳後期	古墳
15	石部分地群	古墳後期	古墳	40	小馬遺跡	弥生末・古墳初	集落
16	千代分地群	古墳後期	古墳	41	豊田遺跡	弥生・古墳	集落
17	羽鳥逆跡	绳文	散布地	42	有明遺跡	弥生後期	集落
18	羽鳥古墳群	古墳後期	古墳	43	有東遺跡	弥生	集落
19	羽鳥勢	中世	城跡	44	ケイセイ遺跡	古代	集落
20	久住勢	中世	城跡	45	西の道遺跡	弥生・古墳	集落
21	安倍城	中世	城跡	46	斐ノ遺跡	弥生後・古墳	集落・木田
22	西ヶ谷古墳	古墳後期	古墳	47	沙入遺跡	弥生・古墳・中国	集落
23	半井南古墳	古墳後期	古墳	48	神明塚・元宮川塚跡	绳文～中世	集落・祭祀
24	内牧城	中世	城跡	49	上ノ山遺跡	绳文～古墳	集落・點
25	城山古墳	古墳	古墳	50	片山寺塚	古墳	寺跡
26	八十間塚跡	绳文	散布地	51	宮川遺跡	旧石器～古代	散布地・集落
27	別所平道跡	绳文	散布地	52	實川瓦窯	古代	古墳
28	諏訪野段遺跡	绳文	散布地	53	小罠古墳群	古墳後期	古墳
	鷲島地	中世	城跡				



第3図 周辺の遺跡分布図

松井助宗らを率いた今川範国が安倍城を攻撃したのは暦応元年（1339）10月のことであるが、狩野氏は宗良親王が駿河入りしたといわれる興国元年（1340）にはまだ勢力を維持していた。しかし、延文3年（1358）には「安部内徒蜂起」に際して兵糧料所として預かっていた有度郡中田保・西鷲郷を今川範氏が伊豆走湯山へ返付していることからも（『静岡県史』資料編6—591 以下『県史』〇一〇〇と略す）、宗良親王が信濃国へ退去した興国2年以降、今川氏の攻勢によって延文年間初頭までに南朝勢力としての狩野氏はほぼ制圧されていたとみられる。

南北朝期に整えられたとされる城砦群は、更に西側の藁科川西岸域から上流部にかけて築かれている。西岸域にある城は小瀬戸城である。この城の西側谷部には小瀬戸集落があり、興良親王の御所が所在したという「ゴショノ谷」という地名が存在する。この谷から南西に向かう県道静岡・朝比奈・藤枝線は、志太平野へ抜けるための旧来からの間道である。この道は標高231mの西又峠を越えて西又川沿いに、鎌倉御家人の流れを汲む朝比奈氏の本拠地である殿（岡部町殿）へ通じる。この道程と小瀬戸周辺は朝比奈氏にとっても縁が深い。小瀬戸城のちょうど藁科川対岸にあたる新間に、朝比奈氏の菩提寺のひとつである見性寺があり、現在は廃しているが、小瀬戸にも同じく西福寺があった。また、天文12年（1543）には藁科莊内富士雅楽跡が朝比奈又八郎に安堵されている（『県史』7—1654）。後年まで今川氏の重臣として活躍する朝比奈氏がいつから小瀬戸周辺に影響を及ぼせたかは確かでないが、このルートを今川方が掌握することによって、志太平野の南朝方拠点である大津城への連絡路を遮断し、南朝方の各拠点を孤立させることになったと考えられる。このことは、観応3年（1352）に今川範氏が大津城の佐竹兵庫入道らを攻め落とし（『県史』6—513）、翌年にあたる文和2年には藁科川を巡って土岐氏の篠の土岐山城攻めを行なうといった一連の軍事行動からも察せられる。つまり一連の軍事行動までには、小瀬戸を含む藁科川流域の南朝勢力が完全に排除されて、今川勢の自由な往来が可能になっていたと考えざるを得ないのである。

土岐山城攻めの際に今川勢がまず取り掛かったのは、藁科川上流部日向にある萩多和城である。そのまま藁科川の支流である黒俣川を遡り、土岐山城の一の木戸と称された護應土城に攻め上った場合、退路を絶たれる恐れがあったのであろう。2月11日に萩多和城、13日に護應土城を落として、18日から土岐山城攻めが開始される。25日には土岐山城を陥落させ（『県史』6—520・521）、これによって藁科川伝いに南朝勢力が駿府に至る恐れを一掃したのである。

後の永享5年（1433）9月3日、安倍城からおよそ12km安倍川を遡った場所にある湯島城が攻略されている（『県史』6—1826）。ここには今川範政没後におこった永享の内訌に際し、今川範忠の家督相続を不服とする三浦・進藤・興津・富士氏らとともに蜂起した狩野氏が、同年7月以来の転戦の末立て篭もっていた。したがって、14世紀後半以降、狩野氏は今川氏に恭順し、安倍山を領する一人として命脈を保っていたことになる。しかしこの内訌の後、安倍山は幕府直轄領となり足利義教の御判御教書によって義忠に預けおかかる（『県史』6—1845）。なお、戦国期にここからさらに西へ、安倍川の支流である中河内川を4kmほど遡った落合を拠点とする狩野氏は、今川氏に追われた狩野氏の末裔である。

戦国時代の静岡平野の中心は、今川氏の館を中心とした駿府である。この頃にはすでに、現代に跡襲まれる町割りの基礎は出来上がっており、おおむね近世駿府城二ノ丸の範囲に主要な機能がまとまっていたものと考えている。当時の繁栄を伝える史料は多くはない。15世紀では、永享4年（1432）に將軍足利義教の富士遊覽を迎えた今川範政が、御座所である「富士御覧の亭」を新築したことが知られている（『富士御覧日記』）。しかしそよそ半世紀後、今川義忠の戦死を発端とした文明の内訌によって駿府は一旦焼け落ち、長享元年（1487）に当主となった氏親が、館とともに改修したとされる（『宇津山記』）。享禄3年（1530）3月3日の『実隆公記』に記された「駿河府中二千余間回禄」（『県史』7—1064）という火災の記事は、氏親からその嫡子氏輝の代にかけて駿府が急速に発展していくことを垣間見せるものである。

第2節 調査に至る経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東名自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けた県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長あて回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518m²となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付けで日本道路公団に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公団東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公団が朝静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となつた。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたバーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759m²となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがしてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課による「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなつた。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結、さらに調査実施機関である静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付けで第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地の確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成9年1月31日付けで建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付けで施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付けで日本道路公団静岡建設局より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受け、県教育委員会文化課は関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付けで再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打合せを行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付けで県教育長から日本道路公団静岡建設局長への回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734m²であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付けで協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パークリングエリア、排土処理場について静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査の事業量の増大に静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

第2表 静岡地区現地調査の体制

	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所 長	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠	斎藤 忠 斎藤 忠
副 所 長	池谷和二 池谷和二	山下 見 山下 見	山下 見 山下 見	山下 見 山下 見	斎藤英夫 斎藤英夫	斎藤英夫 斎藤英夫	斎藤英夫 斎藤英夫	斎藤英夫 斎藤英夫
総 務 部	常務理事企画部長 三村田昌昭	伊藤友雄 伊藤友雄	伊藤友雄 伊藤友雄	伊藤友雄 伊藤友雄	斎藤幸平 斎藤幸平	斎藤幸平 斎藤幸平	斎藤幸平 斎藤幸平	斎藤幸平 斎藤幸平
次 長	初鹿野英治 杉木敏雄	杉木敏雄 杉木敏雄	杉木敏雄 杉木敏雄	杉木敏雄 杉木敏雄	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一
秘 書 部	秘書課 長 初鹿野英治	杉木敏雄 杉木敏雄	杉木敏雄 杉木敏雄	杉木敏雄 杉木敏雄	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一	木本昭一 木本昭一
報 知 部	報知専門員 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸	鶴巣保幸 鶴巣保幸
会 計 部	会計係 長 杉田 智	田中雅代 田中雅代	田中雅代 田中雅代	田中雅代 田中雅代	山本広子 山本広子	山本広子 山本広子	山本広子 山本広子	山本広子 山本広子
副 主 任	大石義二 大石義二	大橋 篤 大橋 篤	大橋 篤 大橋 篤	大橋 篤 大橋 篤	野島尚紀 野島尚紀	野島尚紀 野島尚紀	野島尚紀 野島尚紀	野島尚紀 野島尚紀
主 事	鈴木秀幸 鈴木秀幸	鈴木秀幸 鈴木秋博	鈴木秀幸 鈴木秋博	鈴木秀幸 鈴木秋博				
部 長	石垣英夫 石垣英夫	佐藤道雄 佐藤道雄	佐藤道雄 佐藤道雄	佐藤道雄 佐藤道雄	山本昇平 山本昇平	山本昇平 山本昇平	山本昇平 山本昇平	山本昇平 山本昇平
次 長	柴野克己 柴野克己	佐野五十三 佐野五十三	佐野五十三 及川 司	及川 司 及川 司	柴野克己 中嶋郁夫	柴野克己 中嶋郁夫	中嶋郁夫 中嶋郁夫	中嶋郁夫 中嶋郁夫
次 長 心 母	佐野五十三 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司	及川 司 及川 司				
担 当 津 長	栗野克巳 栗野克巳	栗野克巳 栗野克巳	栗野克巳 栗野克巳	栗野克巳 栗野克巳	中嶋郁夫 中嶋郁夫	中嶋郁夫 中嶋郁夫	中嶋郁夫 中嶋郁夫	中嶋郁夫 中嶋郁夫
工 区 主 任	足立順司 足立順司	足立順司 足立順司	足立順司 足立順司	足立順司 足立順司				
主 任 調査研究員	鈴木清夫 鈴木清夫	鈴木清夫 鈴木清夫	鈴木清夫 鈴木清夫	鈴木清夫 鈴木清夫				
調 査 研 究 部	鈴木清夫 鈴木清夫 伊藤英勝 伊藤英勝 河合 修 河合 修 福手鉄里 福手鉄里	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努	川上 努 川上 努
保 存 処 理 室 長					西尾太加二 西尾太加二	西尾太加二 西尾太加二	西尾太加二 西尾太加二	西尾太加二 西尾太加二

こうした経過の中で、静岡市西部地区における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、確認調査の対象をNo.67～75地点の9地点に、本調査の対象をNo.69地点（キヨウダイヤト遺跡）、No.70地点（キヨウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳）、No.72地点（小瀬戸城跡）、No.73-1～3地点（小瀬戸遺跡）、No.74-1地点（小瀬戸城跡）、No.74-2地点（栗ヶ沢遺跡）、No.75地点（番匠カイト遺跡）及び代替地（有東遺跡）の8地点とした。本調査の実施については、72・73-1・73-3の一部・74-1・75地点を静岡市教育委員会が担当し、他を勤務静岡県埋蔵文化財調査研究所が受け持った。作業の着手は用地買収が進んで、一部調査実施が可能となった平成9年度以降となった。

第3節 確認調査

1 調査の体制

静岡市西部地区の確認調査及び本調査は平成9～15年度に実施しており、その体制は第2表のとおりである。この体制は、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて設定した静岡工区（静岡市・藤枝市・島田市）のうちの静岡市西部地区で実施したものである。

静岡市西部地区的担当は、確認調査段階では静岡市駿河区篠が丘町に所在する中原整理事務所を、本調査段階では各現地事務所を拠点として各現地調査を実施している。

2 確認調査の方法と経過

(1) 位置と現況

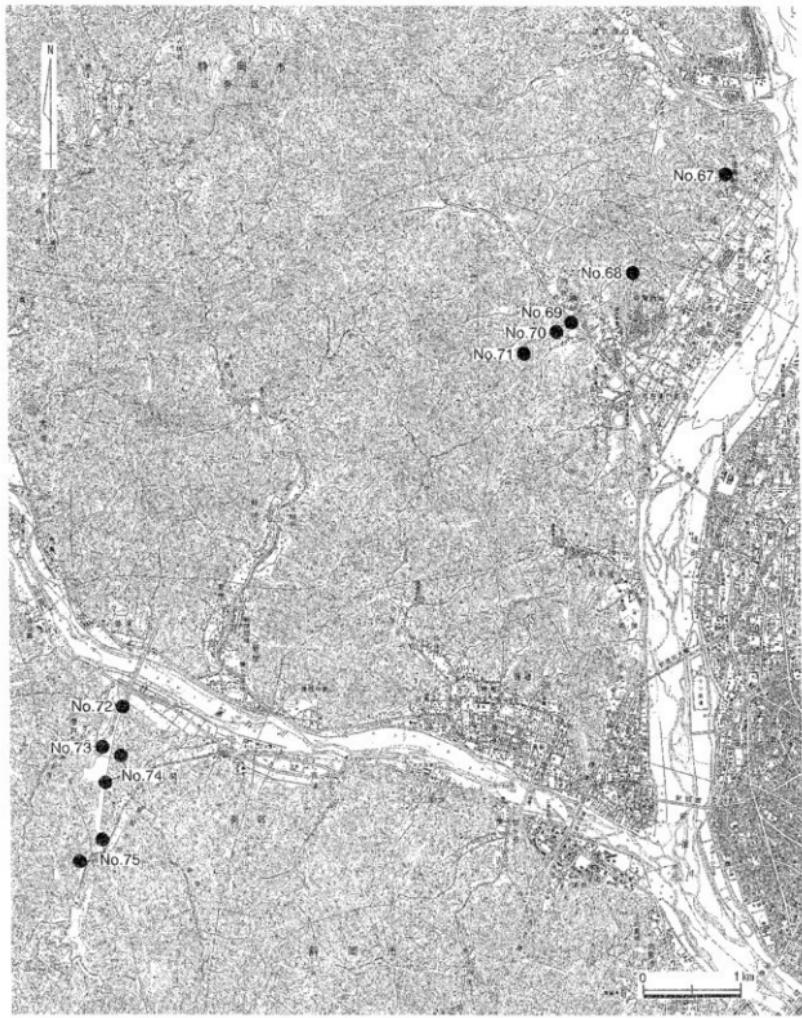
第二東名の路線は、静岡・清水平野の北縁にある丘陵部を東西に横断する。静岡市西部地区での路線はおよそ29kmを測る。なお、計画ではトンネル9箇所、インターチェンジ1箇所、パーキングエリア1箇所が計画されている。路線の多くは丘陵部をトンネルで通過するものであり、河川によって開拓された部分では高架橋で谷を横断することとなる。

路線内の丘陵地の現況は、多くが杉・桧の植林や竹林、茶畠として利用される。土採りによって大きく改変されている丘陵は見当たらない。したがって、各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残されているとみられる。一方、平野部・谷平野においては、道路や建築物・宅地によって開発されている部分もあるものの、水田や畑に利用されている部分が比較的多い。

(2) 対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および静岡市教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後においても、路線範囲の変更や製造等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡の所在の再確認等によって、対象地点の範囲の変更や新たな対象地点の追加も同様に行われた。最終的に、静岡市西部地区では9ヶ所の対象地点（No.67～75地点）及び代替地1箇所の計10ヶ所が選定された。

10ヶ所の対象地点の内、3地点（No.70・72地点、代替地）は既に周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含んだ場所、その他は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査は行う必要があるとされた場所である。周知の遺跡を含むNo.70地点は、丘陵上に南北朝期の山城（内牧城跡）及び古墳（城山古墳）の存在が知られていた場所である。丘陵は安倍川と蘿科川の間にある山塊から派生した小さな尾根で、急峻な地形を備えることから、斜面部を含めて全面に遺跡が及ぶ可能性が高いことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。同じくNo.72地点は、丘陵上に戦国期の山城（小瀬戸城



第4図 第二東名の路線と対象地点

跡) の存在が知られていた場所である。対象となったのは、城域の最高所から北へ派生する痩せ尾根であるが、曲輪とも考えられる複数の平坦地が観察されていたことから、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。代替地は、安倍川が形成した自然堤防上にあり、弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡である有束遺跡の範囲内にある。現地表面から1m弱下位で遺構面に到達するため、遺跡の保全が図られな

いと判断され、開発範囲のすべてを対象地点の範囲とした。

(3) 調査の方法

確認調査の開始にあたっては、まず駐車場・作業員棟設置等の準備と並行して、対象地点の位置と範囲を確認した。調査区は、対象地点の多くが丘陵上であることから、トレンチを基本とし、把握の難しい場合はその周囲を拡張した。また、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、調査区を対象範囲の全域にわたるように設定することに努めたが、急斜面部においては、作業の安全上を考慮してやむなく調査区の設定を避けた部分もある。調査区の掘削は、No.69地点、No.73地点や代替地、70地点、74地点と75地点の一部以外は、重機が入らない場所であったので、表土から人力で行った。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるか、根痕や搅乱・自然地形等であるか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとめて出土した遺物など遺構の性格をあらわすものについては、本調査をすることを前提として、出土位置に残したままとした。以上の方によって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらには発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は1/100、土層断面もしくは柱状図は1/20を基本とし、必要と判断した遺構図等は1/20もしくは1/10で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土地標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35mm判カラーネガを用い、必要に応じて、35mm判や6×7判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。

(4) 調査の経過

各地点の確認調査は、実施できる条件がそろい、要請のあった順に実施した。よって、地点順に確認調査を実施してはいない。また、同一地点内でも部分的に数度に分けて確認調査を実施せざるを得ない場所もあった。その場合は、「No.73地点その1」等として実施することとした。

各地点の調査期間は、第3表のとおりである。それぞれに示した期間内において、先述の調査の方法に従って確認調査を実施し、遺跡の有無と範囲を把握した後、調査を終了している。

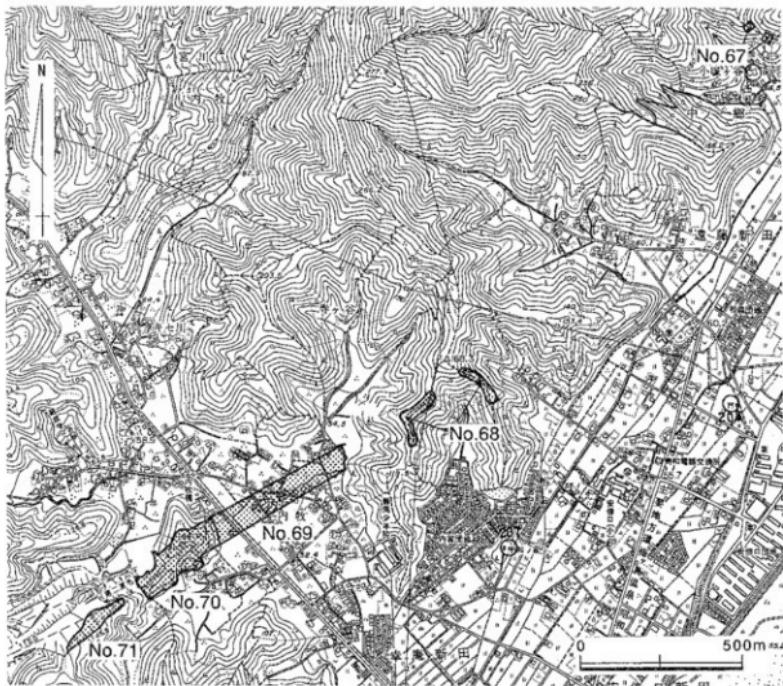
3 各地点の概要

(1) No.67地点

位置・立地と現況 静岡市葵区遠藤新田に位置する。標高120～150mの南へ張り出した尾根上であり、茶畠・杉の植林に利用され、部分的に雜木林が残存していた。茶畠や植林に際して若干斜状に改変されている部分もあったが、現況では大きな地形の変化は認められなかった。

対象地に近接して古墳が確認されており、対象地内にも墳丘と思われる高まりや、石室の石材の可能性を感じさせる礫の散布がみられる箇所があったため、古墳が存在する可能性を想定した。

調査方法と確認状況 墳丘と思われる高まりや、礫の散布域を中心にトレンチによる調査を人力で行った。表土は厚さ10cm前後で、その下位に厚さ50～70cmの礫の混じる黄褐色土、さらに赤褐色～黄褐色の



第5図 各地点対象位置図1

基盤層を確認した。墳丘と思われた高まりの頂部付近で同一個体である須恵器の裏表部片2片が出土したが、遺構は検出されなかった。

結果 本地点対象範囲内において、遺跡が残存しているという根拠は得られなかった。

(2) No.68地点

位置・立地と現況 静岡市葵区幸庵新田に位置する。標高140~150mの南へ張り出した尾根上であり、茶畑や杉の植林に利用され、部分的に雑木林が残存していた。茶畑や杉の植林に際して若干斜状に変更されている部分もあったが、現況では大きな地形の変化は認められなかった。

対象地内には、堀切状のくぼみや平坦部がみられたため、山城に関する遺構の存在を想定した。また、近接地域には、尾根上に古墳がのる例がみられるため、古墳の存在も考慮した。

調査方法と確認状況 堀切状のくぼみや平坦部を中心にトレンチによる調査を人力で行った。表土は厚さ20~30cm程度で、その下位に厚さ15~120cmの角礫の混じる褐色土、さらに基盤層である岩盤を確認した。堀切状のくぼみは地すべりの跡であり、平坦部も自然地形であることが把握された。

結果 遺物の出土はなく、遺構も発見されなかつたため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかつた。

(3) No.69地点

位置・立地と現況 静岡市葵区内牧に位置する。標高54m前後の内牧川による沖積地で、水田・畑・宅

地に利用されていた。堆積土が厚いため、地表面からは遺跡の存在は把握できなかった。

調査方法と確認状況 橋脚が築かれる位置を中心に、4～5m四方のグリッドを複数個所設定して、主に重機を用いて掘削を行った。内牧川左岸一帯は、いずれの箇所からも砂利・砂・シルトの互層が確認され、内牧川の氾濫原が広がっていることが把握された。内牧川右岸でも、現地表面からおよそ2mにわたって内牧川による堆積物が確認されたが、この下位にある黄褐色～暗褐色粘土層において奈良時代の遺構および当該時期の須恵器・土師器が検出された。

結果 内牧川左岸地域では、遺物の出土もなく、遺構も確認されなかった。右岸地域では遺物包含層および遺構の存在が認められ、遺跡が存在していることを確認した。現在この遺跡をキヨウダイヤト遺跡としている。

(4) №70地点

位置・立地と現況 静岡市葵区内牧に位置する。標高99.1mを頂部とする城山とその西側尾根からなる丘陵部、南側の谷によって構成される。丘陵部は多くが茶畑に利用されていたが、部分的に雑木林や竹林となる。茶畑に利用されていた部分には、古墳に用いられていたものと思われる石材や古タイヤを積み重ねて土留めとした段が一面に造成され、かなり地形が変化していることが知られた。また、谷の奥（北西側）では、大規模な地すべりによって形成されたとみられる高さ約2mのほぼ垂直な崖面が認められた。対象地内では、地表面で明確な遺構を把握することはできなかったが、丘陵頂部を中心内牧城跡が、頂部から南東に突出する尾根先端に城山古墳が存在することが判明していた。

調査方法と確認状況 内牧城の機能が城山の急峻な地形に集約されていると理解し、城山一帯の詳細な地形測量を実施し、全体像を把握することとした。沼館愛三が記録した見取り図（沼館1933）では、丘陵上を中心に山城が築かれ、南側尾根末端に古墳が存在することが把握された。また、畑の土留めに用いられている石材についても、石室から引き出されたものであることが地元民からの聞き取りで判明した。

結果 丘陵上を中心に、内牧城跡が存在することが確認された。また、南側尾根末端に横穴式石室を持つ古墳1基（城山古墳）の存在が確認された。

(5) №71地点

位置・立地と現況 静岡市葵区内牧に位置する。標高165m付近を頂点とする北東向きの尾根であり、頂部の一部と北向き斜面が茶畑であったほか、多くの部分が杉の植林に利用されていた。頂点付近には幅20m、長さ60mほどのやや平坦な部分があるが、北東向きに下がるに従って徐々に狭くなり、標高120m付近では幅3m程度の瘦せ尾根となる。調査対象地は、内牧城と尾根続きであるため、山城に関する遺構の存在を想定して調査を実施した。

調査方法と確認状況 等高線に直交・平行する位置に幅1mのトレーナーを13本設定し、すべて人力で調査を実施した。厚さ5～20cmの表土下に、褐色～黄褐色シルト（厚さ10～30cm）、地山に起因する礫を多く含む橙色シルト（厚さ30cm）の順で堆積し、この下に岩盤が検出されている。

結果 いずれのトレーナーからも遺構・遺物は検出されなかったため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。

(6) №72地点

位置・立地と現況 静岡市葵区小瀬戸に位置する。小瀬戸城から北側へ延びる、標高150m付近から99mに至る尾根であり、主に茶畑と杉の植林に利用されていた。標高151m付近に、尾根を遮断する幅10m前後の堀切が東西方向に掘られていることが現況地形で観察されていた。尾根は部分的に小さな平坦部を持つ3～5mの瘦せ尾根であり、小瀬戸城の曲輪が存在することを想定して調査を実施した。

調査方法と確認状況 尾根上に、およそ220mにわたってトレーナーを設定し、人力で掘削した。その結果、尾根の至るところから、現在の山道とは異なる位置にある道状の遺構が検出された。また、平坦面から



第6図 各地点対象位置図2

は炭を多く含む土坑が2基検出された。

結果 検出された遺構は表土から掘りこまれたものではないので、小瀬戸城の時期に遡る可能性が想定された。なお、この地点の確認調査・本調査については、静岡市教育委員会が担当している。

(7) №73地点

位置・立地と現況 静岡市葵区小瀬戸に位置する。小瀬戸谷川が開析した標高59~72mの谷部にある。付近は主に山沿いが宅地に、谷の中心部が水田や畑といった耕作地に利用されていた。谷は小瀬戸谷川や安倍川による堆積が厚く、現況地盤では遺跡の存在は把握できなかった。しかし、「ゴショノ谷」や「門内」という南朝に関わりのあると考えられる地名や集落の機能を示す地名が散在することからも、中世集落の存在が想定された。

調査方法と確認状況 調査対象地全域にわたって3~5m四方のテストピットや幅2mのトレンチを設定し、重機と人力を併用して掘削した。その結果、谷の奥側の一角に古代に遡る集落が検出された。その他の部分には、全域に渡って中世~近世の集落と水田が検出された。

結果 調査対象地のほぼ全域から中世~近世の遺跡が確認された。なお、この地点の確認調査については、静岡市教育委員会と当研究所が地域を区切って分担し、本調査は73-3地点を当研究所が、他を静岡市が分担し実施している。

(8) №74地点

位置・立地と現況 静岡市葵区小瀬戸・飯間に位置する、小瀬戸城本曲輪から南西方向に続く尾根を中心とした部分である。この地点は広範囲に及ぶため、地形の変化点によって74-1・2・3地点の3ヶ所に分割して調査を実施している。74-1・2地点にあたる丘陵部は標高115~169mで、尾根や斜面の多くは杉の植林や竹林、茶畠に利用されていた。74-3地点は74-2地点東側の谷沿いにある平坦面で、標高90~97mを測る。この地点は宅地等に利用されていた。いずれの地点でも小瀬戸城に関する遺構の存在を想定して調査を実施した。

調査方法と確認状況 74-1地点では、等高線に概ね直交・平行する8ヶ所のトレンチを人力で掘削した。その結果、焼上を含む土坑や溝、縄文時代の石斧が検出されている。74-2地点でも等高線に直交・平行する位置に30本のトレンチを設定し人力で掘削した。地点の中程にある尾根上において現況地形で観察されていた尾根に平行する方向の幅の広い溝は、搔き掻げられた土が両側に盛られ、深さは2mに及ぶことが判明した。また、尾根の平坦部を中心に、複数の土坑や溝が検出されている。74-3地点に

第3表 調査実施期間

遺跡名	地点(内容)	面積 (m ²)	平成9年度					平成10年度					平成11年度					平成12年度																		
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9				
—	67(確認)	35																																		
—	68(確認)	340																																		
キヨウダイ ヤト遺跡	69(確認)	942																																		
キヨウダイ ヤト遺跡	69(本調査)	169																																		
内牧城跡・ キヨウダイヤ ト遺跡・城山 古墳	70(確認)																																			
—	70(本調査)	4,872																																		
—	71(確認)																																			
小瀬戸遺跡	73(確認)	1,347																																		
栗ヶ沢遺跡	73 3(本調査)																																			
栗ヶ沢遺跡	74(確認)																																			
栗ヶ沢遺跡	74 2(確認)																																			
有束遺跡	(本調査)	662																																		
遺跡名	地点(内容)	面積 (m ²)	平成12年度					平成13年度					平成14年度					平成15年度																		
			10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
—	67(確認)																																			
—	68(確認)																																			
キヨウダイ ヤト遺跡	69(確認)																																			
キヨウダイ ヤト遺跡	69(本調査)																																			
内牧城跡・ キヨウダイヤ ト遺跡・城山 古墳	70(確認)																																			
—	71(確認)																																			
小瀬戸遺跡	73(確認)																																			
小瀬戸遺跡	73 3(本調査)	21,163																																		
栗ヶ沢遺跡	74(確認)	200																																		
栗ヶ沢遺跡	74 2(確認)	7,352																																		
有束遺跡	(本調査)																																			

については、等間隔に8ヶ所のトレンチを設定し、重機を用いて掘削した。近現代の造成が激しく、遺構・遺物は確認されていない。

結果 74-1・2地点では、縄文時代と中世以降の遺跡が確認された。74-3地点では遺構・遺物は検出されなかつたため、本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかつた。

なお、この地点の確認調査の多くは、静岡市教育委員会が担当し、本調査は74-1地点を静岡市、74-2地点を当研究所で分担し実施している。

(9) №75地点

位置・立地と現況 静岡市葵区飯間、飯間谷川左岸に位置する。西側の丘陵裾部から飯間谷川に近い低地部にかけて西から東へ傾斜する地形であり、現在は安定した丘陵裾部を宅地等の居住域に、低地部を水田や畑に利用している。調査地点は2ヶ所に分かれ、下流側をA区、上流側をB区とした。

調査方法と確認状況 A区・B区ともにトレンチを設定し、人力・重機で掘削した。A区の丘陵裾部からは土坑や小穴が、低地部からは水田が検出されている。B区では遺構・遺物は検出されず、丘陵裾部

を中心にみられる平坦面は現代の造成によるものと把握された。

結果 A区では、戦国時代にあたる遺跡が存在することが把握された。B区では遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。なお、この地点の確認調査・本調査については、静岡市教育委員会が担当している。

第4節 本調査

1 本調査の方法と経過

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、No.69地点キヨウダイヤト遺跡、No.70地点キヨウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳、No.72地点小瀬戸城跡、No.73-1～3地点小瀬戸遺跡、No.74-1地点小瀬戸城跡、No.74-2地点栗ヶ沢遺跡、No.75地点番匠カイト遺跡及び有東遺跡の8箇所であり、No.72・73-1・73-3・74-1・75地点の調査を静岡市が、他を当研究所が実施した。

本調査の実施においては、調査範囲及び調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できること、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することとなった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。

調査の方法は、第3節で述べた調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることとする。

2 本調査の概要

静岡市西部地区の調査結果の概要は以下のとおりである。ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観してみたい。

縄文時代 縄文時代の遺構は、栗ヶ沢遺跡（No.74-2地点）で検出されている。前述のとおり、薬科川沿いには小規模な縄文時代遺跡が点在しており、今回の発見もこの類型と捉えられる。栗ヶ沢遺跡では、山間部の尾根上、あるいは鞍部の比較的平坦面が発達した部分に生活の痕跡が集中していることが特徴である。遺構は土坑や小穴であり、竪穴住居は明確でない。近接する養源山遺跡は山裾にあり、栗ヶ沢遺跡とは立地を異にする。現在では資料が少なく明確にできないが、時期によって生業や居住する環境が変わっているのであれ



写真1 本調査の状況(小瀬戸遺跡)

ば興味深い。

弥生時代～古墳時代 弥生時代の遺構は、有東遺跡で検出されている。中期のものと考えらえる掘立柱建物4棟以上、土坑、溝、小穴等が検出され、同時期の土器、石器・石製品、木製品が多量に出土している。調査面積は狭かったものの、遺跡の中心域の一角であった可能性が高い。

古墳時代については、城山古墳（No.70地点）が調査されている。この古墳は、丘陵の南向き斜面に単独で築かれる、横穴式石室を主体部とする古墳である。石室の側壁は二抱え大程度の割り石で積まれ、床には部分的に拳大前後の円礫が敷かれていた。遺物は盜掘等によってほとんど残されていなかったが、玄室の全面から出土した須恵器の环身から7世紀後半～末頃の年代が知られる。このような、丘陵端部に単独で築かれる古墳は安倍川中流域右岸に複数あり、他の地域に普遍的に見られる群集墳とは異なったあり方を感じさせる。

古代 古代の資料はキヨウダイヤト遺跡（No.69・70地点）、内牧城跡（No.70地点）で検出されている。キヨウダイヤト遺跡からは広い範囲にわたって奈良～平安時代初頭の遺構が検出されている。北側に内牧城がのる丘陵を控えた谷部からは、須恵器の浄瓶や土師器の甕が埋め込まれた土坑が検出されている。この丘陵の表層は破碎した岩石からなっているため、谷を埋める堆積物は極めて崩れやすいものである。谷に面した部分に施設を設けるに際して、土砂崩れ等を予防し、施設を保護するための地鎮の意味が込められているものと考えられる。また、この丘陵と内牧川との間にも同時期の遺構が展開している。奈良時代～平安時代初頭には、この地域の中心的な施設が一帯に營まれていたことを窺わせる発見となった。また、小瀬戸遺跡（No.73-3地点）から検出された平安時代の掘立柱建物群は、灰釉陶器や綠釉陶器を伴っており、周辺の中心的な施設であった可能性を窺わせる。

中世以降 内牧城跡（No.70地点）は、南北朝期に南朝方の山城として整備されたものといわれる。調査の結果、城に伴う明瞭な遺構は確認されなかったが、周囲の急峻な地形は要害性を示すものとして大いに評価できるだろう。戦国期の遺構は、小瀬戸遺跡で水田が検出されている。度重なる水害を乗り越えて耕作を行っていた様子が把握されている。

第5節 資料整理

1 資料整理の体制

本事業では、第2節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したため多くの資料整理が必要となってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施するのは物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することとなった。

静岡市西部地区の資料整理は、平成15年度末時点での現地調査が全て終了できたため、平成16年度から部分的に開始した。現在（平成19年3月時点）、資料整理は中原整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび木製品等の保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

静岡市西部地区の資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第4表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第4表 静岡地区資料整理の体制

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
所長	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠	齋藤 忠
副所長	山下 晃	飯田義夫	飯田義夫	飯田義夫		
常務理事兼総務部長	余田篤幸	余田篤幸	余田篤幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫
次長			鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
総務課長	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎
総務専門員	穂葉保幸	穂葉保幸	穂葉保幸	穂葉保幸	穂葉保幸	穂葉保幸
総務係長	山本広子	山本広子	山本広子	佐藤美奈子	佐藤美奈子	佐藤美奈子
会計係長	大橋 薫	大橋 薫	野島尚紀	野島尚紀	野島尚紀	
副主任	鈴木秀幸			中鉢京子		
主任		鈴木秋博	鈴木秋博			
事務員					調所山美	
部長	佐藤述雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川憲久	石川憲久
次長	栗野克己 及川 司	栗野克己 中嶋郁夫	栗野克己 中嶋郁夫	栗野克己 中嶋郁夫	中嶋郁夫	穂葉保幸 及川 司
組担当課長	及川 司	嶺原修二	中嶋郁夫	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川 司
工区主任	加藤理文					河合 修
調査係長						
主任調査研究員					河合 修	
調査研究員	川上 努	川上 努	川上 努	川上 努	鈴木淑子	鈴木淑子
副主任						中鉢京子
事務員						調所山美

2 資料整理の方法と経過

現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくこととなった。したがって各地区的最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめた本章（総論）を掲載することとした。

以上により、静岡市西部地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「静岡市－1」として、総論と小瀬戸遺跡、栗ヶ沢遺跡の報告を掲載し、続く「静岡市－2」に有東遺跡、「静岡市－3」残る静岡市西部地区の遺跡（キヨウダイヤト遺跡・内牧城跡・城山古墳）を、そして「静岡市－4」に静岡市東部地区（静岡市清水区）の総論とNo.66地点庵原城跡を掲載することとした。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。小瀬戸遺跡の資料整理および報告書作成作業については第2章第2節に、栗ヶ沢遺跡の資料整理および報告書作成作業については第3章第2節に記している。



写真2 整理作業の状況

第2章 小瀬戸遺跡(第二東名No.73—3地点)

第1節 位置と環境

1 位置と地理的環境

第2章

小瀬戸遺跡は、静岡県静岡市葵区小瀬戸の、標高58~80m程度の北向きに開く谷地形上に位置する。この谷（以下、「小瀬戸谷」）は、小瀬戸谷川によって開析されたものであり、谷を埋める土砂も谷の入口付近は薺科川の影響を受けるが、他は小瀬戸谷川とその小さな支流がもたらしたもののが主体となる。谷は、小瀬戸城がる丘陵の張り出しによって入り口が狭められているが、半ばあたりでは幅が300m近くになる。奥行きは1.5km程度であるが、半ばから奥側にかけて100~50mに著しく幅を減じる。薺科川の流域には、このような小河川によって開析された谷がいくつもみられる。

谷には、岡部・藤枝方面と連絡する県道静岡朝比奈藤枝線が通っている。谷を400mほど入った場所左側には、独立した小丘陵があるが、本来は西側の丘陵と尾根でつながっていたものであり、この県道が建設されるに際して掘り割られて現状の姿となっている。

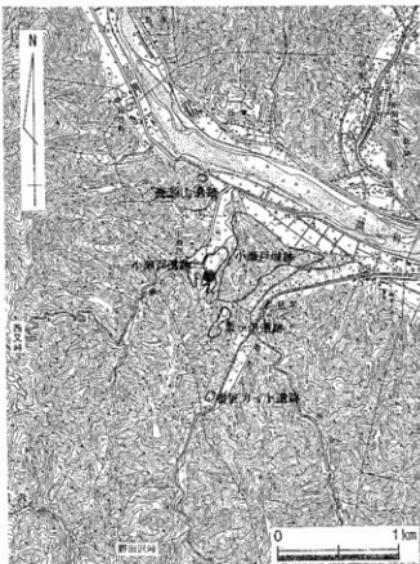
谷を流下する小瀬戸谷川は、周囲から流入する澄んだ沢水によって流量も豊富である。第二東名をはじめとした開発が進む中にあっても、ハヤなどが群れる景色がみられることには安堵させられる。

2 歴史的環境と調査歴

小瀬戸遺跡は、第二東名事業に伴って把握された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査歴は皆無である。現在集落域となっている丘陵裾部は、小瀬戸谷川や安倍川の水害を避けうる場所であり、集落域として永らく使われてきたことは想像に難しくないが、埋蔵文化財包蔵地として把握されていないため、考古学的手法では探求が及んでいない。

小瀬戸谷入り口の西側丘陵には、縄文時代の養源山遺跡がある。第1章でも触れたように、薺科川流域には同様の小規模な縄文遺跡が分布している。養源山遺跡の内容は不確かであるが、薺科川上流部から大井川流域へ、小瀬戸谷から岡部・藤枝方面へと縄文時代遺跡が多くみられる地域へ抜けることが可能な地域にあるだけに、この立地は興味深い。

遺跡の東側に突き出た丘陵の末端部には、小瀬戸城が築かれている。この城は、安倍城の支城として位置付けられているが、築城年代等定かでない部分が多く、実態はよく分



第7図 本調査の位置と周辺の遺跡

からない。ただし、本曲輪東側に二重の堀切が築かれるところをみると、恐らく今川氏の退去後にあたる元亀・天正年間に武田氏などの手によって改修されているのであろう。

小瀬戸谷には、南朝に関わるとされる小字や一定の機能を示す小字が認められる。現在の県道によつて開削された小さな尾根の張り出し部（天神森と呼ばれる）内側は「門内」と呼ばれ、谷の内側からみた空間の限界を示すものと理解でき、興味深い。この奥側には興良親王の御所があったといわれる「ゴシヨノ谷」があり、その周辺に「右エ門屋敷」、「常進屋敷」、「居廻り」などの小字がある。ちなみに、今回の調査区は「右エ門屋敷」、「居廻り」の付近にある。

また、小瀬戸谷西側の丘陵部には、駿府城築城に伴う石切場が残されている。

第2節 調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

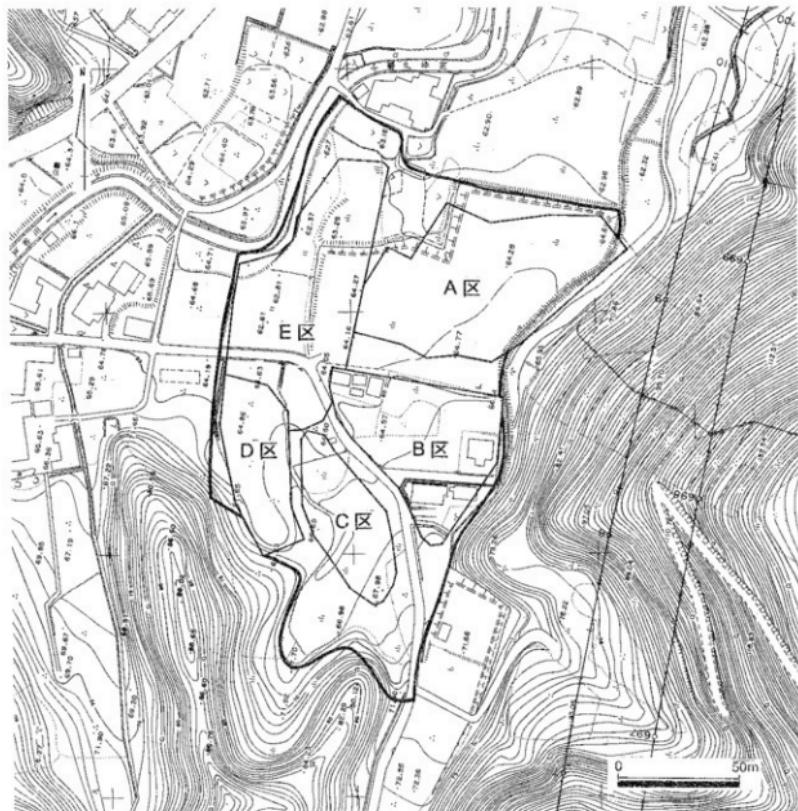
本調査に先立つて、平成11年4月26日から7月22日までに、調査対象範囲の北側に対して試掘・確認調査を実施した。開発対象となる範囲を河川や地物・地形によってA～E地区（本調査の地区分けとは異なる。）に区分した上、基本的には15～20m間隔で設定した3～5m四方のグリッドによって、A地区で23箇所、C地区で18箇所の掘削を実施した。掘削は重機による表土及び耕作土の掘削後、人力により精査をおこなった。その結果、戰国期を中心とする中世の水田の存在が把握され、部分的に古代まで遡る遺物・遺構の存在が確認された。なお、B・D・E地区については、静岡市教育委員会が試掘・確認調査を実施している。

調査の記録は、掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなった。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遺構検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35mm判のカラーネガを使用した。

本調査段階では、試掘・確認調査の成果も加味し、調査対象地を73-1～3地点の三つに区分し直した。当研究所は対象地半ば付近に位置する73-3地点を分担し、本調査を実施した。本調査においては、重機を用いて耕作土等を除去した後、国土座標に乗った10mメッシュのグリッドを設定した。グリッド杭の打設は業務委託により、グリッド間隔と同様に実施した。グリッド番号は、南北方向に北からA～Fとし、東西方向は西から1～9とした。更に、地物の事情や工程の関係から地区内をA～Dの4つの調査区に分割し、平成14年度にA～D区、15年度にE区の調査を実施した。

包含層及び遺構の掘削はすべて人力によって実施した。耕土は堀内に仮置きし、調査終了後各調査区ごとに埋め戻した。遺構番号は調査の進展に合わせて、各調査区ごとに基本的には北から南へ随時付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。また、本来ひとつの遺構を構成する掘立柱建物などは、柱穴個々の遺構番号と別に、アルファベットと数字によって構成される記号（SH1など）を別に冠した。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10～20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したと思われるものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。

測量はトータルステーションを使用し、遺構全体図は空中写真測量をおこなった。写真撮影は6×7判のモノクロと35mm判のカラーネガ、モノクロ、カラーリバーサルを使用し、全景写真は空中写真撮影を委託により実施した。



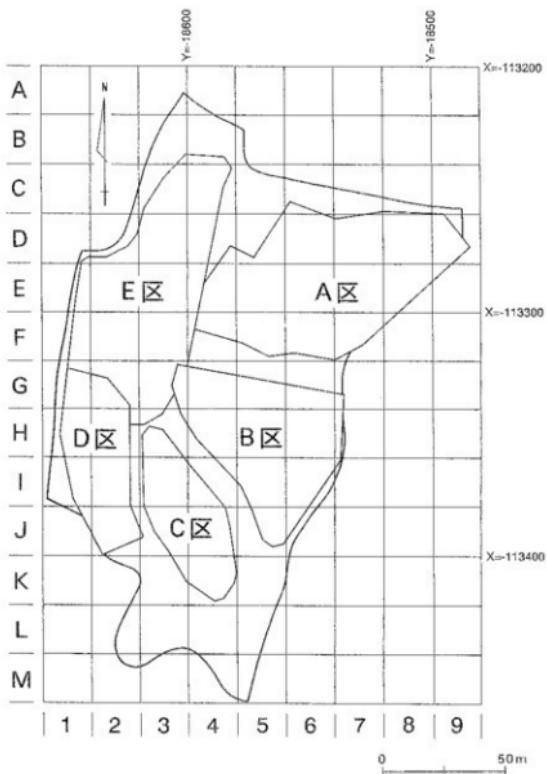
第8図 調査区と周辺地形図

2 発掘調査の経過

本調査は、平成14年5月13日から平成16年2月27日までのおよそ1年9ヶ月にわたって実施した。各調査区の調査経過は次のとおりである。

A区 平成14年5月13日から重機を用いて表土除去を実施した。7月8日、表土除去終了に合わせて場内に排土用のベルトコンベアを搬入して、人力掘削を開始した。同月18日から上層の遺構検出作業を始め、遺構の全体像を把握した後に遺構掘削を実施して9月5日に終了した。この後、写真撮影のため調査区内外の全体清掃を開始し、同月12日に写真測量の撮影を行った。翌日には調査に際して設置した配電施設等撤去し、10月30日までに埋め戻しを実施して調査を終了した。

B区 A区の表土除去が終了した7月8日から重機を用いて表土除去を開始した。9月11日から遺構検出面の排水設備を整え、18日から排土用のベルトコンベアを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺



第9図 グリッド配置図

構の掘削は検出できた部分から随時開始し、11月21日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、同月29日に撮影を行った。翌日から12月17日まで実測を要する部分の解体に着手した。19日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。
C区 B区の人力掘削が後半に差し掛かった10月30日から重機を用いて表土除去を開始した。12月12日から遺構検出面の排水設備を整え、週明けの16日から排土用のベルトコンベアを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺構の掘削は検出できた部分から随時開始し、平成15年2月5日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、同月7日に撮影を行った。翌日からは、18日まで実測を要する部分の解体に着手した。20日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。

D区 C区の表土除去が終了した後の12月13日から重機を用いて表土除去を開始した。平成15年2月5日に遺構検出面の排水設備を整えて、翌日から排土用のベルトコンベアを搬入して、人力掘削を開始した。上層遺構の掘削は検出できた部分から随時開始し、平成15年3月13日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始して、撮影を行った。翌日からは、18日まで実測を要する部分の解体に着手した。3月18日に場内の機材を撤去して、埋め戻しに移行した。

E区 E区の重機掘削に先立って、D区の調査が終了した翌週にあたる3月24日から月末にかけて、調査区内に存在した土側溝の付替を実施した。表土除去は、年度明けの4月7日から開始した。重機作業と並行して5月22日以降、表土が除去された部分から上層遺構の人力による遺構検出作業を開始した。7月3日、降雨による冠水・隣接する工事法面の崩落・調査地区への土砂の流入等があり、翌日から18日までを復旧に要した。7月22日、本格的に調査再開し、10月24日までに終了した。この後、写真測量のため、調査区内外の全体清掃を開始し、30日までに撮影を行った。翌週からは、下層遺構（集落）の広がりを把握するために試掘坑を8箇所で掘削し、11月17日から下層遺構の乗る整地層を北側から検出

し始めた。平成16年1月5日から、検出された遺構の掘削を本格的に開始し2月12日に終了した。この後、写真撮影のため、調査区内外の全体清掃を開始し、19日に撮影を行った。翌日からは、下位の遺構を探したが検出されず、整地層を除去しながら場内の機材を撤去して、3月1日以降に埋め戻しへ移行した。

3 資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、小瀬戸遺跡の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点では静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区の一部を除いた静岡工区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、小瀬戸遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図・遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は6×7寸のモノクロ及びカラーポジ用いた。

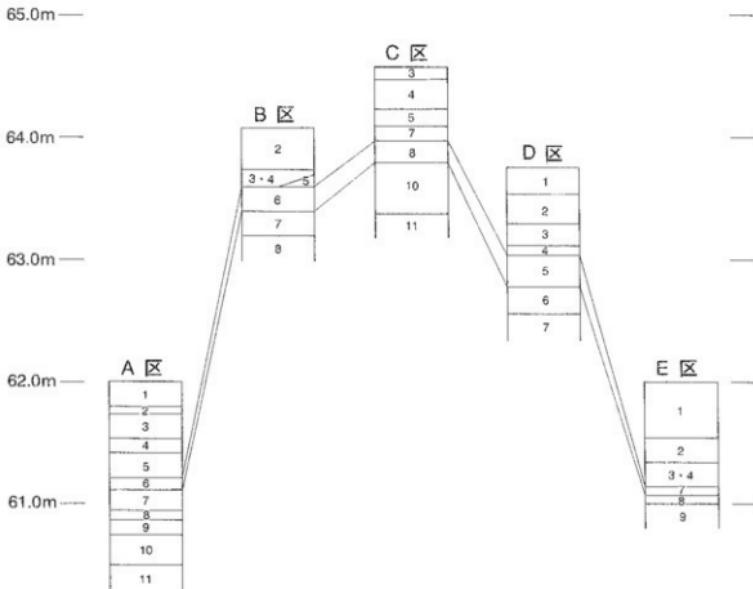
第3節 概要

1 地形

小瀬戸遺跡が営まれている谷底平野は、幅50～300m、奥行き1.5kmで北へ平均2%前後で下る。両側を150～200mほどの丘陵に挟まれるため、日照時間は平野部に比べ制限される。谷底平野は主に糞科川や小瀬戸谷川によってもたらされた砂礫層を基盤としており、上位には水性堆積によるシルトや粘土がラミナを伴い堆積する。従来からの集落は、谷の西側の山裾に沿って営まれている。この傾向は、水害を受けにくい、より安定した地域に居住域を求めたことに起因すると思われる。糞科川の川入や小瀬戸谷川の氾濫によって谷が冠水した場合、谷の入り口が小瀬戸城の乗る丘陵や「門内」に接する小丘陵によって狭められているために、速やかな排水が促されない傾向にある。今回の一連の調査によって随所で確認された水性堆積は、河川の氾濫に伴ってしばらく湿地となり、排水後耕地として再開発されるというサイクルが幾度となく繰り返されていたことを物語っている。

2 土層

遺跡は谷の奥にあたる南側から、谷の入り口がある北側へと徐々に傾斜した地形である。谷の埋土は、前述のように比較的蛇行しながら流れる小瀬戸谷川や、糞科川の影響も受けた水性堆積によるものである。砂礫層の間に数層のラミナを伴うシルト・粘土層を挟む傾向がいずれの地点からも窺えることからも、この地域が周期的な水害を被っていたことが知られる。第10図は、各地点で検出された水田耕作土を基盤に相関関係を示したものである。水田耕作土に用いられる土の質や、その上下に位置する土層の関係、それぞれの層厚が地点ごとに異なることはまさにこのことを示しているのだろう。



第10図 A～E区土層相関図

A区の土層（第49図） A区は、南から北に向かって下がり、東西はほぼ水平な堆積が見られる。丘陵部に近いaにおいては、砂礫層（11層）及びこの下に位置する粘土と砂礫の互層が比較的浅いところから出現するのに対し、cより北側では出現しない。つまり、元来この場所は北から南方向に急激に落ち込んでいたことが判明する。東西方向に関しては、f～jにおいては概ね6層下位に厚さ10～40cmの粘土と砂礫の互層が堆積する。この部分でも急激な落ち込みを示すa-dラインに対して砂礫層（11層）の落ち込みがみられる。つまり、調査区のほぼ中央に北から南に向けて元来窪んでいた部分があつたことが判明する。この窪みは永く微地形として残され、さらに後に河川の侵入が起こったことにより一時湿地化して、上位の粘土と砂礫の互層を部分的に残す結果となったのだろう。上位の粘土と砂礫の互層より上に堆積する1層～6層は粘土を主体とする層位で、5～25cm程度の厚さをもつ灰色～褐色を呈する。このなかで最下位にあたる6層で戦国時代～近世の水田を検出している。一方、上位の粘土と砂礫の互層より下に堆積する粘土層は白色を呈するものがある（8層）。この変化は上位の粘土と砂礫の互層に含まれる地下水の影響であろう。

B区の土層（第54図） B区においては南から北へ下る土層が確認されている。基盤となるのは青灰色砂礫層（8層）であり、この時点でもみられる傾斜がほぼ現在まで踏襲されている。この上位は粘土層を主体とするが、ラミナを含む粘土層（6層）や砂礫層（5層）を含んでいるため、河川の侵入と湿地化が起こった時期がみとめられる。主に耕作土とされる部分は炭酸鉄（菅跡）が入る3～4層である。この層は南側では比較的安定しているが、低位にあたる北側では漸移的に同化する。戦国時代～近世の水田は6層上で検出している。

C区の土層（第58図） C区においても、南から北へ徐々に下る土層が把握されている。基盤となる

砂礫層（12層）は上位にラミナが入る粘土層（10・11層）を伴い、河川の侵入による湿地化がおこっていることが判明する。10層には再び部分的に砂やラミナが入る砂礫層（9層）が堆積する。この9層の上位にあたる土層はある程度安定していたものと考えられ、炭酸鉄（管鉄）を含む5・7・8層などが水田耕作土として利用された層位である。戦国時代～近世の水田は、A-A'断面8層上で検出している。

D区の土層（第59図） D区は、B・C区に比べればさほどでもないが、やはり北へ向かって若干下る土層が確認されている。ここでも基盤となるのは砂礫層であり（A-A'断面5層、B-B'断面7層）、その上位に粘土層が堆積する。しかしB-B'断面の位置では、これら粘土層の上位に砂礫層と薄い砂層が堆積するため、ある時期に川入りして荒地となっていることが判る。戦国時代～近世の水田はB-B'断面5層上で検出している。

E区の土層（第63・64図） E区も、他の調査区と同様に北へ向かってやや下る土層を確認している。A-A'断面の基盤となるのは砂礫層（9層）である。この上には粘土層が堆積するが、中位と上位に更に砂礫層が堆積するなど、他の地点に比べ河川の影響が大きかったことが知られる。また、不整合がみられる2・4・7層も粘土でありながら水性堆積によるものと考えられる。このように、E区においては耕作城が小瀬戸谷川の氾濫によって、頻繁に利用不可能になっていたことが判明する。戦国時代～近世の水田は7層上で検出している。また、下位に古代～中世前期（9～11世紀）の集落が営まれている。これはA-A'断面の8層、B-B'断面の7層上にあり、これらの層位は山裾から切り出されて敷かれた整地層であると考えた。

3 遺構・遺物の概要

遺構は、戦国期（16世紀）～近世の水田（上層遺構）、平安時代（9～12世紀）の集落（下層遺構）が検出されている。このうち、平安時代の集落はE区にのみ存在し、他では検出されていない。

戦国期～近世の水田は、調査を実施したすべての調査区から検出された。水田面は標高65.6～60.4mの間にあり、南から北へ3%程度の勾配を持って下る（第44・47・48図）。A・B・D区は東側に広がる丘陵の影響を受け、上位の等高線が丘陵方向に流れる傾向がある。水田の区画である畦畔は等高線に沿う方向にある。東西・南北方向を基幹とし、山麓では東よりに振れてくる。水田の作土は粘土が主体となるが、水性の堆積土がいたるところに見られ、耕作・氾濫による川成・開拓のサイクルが幾度となく繰り返されてきたことが知られる。遺物は主に古瀬戸後期IV新段階から19世紀代までの瀬戸美濃製品・志戸呂製品が出土している。擂鉢、碗皿類など一般的な生活雑器が主体である。

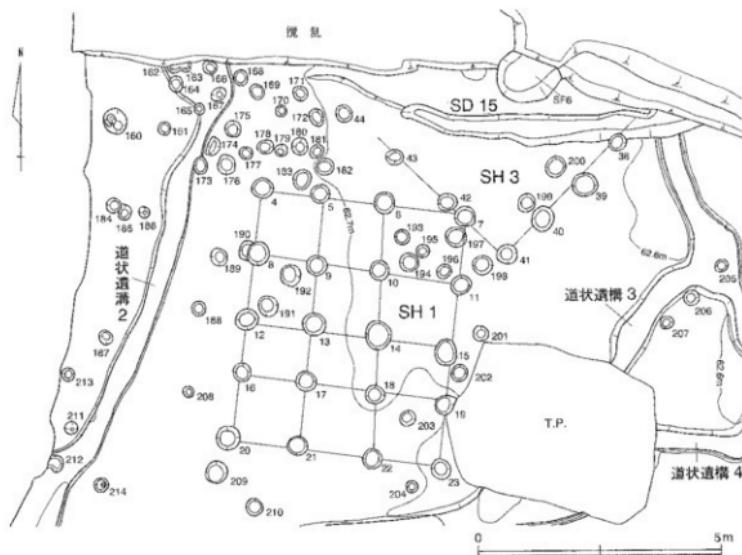
古代～中世前期の集落は、E区の下層から検出されている。南北方向に近似した総柱の掘立柱建物が古く、側柱の掘立柱建物がより新しい時期にあたる。これらは整地層とみられる層位の上位に築かれており、東側の流路との間に土手状の盛り上がりをしつらえるなど、出水への対策を施している。遺物は、整地層の上面や柱穴から縄輪陶器、灰輪陶器、山茶碗などが出土している。

第4節 下層遺構と出土遺物

小瀬戸遺跡の遺構面は、大きく上下2面からなる。上層遺構は江戸時代までの水田跡や畦などで、A区・B区・C区・D区・E区に広がっていた。E区はさらに下部に灰色の整地層が有り、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出された。この部分とその周辺から陶器片などの遺物が出土している。他のA区・B区・C区・D区は江戸時代までの水田跡や畦などを検出したが、E区で検出した最下部灰色



第11図 下層構造全体図



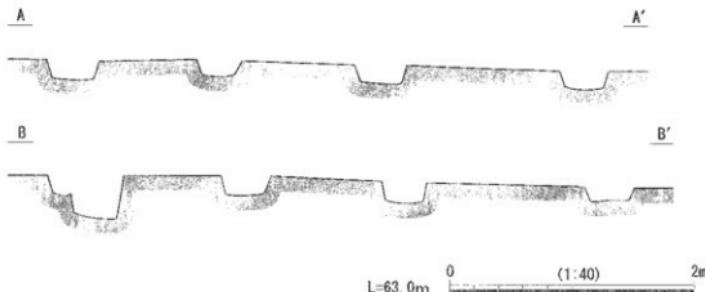
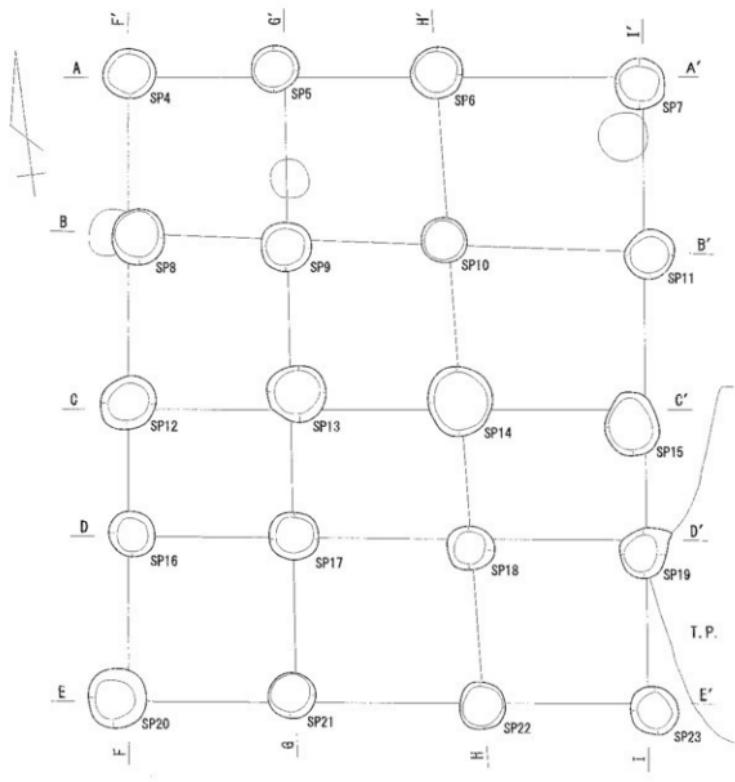
第12図 捶立柱建物SH 1・3付近平面図

粘土層の整地は無かった。こうした状況で出土遺物を整理するにあたり、まず、E区出土遺物を「E区遺構外出土遺物区分け図」(第32図)に示したように分けて、遺構・地点・層位・年代ごとに出土陶器や土器を図示した。ことにE区は最下部で遺構を検出しておらず、これに伴って出土した陶器の製作年代を考慮して図示している。さらに、その周辺から出土した遺構に伴わない遺物も区分けて図示した。したがって、下層部E区出土陶器は、撃立柱遺構SH 1・SH 2・SH 3・SH 4・SH 5出土陶器や土器、道状遺構1・2・4・5・6出土陶器や土器、溝状遺構SD11・SD12・SD13・SD14・SD15・SD17・SD21出土陶器や土器などの順序で図示している。

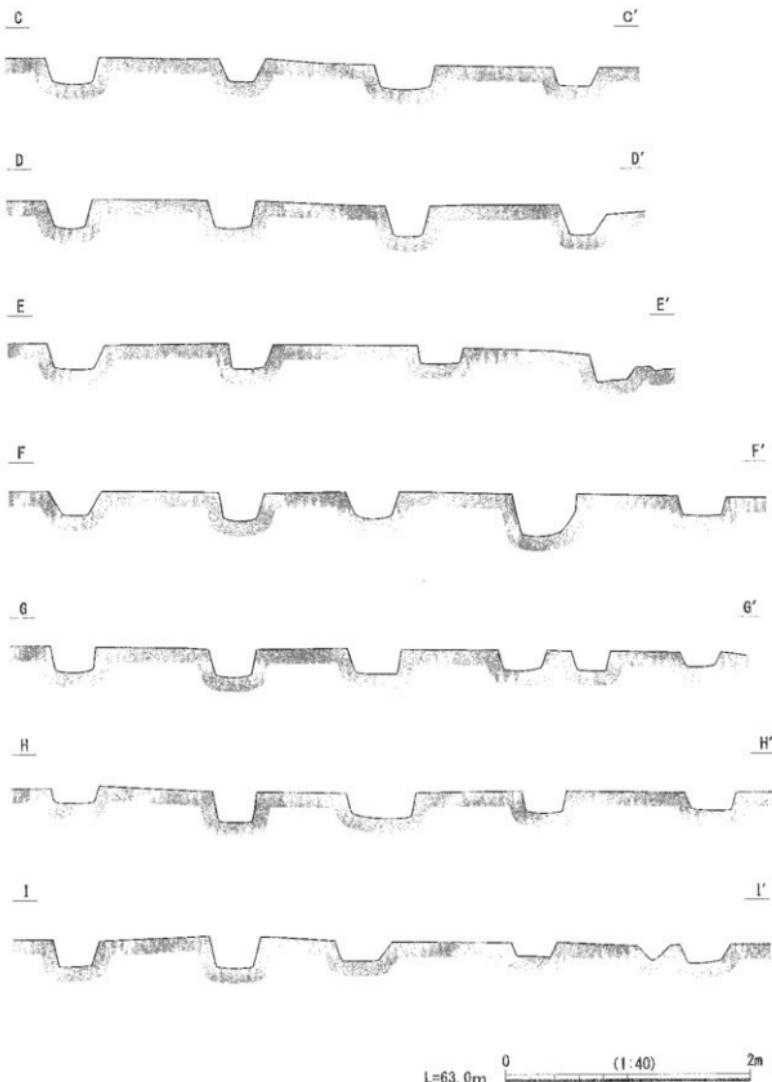
1 下層遺構

(1) 撃立柱建物跡 (SH)

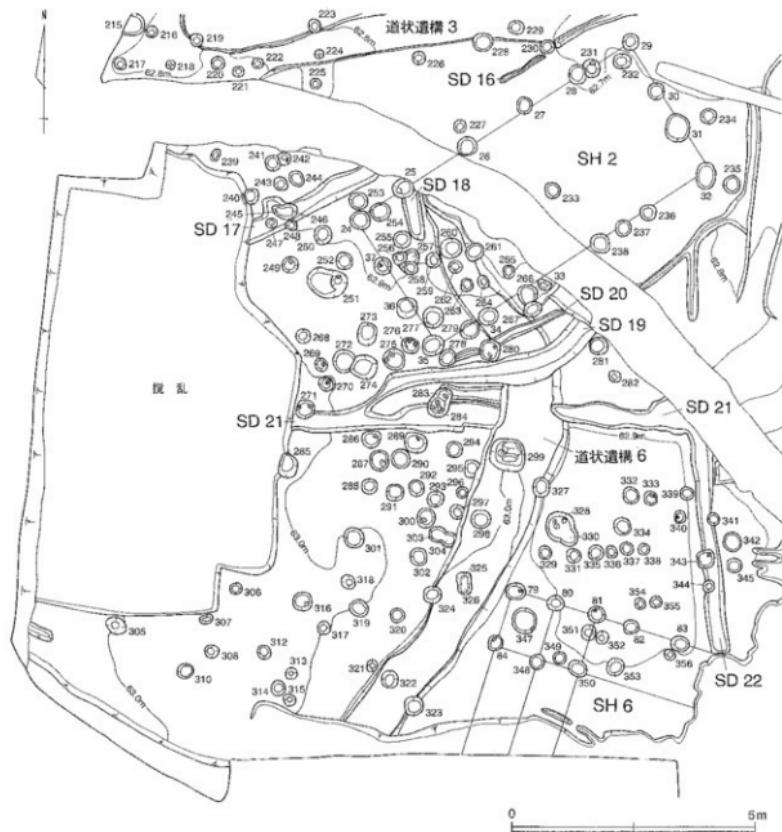
SH 1 (第11~14・28図・図版2) SH 1はE区G 2・F 2グリッドに位置する。平面形が長方形を呈する総柱建物であり、建物の方向はN-7°-Eである。規模は桁行4間(6.5m)、梁行3間(4.4m)で面積は21.82m²である。柱穴の平面形状は円形がほとんどで、楕円形もあり、深さは平均0.2mであった。底面は標高62.6mから62.7mである。出土遺物は(1~19)で、8世紀から9世紀の遠江系土師器の甕(1・7)、K-14号窯式併行にあたる猿投窯生産の灰釉長頸瓶(8・9)、K-90号窯式併行にあたる猿投窯生産の灰釉陶器の輪(10)、東遠系の灰釉陶器碗(11)、糸切り碗(16・17)、O-53号窯式併行の助宗窯生産の碗(12)、同時期の長頸瓶(15)などが出土している。この建物の時期は9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。



第13図 振立柱建物SH1 平面・断面図1



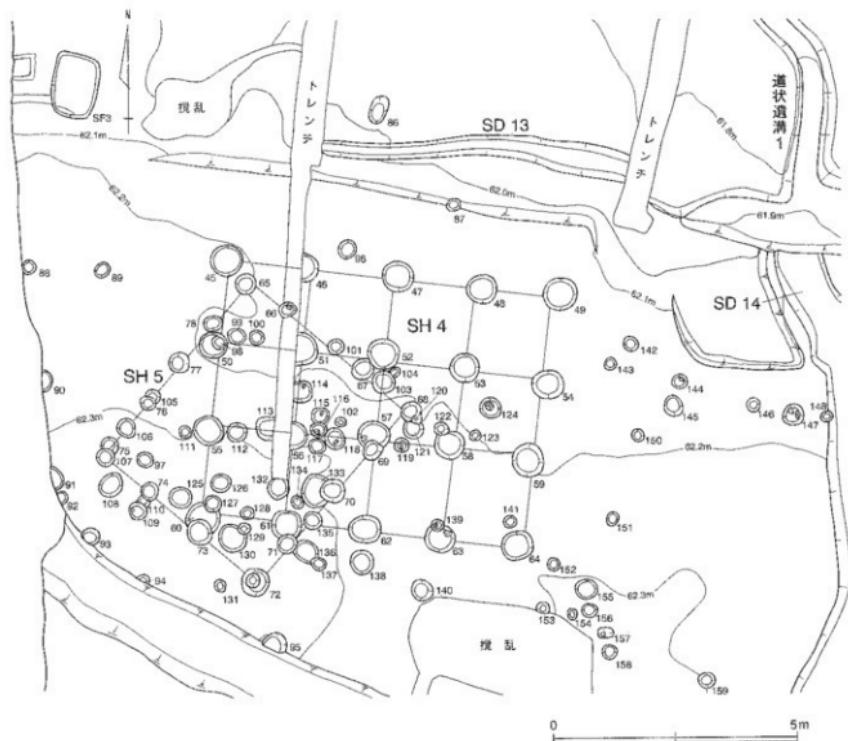
第14図 鋸立柱建物SH 1 平面・断面図2



第15図 挖立柱建物SH2・6付近平面図

SH 2 (第15・17図・図版2) SH 2はE区G 2・F 2グリッドに位置する。平面形が長方形を呈する掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はN-57°-Eである。規模は桁行5間(6.65m)、梁行3間(2.95m)で面積19.6m²を測る。柱穴の平面形状は円形が多く、不定形と椭円形もあり、深さは平均0.256mであった。底面の標高は62.7mから62.9mである。出土遺物は(20~31)で、遠江系の土師器の甕(20)、助宗窯生産のK-90号窯式併行の灰釉陶器碗(23・24)、O-53号窯式併行の糸切り碗(25~27・29・30)、同時期の灰釉陶器の碗(28)、I-2期の小碗(31)などが出土している。この建物の時期は12世紀前半と考えられる。

SH 3 (第12・18図・図版2) SH 3はE区G 2・F 2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し北側が壊乱を受けた掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はN-44°-Eである。建物の規模は桁行3.2m、梁行3.3m、柱穴の形状はすべて円形で、深さは平均0.175mであった。底面の標高が62.6mである。出



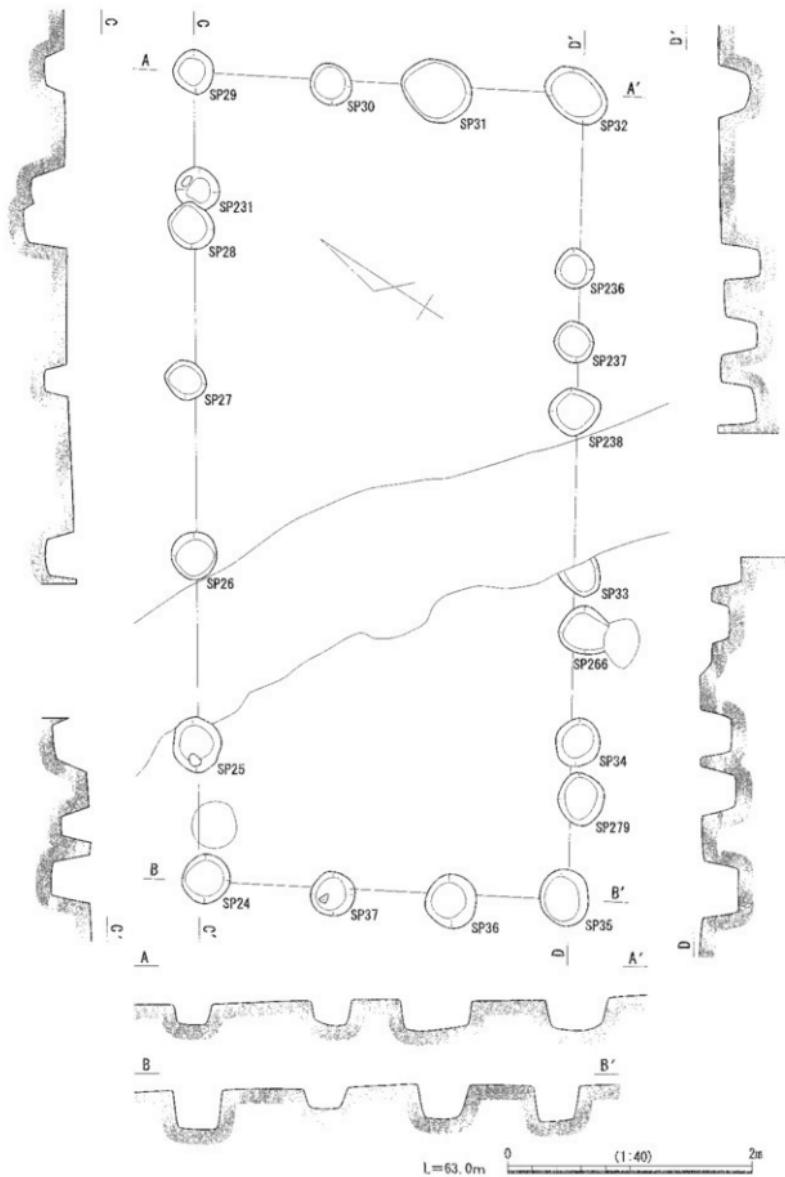
第16図 捜立柱建物SH 4・5付近平面図

土遺物は清郷甕（34）、O-53号窯式併行の碗（35）、山茶碗（36）が出土している。この建物の時期は12世紀後半と考えられる。

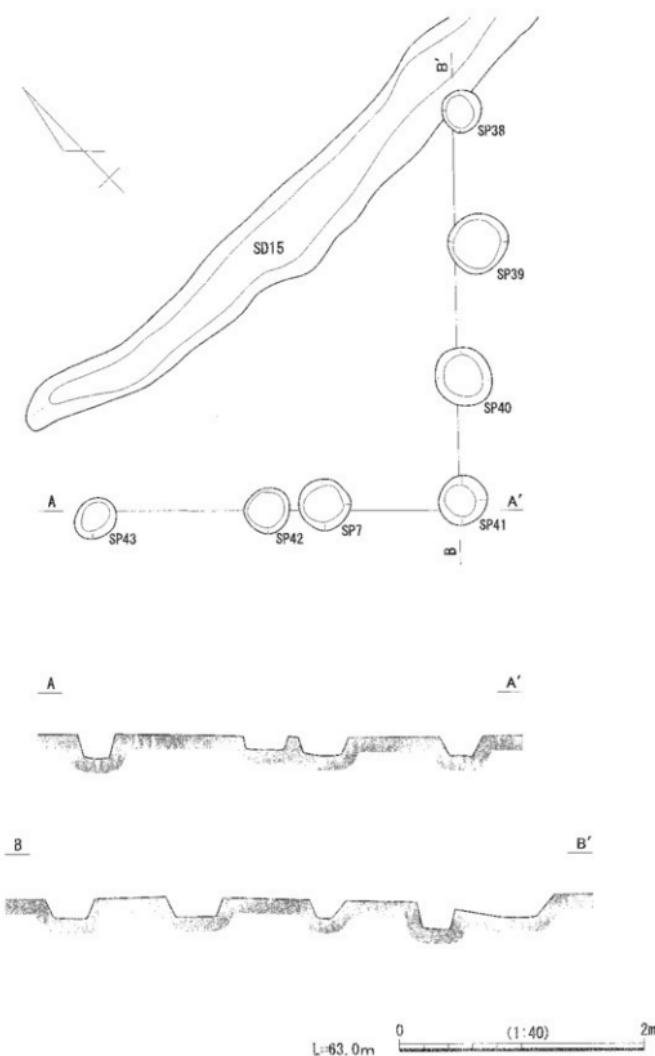
SH 4（第16・19・20図・図版3） SH 4はE区のG 2グリッドに位置する。平面形は方形を呈する掘立柱による総柱建物であり、建物の方向はN-7°-Eである。規模は桁行4間（6.8m）、梁行3間（5.8m）で、面積は39.44m²である。柱穴の平面形状は円形がほとんどであり、不定形もある。柱穴の深さの平均は0.2mであった。出土遺物は9世紀の土師器の碗（37・39）、糸切り碗（38）が出土している。この建物の年代は、SH 1と同様な構造となるため9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

SH 5（第16・21図・図版3） SH 5はE区のF 2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する掘立柱による側柱建物であり、建物の方向はN-40°-Eである。規模は桁行5間（4.3m）、梁行4間（4.15m）で、面積は17.8m²である。柱穴の平面形状は円形・隅丸方形・不定形である。出土遺物は助宗窯生産のK-90号窯式併行の碗（41）が出土している。この建物の年代は柱穴の切り合いから、SH 4より後出するものであり、建物構造から12世紀後半と考えられる。

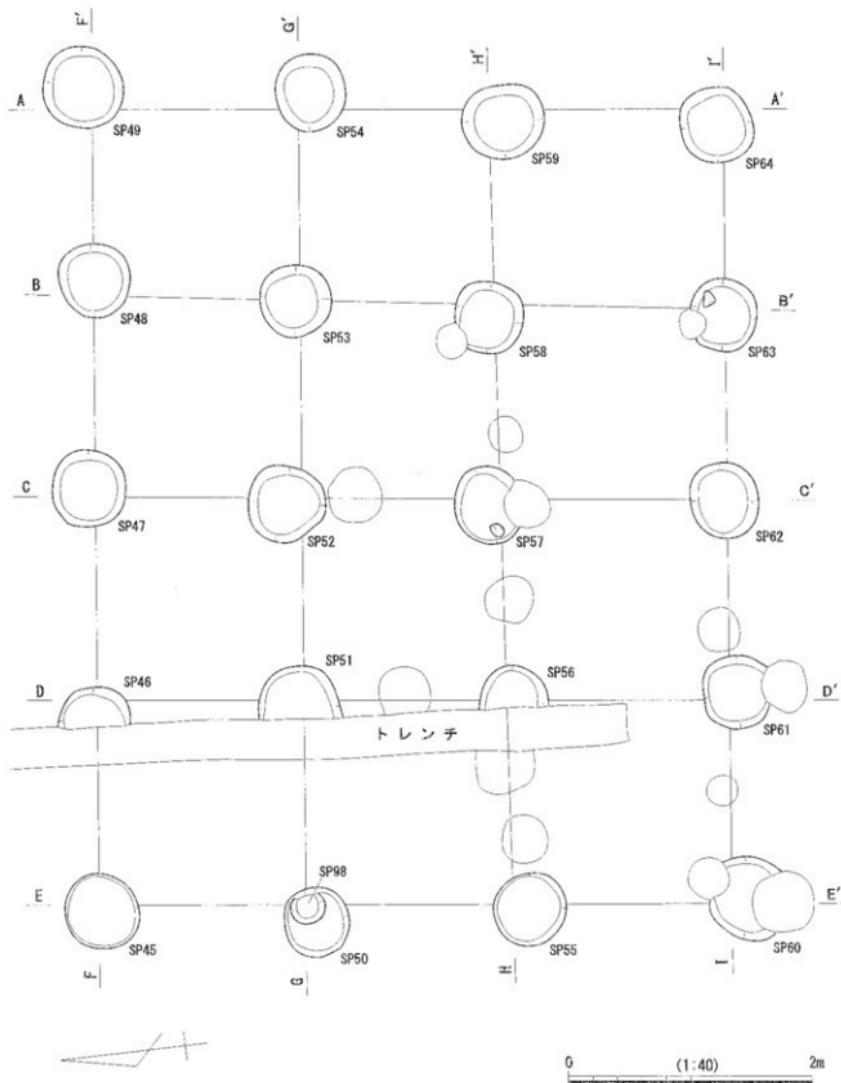
SH 6（第15・22図・図版3） SH 6はE区のG 2グリッドに位置し、平面形は長方形を呈すると思わ



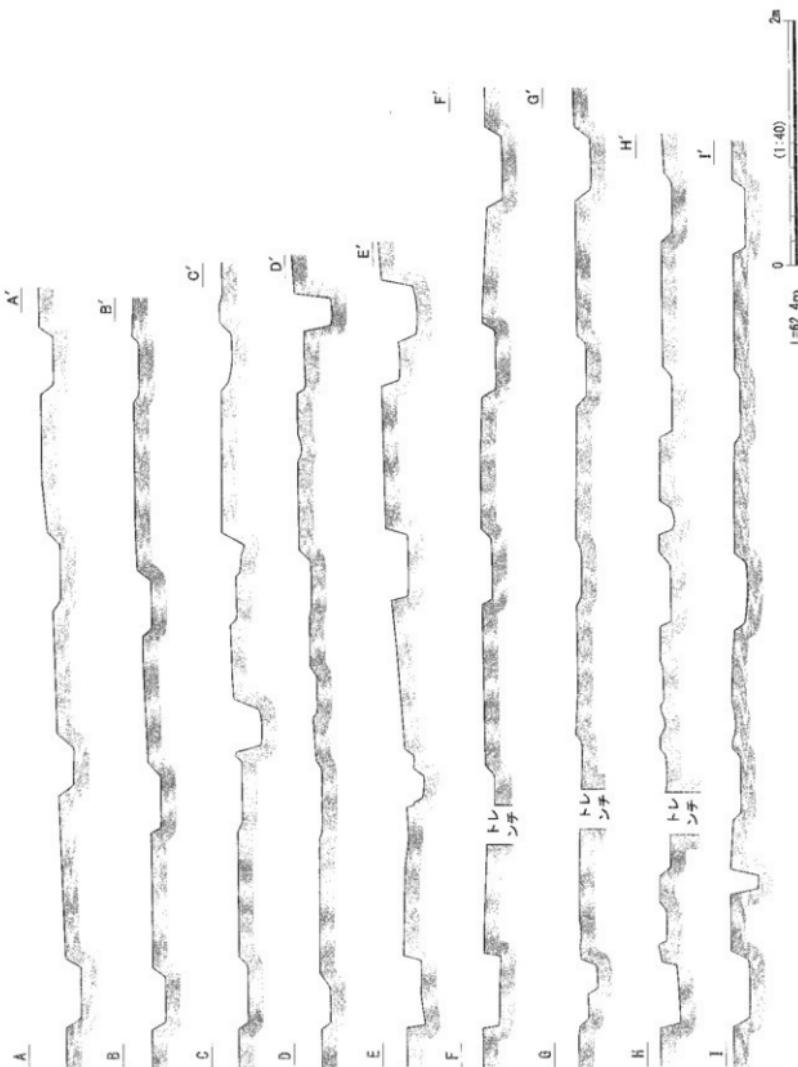
第17図 据立柱建物SH 2 平面・断面図



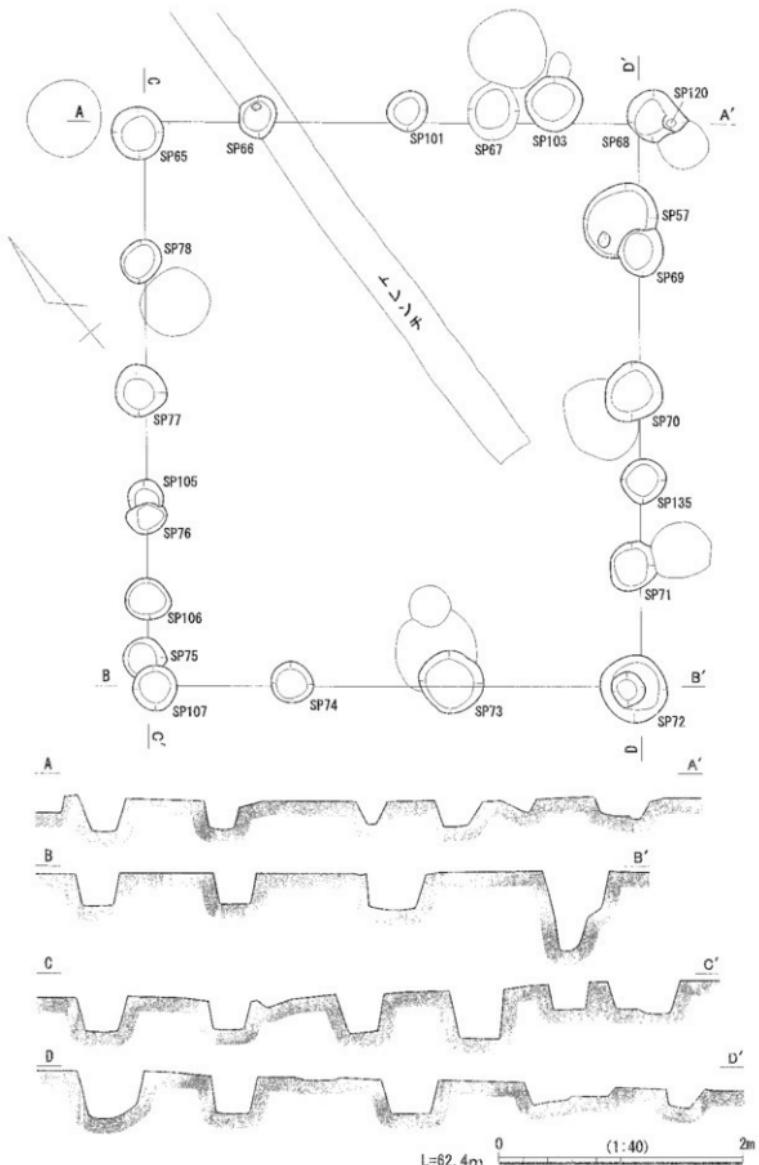
第18図 振立柱建物SH 3平面・断面図



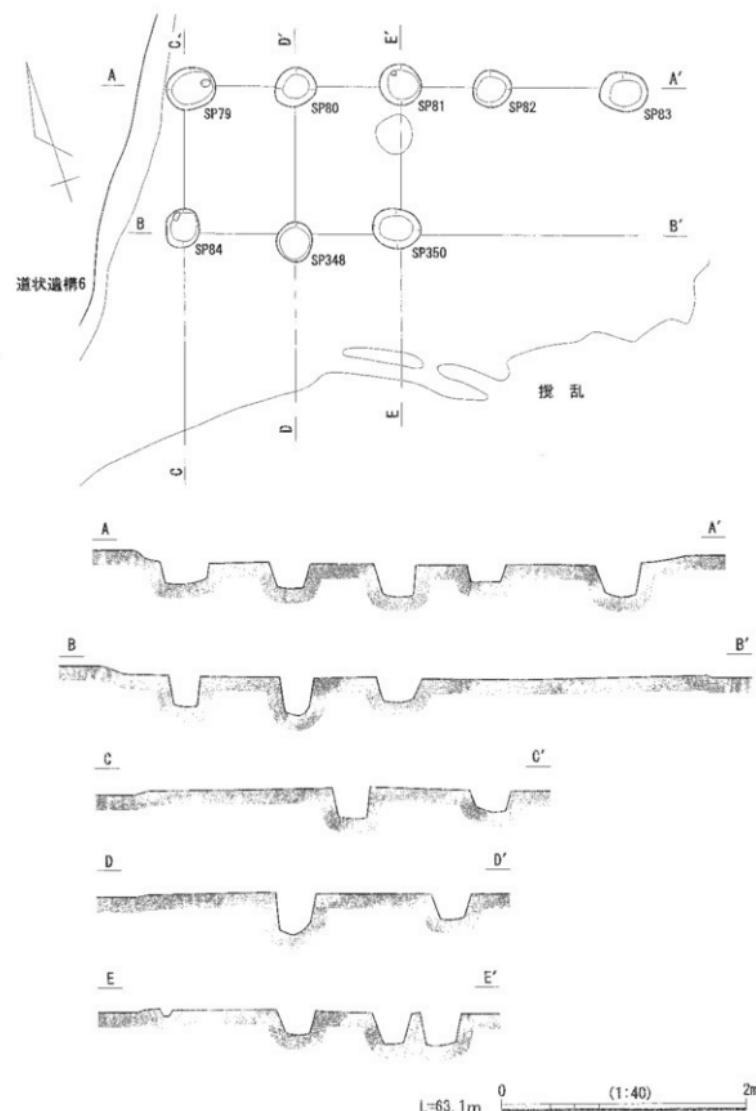
第19図 埋立柱建物SH 4 平面・断面図 1



第20圖 細立柱遺物SH4平面・断面図2



第21図 挖立柱建物SH 5 平面・断面図



第22図 捨立柱建物SH 6 平面・断面図

れる。掘立柱による総柱建物の可能性もあるが明らかでない。建物の方向は、N—111°—Eであり、北西方向に4間以上、南西方向に2間以上と思われる。発掘区の南西から南東にかけて搅乱されていたので規模などは不明である。柱穴の平面形状は円形・梢円形・不定形であり、深さは平均0.225mである。出土遺物は無かった。この建物は不明な点が多いが、構造などにより10世紀代の建物と思われる。

(2) 道状遺構

道状遺構1（第11・23図）道状遺構1はE区のほぼ中央にあり逆T字状に交差している。一方はE2・F2グリッドにあり、長さ12.2m、幅約0.6mから1.2mで方位がN—17°—WからN—43°—Wとなる。もう一方はF2グリッドにあり、長さ5.5m、幅0.7mから1.3m、N—22°—EからN—71°—Eとなる。この遺構からは9世紀中葉の須恵器（42）、K—90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の碗（24・103・144）、助宗窯生産で同時期の灰釉陶器の皿（43）、13世紀中頃の山茶碗（165）、小碗（44）が出土した。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は時期不明であるが13世紀中頃と思われる。

道状遺構2（第23・31図・図版2）道状遺構2はE区G2・H2グリッドにある。道状遺構2から道状遺構4はセットをなすものである。道状遺構2は長さ12m、幅0.3mから1.2mである。E区にあるSH1の西側の一方を囲むように作られている。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。E区南西の隅で道状遺構3とV字状に合流する。この遺構から古墳時代のものと思われる土師器の壺（45）、土師器の甕（46）、9世紀前半の蓋（47）、K—90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の碗（48）、11世紀後半の灰釉陶器の輪花小碗（51）、12世紀前半の山茶碗（52）、12世紀代で中国越州窯系の白磁菊花紋合子蓋の一部（53）が出土している。出土遺物（51～53）は新しい時期の混入品である。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は9世紀後半から10世紀初頭と思われる。

道状遺構3（第23・31図・図版2）道状遺構3はE区G2グリッドにあり、SH1の南側と東側を囲むように作られて道状遺構2と合流し、道状遺構4とも合流する。長さは18.5m、幅0.4mから0.9mで方向がN—76°—EからN—45°—Eへ、さらにN—7°—Eへとなる。この遺構からは出土遺物が無かった。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。土層などからこの遺構の年代は9世紀後半から10世紀初頭と思われる。

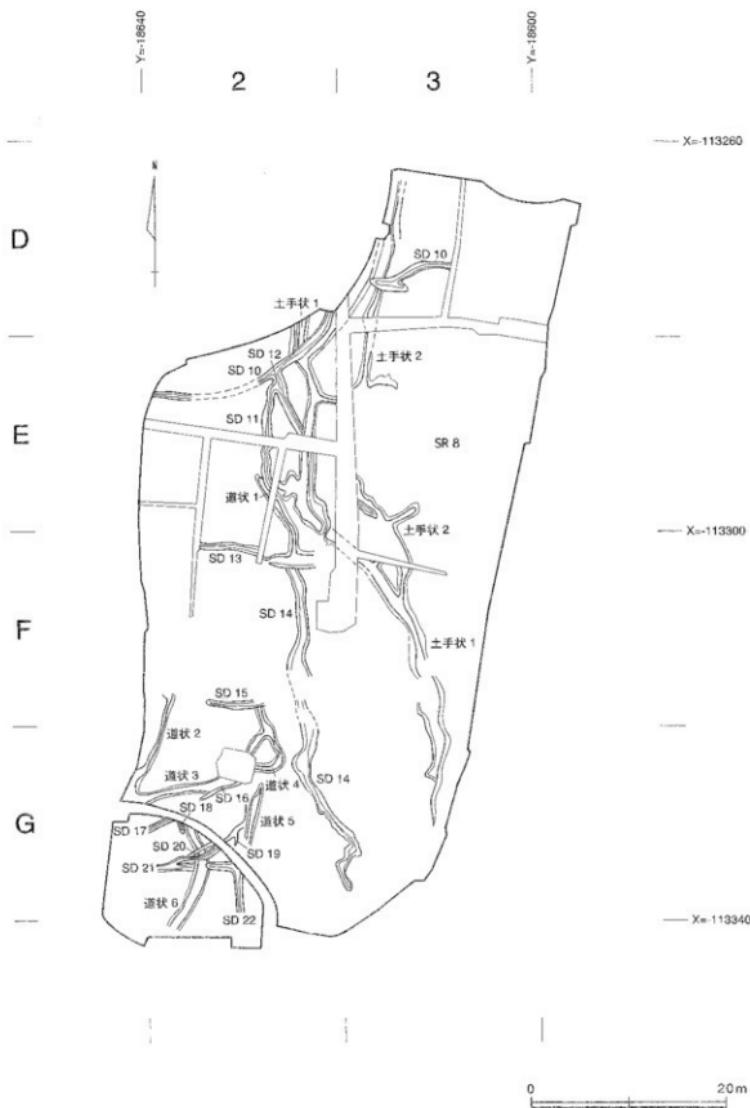
道状遺構4（第23図）道状遺構4はE区G2グリッドにあり、道状遺構3につながっている。長さ6.2m、幅0.4mから0.8m、方向がN—68°—EからN—32°—Wであった。この遺構から10世紀初頭のO—53号窯式併行の長頸瓶（15）、12世紀末の山茶碗（54）が出土した。出土遺物（54）は新しい時期の混入品である。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は9世紀後半から10世紀初頭と思われる。

道状遺構5（第23図）道状遺構5はE区G2グリッドにありSH2の東に作られている。長さ6.5m、幅は0.5mから0.9mである。方向はN—23°—EからN—2°—Eである。出土遺物は10世紀初頭で助宗窯生産の灰釉陶器の皿（55）が出土している。土層は灰色シルトに風化礫を含んでいた。この遺構の年代は不明であるが9世紀後半から10世紀初頭の可能性があると思われる。

道状遺構6（第23図・図版3）道状遺構6はE区G2グリッドにあり、SH2を切っており、SD19、SD20により切られている。長さ10.3m、幅0.6mから1.3mである。方向はN—34°—EからN—43°—Wである。出土遺物は9世紀前半でK—14号窯式併行の灰釉陶器の長頸瓶（56）、糸切り碗（25）が出土している。土層は灰色シルトで風化礫を含んでいた。この遺構の年代はSH2の柱穴に切られていことから、12世紀前半以前と思われる。

(3) 溝状遺構（SD）

SD10（第11・23図・図版1）SD10はE区の北側に位置する。調査区北西から北東部にかけて弓なりに屈折しながら延びる。E2・D2グリッドで長さ10.8m、幅0.5mから0.9m、深さ0.11m、N—2°—Eの方向に延び、D3グリッドで長さ4.1m、幅0.9mから1.3m、深さ0.12m、N—101°—Eの方向に延び



第23図 道状遺構・土手状遺構等配置図

る。さらにD 3 グリッドで長さ3.5m、幅0.4mから0.5m、深さ0.3m、N—58°—Eの方向に延び、同グリッドで長さ3.1m、幅0.5m、深さ0.11mでN—96°—Eの方向に延びている。溝状遺構の北東部に0.4mから0.18mの角礫を積んだ壠状の遺構があり、流路の水量を調節したと思われる。この遺構は出土遺物が無かった。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

SD11 (第11・23図・図版1) SD11はE区のE 2 グリッドに位置する。長さ11.3m、幅0.4mから0.9m、深さ0.1mであり、方向はN—5°—Eである。一部に土手状遺構と道状遺構に挟まれた不定形の窪みがあり、広い部分で3m、狭い部分で1.2m、深さ0.1mから0.2mであった。SD11はここから屈折して北側に延びてSD12と交差し、さらにSD10と合流する。この遺構からは、8世紀から9世紀で遠江系の土師器の甕(57)、9世紀前半の土師器の壺(58)、K—90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の碗(141)、同時期の灰釉陶器の長頸瓶(147)、O—53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器の碗(59)、同時期の灰釉陶器の皿(155)、13世紀で中国の白磁の四耳壺(170)が出土している。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

SD12 (第11・23図・図版1) SD12はE区のほぼ中央から北西方向に屈折しながら延び、SD11と交差してSD10と合流する。グリッドはE 2・F 2で長さ17.5m、幅0.4mから1.7m、深さ0.09mで方向はN—28°—EからN—12°—Wへ、さらにN—28°—Wであった。断面形は皿状を呈する。この遺構から9世紀後半の土師器の壺(60)、13世紀の小碗(168)が出土している。この遺構の年代は12世紀から13世紀と思われる。

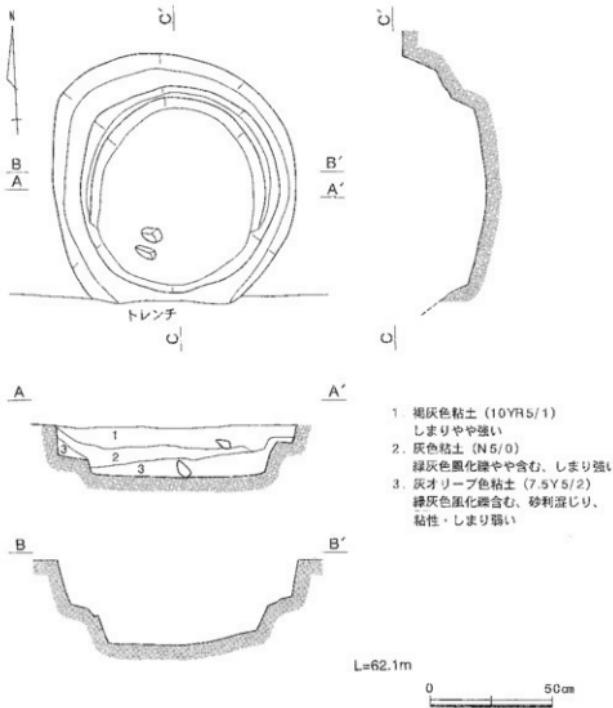
SD13 (第11・23図・図版1) SD13はE区中央のF 2 グリッドに位置している。長さ6.9m、幅0.4mから0.7m、深さ0.08mから0.1mで方向はN—49°—Eであった。断面形は皿状を呈する。この遺構からは、8世紀から9世紀の土師器(61)、K—14号窯式にあたる9世紀前半の灰釉陶器の長頸瓶(62)、助宗窯生産でK—90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器碗(41)の一部、助宗窯生産でO—53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器の碗(64)、東遠系で同時期の灰釉陶器の碗(63)が出土した。この遺構の年代は東端でSD11と接続することから12世紀から13世紀と思われる。

SD14 (第11・23図・図版1) SD14はE区の南側から屈折しながら北側に延びる。途中で擾乱を受けている。グリッドはF 2・G 2・G 3にまたがり、長さ35.4m、幅0.3mから2.7m、深さ0.16mで、方向はN—26°—EからN—37°—Wとなり、さらにN—2°—Wとなる。断面形は皿状を呈する。この遺構からはK—90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の碗(65・193)が出土した。この遺構の年代はSD 11の延長上に位置することから12世紀から13世紀と思われる。

SD15 (第11・23図・図版1) SD15はE区の中央部より南西に位置し、SH 3を切って東西に延びる。E 2 グリッドにあり長さは6.2m、幅0.4mから0.6m、深さ0.12mから0.2m、方向がN—91°—Eである。溝の東側は擾乱を受けているがSD14と交差していたと思われる。SH 3を切っており、SP38に一部切られている。この溝からは糸切り碗(66)が出土している。この遺構の年代は12世紀後半以降と思われる。

SD16 (第11・23図・図版1) SD16・SD17・SD19・SD20はSH 2 を囲むようにつくられている。SD 16はE区の南西に位置し、道状遺構3に沿うように検出されSH 2 の北東から北西に延びている。グリッドはG 2 にあり長さ4.7m、幅0.12mから0.22m、深さ0.04mから0.06m、方向がN—67°—Eである。この溝はSP230に一部切られている。この溝からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代はSH 2 と関係すると考えられるため、12世紀前半のものと思われる。

SD17 (第11・23図・図版1) SD17はE区の南西G 2 グリッドにありSH 2 の北西に位置する。この溝状遺構の北西部と南東部は擾乱されており不明である。長さ3.1m、幅0.5m、深さ0.04m、方位がN—61°—Eであり、SP245からSP248に切られている。SD17からは土師器の蓋(67)が出土した。この遺構



第24図 土坑SF 2 平面・断面図

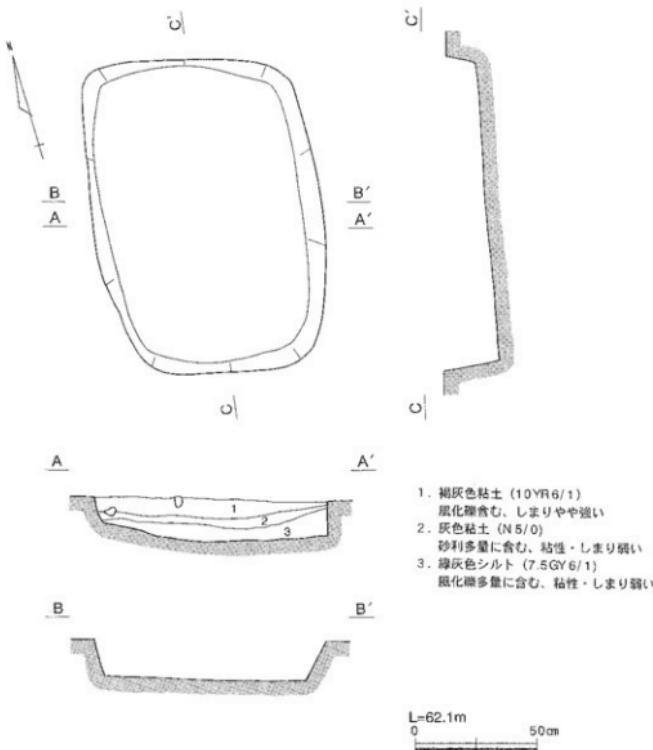
はSH 2に伴うと考えられるため、年代は12世紀前半と思われる。

SD18 (第15・23図・図版1) SD18はE区の南西にありSH 2を切っている。この溝状遺構はG 2グリッドにあり長さ1m、幅0.4m、深さ0.05m、方向がN-10°-Wである。SD18はSP25に切られている。この遺構からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代は12世紀前半以降と思われる。

SD19 (第15・23図・図版1) SD19はE区の南西部に位置し、SH 2の南東から南西を包むように屈折しながら延び、途中南側に分かれる。この遺構はG 2グリッドにあり大きく二方向に分かれている。一方長さ9.3m、幅0.3mから0.6m、方向がN-63°-Eで、もう一方は長さ1.5m、幅0.3mから0.6m、方向がN-1°-Wで、深さ0.05mから0.08mである。断面形は逆台形であった。この遺構からは遺物の出土が無かった。この遺構の年代はSD16と同様に12世紀前半と思われる。

SD20 (第15・23図・図版1) SD20はE区の南西に位置し、溝の南部が搅乱を受けSP278、SP280に切られている。この溝状遺構はG 2グリッドにあり長さ2.5m、幅0.1mから0.2m、深さ0.03mであり、方向がN-66°-Eであった。出土遺物は無かったが遺構の年代はSD16同様12世紀前半と思われる。

SD21 (第15・23図・図版1) SD21はE区の南西に位置し東西方向に延び、ほぼ中央部に道状遺構6が通る。SD21の西側は搅乱を受けており、東側も上層遺構発掘時の排水溝により搅乱されている。この溝状遺構はグリッドG 2にあり、道状遺構6の西側は長さ8.2m、幅0.3mから0.6m、方向がN-82°-E



第25図 土坑SF 3 平面・断面図

であり、道状遺構6の東側は長さ6.6m、幅0.3mから0.6m、方向がN-89°-Eで深さが0.03mから0.05mである。この遺構からの出土遺物は、助宗窯生産でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の碗(68)、糸切り碗(70)が出土しているが、SD19と接続するため、この遺構の年代は12世紀前半であると思われる。

SD22 (第15・23図・図版1) SD22はE区の南西隅にあり南北方向に延びている。北側は上層遺構発掘調査時の排水溝で搅乱されているが、SD21と交差するものと思われる。SP341、343、344により切られている。G 2グリッドにあり長さ4.7m、幅0.3mから0.5mで方向N-4°-W、断面形が台形状である。このSD22からは遺物の出土が無かった。この溝の年代はSD21と接続するため12世紀前半と思われる。

(4) 流路・旧河川(SR)

SR 8 (第11・23図・図版4) SR 8はE区の南東から北東にかけて流れる旧河川で、左岸が土手状遺構1と土手状遺構2になる。この河川の右岸は発掘区外となり川幅の全容を明確にすることはできなかった。SR 8はD 3・D 4・E 3・F 3グリッドにかかっており、長さ55m、発掘区内で幅20m、方向がN-7°-EからN-24°-Wであった。土層はシルト層で一部に礫が混入していた。標高は上流部で62.7m、下流部で60.7mであった。この旧河川は山側やその谷部からの湧水や降雨を下流に流し、E区の南東か

ら北東へ向かって流れていたと思われる。SR 8 の南東部の土手状遺構 1 では、これに接するように直径約 3 m の樋の大木の根を検出した。この根元付近から助宗窯生産で 9 世紀前半の須恵器の坏蓋（217）、土師器の坏（222）、土師器の碗（220）が出土した。SR 8 からの出土遺物は、8 世紀から 9 世紀の土師器の台付甕（221）、9 世紀前半の助宗窯生産の須恵器坏身（223）、9 世紀前半の須恵器の坏身（218）、須恵器の坏身（219）、K-14号窯式併行にあたる 9 世紀前半の灰釉陶器広口瓶の一部（14）、O-53号窯式併行にあたる 10 世紀初頭の糸切り甕（227～229・231・232）、12 世紀前半の山茶碗（233～235）、13 世紀後半の小碗（237）が出土した。土手状遺構 1 と同 2 は、SR 8 による水害から SH 1 ～ SH 6 などの建物を守るべく造られたとも考えられ、SR 8 はたびたび氾濫した可能性がある。SR 8 は 9 世紀頃から 12 世紀頃まで流れていたと思われる。

(5) 土坑 (SF)

SF 2 (第11・24図・図版1) SF 2 は E 区中央の西側隅から検出された。表面は楕円形で三重の構造となる。外側は東西 1.08m、南北 1.13m、深さ 0.18m、中間が東西 0.87m、南北 0.88m、深さ 0.07m、底面が東西 0.75m、南北 0.76m、深さ 0.16m であり、覆土の灰色粘土層から 13 世紀前半の古瀬戸の四耳壺（127）と繰 2 個が検出された。13 世紀前半の土坑と考えたい。

SF 3 (第11・25図・図版1) SF 3 は E 区の中間西側隅 E 1・E 2 グリッドから検出された。平面形は隅丸方形の土坑で、東西 0.95m、南北 1.28m、深さ 0.16m である。この土坑の覆土の疊混灰色粘土層より、15 世紀後半の志戸呂焼の鋪釉描鉢（323）が出土した。15 世紀後半以降の土坑と思われる。

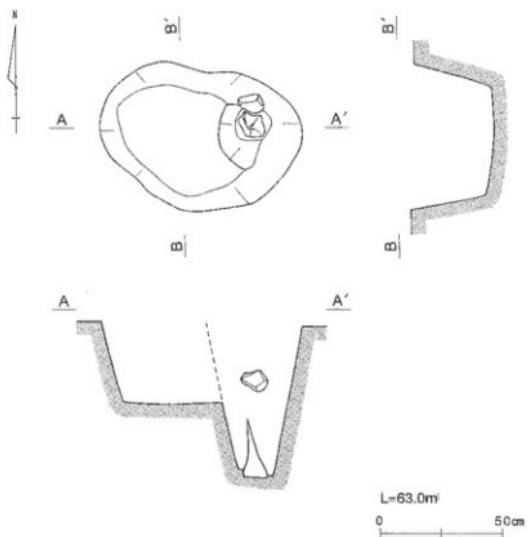
SF 4 (第11図・図版1) SF 4 は E 区の南東側 G 3 グリッドより検出された。平面形が円形で底部も円形である。この土坑は覆土の黒色粘土層から 13 世紀中頃の山茶碗（165）が出土した。掘り抜き井戸の可能性もある。山茶碗の出土から 13 世紀中頃の遺構と考えられる。

SF 5 (第11図・図版1) SF 5 は E 区 G 3 グリッドにあり SF 4 から東側に 1.7m 離れた位置にある。平面形は円形に近く東西 0.64m、南北 0.64m、深さ 0.5m であり、掘り抜き井戸の可能性がある。時代は不明である。

SF 6 (第11・12図・図版1) SF 6 は E 区の中心よりやや南西部 F 2 グリッドにある。平面が楕円形の土坑であったと思われるが北側が搅乱されていた。規模は東西 1.31m、南北は残存している箇所で 1.03m、深さ 0.36m であった。覆土の灰色粘土層より猿投窯生産で K-90号窯式併行にあたる 9 世紀後半の灰釉陶器甕の一部（10）、10 世紀から 11 世紀の清郷甕（96）が出土し、掘削土中から 18 世紀の伊万里焼の染付茶碗（98）が出土した。出土品から 18 世紀の遺構と考えられる。

(6) 土手状遺構

土手状遺構 1 (第11・23図・図版4) 土手状遺構 1 は E 区の D 2・E 2・F 2・F 3・G 3 グリッドと E 2・D 2・D 3 グリッドにある。この遺構は南東隅から屈折しながら北東方向に向かって延び、途中で土手状遺構 2 と枝分かれする。土手状遺構 1 は分歧点から北西に直線的に延び、しばらく SD12 に沿うように北側に延びる。さらに途中で枝分かれするが、一部が SD10 に沿って北東に延びている。この土手状遺構の D 2・E 2・F 2・F 3・G 3 グリッドにかかる部分は、長さ 56.0m、幅 0.36m から 2.1m、高さ 0.12m から 0.2m、方向が N-12°-W から N-40°-W となり、さらに N-4°-W となる。また、E 2・D 2・D 3・E 3・F 3 グリッドにかかる部分は、長さ 15.0m、幅 0.7m から 1.5m、高さ 0.03m から 0.1m、方向が N-35°-E である。この土手状遺構 1 は調査時に上部を削りすぎた。この遺構は SR 8 と SD10 の水害より、SH 1 から SH 6 の建物群を守るために堤防状遺構と考えられる。出土遺物は 8 世紀から 9 世紀の造江系土師器の甕（183・188）、8 世紀から 9 世紀の土師器の甕（137・182・189）、土師器の甕（187）、9 世紀前半の助宗窯の須恵器（175）、K-90号窯式併行にあたる 9 世紀後半の灰釉陶器の碗（194）、同時期の灰釉陶器長頸瓶の一部（140）、O-53号窯式併行にあたる 10 世紀初頭の灰釉陶器



第26図 小穴SP251平面・断面図

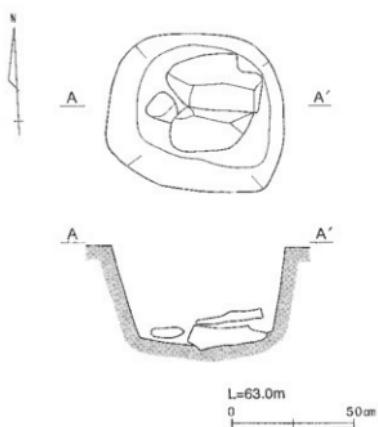
N-11°-Eであった。東側に流れるSR 8の堤防的な機能を持っていたと思われる。土手状遺構1と土手状遺構2が枝状に分かれた部分から土手が二重構造になり、流水の激しい流れを受けていたと思われる。また、北側はSD10により土手状遺構が一部切られているが、土手状遺構1、土手状遺構2により水の流れを受け止め、堤防的な役目をしていたと思われる。さらに、堤防の出し状に東方向と北東方向に突き出ている部分がある。このうち、北東方向の出し状遺構は長さ5m、幅0.9m残存する。東方向の出し状遺構は長さ6.2m、幅1.15m残存した。この土手状遺構は暗灰色粘土層であった。土手状遺構2も土手状遺構と同様にSR 8の水害から建物群を守る機能があったと思われる。出土遺物はK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器長頸瓶の一部(140)、O-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の灰釉陶器碗の一部(151)、同時期の灰釉陶器の皿(150)、同時期の灰釉陶器の碗(12・13・201・225)、糸切り碗(163)、12世紀の中国越州窯系の白磁菊花紋合子蓋の一部(53)が出土した。出土遺物(53)は新しい時期の混入品である。SH 1などが存在した10世紀初頭には土手状遺構1が作られていたと思われる。

土手状遺構2 (第11・23図・図版4) 土手状遺構2はE区D3・E3・F3グリッドにあり、土手状遺構1の中間から枝分かれして屈折しながら北側に延びており、SD10に切られている。この土手状遺構2も調査時に上部を削りすぎている。この遺構は、長さ44m、幅0.8mから1.5m、高さ0.03mから0.23mであり、方向がN-27°-Wから

(7) 小穴 (SP)

SP 1・SP 2・SP 3 (第11図・図版1) SP 1からSP 3はE区のE 2グリッドにある。SP 1とSP 2は土手状遺構1が北側に延び枝分かれする箇所にあり、土手状遺構1を挟むように存在する。SP 1より南東に9m離れてSP 2が検出された。SP 2からさらに南東に3.1m離れてSP 3が検出された。SP 1からSP 3まではほぼ直線的に並ぶ。これらの小穴にはそれぞれ根石がある。SP 1は平面形が梢円形で東西0.59m、南北0.47m、深さ0.27m、小穴内に根石を使用していた。SP 2は平面形が梢円形で東西0.54m、南北0.6m、深さ0.16mで方形の根石を使用していた。SP 3は梢円形で東西0.61m、南北0.48m、深さ0.35mで根石が使用されていた。このSP 1・SP 2・SP 3の性格と年代は不明であるが、根石が検出されているので、柱状のものが立っていた可能性がある。

SP160 (第11・12図・図版1) SP160はE区F 1・F 2グリッドにあり、道状遺構2の西側に位置する。



第27図 小穴SP299平面・断面図

西0.28m、南北0.26m、深さ0.23mで覆土の灰色粘土層より、10世紀から11世紀の清郷壺（34）が出土している。

SP180（第11・12図・図版2） SP180はE区F2グリッドにありSH1の北側に位置し、平面形は円形で東西0.33m、南北0.35m、深さ0.25mで覆土の灰色粘土層より弥生土器（33）が出土している。

SP189（第11・12図・図版2） SP189はE区G2グリッドにありSH1のSP8から西側へ0.42m離れた場所に位置し、平面形は円形で東西0.34m、南北0.36m、深さ0.18mで、灰色粘土層より13世紀前半の山茶碗（18）が出土している。

SP192（第11・12図・図版2） SP192はE区G2グリッドにありSH1の中にある。平面形は円形で東西0.42m、南北0.44m、深さ0.24mで覆土の灰色粘土層より土師器の壺（5）が出土している。

SP194（第11・12図・図版2） SP194はE区G2グリッドのSH1の中にある。平面形は円形で東西0.39m、南北0.39m、深さ0.11mで覆土の灰色粘土層より土師器の壺（3）が出土している。

SP201（第11・12図・図版2） SP201はE区G2グリッドのSH1の東側にある。平面形は円形で東西0.29m、南北0.3m、深さ0.21mであった。覆土の灰色粘土層より8世紀から9世紀の遠江系壺の底部（7）が出土している。

SP213（第11・12図・図版1） SP213はE区G1グリッドにあり、道状遺構2の西側に位置する。平面形は円形で東西0.27m、南北0.28m、深さ0.26mであった。この小穴の覆土黒色粘土層より、土師器の壺（46）が出土している。

SP232（第11・15図・図版2） SP232はE区G2グリッドにあり、SH2のSP29より南西に0.1m離れて位置する。平面形は円形で東西0.38m、南北0.32m、深さ0.13mであった。糸切り碗（30）が出土している。

SP236（第11・15図・図版2） SP236はE区G2グリッドにあり、SH2の中に位置する。平面形は円形で東西0.31m、南北0.31m、深さ0.32mで覆土の灰色粘土層直上より、助宗窯生産でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器碗（24）の一部が出土している。

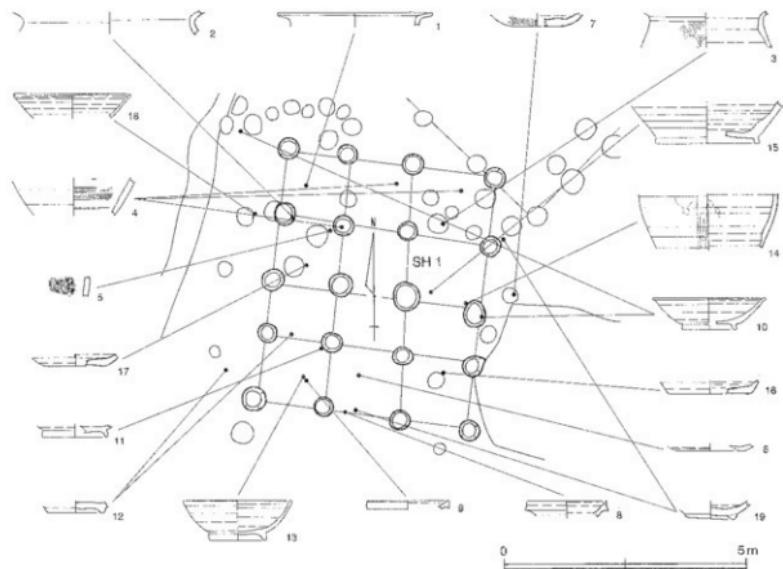
SP238（第11・15図・図版2） SP238はE区G2グリッドにありSH2の中に位置する。平面形は方形

平面形は円形で東西0.47m、南北0.52m、深さ0.44m、小穴の中に比較的大型の根石があり、覆土の灰色粘土層の中から土師器（82）が出土している。

SP166（第11・12図・図版1） SP166はE区F2グリッドに位置し道状遺構2を切っている。平面形は円形で東西0.29m、南北0.29m、深さ0.24mで覆土の黒色粘土層の中より、助宗窯生産でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器の長頸瓶（49）が出土している。

SP176（第11・12図・図版2） SP176はE区F2グリッドにあり道状遺構2から東方に0.2m離れた位置にある。平面形は楕円形で東西0.36m、南北0.44m、深さ0.23mで覆土の灰色粘土層より糸切り碗（92）が出土している。

SP177（第11・12図・図版2） SP177はE区F2グリッドのSH3付近に位置し、平面形は円形で東



第28図 挖立柱建物SH1付近遺物出土状況

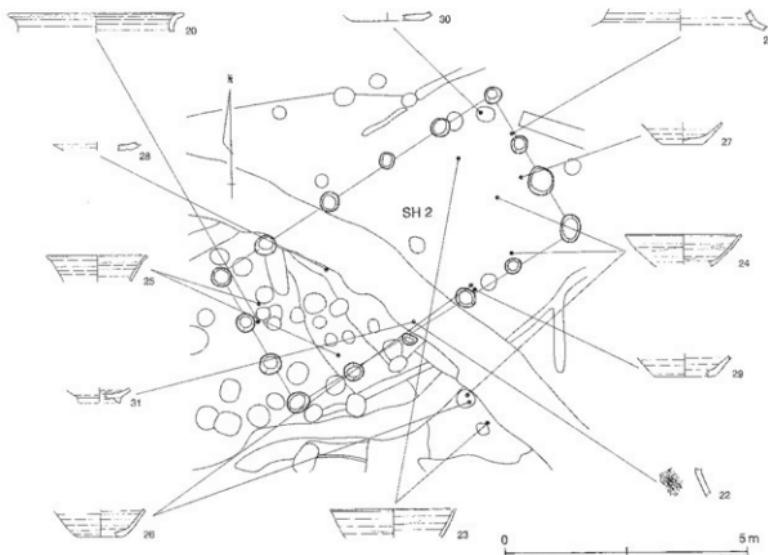
で東西0.38m、南北0.38m、深さ0.31mであった。東遠系でO-53号窯式併行の10世紀初頭の糸切り碗(29)が出土している。

SP251 (第11・15・26図・図版2・5) SP251はSH 2から南西に0.3m離れて検出された。平面形は不定形で比較的大形の小穴で、東西0.83m、南北0.58m、深さ0.33mである。それを切って東西0.17m、南北0.23m、深さ0.61mの不定形の小穴が検出され、この小穴から柱根が検出された。この柱根の年代はSH 2に近接するため、12世紀前半と考えられる。

SP281 (第11・15図・図版2) SP281はE区G 2グリッドのSD19の付近にある。平面形は不定形で東西0.38m、南北0.38m、深さ0.31mである。SP281の覆土灰色粘土層直上から、助宗窯生産でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の灰釉陶器碗(24)の一部と、O-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の糸切り碗(26)の一部が出土した。

SP283・284 (第11・15図・図版2) SP283はE区G 2グリッドにありSP284に切られている。SP283の平面形は不定形で東西0.36m、南北残存径0.26m、深さ0.18mである。また、SP284は根石があり、平面形が方形で東西0.39m、南北0.43m、深さ0.22mである。SP283の覆土中より糸切り碗の一部(70)が出土している。

SP299 (第11・15・27図・図版3・5) SP299はE区G 2グリッドにあり道状造構6を切っている。平面形は方形であり、東西0.72m、南北0.65m、深さ0.42mで、小穴内に角礫が根石として検出された。この小穴の年代は道状造構6より新しいと思われる。

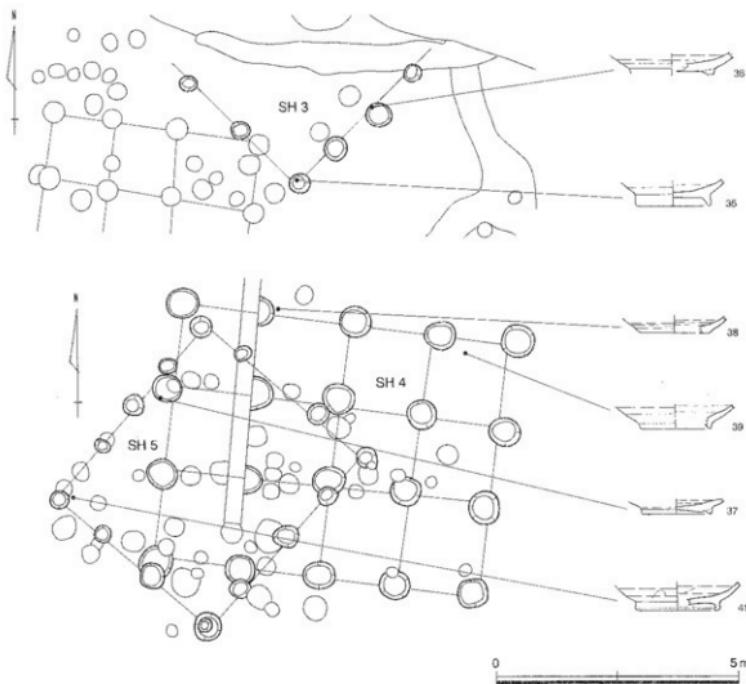


第29図 挖立柱建物SH2付近遺物出土状況

2 下層遺構出土の遺物

(1) 挖立柱建物出土の遺物

SH 1 出土遺物 (第28・34図・図版2・20) (1) はF 2 グリッドにあるSH 1 の整地層から出土しており、遠江系の土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(2) はG 2 グリッドにあるSH 1 の柱穴のSP 8 より出土した遠江系の土師器の合付甕で8世紀から9世紀の製品である。(4) はF 2 ・ G 2 グリッドにあるSH 1 の柱跡のSP 9 より出土した湖西産の須恵器の瓶で8世紀から9世紀の製品と思われる。(6) はG 2 グリッドより出土した土師器の坏である。(8) はG 2 グリッドより出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でK-14号窯式併行にあたる9世紀前半の製品である。(9) は同時期でG 2 グリッド灰色粘土層より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(10) はF 2 ・ G 2 グリッドより出土した猿投窯生産の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。SP15とSF 6 からの出土品と接合した。(11) は同時期でG 2 グリッドより出土した東遠系の灰釉陶器の瓶である。(12) は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品であり、土手状遺構1からの出土品と接合した。(13) は同時期でE 2 ・ G 2 グリッドより出土した旗指古窯生産の灰釉陶器の碗である。土手状遺構1からの出土品と接合した。(14) はE 2 ・ F 3 ・ G 2 グリッド灰色粘土層より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の広口瓶でK-14号窯式併行にあたる9世紀前半の製品である。SH 1 のSP11、SH 3 のSP39、SR 8 からの出土品と接合した。(15) はG 2 グリッドの灰色粘土層より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。道状遺構4からの出土品と接合した。(16) はG 2 グリッドより出土した東遠系の糸切り瓶でK-90号窯式併行にあたる9世紀後

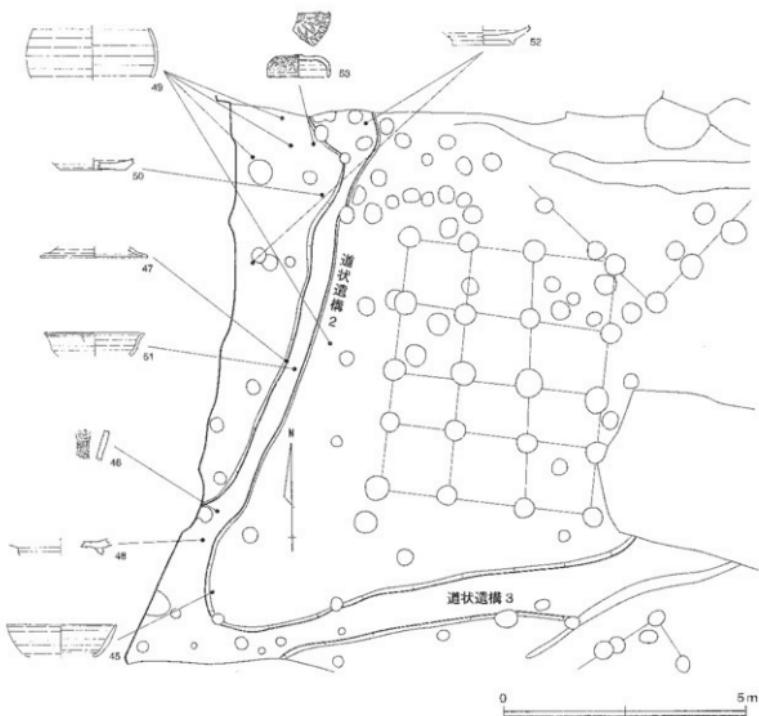


第30図 振立柱建物SH 3～5付近遺物出土状況

半の製品である。(17)はG 2グリッドより出土した東遠系の糸切り碗でO—53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(19)はG 2・F 2グリッドより出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。SH 2出土遺物(第29・35図・図版2・20) (20)はG 2グリッド灰色粘土層(整地層)より出土した遠江系の土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(21)はG 2グリッドより出土した土師器の甕でSH 2のSP30の風化疊混灰色粘土層から出土している。(22)はG 2グリッドより出土した土師器の甕で、SH 2のSP33灰色粘土層から出土している。(23)はG 2グリッドの灰色粘土層より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でK—90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(24)は同時期でE 2・F 2・G 2グリッドより出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗である。SP236、SP281、道状造構1からの出土品と接合した。(25)はG 2グリッドより出土した東遠系の糸切り碗でO—53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。SH 2と道状造構6からの出土品と接合した。(27)は同時期でG 2グリッドより出土した東遠系の糸切り碗である。(28)は同時期でG 2グリッドから出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。

(31)はG 2・F 2グリッドから出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(32)は伊万里焼の染付の簡形鉢で筆筒の可能性がある。18世紀の製品で上端部から混入した遺物と考えられる。

SH 3出土遺物(第30・35図・図版2・20) (35)はG 2グリッドSH 3のSP41より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でO—53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(36)はF 2グリッドSH 3のSP39より出土した東遠系の山茶碗で12世紀後半の製品である。



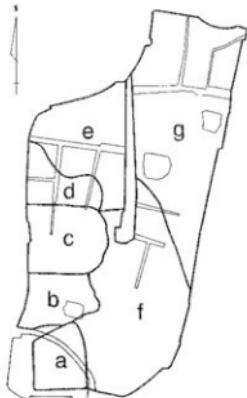
第31図 道状造構遺物出土状況

SH 4 出土遺物 (第30・35図・図版3・20) (37)はF 2 グリッドSH 4 のSP50より出土した土師器の碗でK-14号窯式からK-90号窯式前半にあたる9世紀前半から9世紀後半の製品と思われる。(38)はF 2 グリッドSH 4 から出土した糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品と思われる。(39)はF 2 グリッドSH 4 出土の土師器の碗でK-14号窯式からK-90号窯式にあたる9世紀前半から9世紀後半の製品と思われる。(40)はE 2・F 2 グリッドのSH 4 にあるSP51より出土しており、瀬戸焼の鉄軸の天目茶碗で登窯5期か登窯6期にあたる18世紀前半の製品で、上部層からの混入品である。

SH 5 出土遺物 (第30・35図・図版3・20) (41)はF 2 グリッドのSH 5 より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でK-90号窯式にあたる9世紀後半の製品である。SH 5 とSD13の出土品が同一個体である。また、SH 6 からは遺物が出土していない。

(2) 道状造構出土の遺物

道状造構1出土遺物 (第23・33・35・36図・図版1・20・21) (24)はE 2 グリッド道状造構1より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品と思われる。この製品はSH 2、SP236、SP281からの出土品と接合した。(42)はE 2 グリッド道状造構1より出土した東達系の須恵器で9世紀中葉の製品と思われる。(43)はE 2 グリッドの道状造構1より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の皿でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(44)はE 2 グリッドの道状造構



第32図 E区遺構外出土遺物区分図

1より出土した東遠系の小碗である。

道状遺構2出土遺物（第31・36図・図版2・21）（45）はG1グリッドの道状遺構2より出土した土師器の壺で古墳時代の可能性がある。

（47）はG2グリッドの道状遺構2より出土した須恵器の壺蓋で9世紀前半の製品である。（48）はG1グリッドの道状遺構2より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。（50）はF2グリッドの道状遺構2付近より出土した東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品と思われる。（51）は道状遺構2付近より出土している東遠系の灰釉陶器の輪花小碗で11世紀後半の製品である。（52）は道状遺構2より出土している東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。

（53）は道状遺構2付近より出土している中国越州窯系の白磁菊花紋合子の蓋で12世紀の製品である。この資料は土手状遺構1からの出土品と接合した。道状遺構3からは遺物が出土しなかった。

道状遺構4出土遺物（第23・33・34・36図・図版1・20・21）

（15）は道状遺構4より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。SH1からの出土品と接合した。（54）は道状遺構4より出土した東遠系の高台付山茶碗で12世紀末の製品である。

道状遺構5出土遺物（第23・33・36図・図版1・21）（55）は道状遺構5より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の皿でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

道状遺構6出土遺物（第23・33図・図版3・21）（56）は道状遺構6より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でK-14号窯式併行にあたる9世紀前半の製品である。

③ 溝状遺構（SD）出土の遺物

SD11出土遺物（第33図・図版1・21）（57）は遠江系の土師器壺の口縁部で8世紀から9世紀の製品である。（58）は土師器の壺で9世紀前半の製品と思われる。（59）は東遠系の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD12出土遺物（第33図・図版1・21）（60）は土師器の壺で9世紀後半の製品と思われる。

SD13出土遺物（第33図・図版1・21）（61）は土師器で8世紀から9世紀の製品である。（62）は猿投窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でK-14号窯式併行にあたる9世紀前半の製品である。（63）は東遠系の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（64）は同時期助宗窯生産の灰釉陶器の碗である。

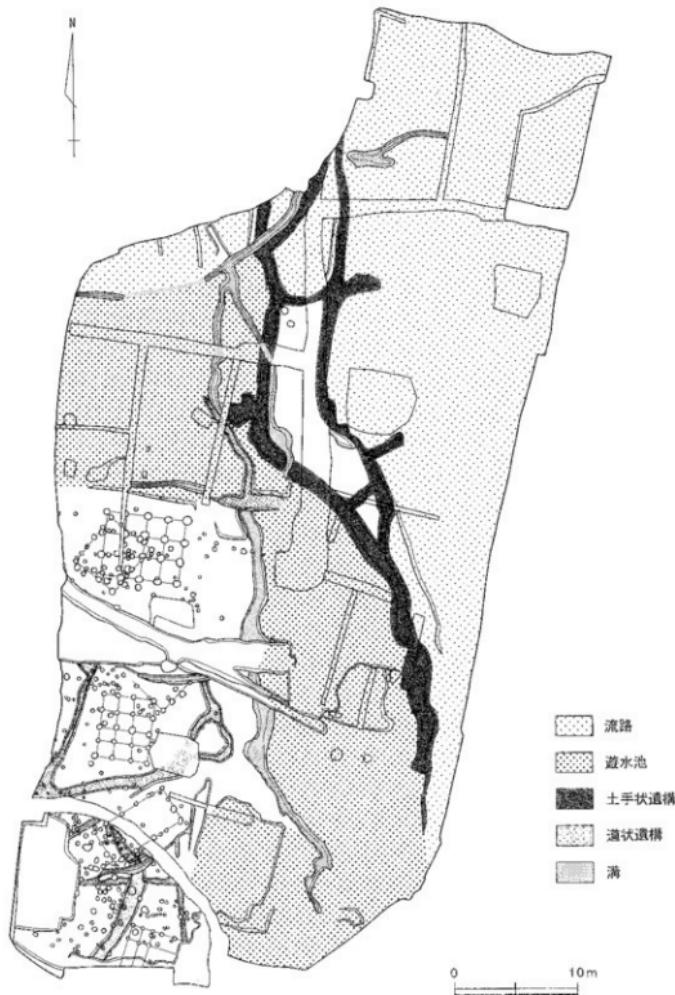
SD14出土遺物（第33図・図版4・21）（65）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。

SD15出土遺物（第33図・図版1・21）（66）は東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD17出土遺物（第33図・図版2・21）（67）は土師器の蓋である。

SD20出土遺物（第33図・図版2・21）（68）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。（69）は東遠系の灰釉陶器の輪花碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

SD21出土遺物（第33図・図版3・21）（70）は東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。



第33図 下層造構流路・蓄水池区分図

(4) E区a地点出土遺物 (第32図・図版21)

(71) は土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(72) は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(73) は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器碗である。(74・75) は同時期の東遠系の糸切り碗である。(76) は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。

(5) E区b地点出土遺物（第32・37・38図・図版21・22）

(77) は須恵器の壺蓋で7世紀中葉の製品である。(78~81) は遠江系の土師器の壺で8世紀から9世紀の製品である。(82) は土師器の壺の底部でSP160から出土している。(83) は助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶でK-14号窯式併行にあたる9世紀前半の製品である。(84) は東遠系の灰釉陶器の壺でK-14号窯式からK-90号窯式にあたる9世紀前半から9世紀後半の製品である。(85) は助宗窯生産の灰釉陶器の壺でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(86) は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(87) は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(88) は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。(89) は東遠系の灰釉陶器の壺でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。

(90) は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器壺である。(91) は東遠系の灰釉陶器長頸瓶でO-53号窯式にあたる10世紀初頭の製品である。(92) はSP176より出土した東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(93) は同時期で東遠系の糸切り碗である。(94) は同時期で東遠系の糸切り碗である。(95) は同時期で東遠系の糸切り碗である。(96) はSF 6出土の清郷壺で10世紀から11世紀の製品である。(97) は東遠系の高台付きの山茶碗で13世紀中葉の製品である。(98) はSF 6から出土した伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。(99) は伊万里焼の白磁の碗で19世紀前半の製品である。

(100) は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。

(6) E区c地点出土遺物（第31・32図・図版22・29）

(101) は助宗窯生産の須恵器の壺身で8世紀から9世紀の製品である。(102) は助宗窯生産の灰釉陶器の輪花碗でK-90号窯式にあたる9世紀後半の製品である。(103) は道状遺構1より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の壺でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(104) は東遠系の灰釉陶器の壺でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(105) は瀬戸焼の灰釉の小皿で窯窓10期にあたる14世紀後半の製品である。(106) は土手状遺構1より出土した志戸呂焼の鉄釉の徳利で16世紀後半の製品である。

(7) E区d地点出土遺物（第32・38・39図・図版22）

(107) は遠江系の土師器の壺である。(108) は遠江系の土師器の壺で8世紀から9世紀の製品である。(109) は須恵器の壺蓋で8世紀代の製品である。(110) は猿投窯生産の原始灰釉陶器の長頸瓶でO-10号窯式併行にあたる8世紀末から9世紀初頭の製品である。(111) は猿投窯生産の縫釉陶器の縫碗で9世紀代の製品である。(112) は助宗窯生産の灰釉陶器の壺でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(113) は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。(114) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(115) は同時期で猿投窯生産の長頸瓶である。(116) は道状遺構1より出土した東遠系の長頸瓶でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(117) は同時期で土手状遺構1より出土した東遠系の長頸瓶である。(118) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(119~121) は同時期で東遠系の糸切り碗である。(122) は東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。(123) は旗指窯生産の灰釉陶器の碗で11世紀末の製品である。(124・125) は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(126) は東遠系の小皿と思われる。(127) はSF 2より出土した古瀬戸の灰釉の四耳壺で窯窓4期（古瀬戸前II期）にあたる13世紀前半の製品である。(128) は中国元代景德鎮窯の白磁梅瓶で13世紀の製品である。

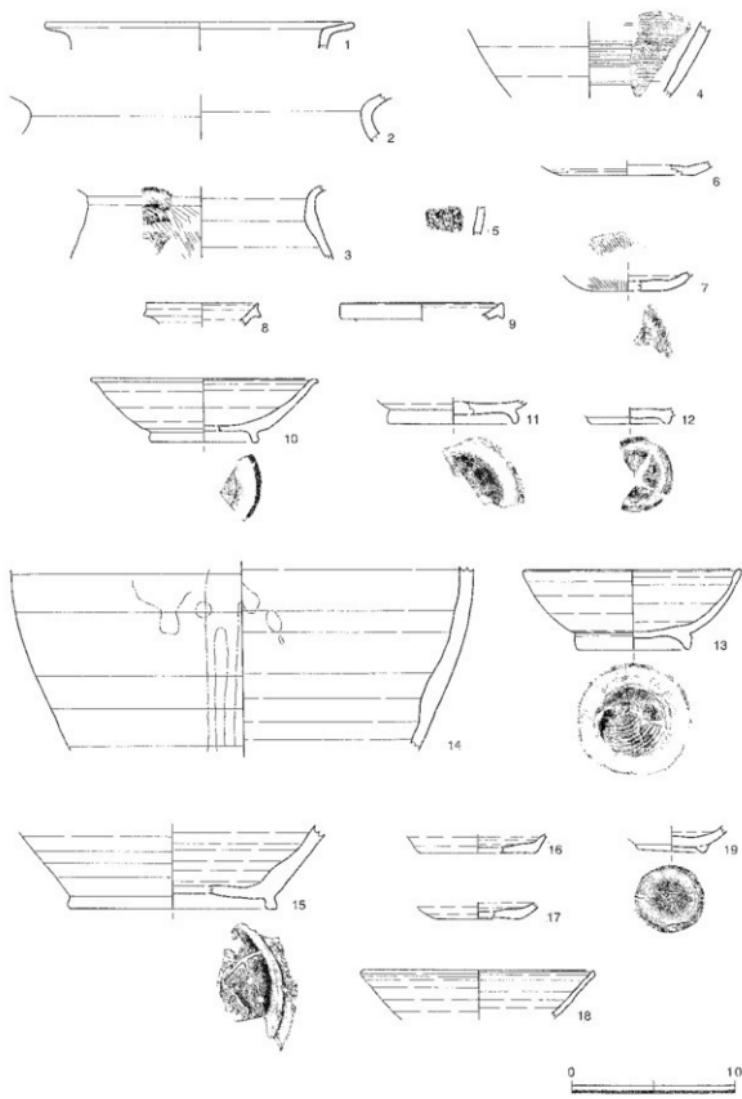
(8) E区e地点出土遺物（第32・39・40図・図版18・19・22・23・29）

(129) は古墳時代の土師器壺の底部である。(130) は助宗窯生産の須恵器の壺身で8世紀前半の製品である。(131) は須恵器の壺身で8世紀末の製品である。(132) は土師器の壺で奈良時代の製品である。(133) は駿東窯で8世紀から9世紀の製品である。(134) は遠江系の土師器の壺で8世紀から9世紀の製品である。(135) は土師器の壺の底部付近である。(136) は土師器の壺で奈良時代の製品である。(137) は土手状遺構1より出土した遠江系の土師器の壺で8世紀から9世紀の製品である。(138) は遠江系の

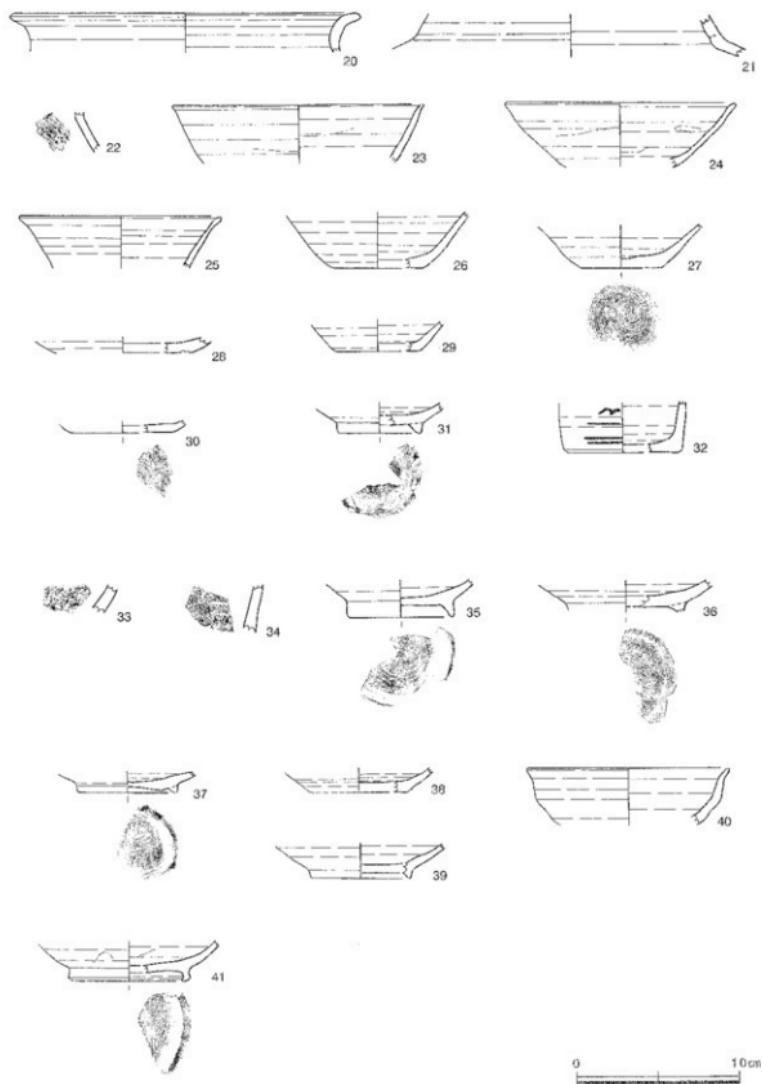
S字甕で8世紀から9世紀の製品である。(139)は遠江系の土師器の甕で頸部に接合痕があり8世紀から9世紀の製品である。(140)は土手状遺構1と土手状遺構2より出土した東遠系の灰釉陶器の長頸瓶でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(141)は同時期のSD11より出土した東遠系の灰釉陶器の甕である。(142)は同時期で東遠系の灰釉陶器の甕である。(143)は同時期で助宗窯生産の灰釉陶器の甕である。(144)は同時期で道状遺構1より出土した東遠系の灰釉陶器の甕である。(145)は同時期で東遠系の灰釉陶器の甕である。(146)は同時期で東遠系の灰釉陶器の長頸瓶である。(147)は同時期でSD11より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の長頸瓶である。(148)は同時期で東遠系の長頸瓶の把手である。(149)は同時期で猿投窯生産の綠釉陶器の碗である。(150)は東遠系の灰釉陶器の皿でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(151)は同時期で土手状遺構2と道状遺構1から出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(152)は猿投窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式にあたる10世紀初頭の製品である。(153・154)は東遠系の灰釉陶器の甕でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(155)は同時期で東遠系の灰釉陶器の皿である。(156)は同時期でSD11から出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。外面に墨書きがあるが判読不明である。(157~162)は同時期で東遠系の糸切り碗である。(163)は土手状遺構1より出土した東遠系の糸切り碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(164)は東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行の10世紀初頭の製品である。体部外面に墨書きが施されているが判読不明である。(165)はSF4と道状遺構1より出土した東遠系の山茶碗で13世紀中頃の製品である。(166)は東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(167)は東遠系の山茶碗で12世紀後半の製品である。(168)はSD12より出土した東遠系の小碗で13世紀の製品である。(169)は中国南宋の白磁の小皿で12世紀の製品である。(170)はSD11より出土した中国南宋の白磁の四耳盞で13世紀の製品である。(171)は土手状遺構1より出土した常滑焼の甕で13世紀から14世紀の製品である。(172)は土手状遺構1より出土した志野焼の鉄釉の小皿で後期IV古併行にあたる15世紀中葉の製品である。

9) E区f地点出土遺物 (第32・41・42図・図版23・24・29)

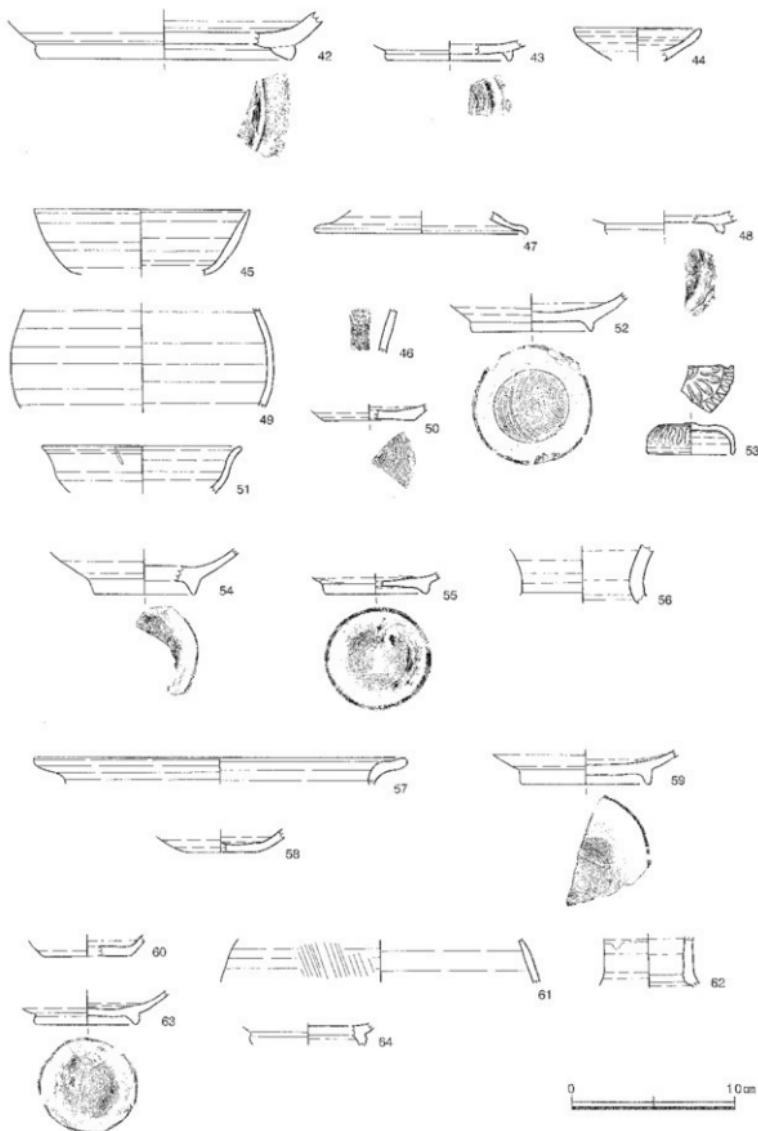
(173)は助宗窯生産の須恵器の坏蓋で9世紀前半の製品である。(174)は助宗窯生産の須恵器の坏身で9世紀前半の製品である。(175)は土手状遺構1から出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で9世紀前半の製品である。(176)は助宗窯生産の須恵器の坏身で9世紀前半の製品である。(177)は土師器の坏である。(178)は土師器の甕である。(179・180)は土師器の坏である。(181)は土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(182)は土手状遺構1より出土した土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(183)は土手状遺構1より出土した遠江系の土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(184~186)は遠江系の土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(187)は土手状遺構1より出土した土師器の甕である。(188)は土手状遺構1より出土した遠江系の土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(189)は土手状遺構1より出土した土師器の甕で8世紀から9世紀の製品である。(190)は土師器の小形甕で8世紀から9世紀の製品である。(191)は東遠系の灰釉陶器の碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(192)は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(193)は同時期でSD14より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(194)は同時期の土手状遺構1より出土した猿投窯生産の灰釉陶器の碗である。(195)は同時期で猿投窯生産の灰釉陶器の碗である。(196)は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(197)は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。高台部を転用窓に使用した可能性がある。(198)は同時期で東遠系の灰釉陶器の甕であり高台部が欠損している。(199・200)は同時期で東遠系の灰釉陶器の甕である。(201)は同時期で土手状遺構1より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。(202)は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(203)は同時期の東遠系の糸切り碗である。(204)は東遠系の糸切り碗でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。(205・206)は東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。



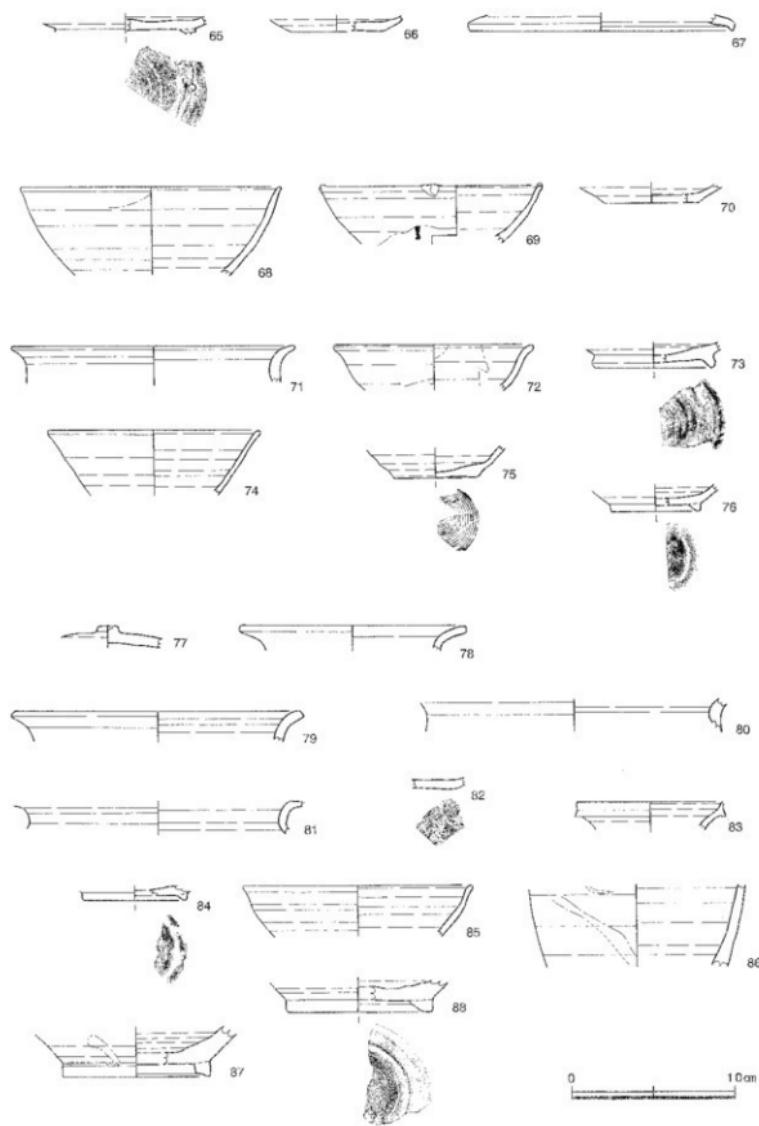
第34図 出土遺物実測図1(土器1)



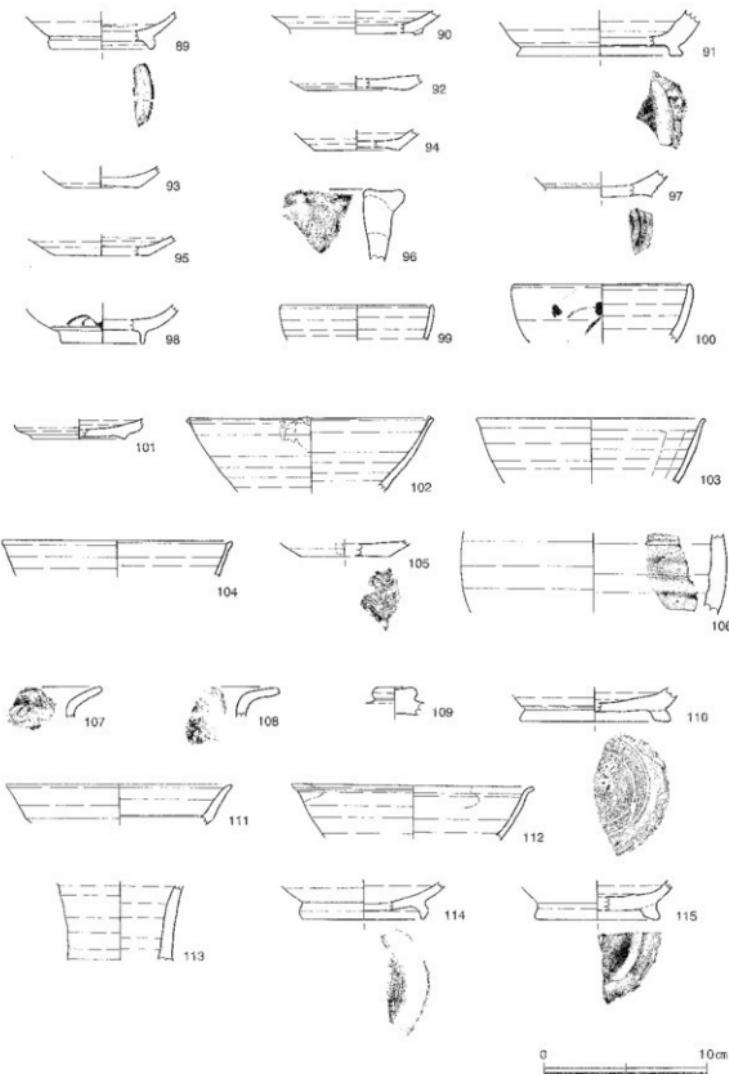
第35図 出土遺物実測図2(土器2)



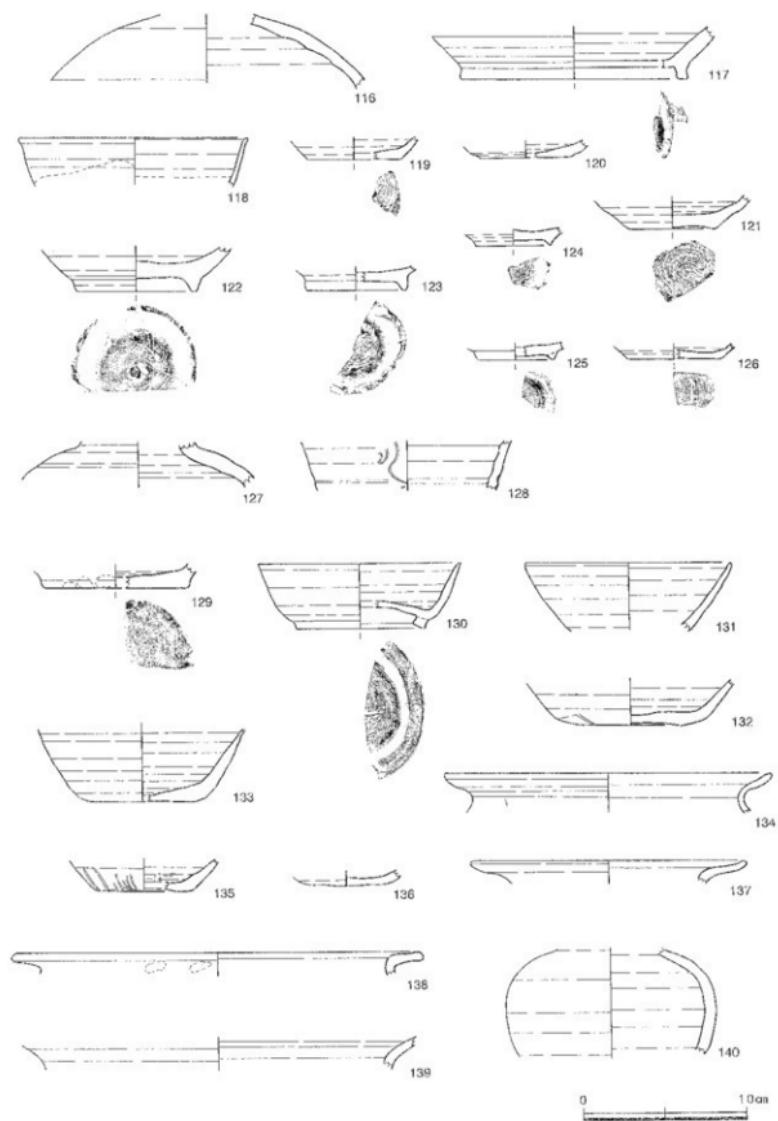
第36図 出土遺物実測図3(土器3)



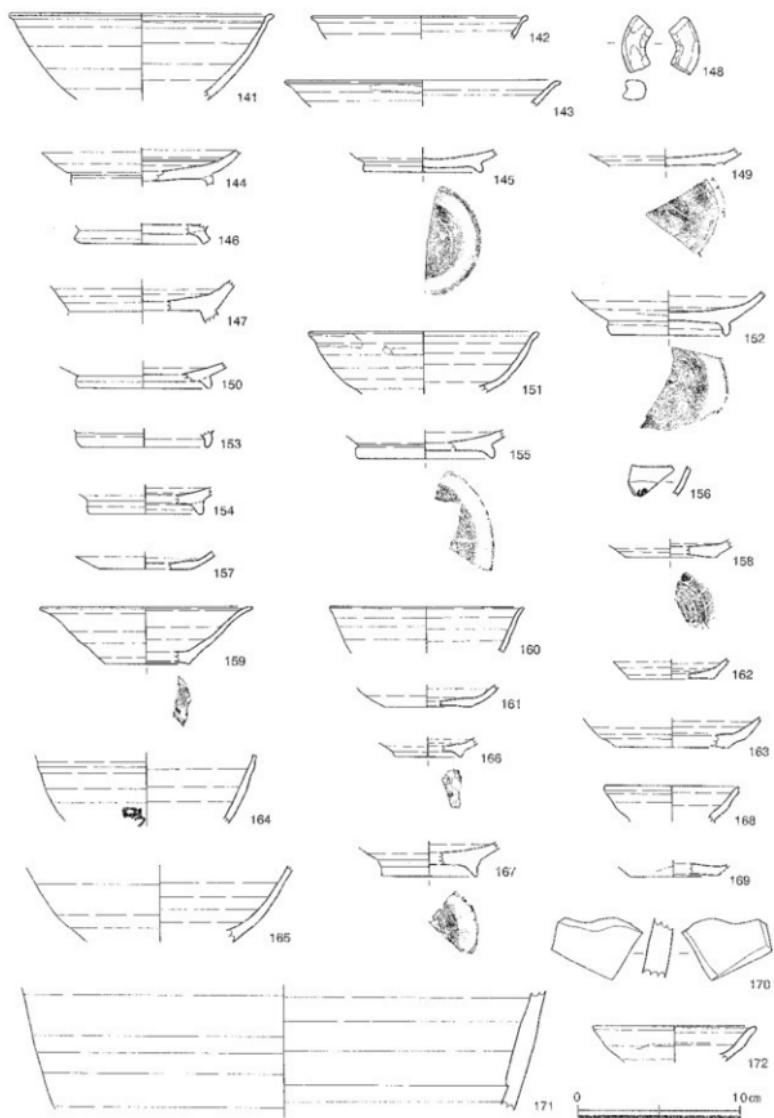
第37図 出土遺物実測図4(土器4)



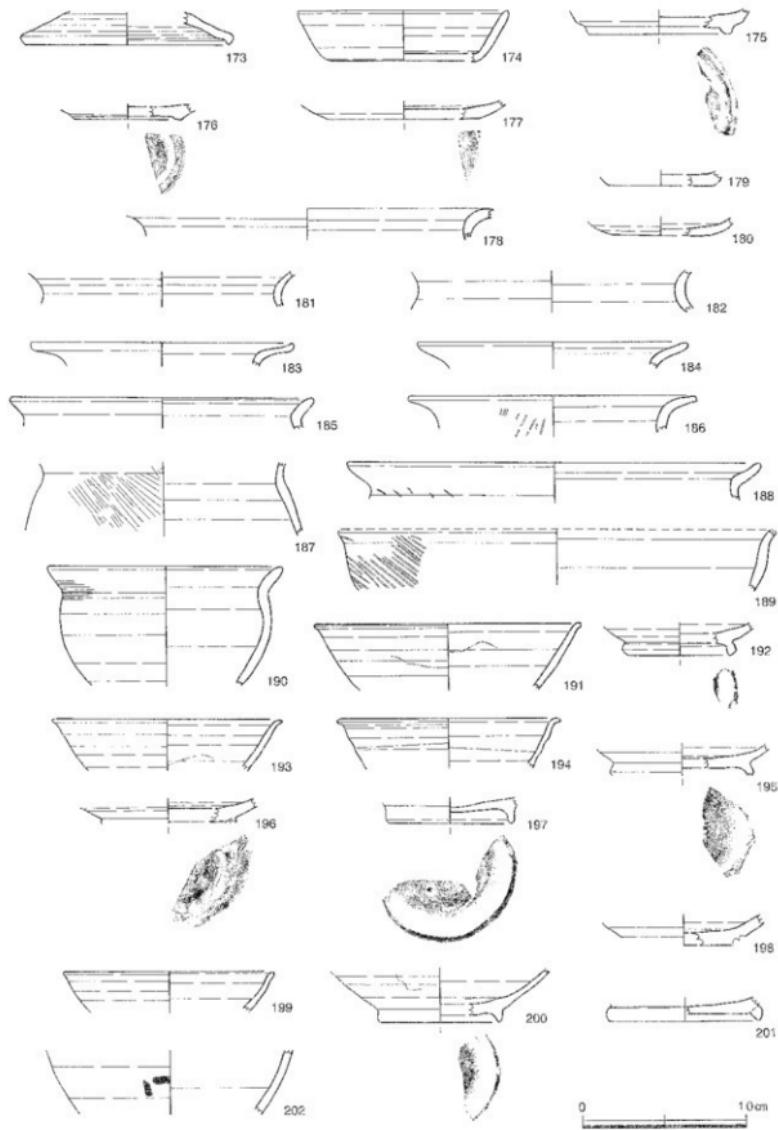
第38図 出土遺物実測図5(土器5)



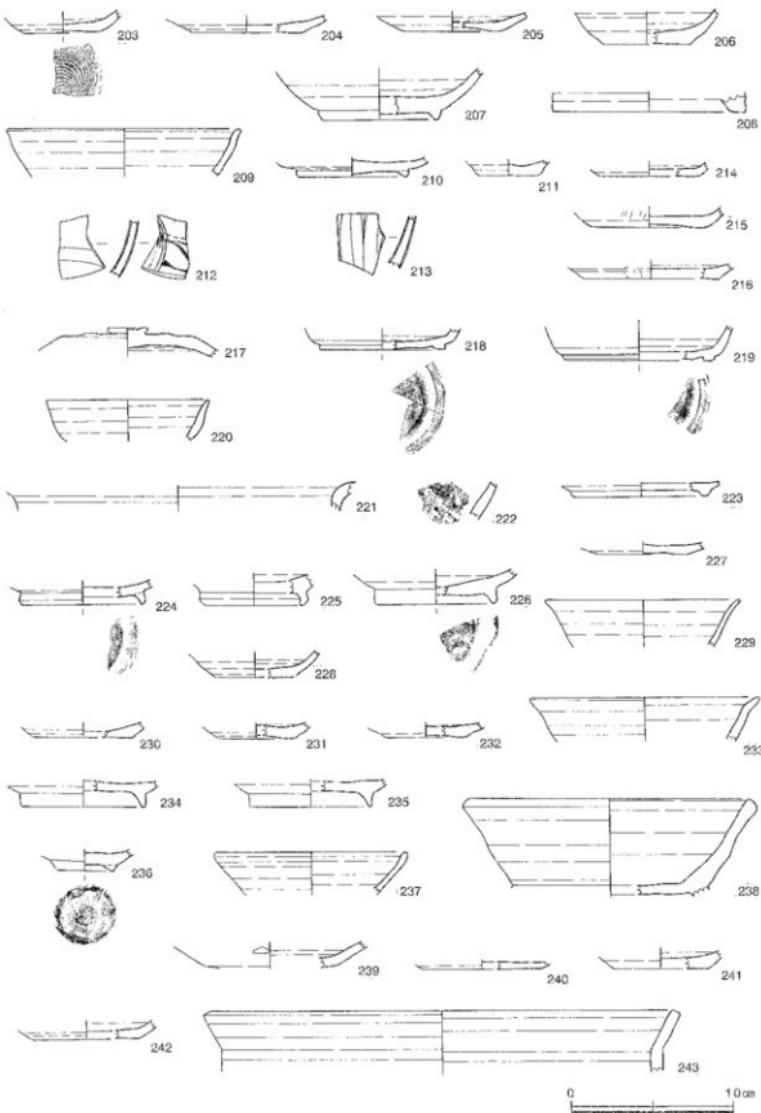
第39図 出土遺物実測図6(土器6)



第40圖 出土遺物實測圖 7(土器 7)



第41図 出土遺物実測図8(土器8)



第42図 出土遺物実測図9(土器9)

(207) は東遠系の山茶碗で13世紀中葉の製品である。(208) は東遠系の片口鉢で13世紀初頭の製品である。(209) は東遠系の山茶碗で12世紀の製品である。(210) は東遠系の山茶碗である。(211) は東遠系の小皿で13世紀後半の製品である。(212) は中国龍泉窯系の青磁の碗で12世紀から13世紀の製品である。(213) は中国の青磁蓮弁紋碗で13世紀中頃の製品である。(214~216) はかわらけである。

⑩ E区g地点出土遺物 (第32・42図・図版18・24)

(217) はSR 8より出土した助宗窯生産の須恵器の坏蓋で9世紀前半の製品である。(218) はSR 8より出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で9世紀前半の製品である。(219) はSR 8より出土した須恵器の坏身である。(220) はSR 8より出土した上師器の碗である。(221) はSR 8より出土した遠江系の土師器の台付壺で8世紀から9世紀の製品である。(222) はSR 8より出土した土師器の杯である。(223) はSR 8より出土した助宗窯生産の須恵器の坏身で9世紀前半の製品である。(224) は土手状遺構2より出土した東遠系の灰釉陶器の碗でO-53号窓式にあたる10世紀初頭の製品である。(225) は土手状遺構1より出土した助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窓式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(226) は同時期で東遠系の灰釉陶器の碗である。(227~229・231・232) は同時期でSR 8より出土した東遠系の糸切り碗である。(230) は同時期の東遠系の糸切り碗である。(233~235) はSR 8より出土した東遠系の山茶碗で12世紀前半の製品である。(236) はSR 8より出土した東遠系の小碗で12世紀前半の製品である。(237) はSR 8出土の東遠系の小碗で13世紀後半の製品である。(238) は渥美窯生産の山茶碗で13世紀後半の製品である。(239~241) はSR 8から出土したかわらけで15世紀代の製品であり、(239) の体部外面には炭化物が付着している。(242) はかわらけで15世紀代の製品である。(243) はSR 8より出土した内耳鉢であり15世紀後半から16世紀前半の製品である。

第5節 上層遺構と出土遺物

1 A区水田

A区水田は、標高62.4~60.8m付近に営まれる(第44図)。等高線は南から北方向に下るほど東西方向を呈するが、61.6m付近から上位は東側の丘陵裾部の影響を受けて東北東方向に変化する。

① 畦畔 (第45図)

水田の畦畔はほぼ等高線に平行・直交する方向に造られている。基幹となる大畦畔はSK 1~9である。板材と丸材の杭を用いた施設は東西方向の畦畔の北面に集中する傾向があり、SK 5以外の南北方向には余りみられない。より下位にあたる田面に、上位の水田が流出しないよう図られているのだろう。また、特に東西方向の大畦畔毎に、上下で大きな段差が生まれている。大畦畔を整えることで、従来の南から北に向かう斜面をより平坦にすることを意図している(第47図)。

SK 1 D 7・8 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。水田面である灰色粘土層上に、田面の粘土を搔き揚げて形作る。幅は上端で0.3~0.5mを測り、南側・北側田面との比高差は3cm前後である。北側の縁辺には板材を横に渡し、太さ5~8cmの丸材の杭を打ちこんで押さえとしている(第51図)。

SK 2・4 D 6~E 7 グリッドで検出された同一延長上に位置する東西方向の畦畔である。幅は上端で0.2~1.2mを測り、SK 4では屈曲が強く細い。特にSK 4の南側を主体に複数列の杭が打たれる(第50図)。

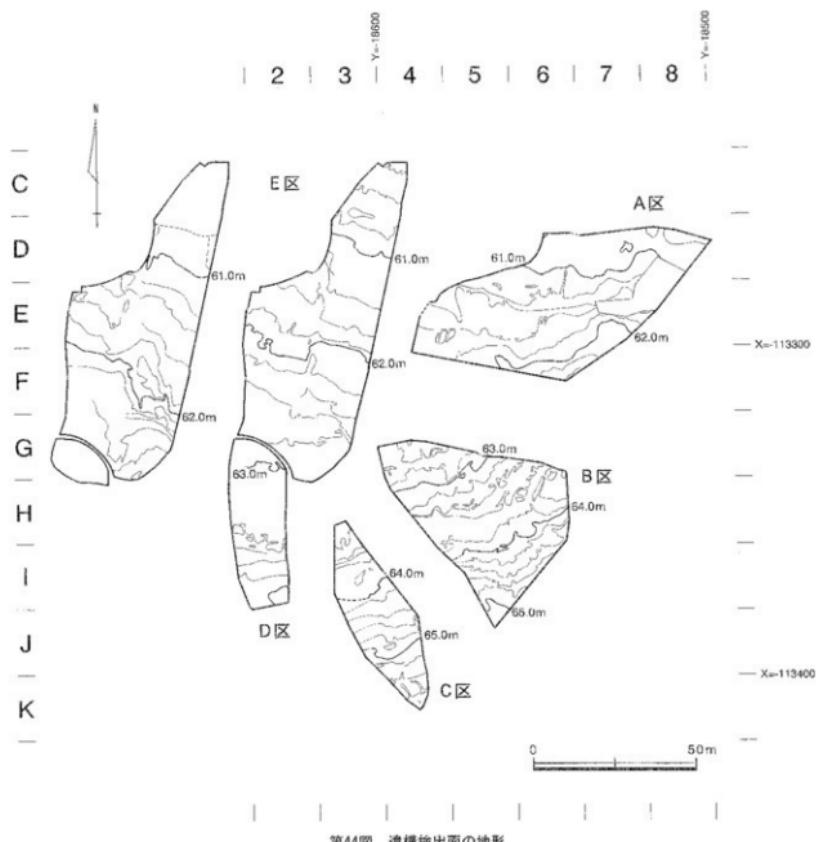
SK 3 D・E 6 グリッドで検出された南北方向の畦畔である。幅は上端で1.0~1.2mを測る。

SK 5 D 7・8、E 7 グリッドで検出された南北・東西方向の畦畔である。東側が確認調査トレンチによって失われている。北西側田面との比高差は10~12cm程度である。西側から接するSK 4との取り付き



第43図 上層遺構全体図

部分を主体に、畦畔の西面に杭が打ち込まれる。これより北側へ離れた位置に3本の杭が検出されており、南側はSK 6方向に杭を打ち込み、微弱ながらも畦畔の西面に保護を施している（第50図）。SK 6～E 7グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.4～2.0mを測り、北側田面との比高差は8～11cmである。幅が著しく太くなる部分は、南側田面と畦畔との差が明らかでない。恐らく放棄される前後に流出していたものとみられる。丸材の杭列は幅1～2m間に少なくとも2条が打ちこ

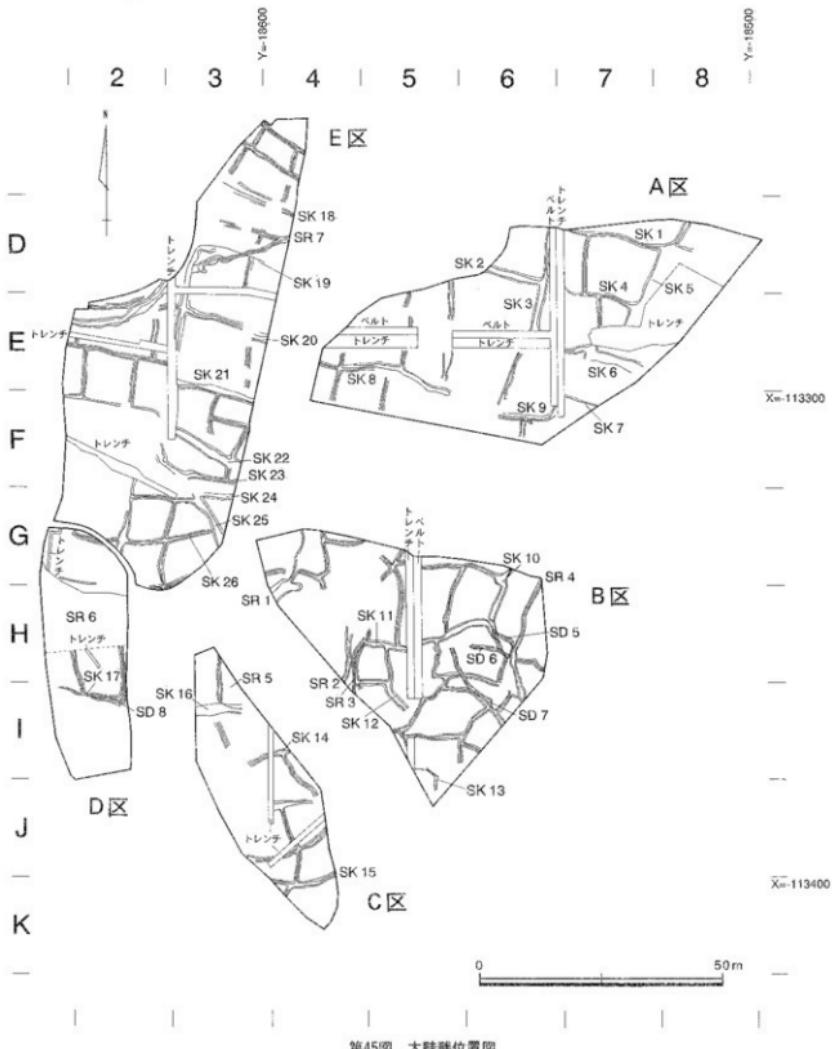


第44図 遺構検出面の地形

まれている。一条は畦畔の内側部分にある。もう一条は外側（北側）部分にあり、内側部分よりも密である。この密な部分は、下位（南側）の田面に対して段をつくって下がる部分にあたり、上位（南側）の田面をより水平に、下位の水田への流出がないように、より強固に保護されていることが窺える（第50図）。

SK 7 F 7グリッドで検出された東西方向の畦畔である。調査時には、北側田面に対する比高差2cm前後の段差として認識された。南側には少なくとも2列の丸材による杭列が打ちこまれており、これらの間を移動していることが察せられる。ここからSK 6方向（南北方向）にも杭列が施されている。

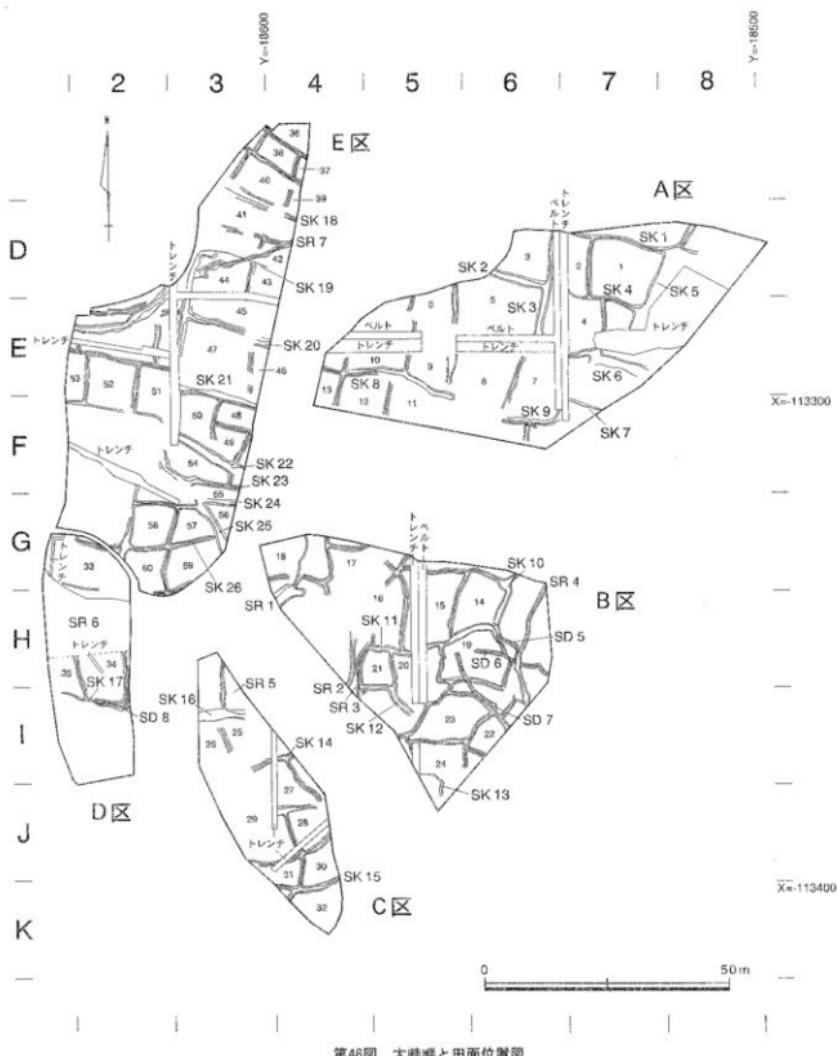
SK 8 E 4～6、F 5グリッドで検出された東西方向の畦畔である。半ばほどでやや南側に膨らんでいる。幅は上端で0.2～1.2mを測り、北側田面との比高差は5～10cm、南側田面とは4～8cm程度である。丸材の杭は1m前後の幅で打ちこまれる（第52図）。南への落ちの肩部以下に杭が多くみとめられることは、この幅の北側にあたる部分が元來の畦畔北面であり、脆弱になった部分あるいは流出した部分を南



第45図 大畦畔位置図

側へさげて補修していくことを示しているのだろう。

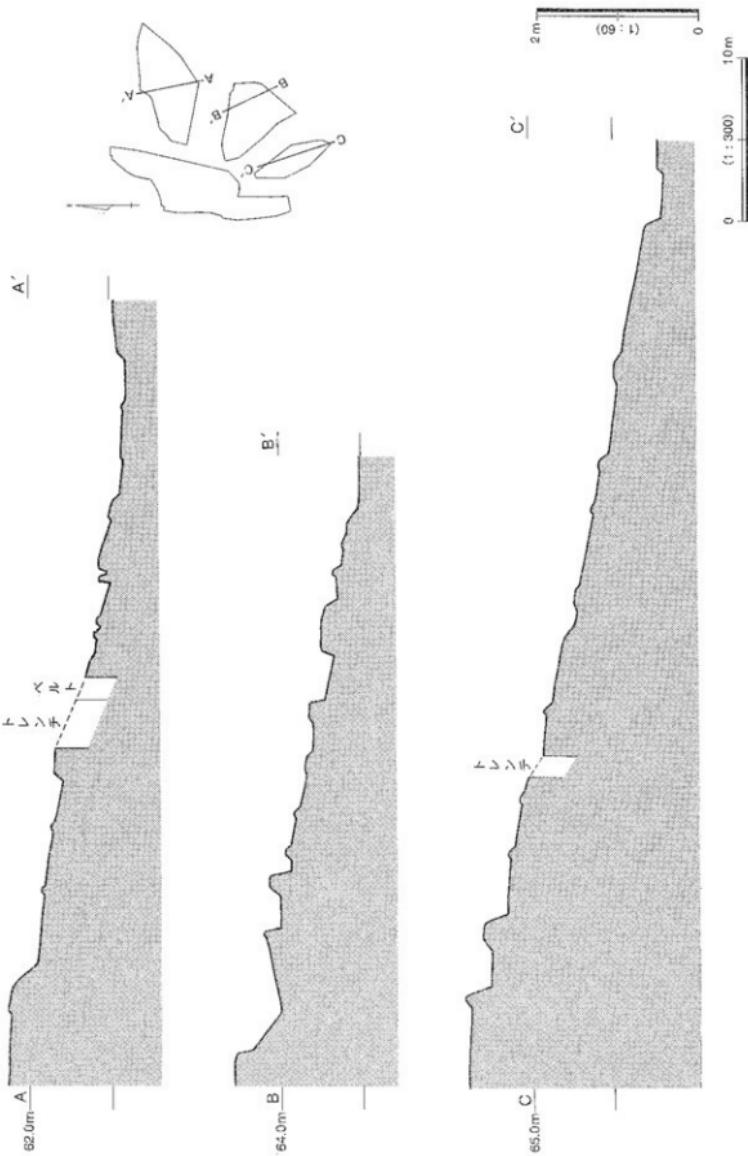
SK 9 F 6 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東端で北東方向に折れていることは、山裾に平行する方向の畦畔に連結していたことを示している。幅は上端で0.4m前後を測り、北側田面との比高差は20cm、南側田面とは2cm程度である。この畦畔に伴う丸材を用いた杭列は、畦畔の幅に散らばって

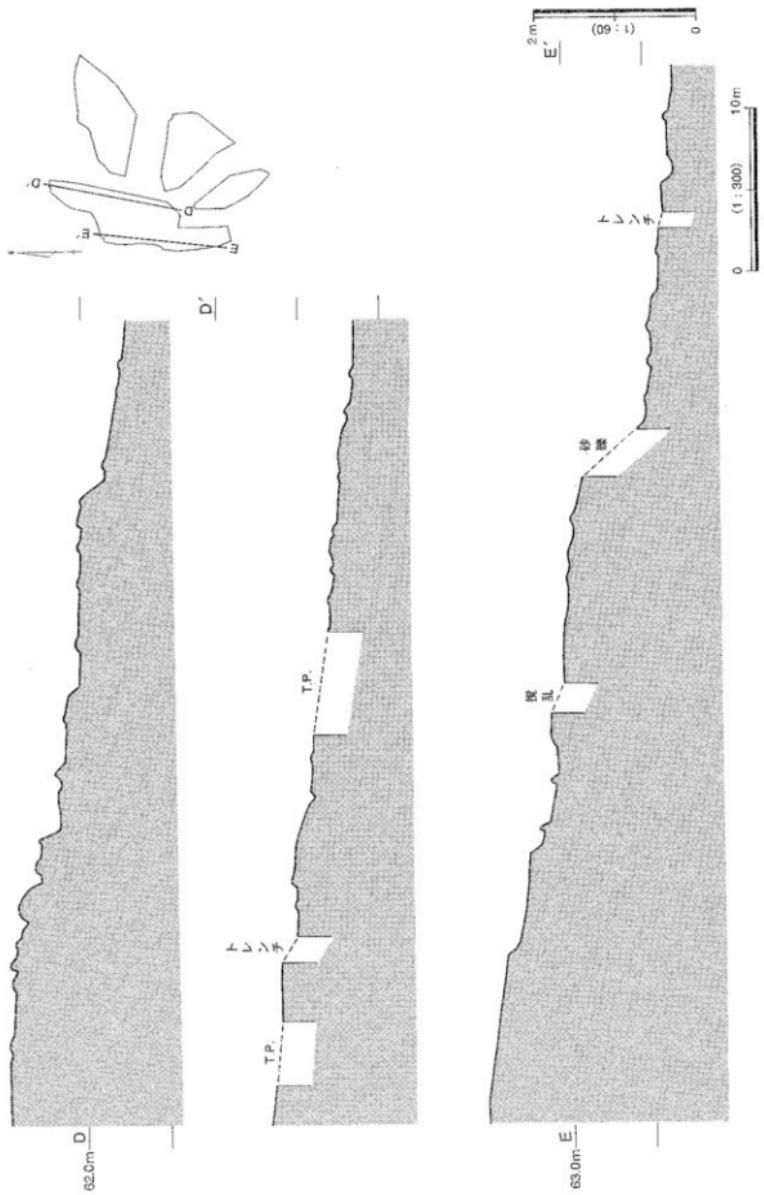


第46図 大陸岬と田面位置図

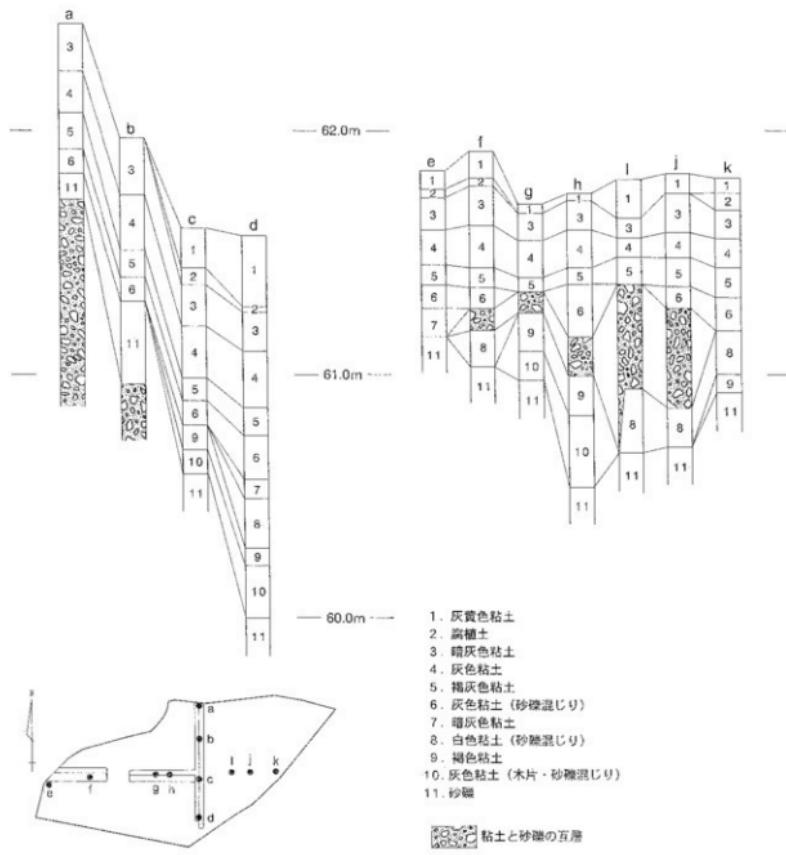
検出されている。この幅の中で幾度となく盛り直されていることを示唆している。また、畦畔が検出されなかつ東側にも杭列が検出されていることは、元来まっすぐであったものを、ある時期に北東方向へ曲げたことを示している(第52図)。また、北側から南側の田面へ水を廻すための水口と考えられる施設が付随している。これは、畦畔の一部を切っており、内側に水が渦巻いたことによって削り取られた

第47図 等高線に直交する陸野断面図





第45図 等高線に重交する地質断面図2



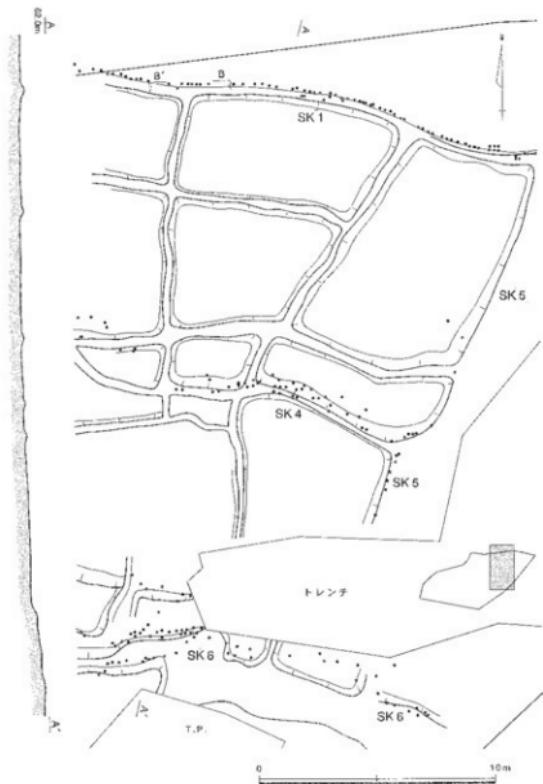
第49図 A区トレーンチ土層柱状図

小さな窪みが形成されている。また、畦畔の東側・西側の一部が不明確となっている。特に西側は砂利によって覆わっていたことから、洪水によって削り取られていることが窺える。

(2) 小畦畔による小区画(第43・46図)

10~20mおきに現れる大畦畔の内部は、畦畔(小畦畔)によって更に細かく区切られている。これらは、木材を用いて保護されている大畦畔とは異なり、すべて周囲の土を掘り揚げて盛り上げることで造られている。小畦畔による小区画は、北へ下る斜面地へ均等に水を張るために工夫であったり、小さなものについては、苗代を育てるための区画であったりと、いくつかの意図が感じられる。A区においては、大畦畔による区画(田面)13枚に、このような小畦畔が検出されている。

田面1 田面1の内側は、小畦畔によって5ヶ所の小区画に分けられている。SK 5に沿う部分が最も大



第50図 A区大畦畔に伴う杭排列位置図1

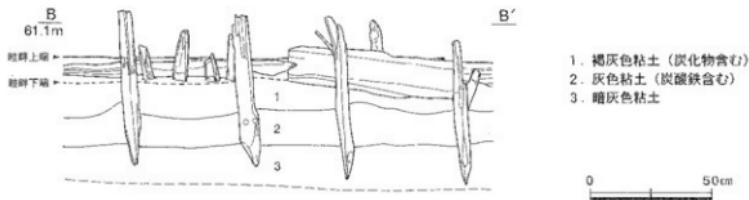
きく東西5.4~7m、南北9.2~9.6mの規模を持つ。この西側は、ほぼ中央に東西方向の小畦畔を造って、二つの区画に分けられている。北側がやや広く東西7.8~9m、南北4.4m、南側が東西5~7m、南北5~5.4mの規模がある。一方、これら三つの区画の南側にはSK 4に沿う幅の狭い小区画がある。東側が東西8m、南北2.2~3m、西側が東西3.4m、南北2.2mと、特に後者は一坪にも満たない。

田面2 田面2の内側は、隣接する田面1の小畦畔が西に伸びて内部を3ヶ所の小区画に分けている。西側の一部にトレーナーが穿たれているため、東西幅は定かでないが、南北幅は田面1とはほぼ同様である。最も南側の小区画は、SK 4が次第に北側へ曲がってくるため、三角形状を呈する。東西幅は

3.4mである。

田面3 田面3の内側は、隣接する田面2の小畦畔が西に伸びて、南北方向の小畦畔2条によって少なくとも6ヶ所の小区画に分けられる。南北の大畦畔に沿う二つの小区画は、北側が南北3.4~3.8m、東西3.3~3.9m、南側が南北4.5m、東西4~4.3mで、いずれも南北隅が一部水口状に途切れている。これらの西に接する小区画は、西縁の小畦畔が北東~南北方向に傾くため、変則的な矩形を呈する。北側は東西2~4m、南北8mと長細く北側に水口状の途切れがみられる。南側は東西4m~12m以上、南北3~9.8mと合形状である。さらにこの西側に南北4~6mの小区画が二つ存在する。

田面4 田面4の内側は、7ヶ所の小区画に分けられる。南北方向のトレーナー以西に東西方向の小畦畔が複数みられる。これらはトレーナー以東につながらないので、トレーナー部分に南北方向の小畦畔が存在した可能性が高い。最も大きな区画は東側にあり、南側の一部をSK 6に接している。東西13~14m以上、南北12~16mの規模があるが、中央部に南北方向の小畦畔の残欠がみられるため、本来は東西に二分されていたものと思われる。この南側にはSK 6に沿って、用水をもたらす想定される小さな溝が取りつけられていた。



第51図 A区杭判断面図

いている。

田面5 田面5の内側は、10ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK 2に沿う部分に比較的大きな区画がみられる。SK 2と3のコーナー部分にある小区画は東西方向が5.7mと長く、南北方向は2.6~3.4mとなる。西側の小畦畔の中程は水口が造られているため途切れている。ここから幅40cm、深さ6~10cmの溝が、南側の大畦畔に沿うようにL字形に掘られている。この溝は、南北方向のほぼ同一規模の溝に繋がることから、南側からもたらされた水を等しく田面に供給する用を成すものと考えられる。最も大きな小区画は田面5の中央北側にあり、北側を大畦畔SK 2に接する。南北方向6.6m、東西方向5.9mの規模がある。この南側や南西側の小区画は、東西方向の小畦畔によって区切られて、このほぼ半分の広さとなる。

田面6 田面6の内側は、3ヶ所の小区画に分けられるが、北側が調査区外となるため、本来はこの倍程度と見込まれる。南側の搅乱沿いにある小区画は東西方向に7mと長い。この北側の小区画は、この幅を南北方向の小畦畔によって区切った南北に長い区画となる。

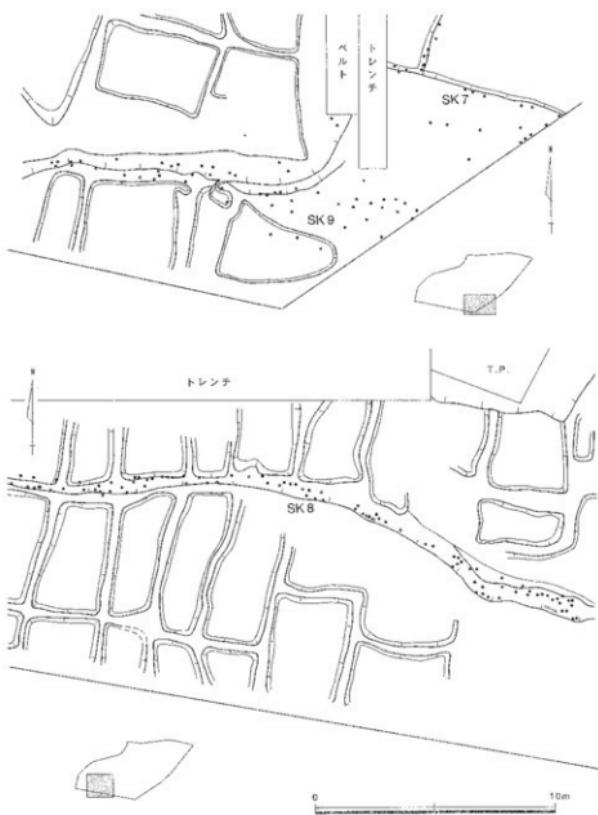
田面7 田面7の内側は、南北方向トレンチの西側で6ヶ所の小区画に分けられる。いずれも正方形に近く、碁盤の目状に並ぶ。最も小さな区画は北東側にあり、南北方向に4.3m、東西方向に2.1~2.9mとなる。最も大きな区画は南西側にあり、南北方向に2.9m、東西方向に4.5mである。また、南隣の田面北縁には、田面7へ水を廻すための水口が開いている。底が窪む部分は、落ちてゆく水が渦巻いた跡であろう。

田面8 田面8の内側は、4ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK 3に沿う位置には、田面5から伸びるほぼ南北方向の小畦畔に規制される最大幅2.8m、奥行きおよそ7mの三角形状の小区画がある。この西側には東西方向に5.5mの小区画があるが、やや南に偏った位置に、小畦畔に平行する幅10cm、深さ7cm程度の小さな溝が掘られている。最も西側の大畦畔沿いには、幅3.9mの小区画がある。この、後二者を区切る小畦畔は上端幅が30cm程度のもので、北側の田面5にも延びている。

田面9 田面9の内側は、5ヶ所程度の小区画に分けられるが、北側はテストピット等によって抜かれているために判然としない。南側の三つの小区画は、大畦畔の幅のはば中央を南北の大畦畔で区切り、さらに東側を田面8から延びる東西方向の小畦畔で二分している。この東西方向の小畦畔は、さらに西に延びる様子が伺えるので、西側の小区画も東側と同様に二分されていた可能性がある。東側の小区画は、東西3m前後で南北は1.5~3.2mの規模がある。

田面10 田面10の内側は、南北方向の小畦畔によって5ヶ所の小区画に分けられている。北側をトレンチによって抜かれているため、南北方向の側は判然としないが、東西幅1.2~2.4m程度で短冊状になるものと思われる。

田面11 田面11の内側は、3ヶ所の小区画に分けられる。大畦畔SK 8に沿う北側の小区画は東西方向に7.2m、南北方向に5.4mの規模がある。南を区切る小畦畔がクランク状に曲がるため、本来はこの位置

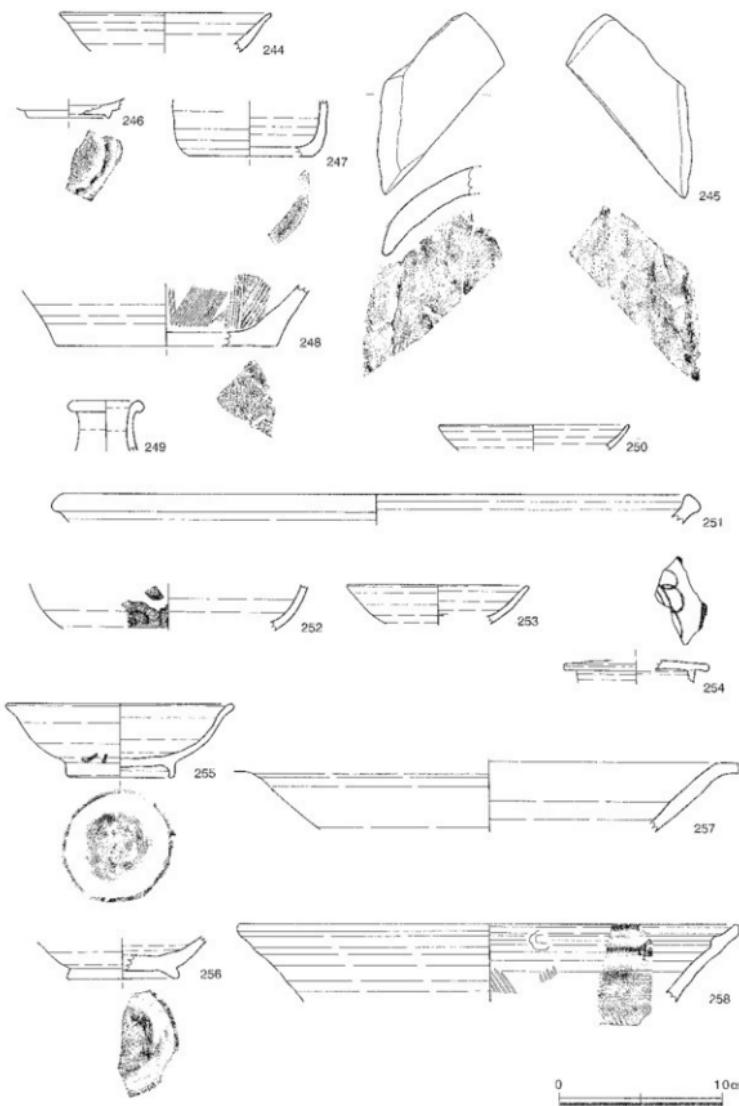


第52図 A区大畦時に伴う杭列位置図2

2 A区水田面出土の遺物

A区水田面出土の土器・陶磁器（第53図・図版24）（244）は土師器の壺で10世紀から11世紀の製品である。（245）は東遠系の鎌倉時代の丸瓦で表面の凸面が無文になり、凹面に指頭痕が付く。一枚作り（型作り）と思われ表面と内面に細砂を多く含んでいる。（246）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の小皿で17世紀前半の製品である。（247）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小壺で17世紀前半の製品である。（248）は一ツ沢窯生産の志戸呂焼の鉄釉擂钵で15世紀後半の製品である。（249）は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の徳利で17世紀前半の製品である。（250）は肥前焼の青緑釉の皿で17世紀前半の製品である。（251）は瀬戸焼の諸釉擂钵で19世紀前半の製品である。（252）は伊万里焼の染付の碗で19世紀前半の製品である。（253）は伊万里焼の染付の皿で19世紀前半の製品である。（254）は產地不明の鉄絵の土瓶蓋で19世紀前

で東西に二分されていた可能性がある。南側の二つの区画は、東側が幅4.1m、西側が3m前後の規模がある。南北方向の規模は、調査区境内にかかり判然としない。
田面12 田面12の内側は、8ヶ所程度の小区画に分かれるものと思われる。北側の小区画はいずれも短冊状で、幅1.7～2.5、長さ4.7～6.5mの規模がある。南側は調査区境内にかかり判然としない。
田面13 田面13の内側は2ヶ所以上の小区画に分かれている。いずれも調査区境内にかかり、規模は判然としない。東西方向の小畦畔が田面12のものと同一位置にあるため、田面12に類した短冊状の小区画である可能性がある。



第53図 出土遺物実測図10(土器10)

半の製品である。

3 B区水田

B区水田は、標高65~62.5m付近に営まれる（第44図）。等高線は南東から北西方向に搔鉢状に下るが、調査区北東側は東側の丘陵部の影響を受けて標高64~63.5m付近でやや平坦な面をつくる。

(1) 畦畔（第45図）

水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られるが、調査区の東側や北西側に行くにしたがって崩れてゆく傾向がある。これはそれぞれの位置にある貯水池状の窪みや自然流路などの影響によるものであろう。基幹となる大畦畔はSK10~13である。板材と丸材の杭を用いた施設はSK10と11・12の一部にみられるだけで、他はいずれも耕作土を盛り上げたのみである。SK10の施設は、流路SR 4によって田面が侵食されないように計らっているものと思われる。

SK10 G・H 6グリッドで検出された南北方向の畦畔である。水田面上に、田面の粘土を搔き揚げて形成する。幅は上端で0.7~1.0mを測り、東側田面との比高差は9cm前後である。西側の縁辺には板材を横に渡し、太さ15~45cmの丸材の杭を打ちこんで押さえとしている。これらは最大で幅2.5mにわたり、複数列に及ぶ（第55・56図）。西から東側へ次第に田面を拡張していったものと思われる。なお、この杭列はSK10の南端で西に90度折れて、SK11上におよそ3m続いている。

SK11 H 4~6グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.5~1.2mを測り、北側田面との比高差は11~17cm、南側田面とは3~7cmである。杭による補強がみられるのはSK10とつながる部分、南北ベルトと交差する付近の2ヶ所である。前者は丸材の杭を用いて幅およそ1mにわたって施されている。3~4列に及ぶものと思われるが、杭が混在するために分離は難しい。後者は畔の内側と外側に集まる傾向がある。集中しているのはこの部分だけなので、水口などによる侵食から畦畔を保護する目的であった可能性もある。なお、杭列はSK11の西側延長上からも検出されている。この部分は貯水池状施設の内側にあたる。畦畔と田面が整えられていた部分を、ある時期に改変しているのであろう。

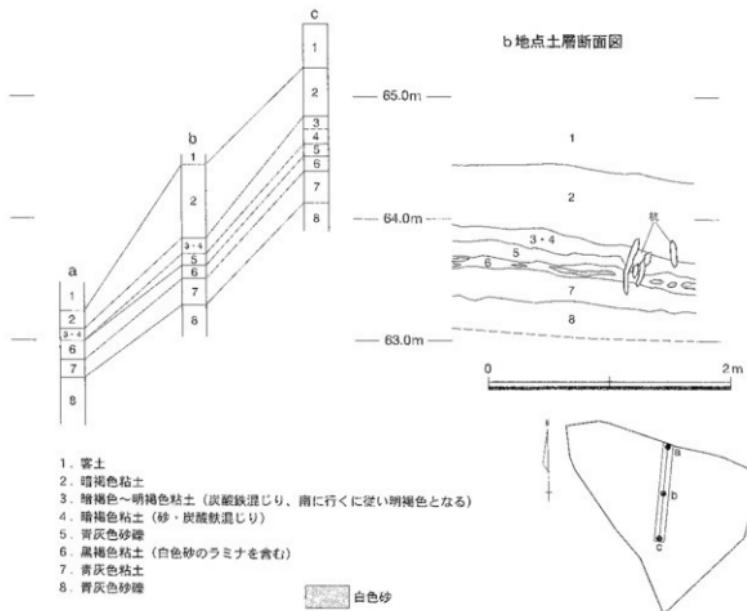
SK12 H・I 5グリッドで検出された南北方向の畦畔である。北端でSK11と連結している。幅は上端で0.2~0.7mを測り、東側水田との比高差は3~9cm、西側田面とは3~7cmである。杭による補強がみられるのはSK11との連結部と南端付近である。前者は4~5本程度によるもので、脆弱な連結部を補っているものと思われる。後者は10本弱が打ち込まれる。SK12が南東よりに屈曲する付近を保護するものと思われる。

SK13 I・J 5グリッドで検出された北西~南東方向の畦畔である。半ばほどで南向きにおよそ60度折れる。幅は上端で50cm前後である。この周囲に田面は検出されておらず北側・南側ともに畦畔上面から最大で30cmほどの窪みとなる。杭による補強は比較的南面に手厚く施される。

(2) 小畦畔による小区画（第46図）

大畦畔の内部はA区と同様に、畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。これらは、木材を用いて保護されている大畦畔とは異なり、すべて周囲の土を搔き揚げて盛り上げることで造られている。B区においては、大畦畔による区画（田面）11枚に、このような小畦畔が検出されている。大畦畔自体が地形の制約によって蛇行しているせいか、A区でみられるように同一延長上に小畦畔が造られる傾向はここでは乏しい。

田面14 大畦畔SK11が北側へ曲がってくる部分にあたるため、田面は台形様の矩形を呈し、内側は小畦畔によって13ヶ所の小区画に分けられている。東西方向に3列、南北方向に3~5列あり、中央列の北側と2番目が東西方向に長く、西列の北よりと東列の南よりに南北方向に長い区画が造られる。このう



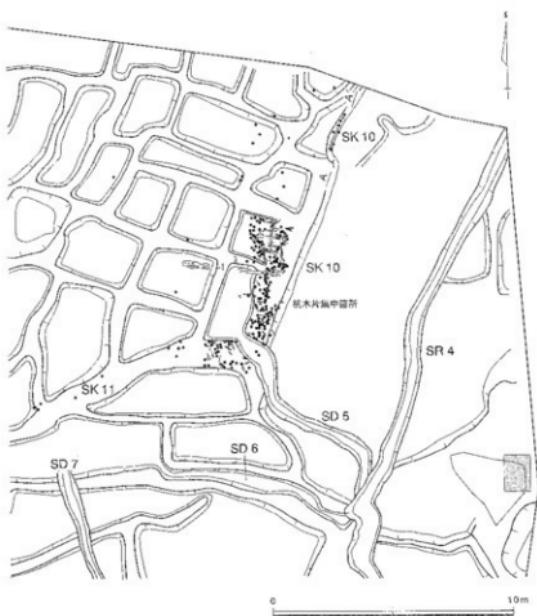
第54図 B区トレンチ土層柱状図・断面図

ち最も小さな区画は西列の北よりにあり、東西幅1.3m、南北幅2.7mを測る。最も大きな区画は西列の南側で東西幅3m、南北幅5mである。また、流路SR4から分岐した溝が南東隅に取りついている。流路から直接水を引き入れる施設であろうか。

田面15 大畦畔SK11の影響による南北に長い矩形を呈し、内部は12程度の小区画に分けられている。北側には南北に長く、幅1.2~2m、長さ4.2~4.8mの短冊状の小区画が並ぶ。南側は東西に長い幅1.1~2.8m、長さ3m以上の区画がならんで造られる。

田面16 貯水池状施設の北東のほとりにあり、内部を5ヶ所の小区画に分ける。最も北側を大畦畔との都合で底辺4.5m、高さ4.4mほどの三角形状に造る。この南側の区画は長方形であり、南北幅3~4m、東西幅4.5~6.3mを測る。中程の区画は南北の小畦畔で更に二分され、南北2~2.6m、東西1.9m以上の小区画をあえて造り出している。

田面17 貯水池状施設の北側のほとりにあり、内部を7ヶ所程度の小区画に分ける。東よりの一部に掘られたテストピットによって、ほぼ半数の規模が不確かとなっている。最も大きな小区画はテストピット北側にあり、東西幅9m、南北幅6m程度となる。最も小さな小区画は2m四方ほどである。このように、この田面の小区画は大小の差が極めて大きい。なお、田面南東側に小畦畔の一部が幅30cm程切れている部分がある。ここは、流路SR2・3の延長上にあたる。流路から供給された水を取りこむ水口と思われる。



第55図 B区大畦畔に伴う杭列位置図

部が途切れている。この北側には南北幅1.5~2.2m、東西幅4.9~6.9mの台形状の小区画が3つある。このうち南西側の一つには、小畦間に造られた幅50cm・深さ5cm前後の小さな溝が流路SR 4から接続している。流路から直接水を引き入れる施設であろうか。

田面20 南側に張り出す矩形の田面であり、大畦畔SK12沿いに5ヶ所程度の小区画が観察される。南北トレンチによって判然としない状況であるが、南北幅1.5~2.6m、東西幅2.7m以上の短冊状の区画が連続していたものと思われる。

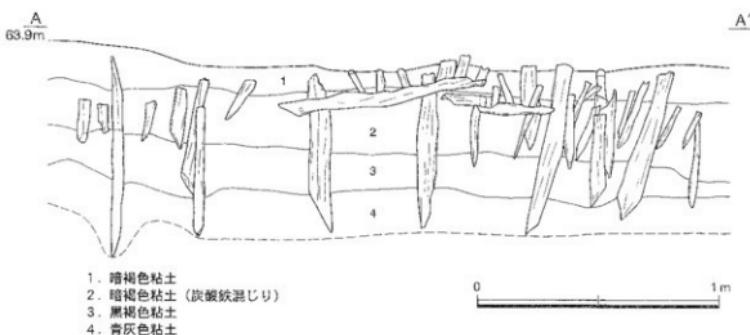
田面21 貯水池状施設に注ぐ流路SR 2・3に接する位置にある正方形の田面である。内部は6ヶ所の小区画に分けられている。東列は田面20の小区画に類似した短冊状であるが、西列の3つは南北幅1.8~3.1m、東西幅1.6~2.1mで正方形の近いものが含まれる。西列北端の小区画は、北西隅が水口状に幅50cm程度空いている。SR 3を介して貯水池状施設へ水を抜くための配慮であろう。

田面22 調査区南東壁際にある正方形になると思われる田面である。内部は6ヶ所程度の小区画に分けられる。いずれも正方形であり、南北幅1.5~3.1、東西幅2.2~3mの規模がある。東側の列は調査区境にかかり、規模は明らかでない。

田面23 田面22の西側にある平行四辺形の田面である。内部は12ヶ所の小区画に分けられる。中央や北側を東西に分ける小畦間に大きく二分され、北側には不整形な小区画が。南側には長方形の小区画が配置される。北側の中央には東西幅5.6m、南北幅2.4mの長方形の小区画がある。この西~東は北側の大畦畔に規制される形でS字状やL字状の小区画となる。南側の小区画は主に長方形である。

田面18 貯水池状施設の北西のほとりにあり、南側から東側にかけては水回しに供されたと思われる溝によって区切られる。この溝に沿う部分は不整形な小区画となるが、内側は南北幅2.3~3.1m、東西幅0.9~1.5mの短冊状や台形状となる。これら小区画を縫うように幅0.5~1m、深さ2~4cmのL字型の溝が掘られている。貯水池状施設から水を引き入れるための施設であろうか。

田面19 田面14の南側にある矩形の田面で、内部は6ヶ所の小区画に分けられる。最も大きな区画は南東隅にあり東西幅7.2m、南北幅3.2~5.4mを測る。この西側にある三角形状の小区画を境する小畦畔は、水回しを配慮したように北側で一



第56図 B区杭列断面図

相互が縦横にモザイク状に配置される。これらは幅1.2~2.7m、長さ2~3.5mと大小がある。

田面24 調査区の最も南側で検出された矩形の田面である。内部は5ヶ所程度の小区画に分けられる。北側は南北幅2m前後の小区画が東西に並ぶ。最も西側の小区画はほぼ中央を東西方向の小柱群で二分する。これらの南側は最大で10cmほどの窪みとなるが、その落ち際に杭が十数本打設される。この窪みの南端には大畔群SK13があり、やはり杭による補強がみられる。この窪み自体が、貯水池状施設のような役割をっていたことも考慮される。

(3) 流路・溝 (第43図)

B区で検出された流路はSR 1~4である。このうちSR 1~3は調査区の西よりにある。その末端は貯水池状施設に至っているため、水田の運営に供するよう人为的に引きこまれていると理解される。SR 4は調査区の東側にある。更に東側の山裾に平行する位置にあることから、山際を流れる小河川のひとつであったと考えられる。溝SD 5・6は流路SR 4に絡む位置にあり、いずれも東から西へ掘られている。水田に水を供給するためのものと考えられるが、SD7については畦畔を切っているため、SR 4の氾濫に伴ってできた水道である可能性が高い。

SR 1 G・H 4グリッドで検出された貯水池状施設の西端にある南西→北東方向の流路である。幅は最大で3m、およそ6mの長さが検出されている。北側にある田面18とは13cm程の比高差がある。SR 1の先端部近くからは、北側の水田に水を廻すための幅0.8~1m、深さ10cm前後の溝が北東に掘られている。

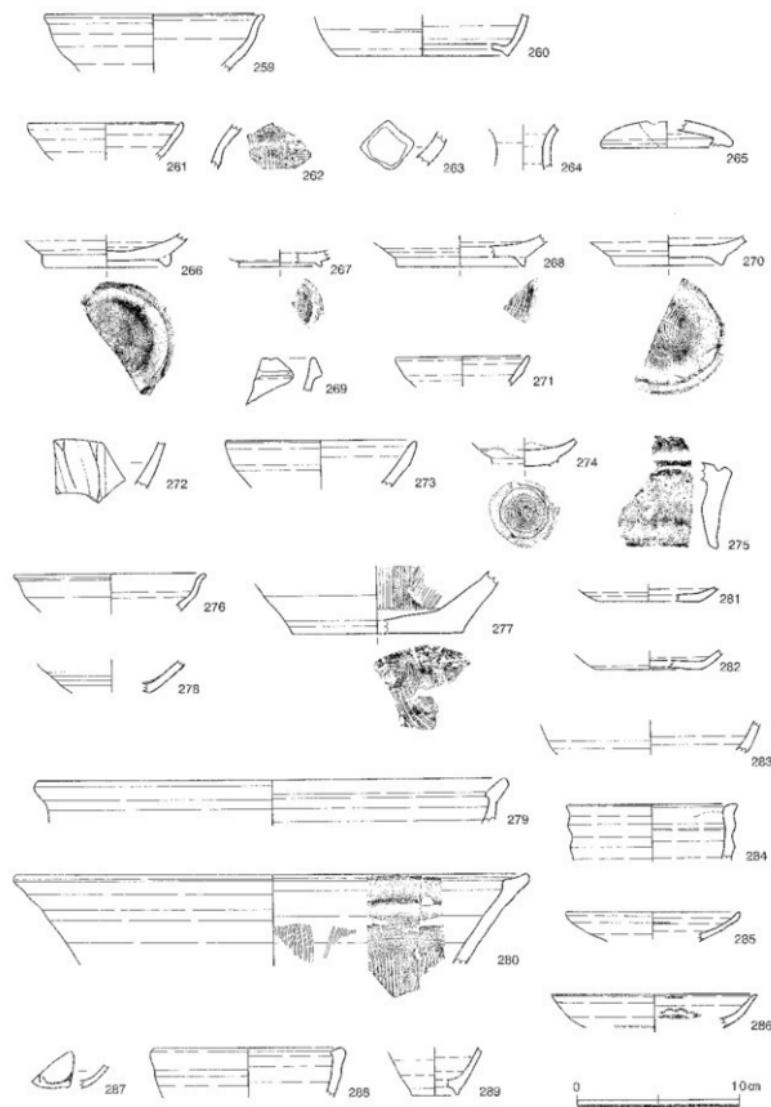
SR 2 H 4グリッドで検出された貯水池状施設へ南から至る南北方向の流路である。幅は70cm前後、深さは16~43cmで北へゆくにしたがって徐々に深くなる。

SR 3 H 4・5、I 4グリッドで検出された貯水池状施設へ南から至る南北方向の流路であり、SR2の東側に平行する。幅は40~70cm、深さは8~15cmで北へゆくにしたがってやや深くなる。

SR 4 G~I 6グリッドで検出された南北方向の流路である。幅は0.6~1.1cm、深さは18~40cmを測り、南北で幅が広く比較的深い。全体的には3%程度の勾配で緩やかに北へ流下する。

SD 5 H 6グリッドで検出された南東→北西の溝である。幅は60cm前後、深さは7~23cmで北西側に下る。田面14の南東隅に取り付いていることから、流路から田面に水を引くための溝と考えられる。

SD 6 H 6グリッドで検出された東西方向の溝である。幅は0.6~1m、深さは7cm前後で西側に下る。田面19の内側に引き込まれていることから、SD 5と同様、流路から田面に水を引くための溝と考えられる。



第57図 出土遺物実測図11(土器11)

SD 7 I 6～H 5 グリッドで検出された南東一北西の溝である。幅は0.5～1.1m、深さは7～29cmで北西側に下る。北西側にいくにしたがって細く、浅くなる傾向がある。田面19の畦畔を切る位置にあり、流路と連結していない。SR 4の氾濫に伴ってできた水道である可能性が高い。

(4) 貯水池状施設（第43図）

G～I 4 グリッドで検出された、流路の末端が取りつく空閑地である。東西におよそ20m、南北に15mの不定形を呈する。東側のSR 2・3が取り付く部分は、西側に南北から幅0.5～1mの土手が張り出すことにより楕円形に仕切られている。この部分にはSR 2・3からもたらされた水が優先的に溜り、北側に開いた水口から田面17に供給されていたものと考えられる。一方西端にはSR 1が取りついているが、この先端近くにはSR 2・3とは異なって北東向きの溝が連結していることからも、SR 1によってもたらされた水は優先的に溝を介して北側の田面に流されていたものと思われる。また、この施設の底面は特に掘り込まれておらず比較的の平らであるうえ、北側の田面との比高差も最大で5cm程度である。したがって、この施設は流路から溢れ出た水が薄く溜まる程度の容量しかなく、積極的に水を溜め置くことはできない。田面に落とす水を灌水することによって温め、更により下位の田面へ効率よく水を再分配するための調整機能を有していたものと考えられる。

4 B区水田面出土の遺物

B区水田面出土の土器・陶磁器（第53・57図・図版18・24・25）（255）は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品で墨書き器であるが、書かれた文字は不明である。（256）は渥美窯生産の山茶碗で12世紀前半の製品である。（257）は瀬戸焼の折縁深皿で14世紀後半の製品である。（258）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の鉢輪捕鉢で15世紀後半の製品である。（259）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窯4前にあたる16世紀末の製品である。（260）は産地不明の灰釉を施した急須で19世紀前半の製品である。

5 C区水田

C区水田は、標高65.8～63.1m付近に営まれる。等高線は南南東から北北西方向に下るが、調査区北端の貯水池状施設付近は標高63.2mあたりでやや平坦な面をつくる。

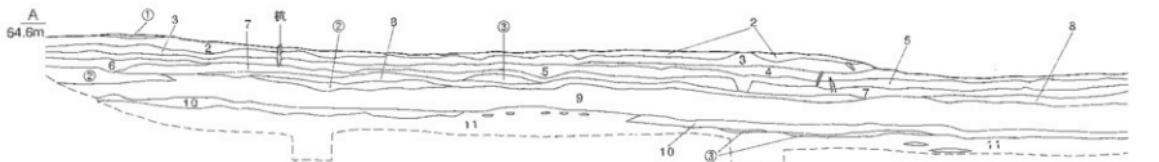
(1) 畦畔（第45図）

水田の畦畔は基本的には等高線にはほぼ平行・直交する方向に造られるが、調査区の南側に行くにしたがって崩れてゆく傾向がある。これは調査区の南に位置する山裾の形状が影響しているのであろう。基幹となる大畦畔はSK14～16である。主に丸材の杭を用いた施設はそれぞれに施されるが、特にSK16に著しく、部分的に石積みを伴っている。流路SR 5を安定させるための計らいであろう。

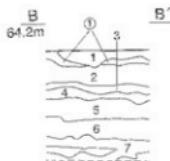
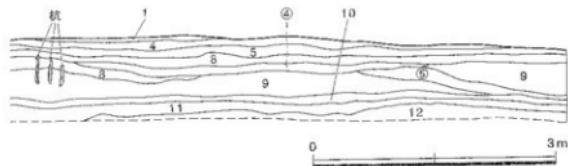
SK14 I 3～4 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.25～0.9mを測り、南側田面との比高差は10～12cm、北側は1～4cmである。畦畔を安定させるために打ちこまれた杭は比較的まばらで、1m前後の間隔をもつ。検出されていないが、これらの間に横木を渡していたことも想定される。

SK15 J 4～K 3・4 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東にいくにしたがってやや北側に曲がる。幅は上端で0.2～0.5mを測り、南側田面との比高差は4～12cm、北側は1～6cmである。打ちこまれた杭は西端部に集中している。10～70cm間隔で打ち込まれるもので、横木はみられない。水口などの施設を補強しているものと思われるが、調査区にかかり判然としない。

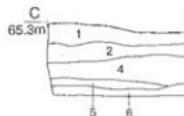
SK16 I 3 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。南側田面と北側の貯水池状施設の間に段状に



1. 灰色シルト
2. 灰色シルト（白色の斑点混じり）
3. 黄灰色粘土
4. 黄灰色シルト（白色の斑点混じり）
5. 黄灰色粘土（炭酸鉄混じり）
6. 黄色粘土（白色の斑点混じり）
7. 灰色粘土（白色砂質粘土・疊混じり、北に行くに従い炭酸鉄混じる）
8. 錫灰色粘土（北側は炭酸鉄混じり）
9. 砂礫
10. 反褐色粘土（腐植物のラミナが入る）
11. 灰色粘土（粘性強く、腐植物・白色粘土のラミナが発達する）
12. 砂礫

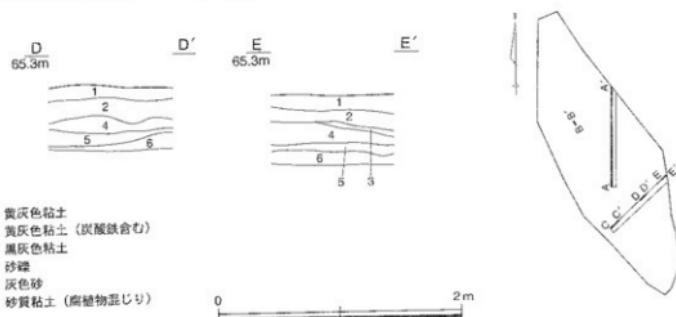


- B-B'
1. 黄灰色粘土（砂礫含む）
2. 黄色粘土（やや砂質）
3. 黑灰色粘土（腐植物含む）
4. 白色砂（腐植物のラミナが発達する）
5. 褐色粘土（腐植物のラミナが発達する）
6. 砂礫
7. 褐色粘土（砂のラミナが発達する）



- C-C' ~ E-E'
1. 黄灰色粘土
2. 黄灰色粘土（炭酸鉄含む）
3. 黑灰色粘土
4. 砂礫
5. 灰色砂
6. 砂質粘土（腐植物混じり）

第58図 C区トレント土層断面図



造られており、幅は平坦面で30~60cmを測る。杭は段の上端、すなわち田面25・26の北端部分と段の北縁に打ちこまれる。東半分は畦畔自体の平坦面が失われ判然としないが、杭列が継続するため、やや南北向きに角度を変えながら延びていたことが窺える。これら杭列には、部分的に人頭大の礫を用いた石積みが伴っている（図版13）。このSK16に直交し北へ伸びる上端幅20~50cmを測る土手状の高まりにも、東面を主体に0.3~1m間隔で杭が打ちこまれる。相互の間は80cmほど空いており、ここにも集中して杭が打ちこまれる。貯水池状施設から東側へ水を廻す水口であったと思われる。

② 小畦畔による小区画（第46図）

大畦畔の内部はA・B区と同様に、土を搔き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。C区においては、大畦畔による区画（田面）9枚に、このような小畦畔が検出されている。B区と同様、大畦畔自体が地形の制約によって蛇行しているせいか、A区でみられるように同一延長線上に小畦畔が造られる傾向はここでも乏しい。

田面25 大畦畔SK16の東側で北縁が接する部分にあたり、田面は台形を呈する。内側は小畦畔によって7ヶ所の小区画に分けられている。正方形状の小区画も含まれるが、三角形状が比較的多く、相互がモザイク状に組み合っている。長方形状の区画は田面の中ほどにあり、南北幅2.2~2.4m、東西幅2.5~3mの規模がある。三角形状の区画は田面の南側にあり、底辺8m、高さ5.5mである。

田面26 田面25の西側に接し、北縁を大畦畔SK16とする。内部は小畦畔によって6ヶ所以上の小区画に分けられている。SK16に接する小区画は正方形状を呈する。一部の小畦畔が失われているが、2.2m四方程度の規模となる。この南側には南北幅2.1~4m、東西幅1.2~1.6mと南北に長い短冊状の小区画が並ぶ。南端は東西に長い区画がみられるが、調査範囲外となり規模は定かでない。

田面27 調査区のほぼ中央東よりにある正方形状の田面である。内部は4ヶ所以上の小区画に分けられている。大畦畔SK14に接する最も北側の小区画は、南を境する小畦畔が円弧状になるため、南北の最大幅2.4m、東西幅6.7mの唇のような形状をなす。この南側には、南北幅4.4m、東西幅7.6m以上と長方形状の最も大きい区画がある。南端の区画は2つとも不定形であり、東側で南北幅4.4m、東西幅7.2m、西側で南北幅1.6m、東西幅6.3m以上の規模がある。

田面28 田面27の南に接する台形状の田面である。内部は4ヶ所以上の小区画に分けられている。北側東よりの区画は南北幅3m、東西幅4.4mと東西に長く、北側西よりの区画は東西幅が2.6m程度と南北にやや長い。南側西よりの区画は5m四方の正方形状であり、この田面のなかで最も大きい。東側の小畦畔が北よりで不明確となるため、この部分に水口が存在する可能性が感じられる。これらの東側の小区画は調査区境にかかり、規模は判然としない。

田面29 田面28の西に接する。西側は調査範囲外となるため全面の検出はできなかったが、正方形状になるものと思われる。内部は5ヶ所以上の小区画に分けられている。北側の小区画は広く、南北幅3.9m、東西幅7m以上の長方形状になると思われる。この南東側の小区画は台形状で、南北幅5.3m、東西の最大幅3.4mの規模がある。南西側の小区画は、中央に南北幅3.6m、東西幅6m以上の不定形の部分があり、更に南北に小畦畔で区切られたごく小さな部分を伴っている。この部分は幅が1mに満たない。耕作に用いたと考えるにはいささか難がある。

田面30 田面28の南に接する。東側は調査範囲外となるため全面の検出はできなかったが、菱形状になるものと思われる。北西側の小区画は不定形で、南北の最大幅3m、東西の最大幅4.5mを測る。この東に接する小区画は東側が調査区境にかかるため規模は明らかでないが、同様な雰囲気であると考えられる。これらの北を境する上端幅0.2~0.5mの大畦畔は、北面に杭による補強を施している。一方、南側の小畦畔にも北面に杭による補強がみられるが、この範囲は北西側の小区画に面する部分に限られる。南西側の小区画は、南北幅3.8m、東西幅2.4~5.5mを測る台形状を呈する。南縁を大畦畔SK15に接して

いる。

田面31 田面30の西にあり、南縁を大畦畔SK15に接している。内部は2ヶ所以上の小区画に分けられている。東側は南北の最大幅6.5m、東西の最大幅5mを測る不定形を呈する。西側の小区画は、調査区境にかかるため規模は明らかでない。南に接するSK15には杭が密集して打ちこまれる部分があるため、より上位の水田からこの位置に水を廻す水口が開いていた可能性を感じさせる。

田面32 調査区の最も南側に位置する。田面の形状は、二方が調査区境にかかるため明らかでない。内部は6ヶ所以上の小区画に分けられる。いずれも不定形を呈する。規模が判る小区画はSK15に接する部分にあり、南北の最大幅5m、東西の最大幅5.2mを測る。耕作土中から有孔板材(50)が出土している。

(3) 流路 (第43・45図)

C区で検出された流路はSR5である。貯水池状施設に接する位置にあるため、田面から集まつた水をやや大きな流れとして下位に落とす機能があると考えられる。

SR 5 貯水池状施設の東端にある南北方向の流路である。幅は4m以上になると考えられ、貯水池状施設の南東隅にある底面に幅0.7m、深さ2~6cmの細長い窪みを伴う水口から溢れ出した水は、水口の東に接する浅い窪みに集まつた上で、SR 5に流れ出ることになる。この流路の延長上にあたるE区には同様な流路は検出されていない。西向きに曲がってB区SR 1に至る可能性を感じられる。

(4) 貯水池状施設 (第43図)

調査区の北端にあたるI 3グリッドで検出された大畦畔SK16と土手状の高まりによって囲まれた長方形の空闊地である。検出された範囲では南北約16m、東西5mの規模がある。底面は平らであるため意図的に掘り堀められたものとは考えられない。底面と大畦畔や土手の高まりの上端との比高差は最大で16cmであるため、B区の貯水池状構造と同様に東側の田面や流路から集まつた水を薄く溝水させ、温めて再分配するためのものと考えられる。

6 C区水田面出土の遺物

C区水田面出土の土器・陶磁器 (第57図・図版19・25) (261)は東晩系の小碗で12世紀前半の製品である。(262)は瀬戸焼の繕釉捕鉢で後期IVか大黒1期の15世紀末の製品である。(263)は瀬戸焼灰釉盤で登窯8期から後で18世紀末の製品である。(264)は肥前焼の白磁の花瓶で19世紀前半の製品である。(265)は土瓶の蓋で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。

7 D区水田

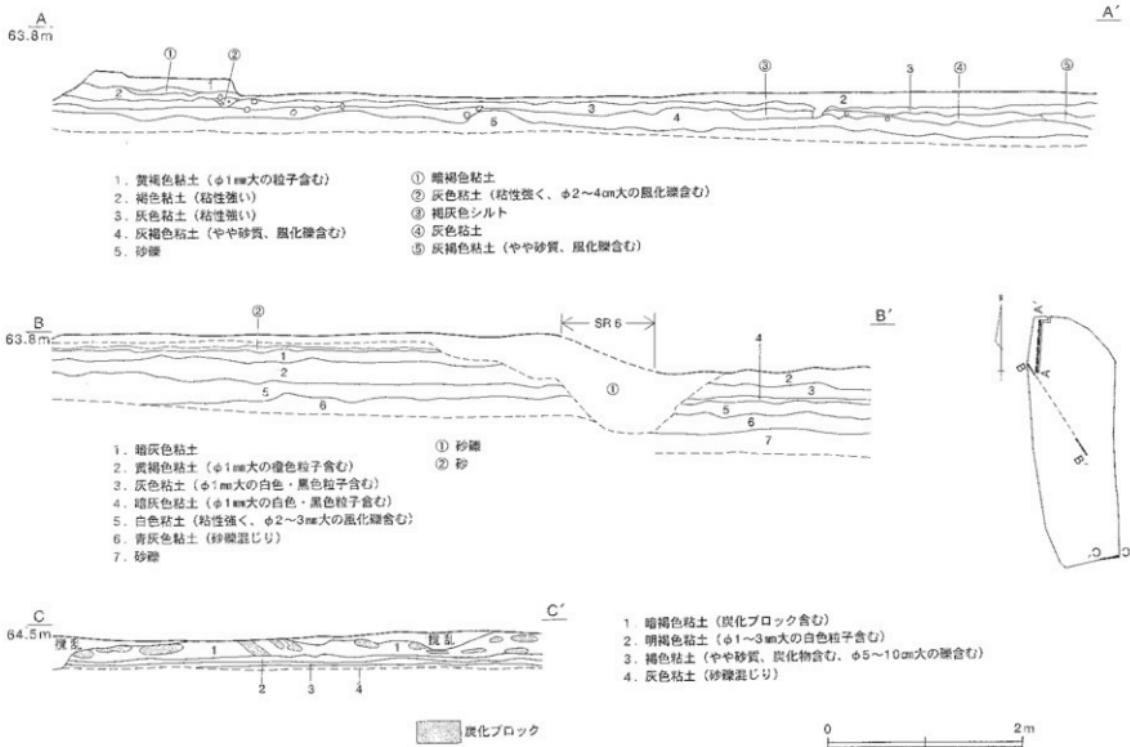
D区水田は、標高64.3~62.9m付近に営まれる。等高線は南から北方向に下るが、調査区中央や北よりでは氾濫による砂礫が流入して田面を押し流しており、標高63m付近で平坦面を形成している。

(1) 畦畔

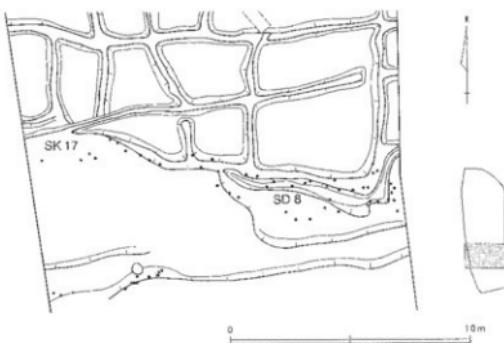
水田の畦畔は基本的には等高線にほぼ平行・直交する方向に造られる傾向がある。基幹となる大畦畔は南よりにあるSK17である。

SK17 I 1~2グリッドで検出された東西方向の畦畔である。幅は上端で0.3~0.8mを測り、南側田面との比高差は3~17cmである。北側には平行する段が複数検出されたが、明確な田面は把握できない。

杭による補強は北面を中心に丸材の杭を用いて0.3~1.7m間隔に行われる(第60図)。この面は溝SD 8に接する部分であるので、水による流出を防止する目的が感じられる。



第59図 D区トレント土層断面図



第60図 D区大畦畔に伴う杭列位置図

かれている。北よりには不定形の小区画が多い。一方南よりには、東西幅3.1~4.2m、南北幅1.7~2.7mの長方形の区画が格子目状につながる。

田面34 南端で大畦畔SK17に接する正方形の田面である。北端はSR 6によってもたらされた砂礫の侵入を受け、流失している。南よりは東西方向の小畦畔によって東西幅2.3~5.2m、南北幅2.4~3.7mを測る正方形~長方形形状を呈する4ヶ所の区画に分けられる。このうち北東側小区画の南東隅と南西側小区画の北西隅北側には、水口とみられる小畦畔の途切れが観察される。北よりは南北幅3.6m、東西幅9.5mの比較的大きな長方形区画に見えるが、南側の小畦畔より半円状の小畦畔が北東側へ分岐しているため、更に二分される可能性がある。

田面35 田面34の西にあり、南端で大畦畔SK17に接する。北側は洪水による砂礫の侵入により、西側は調査区境にあたるため田面の形態は定かでない。内部は5ヶ所以上の小区画に分かれている。大畦畔沿いには南北幅3.2~3.9m、東西幅1.3m前後の長方形形状の小区画が連続して営まれる。

(3) 流路・溝（第43・45図）

D区で検出された流路はSR 6、溝はSD 8である。山裾を西側から頑丈に来た水に対処するものと思われる。

SD 8 調査区の南側であるI 2グリッドで検出された東西方向の溝である。大畦畔SK17の南側に平行しており、幅0.4~1m、深さ5~25cmの規模がある。この溝の南縁には0.25~1mの間隔で杭が打たれており、SK17南縁にある杭列とともに溝の範囲を区切っている。

SR 6 調査区の中央から北よりの地域には、幅11~13mにわたって厚く砂礫をもたらしたSR 6が東西方向に流入している。この砂礫は西側からの急激な氾濫によってもたらされたと考えられ、水田面を割り流してしまっている。この砂礫は、しかし、隣接するC区に同様な砂礫が認められない、H 3グリッド付近で止まっており、谷中を貢流するものではないと考えられる。

8 D区水田面出土の遺物

D区水田面出土の土器・陶磁器 (第57図・図版19・25) (266) は助宗窯生産の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。(267) は東遠系の小碗で12世紀中葉の製品である。(268) は東遠系の山茶碗で12世紀後半から13世紀初頭の製品である。(269) は中国白磁碗で12世紀の製品である。

(2) 小畦畔による小区画

他の調査区と同様に、大畦畔の内部は土を搔き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって更に細かく区切られている。D区においては、大畦畔による区画（田面）3枚に、このような小畦畔が検出されている。それぞれは長方形形状を呈し、B区やC区南東側に比べて整った印象を受ける（第46図）。

田面33 調査区の北端にある東西に長い長方形形状の田面である。内部は11ヶ所以上の小区画に分

る。(270)は東遠系の山茶碗で13世紀初頭から13世紀中葉の製品である。(271)は東遠系の小皿で13世紀の製品である。(272)は中国青磁の蓮弁紋碗で13世紀中頃から14世紀前半の製品である。(273)は古瀬戸の鉄鋸天目茶碗で後期IIIにあたる15世紀前半の製品である。(274)は中国白磁小皿で15世紀前半の製品である。(275)は常滑焼の甕で15世紀前半の中野編年9型式の製品である。(276)は美濃黄天目茶碗で登窯1期か登窯2期に併行する17世紀初頭の製品である。(277)は上志戸呂窯生産の鉄釉擂鉢で大窯4期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。(278)は美濃焼の鉄釉天目茶碗で登窯1期か登窯2期の17世紀前半の製品である。(279)は上志戸呂窯併行にあたる志戸呂焼の鉄釉擂鉢で17世紀前半の製品である。(280)は上志戸呂窯併行にあたる志戸呂焼の鉄釉擂鉢で16世紀末の製品である。(281～283)はかわらけで16世紀の製品と思われる。(285・286)は伊万里焼の染付皿で18世紀の製品である。(287)は伊万里焼の染付丸茶碗で18世紀の製品である。(288)は瀬戸焼の黄釉片口鉢で18世紀中葉の製品である。(289)は産地不明の白磁盃で19世紀前半の製品である。

9 E区水田

E区水田は、標高63.1～60.4m付近に営まれる。等高線は南から北方向に下るが、谷の中央部に近いため傾斜は比較的緩慢となる(第48図)。標高62.8～62.6m付近と61.0m前後で平坦面を形成している。

(1) 眦畔(第45図)

水田の畦畔は基本的には等高線にはほぼ平行・直交する方向に造られる傾向がある。基幹となる大畦畔はSK18～26であり、SK18がA区で検出されたSK2と、SK19がSK6と、SK20がSK8と同一延長上になる可能性が高く、周辺の水田との連続性が窺える部分がある。

SK18 C・D3～D4グリッドで検出された北西～南東方向の畦畔である。位置関係からA区で検出されたSK2と同一延長上にある可能性が高い。杭等による補強はなされおらず、耕作土を搔き揚げることで形成される。幅は上端で30～60cmを測り、北側田面との間には6～16%の下り斜面を造る。北側田面との比高差は12～18cm、南側とは8cmとなる。

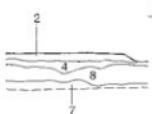
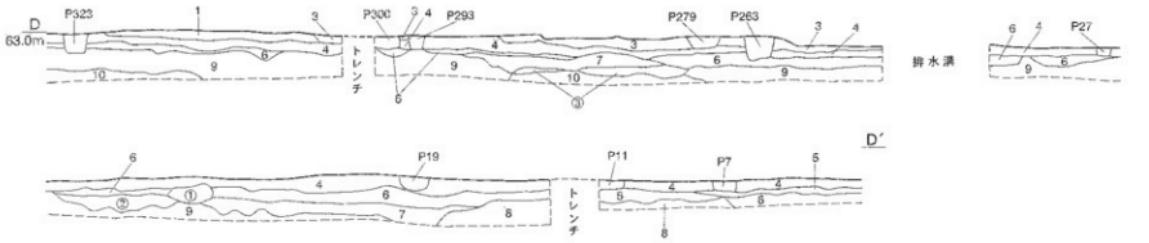
SK19 D3～4グリッドで検出された東西方向の畦畔である。位置関係からA区で検出されたSK6と同一延長上にある可能性が高い。東側は上端で20～40cmと幅が狭いが、西端部分では1m前後に広がる。西端で南側に折れてSK25につながるが、この部分の北側には直径20cm前後の自然礫が集められている。曲面の補強として用いられていたのかもしれない。

SK20 E2～3グリッドで検出された東西方向の畦畔であり、調査区の中ほどでSK25と交差する。位置関係からA区で検出されたSK8と同一延長上にある可能性が高い。幅は上端で30～50cmを測り、南側田面との比高差は10cm前後、北側とは1～6cmとなる。SK25との交点南西側には、直径20～30cmの自然礫が集められる。なお、この畦畔は調査区西壁から9～12.5mで流路SR7によって切られている。

SK21 E・F3グリッドで検出された東西方向の畦畔であり、調査区中ほどでSK25と直角に交わる。幅は上端で30～50cmを測り、南側水田との比高差は5～14cm、南側とは2cm前後となる。SK25との交点北東側には、補強のためと思われる直径10cm前後の礫が集められている。

SK22 F3グリッドで検出された北西～南東方向の畦畔である。2列との境付近でSK25と交差する。本来はより西側にあたる田面52～54の南縁付近に延びていたものと思われる。幅は上端で0.3～1.3mを測り、西へ行くにしたがって徐々に細くなる。北側の田面とは10cm前後の比高差があるが、南側の田面は畦畔上端より5cm前後高い位置にある。SK25と交差する部分には50cm前後の間隔に杭を打ちこみ、直径10cm前後の礫が集められている。

SK23 F3グリッドで検出された東西方向の畦畔である。2・3列境の東側でSK25と鋭角に交差する。

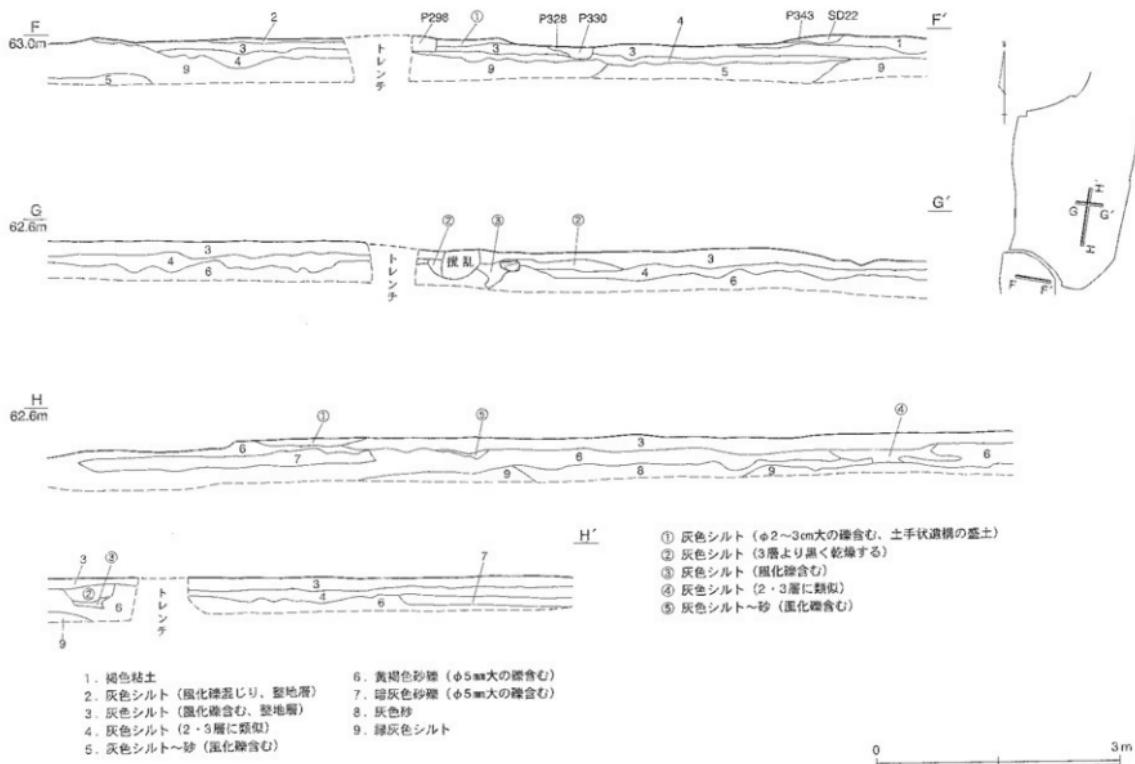


1. 灰色シルト ($\phi 2\sim3\text{cm}$ 大の礫含む、土手状遺構の盛土)
2. 白色粘土 (水田耕作土)
3. 白色シルト (整地層)
4. 灰色シルト (風化礫含む、整地層)
5. 灰色シルト (粘性4層と6層の間)
6. 灰色シルト (3・4層に類似)
7. 灰色シルト～砂 (風化礫含む)
8. 黄褐色砂礫 ($\phi 5\text{mm}$ 大の礫含む、東端にラミナ発達)
9. 緑灰色砂礫 ($\phi 5\text{mm}$ 大の礫含む)
10. 緑灰色シルト～粘土

- ① 灰色シルト (風化礫含む)
- ② 灰色シルト～砂 (風化礫含む)
- ③ 灰色砂 ($\phi 5\text{mm}$ 大の礫含む)
- ④ 灰色粘土
- ⑤ 灰色シルト～砂 (風化礫含む)
- ⑥ 灰色粘土 (暗灰色含む)
- ⑦ 黄褐色砂礫 ($\phi 5\text{mm}$ 大の礫含む)
- ⑧ 緑灰色粘土 (暗灰色含む)
- ⑨ 灰色シルト～砂 (風化礫含む)
- ⑩ 灰色シルト ($\phi 3\text{cm}$ 大の礫混じり)



第61図 D・E区トレンチ土層断面図



第62図 D・E区トレンチ土層断面図2

幅は上端で20~80cmを測り、北側の田面との比高差は9~22cm、南側とは5~10cmとなる。畦畔の北縁には補強のための丸材を用いた杭が0.1~1m間隔に打たれ、特にSK25との交点より東へ6.5m付近までより密に打たれる傾向がある。また、SK25との交点北縁には直径20cm前後の礫が集められている。

SK24 G 3 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。調査区境より西へ7m付近でSK25と交差する。幅は上端で40cm前後を測り、北側田面との比高差は20cm前後、南側田面とは6cm前後となる。畦畔の北縁は5~50cm間隔で丸材の杭が打ち込まれ補強されている。特にSK25との交点から東へ3m程の範囲が著しい。この杭列には部分的に横木が渡され、その周囲に直径20cm程度の礫が集められている（第65図）。

SK25 D 3~G 3 グリッドにかけて検出された畦畔である。南側のG 3~F 2 グリッドでは北西~南東方向であるが、これ以北では南北方向に向きを変える。幅は上端で0.4~1.1mを測り、北西~南東方向の部分においては、北東側に12~26cm、南西側に12cm前後の比高差を生じているが、南北方向部分においては東側・西側ともに15cm前後と近似する箇所もみられるようになる。畦畔を補強する施設は、前述のとおり他の畦畔と交差する部分に手厚く施される。特に杭や横木のほかに礫を用いる手法は、A~D区では用いられていないものである。

SK26 G 2・3 グリッドで検出された東西方向の畦畔である。東端はSK25との間に、水口と思われる60cm程の間隔を取っている。幅は上端で20~40cmを測り、北側田面との比高差は2~7cm、南側田面とは2~6cmとなる。G 2 グリッドで南北方向の畦畔と交差するが、ここからもまばらながら直径10cm前後の礫が複数検出されている。

② 小畦畔による小区画（第46図）

E 区でも他の調査区と同様に、土を搔き揚げて盛り上げることで造られた畦畔（小畦畔）によって大畦畔の内部は更に細かく区切られている。E区においては、大畦畔による区画（田面）のほぼすべてにあたる27枚に、このような小畦畔が検出されている。小区画は正方形～長方形状を呈するものが多い。

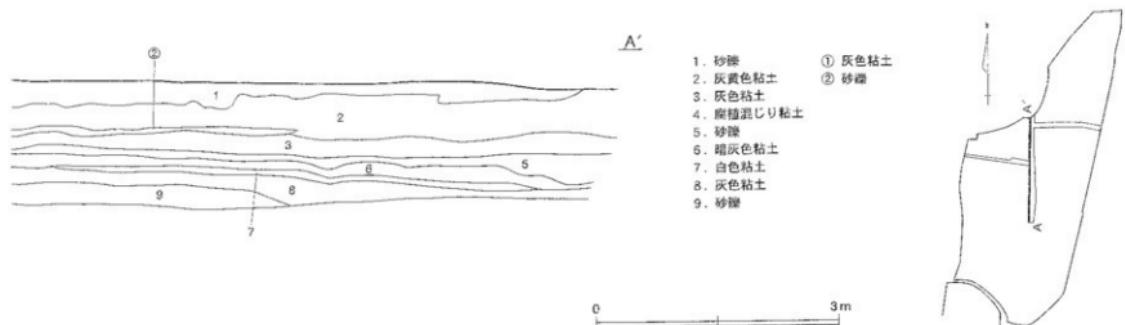
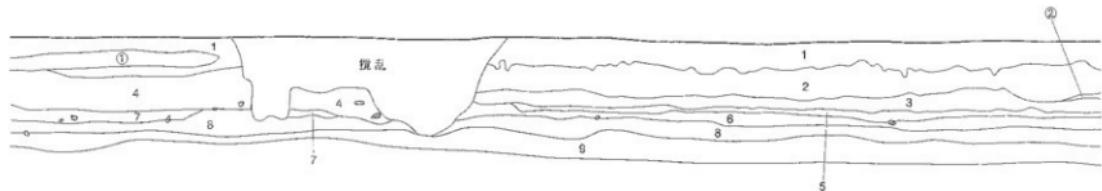
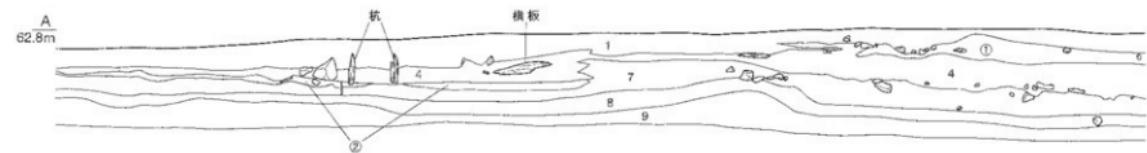
田面36 調査区の北端にある、北西~南東に長い長方形状になると思われる田面である。調査区境にかかるため北・東・西の境となる大畦畔は確定できない。内部は11ヶ所以上の小区画に分かれている。中央付近に1~1.8m四方の小区画があり、周囲に南北幅0.8~1.5m、東西幅3.5m前後の長方形状のものが配置される傾向がある。

田面37 田面36の南東側にある、北西~南東に長い長方形状になると思われる田面である。調査区境にかかるため東の境となる大畦畔は確定できないが、西にある田面38と同様な規模であろう。北側には南北幅1m程度、南側には南北幅3.5mの2ヶ所の小区画がみえる。

田面38 田面36の南側にある東西8~9.5m、南北5m前後となる北西~南東に長い長方形の田面である。内部は長方形や矩形の小区画9つに分かれている。小区画の規模は、最小が南北幅1m、東西幅1.6m、最大が南北幅2m、東西幅3.5mと一定ではなく、それぞれがモザイク状に組み合っている。南西側の隅には、長径1m、短径0.7m、深さ0.17mの貯水穴と思われる窪みSF 1から、導水のためと思われる幅0.4m、長さ2.8m、深さ6cm前後の溝SD 9が延びている。

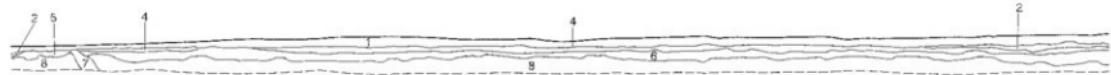
田面39 田面37の南側にある。南側の境は大畦畔SK18となる。東へ延びる2ヶ所小区画が検出されているが、調査区境にかかり全体像は判然としない。恐らく、西側に連続する田面40に類するものであろう。

田面40 田面38の南側にある東西11m、南北6m程の、北西~南東に細長い長方形の田面である。南側は大畦畔SK18に接している。内部は長方形・正方形・三角形等の13ヶ所の小区画に分けられている。長方形の区画は田面の南西隅にみられ、南北幅2.2m、東西幅3.1mを測る。正方形の小区画は中央から西側に多く1.7~2.2mの規模がある。三角形や矩形の区画は田面の東側に偏っている。大畦畔の間隔等に変化がないにもかかわらず、東側に変則的な規模の小区画を配置するのは、何らかの特殊な事情があったのだろう。

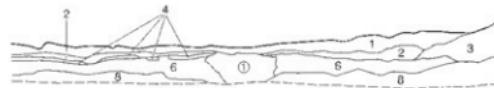


第63図 E区トレントレンチ土層断面図1

B
62.8m



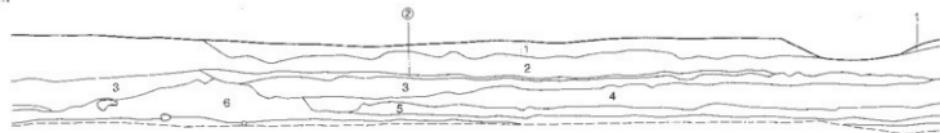
B'



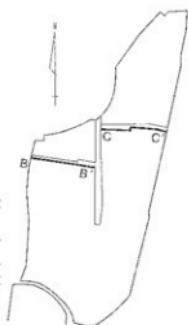
1. 灰黄褐色粘土(腐植物混じり、鉄分含む)
2. 灰色粘土
3. 灰褐色シルト(腐植物混じり)
4. 明黄褐色粘土(風化隕含む、ややしまり強い)
5. 明黄褐色粘土(4層よりもシルト質)
6. 灰黄褐色シルト(腐植物混じり)
7. 黄褐色シルト～砂
8. 砂疊

① 砂疊

C
62.8m

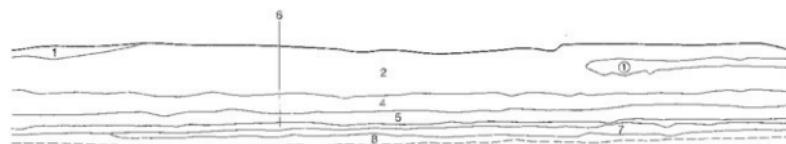


C'



1. 砂疊
2. 灰黄色粘土
3. 灰色粘土
4. 砂疊
5. 灰褐色粘土(腐植物含む)
6. 暗灰色粘土
7. 白色粘土
8. 灰色粘土(風化隕含む)

0 3m



第64図 E区トレンチ土層断面図2

田面41 大畦畔SK18南側の田面である。試掘坑等によって一部が抜かれているほか、西側で小区画が検出されていないなど、正確な規模は把握できない。内部は少なくとも6ヶ所以上の小区画に分けられている。東西に長い長方形形状が主体であり、各々は南北幅1.2~2.2m、東西幅2.7~3.3mを測る。

田面42 大畦畔SK19の北側に接する田面である。5m四方の正方形の田面であるが、内部に直径1.3mの小区画をもつ不定形な張出しが南東側から延びている。

田面43 田面42の南側に位置し、北縁を大畦畔SK19に接する田面である。7m四方程度の規模があると思われるが、東側は調査区間にかかり、南側はトレンチによって判然としない。内部は12ヶ所以上の小区画に分けられている。いずれも南北幅1.3~1.5m、東西幅1.4~1.8mを測る正方形形状であり、南側で比較的均等な規模となる。

田面44 田面43の西側にある南北幅8m、東西幅11m程度となる田面である。田面43との境をなす大畦畔際で南北幅2.5m前後の小区画が観察されるが、これより西側では不明瞭となる。田面の北側を斜めに横切るSR7によって田面が削かれていることも考えられる。

田面45 南側を大畦畔SK20に、西側をSK25によって区切られる、東西幅が17m程の田面である。SK20に2.5~3.5m間隔で平行する小畦畔との間に4ヶ所の小区画が作られる。小区画の東西幅は2~4mを測る。

田面46 大畦畔SK20とSK21間の、最も東側で検出された田面である。南北幅は12m程であるが、東側が調査区間にかかるため東西の規模は明らかでない。内部は3ヶ所以上の正方形~長方形形状の小区画に分けられる。南北幅は1.6~4.2mと一定しない。

田面47 田面46と大畦畔SK20・21・25との間に位置する、およそ14m四方の正方形形状の田面である。内部は13ヶ所の小区画に分けられる。小区画の形状は長方形形状を主体とするが、南北幅0.5~4m、東西幅1.4~6.5mと一定しない。また、北縁や南西側の小区画には、小区画内に突出する仕切り状の小畦畔が観察できたり、水口を介して小区画同士がZ字状につながる部分もみられる。

田面48 大畦畔SK21とSK22間の最も西側にある長方形形状の田面である。南北幅5m、東西幅7m以上の規模があり、内部は9ヶ所以上の小区画に分けられる。西側は東西幅4.3~4.6m、南北幅1.0~2.3mの長方形形状の小区画が南北方向に連続している。この東側には1.4~1.7m四方の正方形形状の小区画が並んでいる。

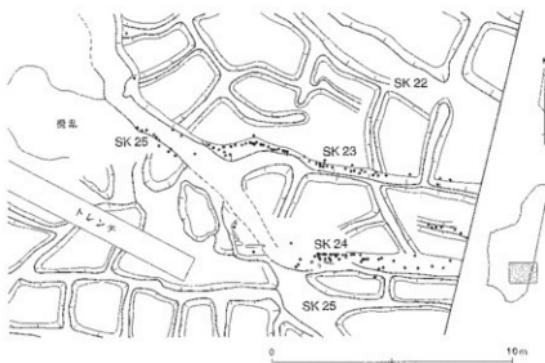
田面49 田面48の南側にある、7.5m四方の正方形形状の田面である。内部は3ヶ所の小区画に分かれるが、規模は一定しない。南側の小区画の北西側にあたる小畦畔は一部が途切れている。田面50方向へ水を出す水口であった可能性がある。

田面50 大畦畔SK21・22・25によって三方を囲まれる南北8~11m、東西9m程の田面である。内部は7ヶ所の小区画に分けられている。西側は矩形の小区画によって大きく2つに分けられるが、東側では不定形の小区画が多くなる。

田面51 東側を大畦畔SK25に、南側をSK23に接する南北11m、東西6.5mを測る長方形の田面である。内部は東西・南北に通る小畦畔によって、6ヶ所の小区画に分けられている。それぞれは南北2.3~3.3m、東西2.3~2.7mの規模があり、整然としている。

田面52 田面51の西側に位置する、およそ10m四方の田面である。内部は18ヶ所の小区画に分けられている。田面51に接する東側には、東西幅3.3~3.5m、南北幅2m前後の長方形形状の小区画が南北方向に連続する。ここには、田面51からの水廻しに配慮したとみられる水口が、複数ヶ所に設けられている。中央付近から西側には、南北1.4~2.7m、東西1.7~2.4mを測る正方形形状の小区画が、碁盤目状に配置される。この部分の南側にも、水口と思われる小畦畔が途切れる部分が複数観察される。

田面53 田面52の西側に連続する田面である。内部は田面52の中央より西側にみられる小区画に類似し



第65図 E区大畦畔に伴う杭列位置図

た、10ヶ所以上の小区画に分けられる。

田面54 大畦畔SK22とSK23・25によって挟まれた部分にあり、SK25が北へ緩やかにカーブするのに規制された半月状の不定形な田面となる。内部は10ヶ所の小区画に分けられている。SK25に接する部分は、幅1.9m前後、長さ3mの長方形形状の小区画が連続するが、他の部分においては三角形や矩形の小区画となる。中

央より東側では、小畦畔が部分的に途切れて水口を構成している。

田面55 大畦畔SK23・24・25に挟まれた南北幅3m、東西幅9m以上を測る長方形形状の田面である。内部は5ヶ所以上の小区画に分けられている。それぞれの区画は三角形や矩形をなし、一定でない。田面の東側には、SK23と24に平行する杭によって補強された畦畔が検出されている。両者の漸移的なものもある可能性もあるが、検出された長さが2m程度であるため詳細は定かでない。

田面56 大畦畔SK24と25に囲まれた田面である。東側が調査区境にあたるため、田面の形状は明らかでない。内部は、幅1.0~2.2m、長さ3.3m以上の東西に細長い小区画5ヶ所以上に分かれている。

田面57 東縁を大畦畔SK25に接する、東西4~10m、南北7m前後を測る台形状の田面である。内部は9ヶ所の小区画に分けられている。SK25に接する部分は三角形~長方形形状を呈し、南東隅には田面59からの水廻しに配慮したと思われる水口が開いている。西よりには南北2~2.5m、東西1.5~2mの正方形~長方形の小区画が碁盤目状に並ぶ。

田面58 田面57の西側に接する、9m四方の正方形を呈する田面である。内部は10ヶ所程度の小区画に分けられている。小区画は、基本的には田面57で検出されたものに類する規模である。

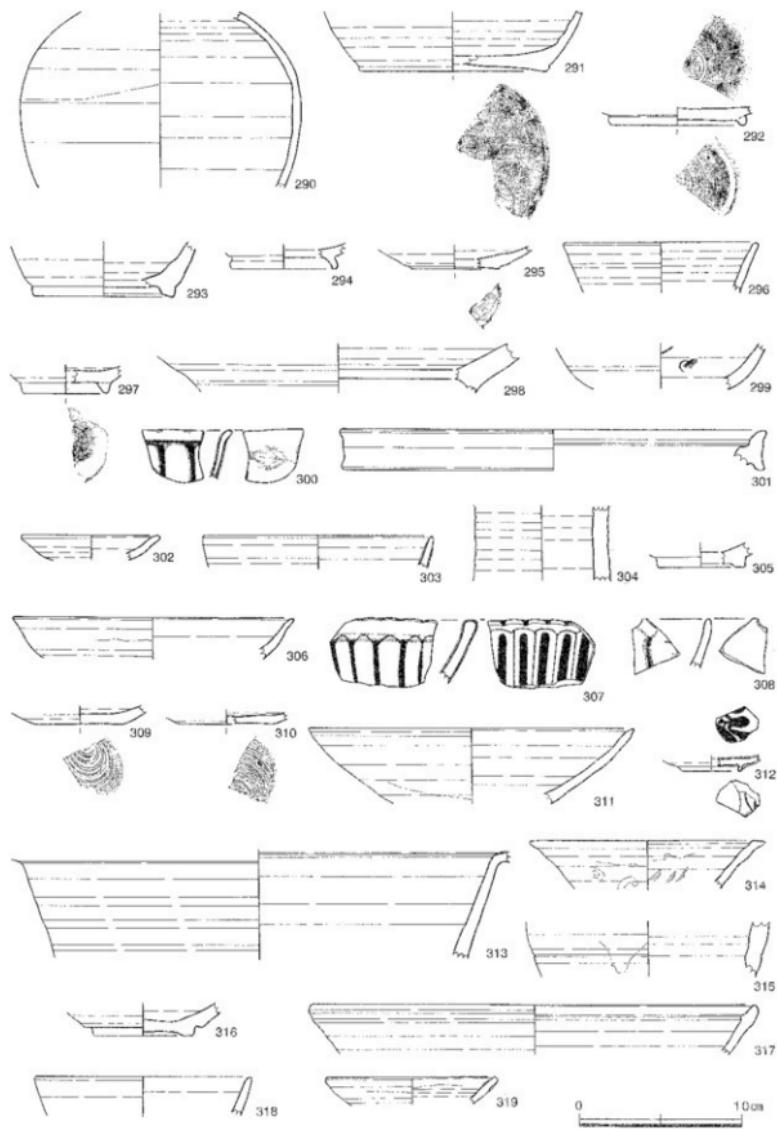
田面59 調査区の最南端にあたる田面の一つであり、東縁を大畦畔SK25に接する。内部は13ヶ所の小区画に分けられている。東側のSK25よりの部分は、南北2.2~3.7m、東西2.5mの比較的大きな区画となるが、西側部分ではこれを概ね半分にした長方形形状の小さな区画が整然と並ぶようになる。

田面60 東を田面59に、西をD区の田面33に接する、東西8m、南北9.5mを測る長方形の田面である。内部は11ヶ所の小区画に分けられている。南東隅には最大幅1mの三角形形状や、東西1.3m、南北1.5mを測る長方形形状のごく小さな区画がみられる。内部の多くは東西1.8~2.9m、南北1.2~2.8mの長方形形状を呈する。

(3) 流路・溝（第43図）

E区で検出された流路はSR 7のみである。小瀬戸谷川から派生したものと思われる。

SR 7 調査区の北よりにあたるE 1~D 4グリッドで検出された、南西~北東方向の流路である。田面の方向との相関性はなく大畦畔SK19・20・25等を切っているため、水田が整備された後に高位にあたる南西方向から流入したものと思われる。田面を覆う4層（A-A'断面）は耕作土（7層上半）を削り込み、上位に堆積する砂疊層（1層）とも不整合がみられることから、SR 7の流入は多量の土砂とその後

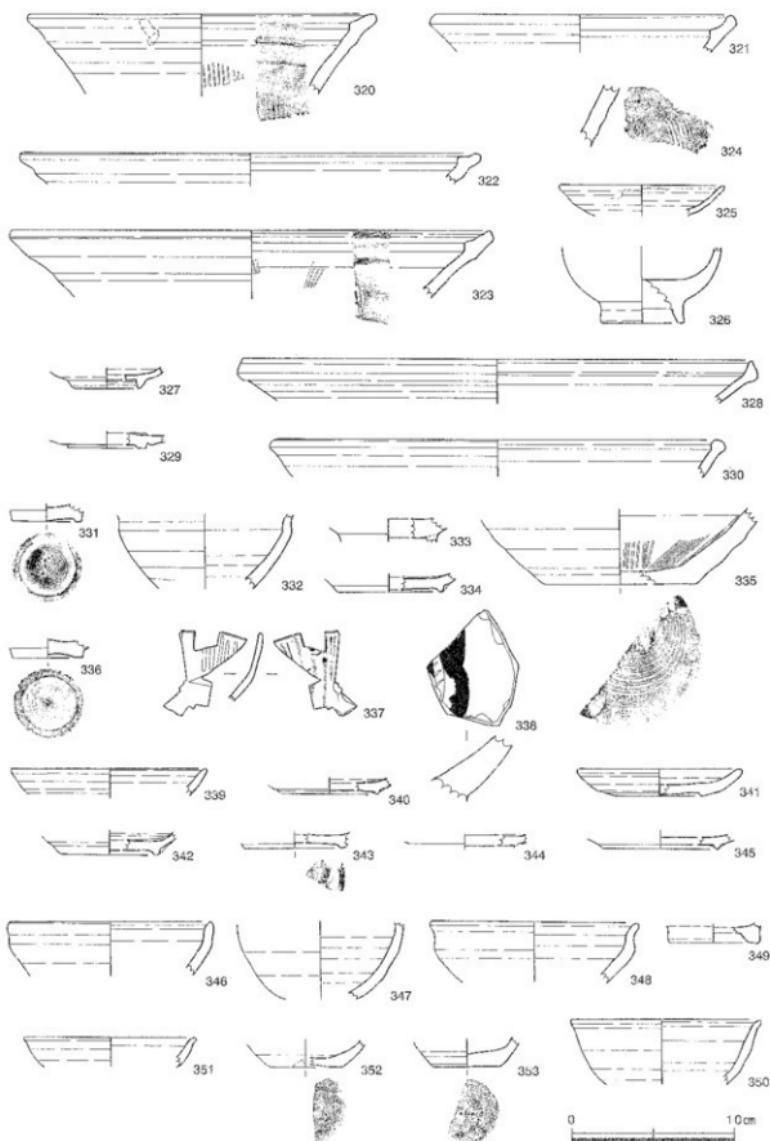


第66図 出土遺物実測図12(土器12)

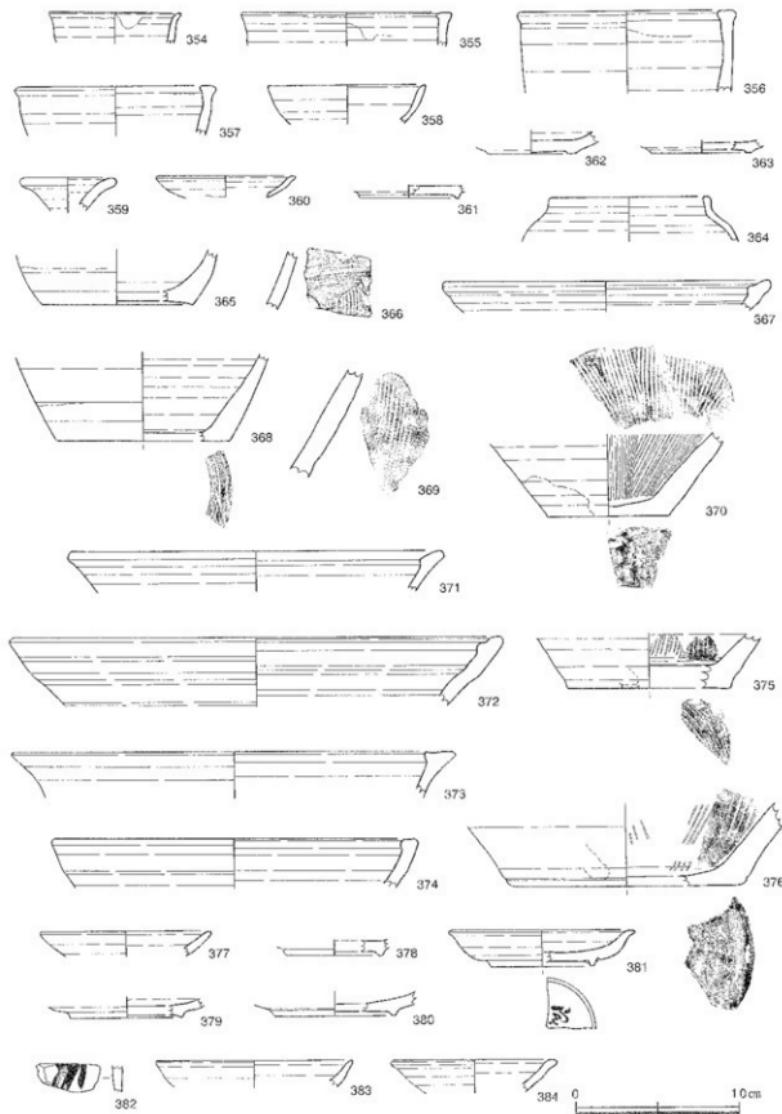
の湿地化をもたらして、戦国時代以来の水田を壊滅させたと考えられる。

10 E区水田面出土の遺物

E区水田面出土の土器・陶磁器（第57・66～70図・図版18・19・25～27）（284）は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。（290）は猿投窯生産の原始灰釉の長頸瓶でO-10号窯式併行にあたる8世紀末の製品である。（291）は猿投窯生産の灰釉陶器の手平瓶でK-90号窯式併行にあたる9世紀後半の製品である。（292）は東遠系の灰釉陶器の皿でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（293）は東遠系の灰釉陶器の長頸瓶でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（294）は東遠系の灰釉陶器の碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（295・296）は東遠系の糸切り碗でO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭の製品である。（297）は東遠系の小碗で12世紀中葉から12世紀後半の製品である。（298）は瀬戸焼の片口鉢で13世紀後半の製品である。（299）は中国の青磁茶碗でA-2類の12世紀から13世紀初頭の製品である。（300）は中国の青磁連弁紋折縁皿でA類の14世紀末から15世紀初頭の製品である。（301）は常滑焼の壺で6a型式の13世紀後半の製品である。（302）は東遠系の小皿で13世紀代の製品である。（303）は中国元代の青磁茶碗で14世紀の製品である。（304）は東南アジア生産の黒褐色釉の花瓶で17世紀の製品である。（305）は同安窯系の中国の青磁茶碗でA類の12世紀後半の製品である。（306）は瀬戸焼の灰釉平碗で後期IV古にあたる15世紀中葉の製品である。（307）は中国元代の青磁盤で14世紀末の製品である。（308）は中国の青磁蓮弁紋茶碗でB2類の14世紀末から15世紀初頭の製品である。（309）は瀬戸焼の綠釉小皿で後期IIIかIV古にあたる15世紀前半の製品である。（310）は瀬戸焼の綠釉小皿で15世紀前半の製品である。（311）は瀬戸焼の灰釉の平碗で後期IIIにあたる15世紀前半の製品である。（312）は中国の染付小皿で15世紀中葉の製品である。（313）は古瀬戸の灰釉の柄付片口で中期IIIかIVにあたる14世紀中葉の製品である。（314）は瀬戸焼の灰釉の下し皿で後期IIにあたる15世紀頃の製品である。（315）は瀬戸焼の鉄釉の壺か瓶で大窓か登窓の製品である。（316）は瀬戸焼の灰釉の平碗で後期IVにあたる15世紀中葉から15世紀後半の製品である。（317）は瀬戸焼の卸目付き大皿で後期IV古にあたる15世紀中葉の製品である。（318）は中国の青磁茶碗で15世紀の製品である。（319）は瀬戸焼の綠釉小皿で後期IV新にあたる15世紀後半の製品である。（320～324）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の錫釉擂鉢で15世紀後半の製品である。（325）は三ツ沢窯生産の志戸呂焼の鉄釉小皿で15世紀後半の製品である。（326）は中国の青磁碗でE類の15世紀後半から16世紀前半の製品である。（327）は中国の白磁小皿で15世紀後半の製品である。（328）は瀬戸焼の錫釉擂鉢で後期IV新にあたる15世紀後半の製品である。（329）は古瀬戸の灰釉の腰折皿で後期IV新にあたる15世紀末の製品である。（330）は瀬戸焼の錫釉擂鉢で後期IV新にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（331）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窓1にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（332）は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で大窓1にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（333）は美濃焼の灰釉の丸碗で大窓1にあたる15世紀末から16世紀初頭の製品である。（334）は美濃焼の端反丸皿で大窓1期か大窓2期にあたる16世紀初頭から16世紀中葉の製品である。（335）は瀬戸焼の錫釉擂鉢で後期IV新にあたる15世紀末の製品である。（336）は古瀬戸の鉄釉天目茶碗の加工円板で後期IV古にあたる15世紀中葉の製品である。（337）は中国の白磁輪花皿で16世紀中葉の製品である。（338）は唐津焼の絵唐津鉢で16世紀後半の製品である。（339）は美濃焼の鉄釉の丸皿で大窓3期にあたる16世紀後半の製品である。（340）は美濃焼の灰釉の丸皿か端反皿で大窓1期か大窓2期にあたる16世紀後半の製品である。（341）は美濃焼の灰釉の丸皿で大窓4期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。（342・343）は美濃焼の灰釉の丸皿か端反皿で大窓1期か大窓2期にあたる16世紀後半の製品である。（344・345）は美濃焼の灰釉の丸皿で大窓2期か大窓3期にあたる16世

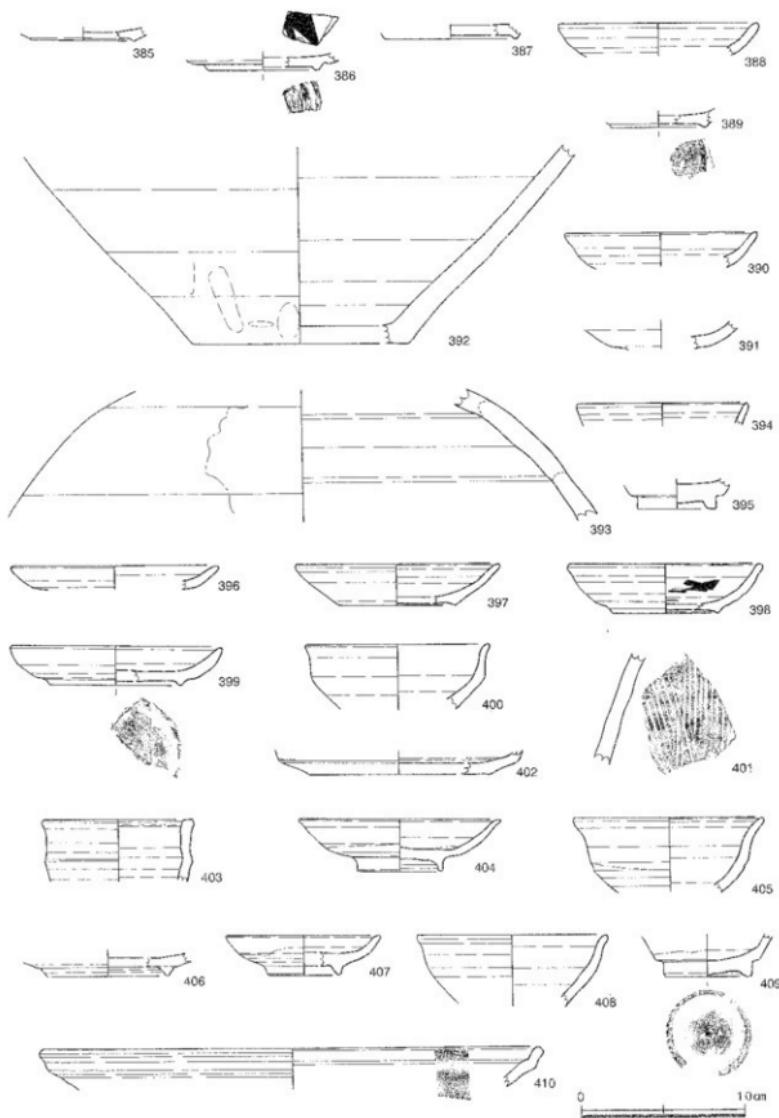


第67圖 出土遺物実測図13(土器13)



第68図 出土遺物実測図14(土器14)

紀中葉から16世紀後半の製品である。(346)は志戸呂焼の鉄釉の天目茶碗で16世紀後半の製品である。(347～350)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉天目茶碗で16世紀後半の製品である。(351)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の灰釉中皿で16世紀後半の製品である。(352)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉茶入で16世紀後半の製品である。(353)は志戸呂焼の鉄釉の小壺か茶入で16世紀後半の製品である。(354)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小杯で16世紀後半の製品である。(355～357)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉香炉で16世紀後半の製品である。(358)は志戸呂焼の鉄釉の小皿で16世紀後半の製品である。(359)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の徳利で16世紀後半の製品である。(360)は志戸呂焼の灰釉の小皿で16世紀後半の製品である。(361)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の灰釉中皿で16世紀後半の製品である。(362)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の口禿皿で16世紀後半の製品である。(363)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉内禿皿で16世紀後半の製品である。(364)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉小壺で16世紀後半の製品である。(365)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉壺で16世紀後半の製品である。(366)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(367)は志戸呂焼の壺鉢で16世紀後半の製品である。(368)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉄釉壺で16世紀後半の製品である。(369)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(370)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(371)は上志戸呂窯生産の志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(372・373)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(374)は志戸呂焼の鉄釉鉢で16世紀後半の製品である。(375)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢で16世紀後半の製品である。(376)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢であり漆で接合されており火を受けている。鉢状に使用していることがわかる。(377～380)は志野焼の丸皿で登窯1期か登窯2期にあたる17世紀前半の製品である。(381)は灰釉の志野丸皿で連房1期にあたる17世紀前半の製品で高台裏に墨書きがある。(382)は志野焼の鉄絵小皿で登窯1期か登窯2期にあたる17世紀前半の製品である。(383～385)は志野焼の丸皿で登窯1期か登窯2期にあたる17世紀前半の製品である。(386)は志野焼の鉄釉の絵小皿で登窯1期か登窯2期にあたる17世紀前半の製品である。(387～390)は志野焼の丸皿で登窯1期か登窯2期の17世紀前半の製品である。(391)は志野焼の丸茶碗で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀末から19世紀初頭の製品である。(392)は常滑焼の壺で16世紀の製品である。(393)は常滑焼の壺で16世紀の製品と思われる。(394)は美濃焼の総織部丸茶碗で登窯6期か登窯7期にあたる18世紀中葉の製品である。(395)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯3期にあたる17世紀後半の製品である。(396)は志野焼の小皿で登窯1期か登窯2期にあたる17世紀前半の製品である。(397)は志野焼の丸皿で登窯1期の17世紀前半の製品である。(398)は志野焼の鉄絵皿で登窯1期の17世紀前半の製品である。(399)は志野焼の丸皿で登窯2期にあたる17世紀前半の遅い段階の製品である。(400)は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で登窯3期にあたる17世紀中葉の製品である。(401)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢で17世紀初頭の製品である。(402)は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。(403)は志戸呂焼の鉄釉の香炉で17世紀前半の製品である。(404)は志戸呂焼の鉄釉の小皿で17世紀中葉の製品である。(405)は美濃焼の緑釉の端反碗で登窯1期の17世紀前半の製品である。(406・407)は美濃焼の灰釉の丸皿で登窯5期か登窯6期にあたる18世紀前半の製品である。(408)は瀬戸焼の鉄釉の端反碗で連房4期か連房5期にあたる17世紀後半から18世紀初頭の製品である。(409)は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で連房4期にあたる17世紀後半の製品である。(410)は瀬戸焼の鉗釉壺鉢で登窯6期にあたる18世紀前葉の製品である。(411)は志戸呂焼の鉄釉の丸碗で17世紀前半の製品である。(412)は瀬戸焼の鉄釉の壺鉢で登窯2期にあたる17世紀第2小期の製品である。(413)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯5期にあたる18世紀初頭の製品である。(414)は志戸呂焼の鉗釉壺鉢で17世紀後半の製品である。(415)は美濃焼の黄瀬戸菊皿で登窯5期にあたる18世紀初頭の製品である。(416)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯1期か登窯2期の17世紀前半の製品である。(417)は肥前焼の梅目文皿で17世紀後半の製品である。(418)はかわらけで17世



第69図 出土遺物実測図15(土器15)

紀の製品と思われる。(419・420)は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。(421)は伊万里焼の染付の壺で18世紀の製品である。(422)は伊万里焼の染付の小壺で18世紀後半の製品である。(423～427)は伊万里焼の染付の茶碗で18世紀の製品である。(428)は瀬戸焼の腰錦茶碗で登窯7期か登窯8期にあたる18世紀後半の製品である。(429・430)は瀬戸焼の腰錦茶碗で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。(431)は瀬戸焼の腰錦茶碗で登窯9期か登窯10期にあたる18世紀末から19世紀初頭の製品である。(432)は志戸呂焼の鉄釉の徳利で18世紀後半から19世紀前半の製品である。(433)は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀初頭の製品である。(434)は呂宋釉の火入れで19世紀初頭の製品である。(435)は伊万里焼の染付の壺で19世紀前半の製品である。(436)は伊万里焼の染付の丸茶碗で19世紀前半の製品である。(437)は伊万里焼の染付の茶碗(小碗)で19世紀前半の製品である。(438)は瀬戸焼の錦釉擂鉢で19世紀前半の製品である。(439)は瀬戸焼の錦釉擂鉢で登窯8期にあたる18世紀後半の製品である。(440)は瀬戸焼の鉄釉の片口鉢で登窯6期にあたる18世紀前半の遅い段階の製品である。(441)は瀬戸焼の鉄釉の鉢で登窯10期か登窯11期にあたる19世紀前半の製品である。(442)は生産地不明の色絵の茶碗で19世紀前半の製品である。(443・444)は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀前半の製品である。(445)は生産地不明の鉄絵の土瓶で19世紀前半の製品である。(446)は生産地不明の仏龕器で登窯8期か登窯9期にあたる18世紀後半から19世紀前半の製品である。(447)は生産地不明の染付の小壺で19世紀前半の製品である。(448)は生産地不明の染付の茶碗で19世紀前半の製品である。(449)は生産地不明の白磁の茶碗で19世紀前半の製品である。(450)は伊万里焼の染付の茶碗で19世紀後半の製品である。(451)は生産地不明の赤絵の仏龕器で19世紀後半の製品である。

11 その他の遺物

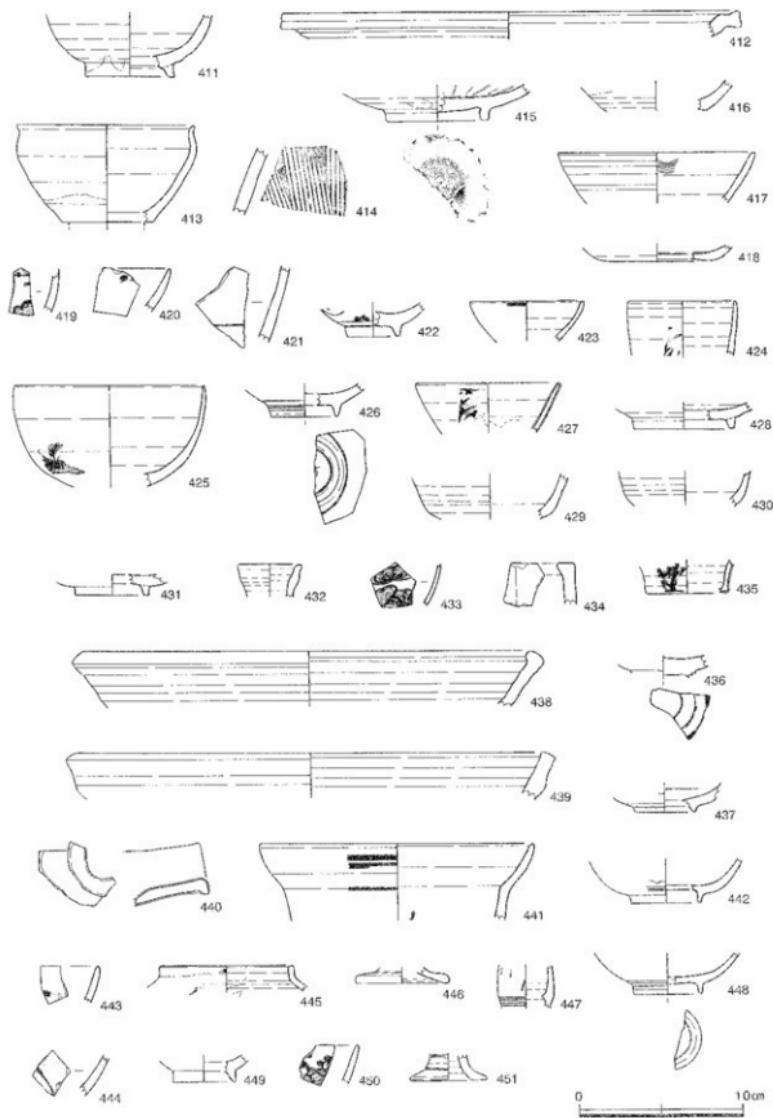
(1) 確認調査出土の遺物 (第53・54・71図、図版24・28)

(452)は清瀬甕で10世紀から11世紀の製品と思われる。出土地点は不明である。(453)は中国の白磁の小皿で15世紀後半の製品である。出土地点は不明である。(454)は美濃焼の志野菊皿で登窯1期にあたる16世紀末から17世紀初頭の製品である。出土地点は不明である。(455)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で大窯4期前半にあたる16世紀末の製品であり、加工円板である。出土地点は不明である。(456)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で大窯4期後半にあたる16世紀末の製品である。出土地点は不明である。(457)は瀬戸焼の鉄釉の天目茶碗で登窯2期か登窯3期にあたる17世紀中葉の製品である。出土地点は不明である。(458)は美濃焼の鉄釉の天目茶碗で登窯5期にあたる18世紀初頭の製品である。出土地点は不明である。(459)は瀬戸焼の長石釉の丸碗で18世紀後半から19世紀前半の製品である。出土地点は不明である。(460)は伊万里焼の染付の皿で18世紀の製品である。出土地点は不明である。(461)はA区より出土した尾張産の片口鉢で13世紀前半の製品である。(462)はA区3層より出土した東遠系の小皿で13世紀前半の製品である。(463)はC区より出土した伊万里焼と思われる長石釉染付呉須で19世紀前半の製品である。(464)はC区より出土した產地不明の染付茶碗で19世紀前半の製品である。(465)はC区より出土した龍泉窯系青磁蓮弁紋碗で明時代15世紀の製品である。(467)は出土地点不明の土師器坏で8世紀から9世紀の製品である。

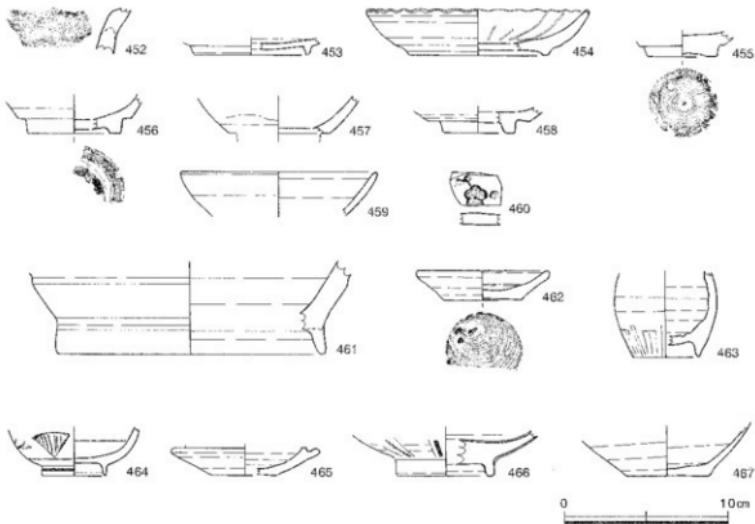
(2) 木製品

出土した木製品は52点である。木製品の半数ほどは日常生活で使用するような製品である。1点(52)以外は上層遺構である水田面からの出土であり、16世紀末以降のものである。

付札状木製品 細長い板目の板の一端を両側縁から削り込んで、頭部を作り出しているものである。(1)、



第70図 出土遺物実測図16(土器16)



第71図 出土遺物実測図17(土器17)

(3)は板状の形状であるが、(1)が板の幅そのままの頭部を有するのに対し(3)は幅を狭め尖頭状としている。(2)は頭部方向に細くなり尖頭状となり、先端は丸く籠のような形状をしている。いずれにも墨書きはみとめられなかった。

栓 (4)は円錐台状を呈する。棒状の素材の側面を削りこんで作られている。栓の下部に用いられた栓であろうか。

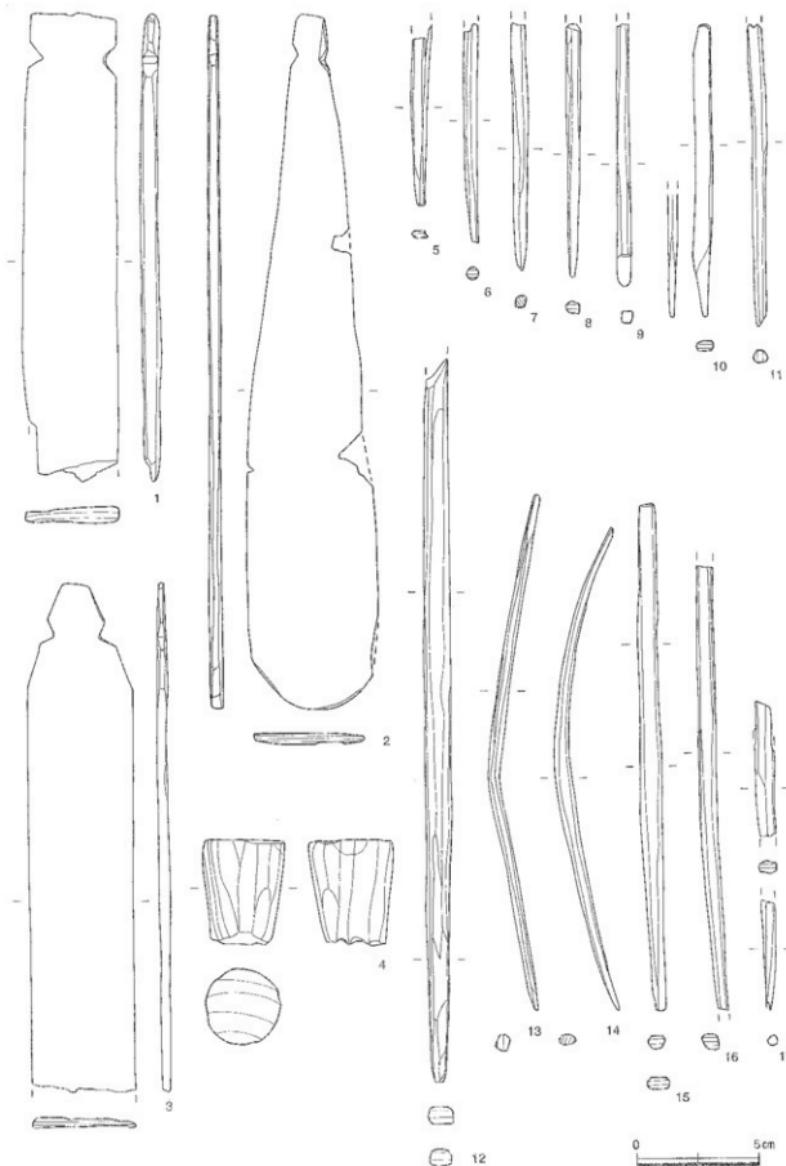
箸 (5~17)は棒状の木製品であり、先端をより細く削るなどした形状から箸であると判断した。(13・14)などに細いものと、(12・15・16)のように太く長いものが。断面形状は、細いものが正方形に、太いものが長方形に整えられる傾向がある。太く長いものは菜箸のようなものがイメージされる。

漆椀 (18~23)は漆椀である。漆の塗り分けは、内面に朱・外面に黒、内外面ともに黒、内外面ともに朱の三種があるが、内面に朱・外面に黒の場合が多い。(18)は内面にわずかに黒漆が残っている。(19~22)は内面に朱漆が残っており、外面に黒漆が残っている。また(19~21)は外面に朱漆による文様が一部残存している。(23)は内外面ともに朱漆が残っている。皿である可能性がある。

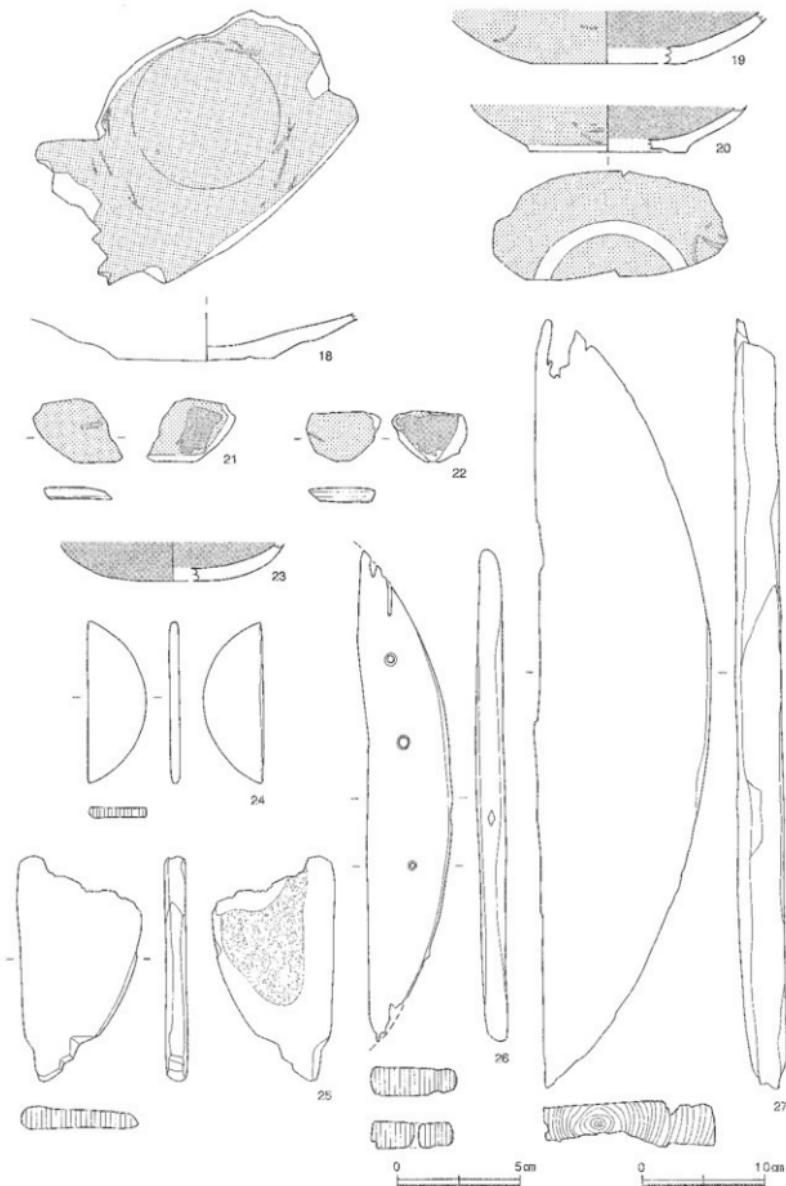
曲物 (24~26)は曲物の底板である。(24)は直径が7cm程度の小型のもので、柄約の部材である可能性がある。(25・26)は1cm程度の厚さを持つ頑丈なもので直径も30cm程度になると考えられる。(25)は末端が削られたうえ、広くこげている。底板から転用されたうえ、最後は燃料として用いられたのだろうか。(26)は側面に側板を固定する木釘の痕跡と思われる穴が残っている。また、別のものへ転用された痕跡であろうか衣表を貫通する2~3cmの穴が3ヶ所あけられている。

桶 (27)は桶の底板である。板に加工された心持ち材を用いている。直径70cm程度になる大型のもので、組み合わせられた複数枚の、もっとも外側にあたる一枚である。

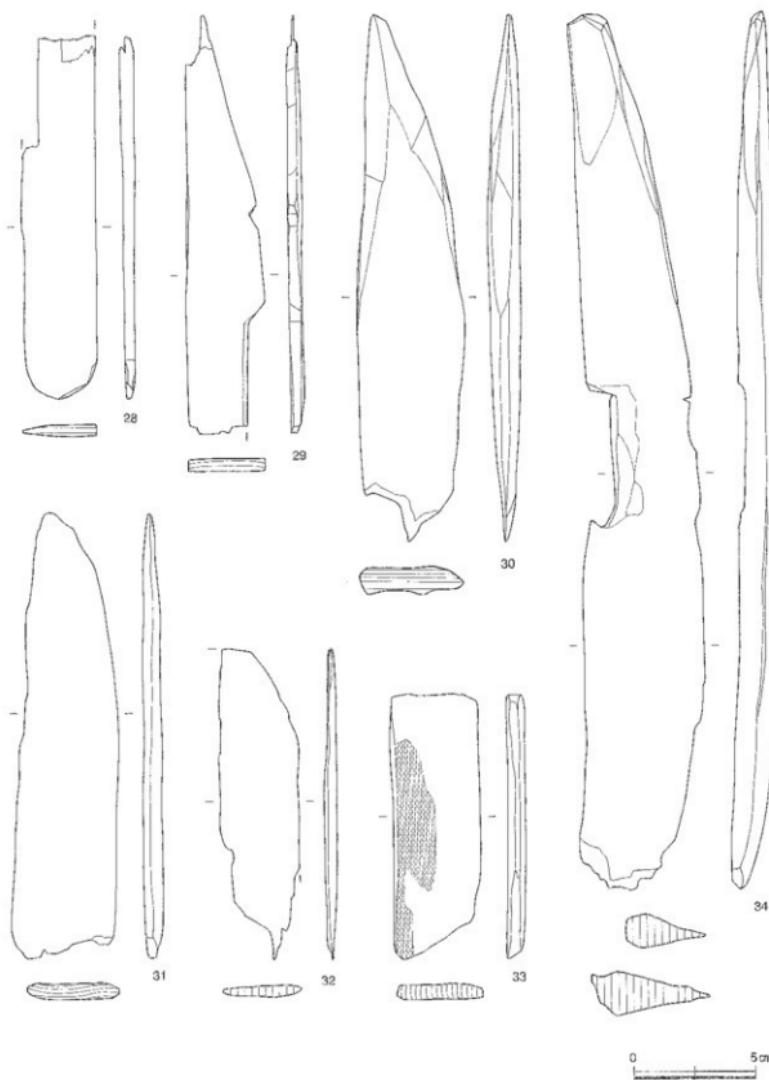
板材 用途が定かでないものには板状・棒状のものがある。(28~35・44~51)が板材、(36~43)は棒



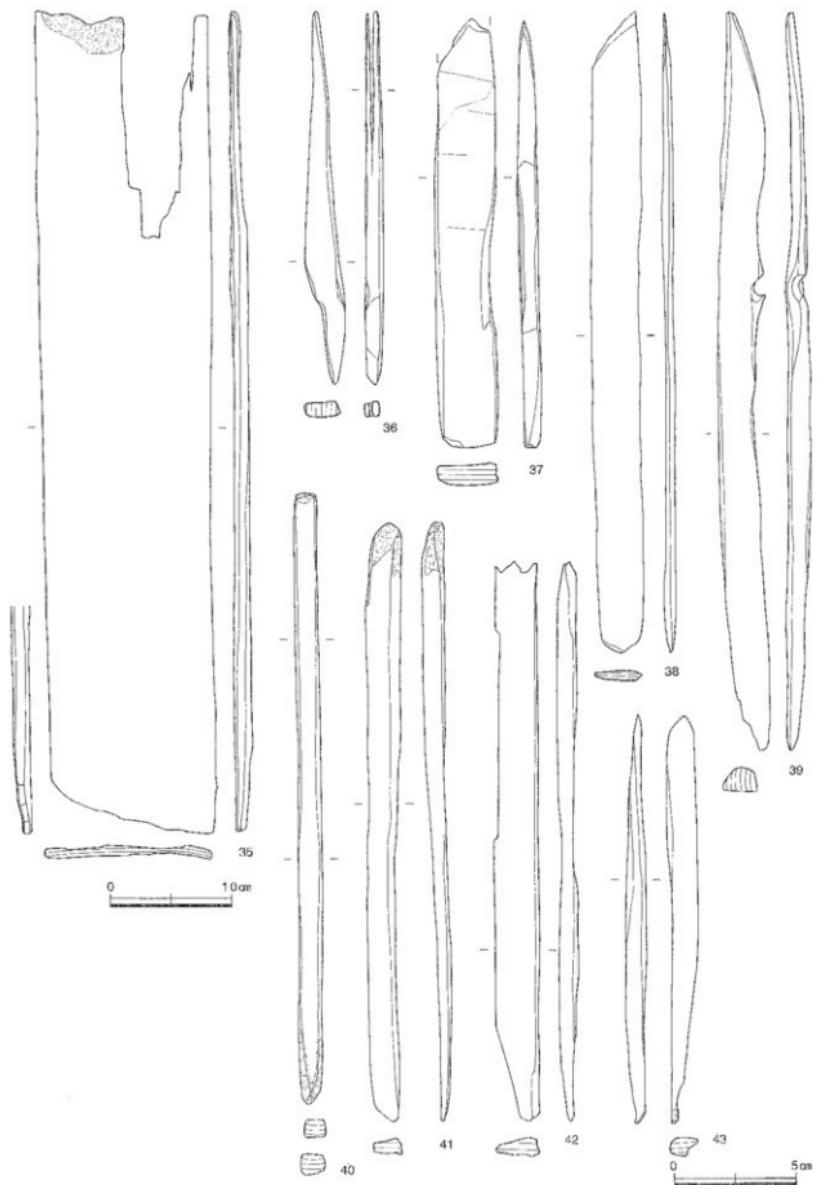
第72図 出土遺物実測図18(木製品1)



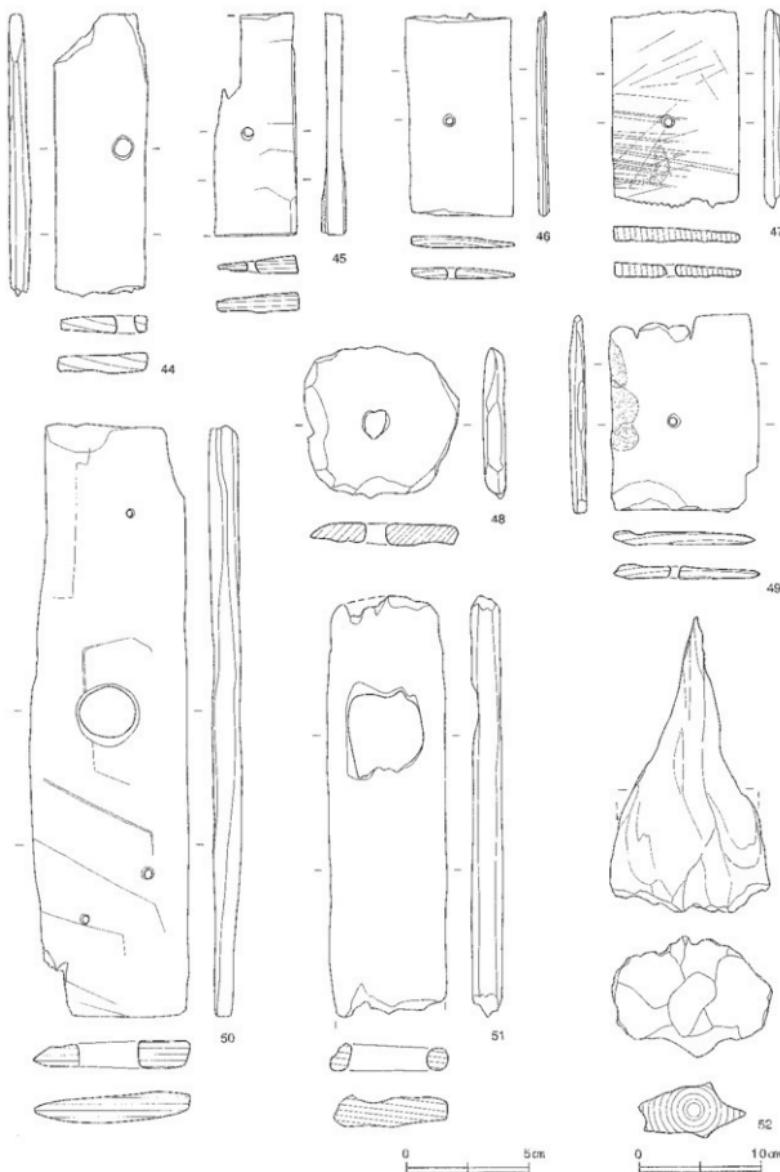
第73圖 出土遺物実測図19(木製品2)



第74図 出土遺物実測図20(木製品3)



第75図 出土遺物実測図21(木製品4)



第76図 出土遺物実測図22(木製品5)

状板材である。板材の中には大きなものから割り取る、あるいは削り取られたもの（28～33）、何らかの部材の一部であるもの（34・44～51）がある。前者は建築材などが、畔の土留として手頃な大きさに再加工されて持ちこまれたものと思われる。後者は、その形自体が何らかの目的をもつものだろう。（34）は側縁にいくにしたがって薄くなる三日月状の板であるが、中央付近に長方形状の抉りがある。元来、中央に長方形の穴があけられた長梢円の部材であったものが、木目に沿って欠損していると考えられる。

（44～47・49）は長方形～正方形の板材のほぼ中央に直径4～9cmの穴を1ヶ所あけたものである。（48）は円形に削り出された板材の中央に直径1.0～1.2cm前後の穴をあけるものである。これらの用途も判然としないが、木釘等を介して他の部材と連結していたのであろうか。（50・51）はやや大きく厚い長方形の板材に円形・矩形の穴をあけるものである。（50）には別に小孔3ヶ所あけられている。

棒状板材には、当初から棒状を指向したであろうもの（40）、籠状のもの（38）、板材から割り取られることによって棒状になったであろうもの（36・37・39・41～43）がある。

柱根（52）は唯一下層遺構で出土されたもので、SP251から出土した柱根である。底部から8センチほどがしっかりと粘土の中に埋まっており、痛みが少なくどっしりした感がある。

（3）金属製品

錢貨を除いたその他の金属製品は56点出土した。大半がE区からの出土であることは、E区の東側に営まれている戦国期以降の集落（静岡市調査区）から混入したことを示しているのだろうか。

鐵（1）は定角形の鉄鎌である。茎は半ばから先端にかけて欠損している。

釘（2～8）は釘で、そのうち（2・4・6～8）は角釘である。（3）は基部両端が脚部となる合釘である。（5）は形状などから最近のものと思われる。

鉄砲玉（10～33）は鉄砲玉である。直径は1.0～1.3cmと若干の大小があるが、1.2cm程度のものが比較的多い。重量は7～9g台（概ね2匁～2匁半）が主体となる。

火箸（34）は長さが概ね20cmの金属棒であるため、火箸に類するものと判断した。

小柄・刀子（35～37）は小柄あるいは刀子である。（35・36）は柄が残っているが先端部は欠損している。一方（37）は刃部のみの破片である。

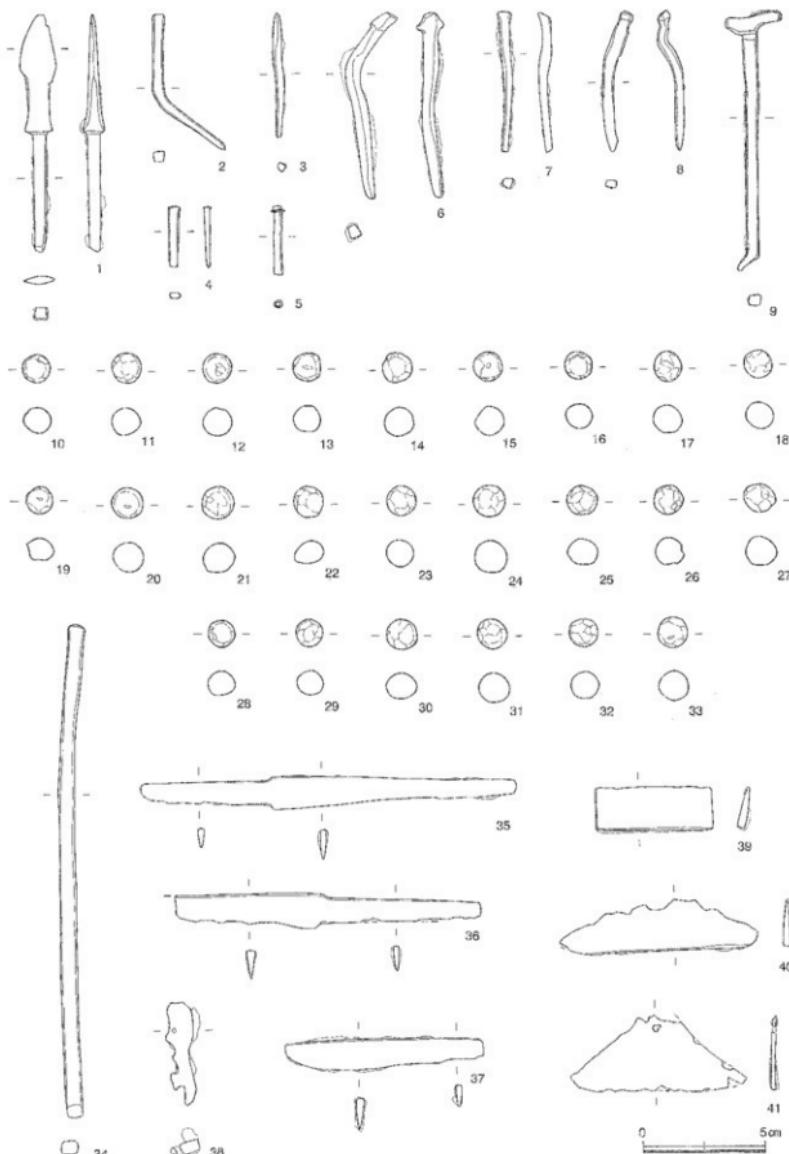
火打ち金（39～41）は火打ち金である。短冊形のものと山形のものがある。（39）は短冊形をしている。（40）は山形をしており、頂上部に穴が開いている。（41）も山形であると思われる。木製の持ち手に挟み込んで使われる例がよく知られているが、（41）などは紙などを穴に通して携帯していたのであろうか。

キセル（42～46）はキセルの雁首、（47～53）は吸口である。（42）は火皿窓があり、火皿補強帶が付く。脛返しの湾曲が大きく、肩付のところで折れていると思われる。（46）は火皿補強帶がつぶく、肩付がはっきりとあるようには見えない。（42）よりやや後出するものだろう。（43～45）は（46）よりさらに後出するものである。（45）は金象嵌が施されている。同様に象嵌が施される吸口の（47）と対になると思われる。他の吸口はいずれも肩付がない。したがって、（42・46）あたりと対になるものはないことになる。

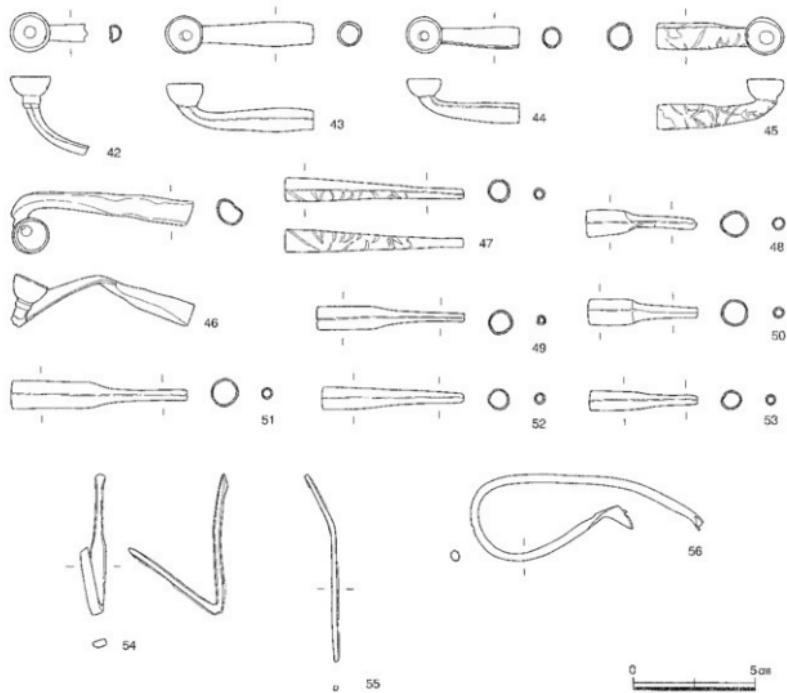
水田からキセルが出土する例は、静清バイパス関連の調査等でも恒常的にみられる。農村での喫煙は贅沢であるとして当時の法度によって規制されていることからも、農村部への喫煙風習はかなり浸透していたものと考えることができる。

こうがい（54・55）は銅製の細い棒状のものであり、こうがいあるいはかんざしの一部と考えられる。

不明鉄製品（9・38・56）は用途不明品である。（9）は基部断面が方形をしており、基部下端は尖っているが曲がっている。基部上端には半分に欠けたリング状の部品が付いている。（56）は土瓶などの弦と思われるが定かでない。



第77図 出土遺物実測図23(金属製品1)



第78図 出土遺物実測図24(金属製品2)

(4) 銭貨

出土した銭貨は26点であった。内訳は、唐錢1点・北宋錢12点・南宋錢1点・明錢1点・無文錢1点・寛永通寶10点である。出土状況から、いずれも遺失物や流れ込んできたものとみられる。

開元通寶（1）は鋤上がりが悪く字の彫りが浅い箇所があり、直徑も小さく薄肉・背の輪幅も不均一のため、模鋸錢と思われる。

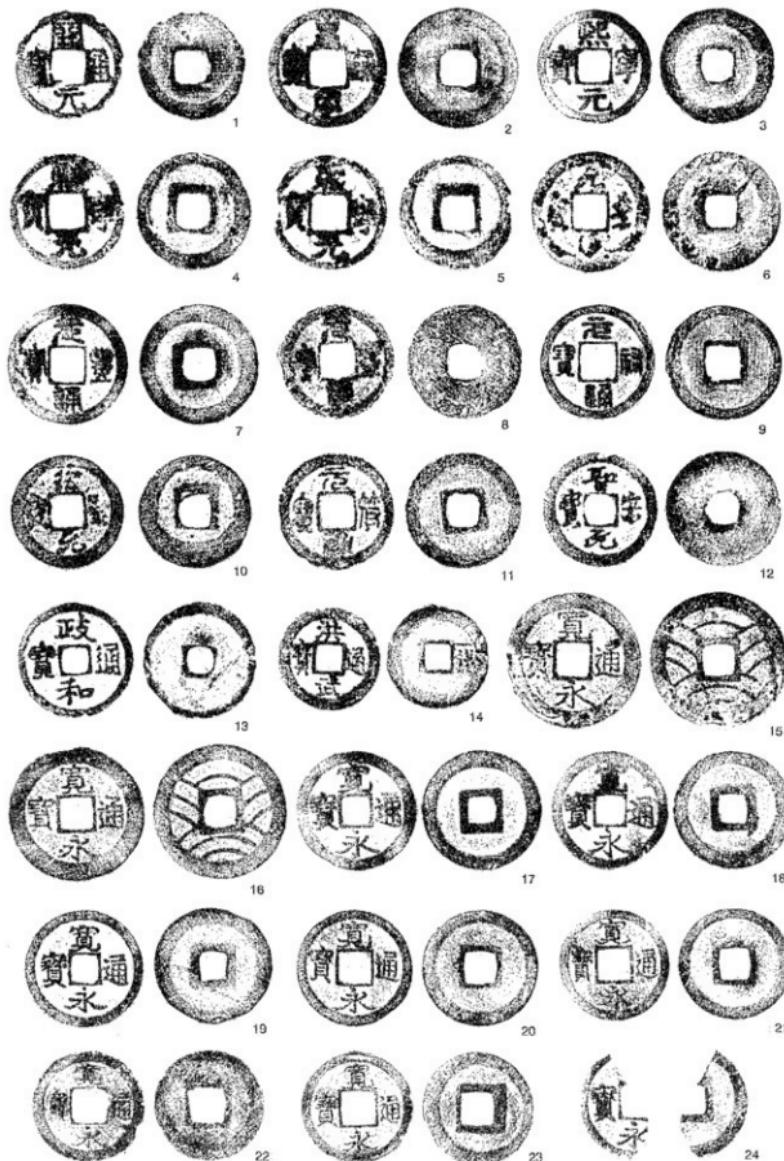
肅寧元寶（3）は穿の角2箇所に鋤バリが残り、面の郭の一部が削れている。直徑がやや小さめのため、模鋸錢の可能性がある。

元豐通寶（8）は、畦上から出土した。背の輪と郭が不明瞭で、薄肉である。面の郭は明瞭だが穿が丸くなってしまっており、模鋸錢とみられる。

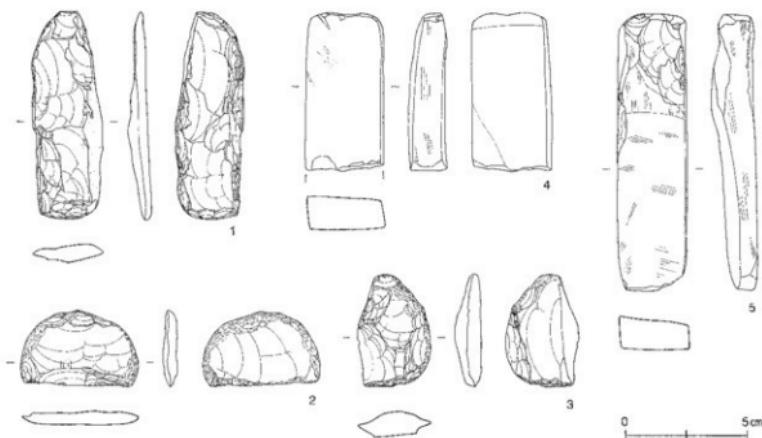
紹聖元寶（10）は、背の輪幅が不均一である。面の郭は比較的明瞭だが穿は丸みを帯びて鋤バリが残っている。

聖宋元寶（12）は、水田検出面から出土した。背の輪と郭が不鮮明な上、輪幅が不均一である。面の郭が削れ穿が丸くなってしまっており、模鋸錢と思われる。

洪武通寶（14）は、背に「一錢」の文字が入っている。直徑が21.3mmと小さいが、字も郭も鮮明で肉厚なため、模鋸錢ではなく小型の本錢であると思われる。



第79回 銭貨拓影



第80図 出土遺物実測図25(石器・石製品)

(25) は、風化して残存状態が悪く図には掲載していないが、文字の配列から咸淳元寶（南宋・1265年初鑄）であると思われる。

無文銭は、水田面から出土した。大変薄く、直径19.0mmの円形の中心に一辺8mmの方孔がある。無文銭は、通貨の流通量不足を補うために、佐渡・石見銀山、堺・森大門・原川・高根城などで鋳造されていたことがわかっている。渡米銭から何度も鉛写を繰り返して鋳造されるうちに、小型・薄手化して錢文等が消滅してしまった銭である。東北地方などでは出土例も多く通用銭として民衆に広く認知されていたようであるが、県内の出土例はほとんどなく流通量はあまり多くはなかったとみられている。どこで鋳造されたものかは不明だが、16世紀後半のものと考えられる。

寛永通寶は、古寛永（17・18・19・24）・新寛永（20・21・22・23）・四文銭（15・16）が出土した。いずれも銅銭である。

古寛永（18）は、畦上から出土した。古寛永（17・19）と新寛永（21）は検出面から出土している。そのうち、（17）は背面に平研ぎの痕が見られる。新寛永（23）の背面にも平研ぎの痕がある。

出土した26点のうち、12点（1・3・4・5・7・10・8・13・18・20・21・22）は被熱している。被熱の具合から、いずれも、火災のような高温の火ではなく比較的低温の火を受けていると見られる。静岡市による西側隣接区の調査では、集落跡とともに中近世の火葬墓および火葬の跡が検出されているため、被熱した銭貨は、あるいは住居域または火葬場所等から流れ込んだものであるとも考えられる。

⑤ 石器・石製品

石製品は5点出土している。縄文時代のものと思われる打製石器3点と、江戸時代の砥石2点である。縄文時代の打製石器については、同時代の遺構や土器が出土していないので、その出自は明確でない。ただし、小瀬戸谷の入り口にある養源山遺跡や第3章で報告する栗ヶ沢遺跡の事例からも明らかなように、近接する丘陵部には縄文時代の遺跡が点々と分布しているので、これらの生活の影響が低湿地まで及んでいたことは想像に難くない。

打製石斧 （1）はD区G 2グリッドの掘削土中から出土した。表面の一側縁に原礫面を残すことから

も、手頃な円礫から割り取った剥片が素材になっていたことが分かる。調整は表裏に及んでいるが、全体的に側縁から大きく調整した後に刃部と縁辺を細かく作り出している。

スクレイパー (2) はE区E 2グリッドの畦上から出土した。折れた打製石斧の先端部を転用したものと思われ、折れ面の一部にも細かな調整を施している。(3) はE区E 1グリッドの掘削土中から出土した。これも(2)と同様に打製石斧の折れた先端部を再加工したものと思われる。周囲を打ち欠いて刃部を作る。

砥石 (4) はE区G 3グリッドの検出面から出土した。短冊形の持ち砥石で、下部は欠損している。表裏面・側面共に使用されている。裏面は、研ぎ減りにより砥面がやや波打っている。目の細かい仕上げ用の砥石である。(5) はC区J 4グリッドの検出面から出土した。短冊形の持ち砥石である。表裏面・側面共に使用されている。表面及び裏面は研ぎ減りにより砥面が波打っている。(4)と同じく、仕上げ用として用いられたものであろう。いずれも、江戸時代の物であると思われる。

第5表 土器・陶器器觀察表

器物 番号	器種・ 器形	形式	产地・ 材質	時代	区	グリッド	埋位遺構	H幅 (cm)	縦幅・ 横幅(度)	器高 (cm)	胎土・地成・調製・色調	保存率
1	上部器 腹	皿型	遼江系	8~9C	E	F2	SII1 領土中 抜地層	(18.8)			胎土 1mmの細砂含む 地成 良 調製 調料の為不明 色調 10YR7/4灰青褐色	□部分1/15強 体部一部
2	上部器 内引き 甕?	蓋窓	遼江系	8~9C	E	G2	SII1 SP6 灰色粘土層				胎土 1mm以下の細砂、3mmの大粒含む 地成 良 調製 壁紙の為不明、頭部縫(26.8cm) 色調 10YR7/3に近い黄褐色	体部一部
3	上部器 收	蓋窓			E	G2	SII1 SP194 灰色粘土層				胎土 灰石、1mmの細砂含む 地成 良好 調製 壁紙の為不明、外側ハケ目 色調 10YR8/3灰青褐色	部分1/12
4	頂部器 腹		遼西	8~9C	E	F2 G2	SII1 SP9 領土中 砂岩中 層化裡 深灰色粘土層				胎土 1mm以下の白色粒子含む、風漬有り 地成 良好 調製 外面へラ開り、内面に墨付着、柱山有 り、剥離と柱下部結合点有り 色調 5Y6/1灰色 2.5Y6/1灰褐色	部分1/7強 体下部1/10強
5	上部器 腹				E	G2	SII1 SP192 灰色粘土層				胎土 灰石、1mmの細砂含む 地成 良好 調製 壁紙の為不明 色調 10YR7/4灰に近い黄褐色	体部一部
6	上部器 环				E	G2	SII1 領土中	(8.2)			胎土 2mmの大粒含む、3mmの大粒含む 地成 良好 調製 壁紙の為不明 色調 10YR8/3に近い黄褐色	体部一部 高部1/14
7	上部器 腹		遼江系	8~9C	E	G2	SII1附近 SP201 灰色粘土層			(4.6)	胎土 2mmの大粒含む 地成 良好 調製 壁紙の為不明、底部外側ハケ目有り、 内壁墨付着有り 色調 10YR7/2灰に近い黄褐色	高部1/4弱
8	灰釉陶器 長瓶	K-14 併行	華紋	9C前	E	G2	SH1 領土中	(6.8)			胎土 1mm以下の白色粒子含む 地成 良好 調製 全体に薄灰施付着 色調 灰褐色 5Y7/1灰白色 5Y5/2灰オリーブ色	口端部1/15
9	灰釉陶器 長瓶	K-14 併行	旋紋	9C前	E	G2	SH1 領土中 灰色粘土層	(10.0)			胎土 灰石を含む、風漬有り 地成 良好 調製 全体に薄灰施付着 色調 灰褐色 2.5Y6/1灰白色 5Y5/2灰オリーブ色	口端部1/11
10	灰釉陶器 瓶	K-90 併行	輪鉢	9C後	E	F2 G2	SH1 SP15 SP6 領土中 焼成層 焼成窓	(13.7)	(6.5)	3.9	胎土 1mmの大粒含む 地成 良好 調製 透部へラ開り有りナデ、内面焼成層 色調 灰褐色 2.5Y6/1灰白色 灰5Y5/2灰オリーブ色	口端部一部 体部高部1/5
11	灰釉陶器 瓶	K-60 併行	束造	9C後	E	G2	SII1 砂岩中			(7.6)	胎土 1mm以下の灰石含む 地成 良好 調製 透部へラ開りカナデ、内面墨付着 色調 灰褐色 7.5Y7/1灰白色 5Y5/2灰オリーブ色	体部一部 高台部1/5
12	灰釉陶器 瓶	O-53 併行	胎室	10C初	E	F1 G2	SII1 土手+收繩1 領土中 焼成窓			4.6	胎土 4mmの大粒含む 地成 不良 調製 底部の為不明、底部少切り後ナデ? 壁付け高部、内面成ね捲き版? 色調 5Y6/2灰オリーブ色	体部一部 高台部2/3
13	灰釉陶器 瓶	O-53 併行	旋振	10C初	E	E2 G2	SH1 手執收繩1 領土中 燒成窓 灰褐色粘土層	(13.5)	6.8	4.9	胎土 1mmの大粒含む 地成 良好 調製 透部少切りへラ開り後ナデ、外側下部 へラ開り 色調 7.5Y7/1灰白色 5Y5/2灰オリーブ色	口端部1/5 体部1/2 高台部2形
14	灰釉陶器 広口瓶	K-14 併行		9C前	E	E2 F3 G2 D3	SII1/SP11 SP15/SP20 SP26 灰色粘土層 要地層 抽 出面 壁上層 燒成窓 領土中				胎土 灰石、2mmの大粒含む 地成 良好 調製 外側へラ開りか?、内外面釉がかかる 色調 灰褐色 7.5Y7/1灰白色 5Y5/2灰オリーブ色	胴部一部破損1/6
15	灰釉陶器 長瓶	O-53 併行	胎室	10C初	E	G2	SII1 領土中 灰色粘土層 焼成窓4			(12.4)	胎土 暗緑多少有り 地成 良好 調製 外面と底部へラ開り、裏面にへラ記号 底有り付け高部 色調 5Y7/1灰白色	体下部~高台部1/6

標号番号	図版・密部	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	葉位達綱	口径 (cm)	直径・高台径 (cm)	基高 (cm)	出土・焼成・調査・色調	残存率
16 糸切り縫 併行	K-99 併行	東造系	9C後	E	G2	SH1 椎山面		(7.0)			粘土 長石、1mm以下の細砂含む 焼成 不良 調査 内外面が剥離の為不明 色調 2.5YR7/1灰白色	体部わずかに残存 底部1/8
17 糸切り縫 併行	O-53 併行	東造系	10C初	E	G2	SH1 陶柄土中		(5.0)			粘土 長石、3mm以上の粗粒含む 焼成 不良 調査 内外面剥離の為不明 色調 2.5Y7/1灰白色	体部一部 底部1/5
18 山形柄 III-1	灰運量	13C前	E	G2 F2	SP189 粘地層 灰色粘土層		(14.0)				粘土 長石、2mm以上の粗砂含む、黒斑有り 焼成 良好 調査 内外面ナガ 色調 10%V7/1灰白色	口縁部1/11 体部一部
19 小窓 I-2		笠井・島田	12C前	E	G2 F2	SH1 泥塑土中		(4.1)			粘土 6mm以下の白色粒子含む 焼成 良好 調査 粘り付け痕台、スノコ板 色調 10%T7/1灰白色	体部下部1/8 高台部完形
20 七輪器 甕		遠江系	8~9C	D	G2	SI12 底層上・中 (窓地層)					粘土 6mmの大粒、白色微細粒子含む 焼成 良好 調査 壁部の為不明 色調 10YR7/4がい黄褐色	口縁部1/6
21 土師器 甕				E	G2	SI42 SP30 風化液混 灰白色土層		(17.4)			粘土 3mmの大粒の混合 焼成 良好 調査 邪氣の為不明 色調 10YR7/3後退褐色	口縁部1/10強
22 七輪器 甕				E	G2	SI42 SP33 灰色粘土層					粘土 長石、1mm以下の粗砂含む 焼成 良好 調査 内外面ナガ 色調 10YR7/3後退褐色	頭部～体部一部
23 灰釉陶器 甕	K-99 併行	駿家	9C後	E	G2	SH2 椎山面 灰色粘土層		(15.0)			粘土 3mmの大粒、1mmの大粒粗砂含む 焼成 良好 調査 内外面がかかる(つけ付けているが 発色していない) 色調 斧地5Y7/1灰白色 納5Y7/2灰白色	口縫部～体部1/15
24 灰釉陶器 甕	K-99 併行	駿府	9C後	E	E2 F2 G2	SI42 SP236 SP251 粘地層 底層・中 窓地層 灰色粘土層 (底層) 透視遮蔽		(14.2)			粘土 粘土、1mm以下の白色粒子含む、表面有り 焼成 良好 調査 内外面底層へ剥離(發色していない?) 色調 10%T7/1灰白色 納5Y7/1灰褐色	口縫部1/8
25 糸切り縫 併行	O-53 併行	東造系	10C初	D E	G2	SI12 底層上・中 窓地層 灰色粘土層 透視遮蔽5		(12.2)			粘土 1mmの大粒の混合 焼成 良好 調査 内面灰褐色付着、外腹灰褐色ハケ塗り 色調 内面5Y6/1灰色 外面SV8/1灰白色	口縫部1/5 体部1/5
26 糸切り縫 O-53	併行	東造系	10C初	E	G2	SP281 窓地層 灰色粘土層		(5.4)			粘土 長石、1mm以下の粗砂含む 焼成 良好 調査 邪氣の為不明 色調 作部YS/1灰白色 底部5Y6/1灰褐色	体部1/4 窓部1/3
27 糸切り縫 O-53 併行		東造系	10C初	E	G2	SI12 椎山面		(4.8)			粘土 漆石わずかに含む 焼成 良好 調査 成形部に切り崩 色調 5Y7/1灰白色	体部～一部 底部7/8
28 灰釉陶器 甕	O-53 併行?	灰運量	10C初	D	G2	SI12 窓地層 灰色粘土層					粘土 長石、1mm以下の長石含む 焼成 良好 調査 向合部欠損、内面並ね施き刷? 色調 2.5Y7/1灰白色 内面SP24/0暗青灰色	体部一部 底部1/5
29 糸切り縫 O-53 併行		東造系	10C初	E	G2	SI12 SP238 灰色粘土層		(5.2)			粘土 長石、4mmの大粒の混合 焼成 良好 調査 邪氣の為不明 色調 2.5Y7/1灰白色	体部1/8 底部1/8
30 糸切り縫 O-53 併行		東造系	10C初	E	G2	SI12 SP232 粘地層		(8.0)			粘土 1mm以下の粗砂含む、底面有り 焼成 不良 調査 邪氣の為不明 色調 5Y5/1灰白色	底部1/5
31 小窓 I-2		東造系	12C前	E	G2 F2	SI12 窓地層 椎山面		(4.5)			粘土 1mm以下の白色粒子含む、黒斑少量化 焼成 良好 調査 粘り付け高台 色調 NT/1灰白色 10YR2/1褐色	体部下部1/4 高台部1/2
32 伊万里 駿村 窓地縫 (窓縫)		伊万里	18C	E	G2	SI12 窓地層 底層・中 窓地層 透視遮蔽2		(6.0)			粘土 窓地 焼成 良好 調査 外部窓地層剥離し、外面に染付、内面 白色灰褐色付着 色調 5CV7/1灰白色 染付16BG4/1暗青灰色	体部1/10 底部1/13

図面 番号	器種・ 品形	型式	底地・ 材質	時代	K	グリッド	断面追跡	口幅 (cm)	底厚・ 高台性 (cm)	基高 (cm)	粘土・洗浄・溝草・色調	残 存 率
33	發生 上槽?			先史?	E	F2	SH3村近SP180 灰色粘土層				粘土 1~2mmの大粗砂、3mmの大粒合む 燒成 良好 調査 摩耗の為不明 色調 内面SYR6/8褐色 外面2.SY4/6オリーブ褐色	体部一部
34	清都燒			10~11C	E	F2	SH3村近SP177 灰色粘土層				粘土 灰石、石英、1mmの粗砂含む 燒成 良好 調査 外面洗浄を横筋に付いている 色調 内面SYR6/8褐色 外面2.SYR5/5褐色	体部一部
35	灰釉陶器 碗	O-53 各行	東達系	10C後	E	G2	SH3 SP41 横出面 整地層		(7.6)		粘土 長石含む、黒灰有り 燒成 良好 調査 底部表面切欠後一部ナデ 色調 4.SY7/1灰白色	体下部わずかに残 高台部1/3
36	山茶碗	E	東達系	12C後	E	F2	SH45 SP39 横出面			(7.0)	粘土 灰石、2.5mmの大粗砂含む 燒成 良好 調査 志那浜切り後一部ナデ、高台部欠損、 貼り付け高台 色調 内面NG/灰褐色	体一部 高台部2/3
37	土師器 瓶	K-14 ~ K-90 各行		9C前 ~ 9C後	E	F2	SI44 SP59 整地層			(6.0)	粘土 1mm以下の白色粒子をわずかに含む 燒成 不良 調査 断続的凹凸有り、粘り付け跡台 色調 内外面SYR6/8灰白色、裏外面NG/灰褐色	体下部1/8 高台部1/4
38	糸切り瓶	O-53 各行	東達系	10C前	E	F2	SI44 横削土中 (整地層)			(6.0)	粘土 1mm以下の白色、白色粒子含む 燒成 NG 調査 断続的凹凸有り 色調 SYR8/1灰白色	体下部1/8 高台部1/3
39	土師器 瓶	K-14 ~ K-90 各行		9C前 ~ 9C後	E	F2	SH4 細削土中 灰色粘土層			(6.0)	粘土 灰石、1mmの大粗砂含む 燒成 U1+ 調査 壁の為不明 色調 SY7/1灰白色	高台部1/8
40	圓筒 鉢	帯5小 登6	瀬戸	18C前	E	E2 F2	SI44 SP34 横削土中 整地層			(12.2)	粘土 2mmの大粗砂含む 燒成 良好 調査 内外面洗浄がかかる、外蓋一面埋伏 色調 黃地SY7/1灰白色、袖SY2/1灰白色	口縁部1/26 体上部1/7
41	反物四脚 鍋	K-90 各行	助宗	9C後	E	F2	SD13 SH45 整地層			(7.8)	粘土 細石、灰石含む 燒成 良好 調査 内外面灰土層 色調 5.Y6/1灰白色	体下部わずかに残 高台部1/3
42	筑底器	K-90 各行	東達系	9C中	E	F2	箆削土中 追状追焼1			(15.4)	粘土 2mm以下の白い粒子含む、黒斑有り 燒成 良好 調査 断続的貼り付け高台 色調 2.5Y7/2灰褐色	体下部1/15 高台部1/8
43	灰釉陶器 瓶	K-90 各行	助宗	9C後	E	E2	箆削土中 追状追焼1			(7.4)	粘土 1mm以下の長石含む 燒成 良好 調査 貼り付け高台 色調 2.5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/8
44	小甌		東達系		E	E2	灰色粘土層 追状追焼1			(7.8)	粘土 1mm以下の粗砂含む 燒成 良好 調査 内外面灰土層 色調 NG/ 灰色	口縁部1/6 体部一部
45	土師器 瓶			古墳時 代?	E	G1	脛研土中 追状追焼2			(13.2)	粘土 3mm以下の繊維、白色粗砂含む 燒成 U1+ 調査 断続的凹凸有り 色調 7.SY6/3灰褐色	口縁部1/7 体下部一部
46	土師器 燒				E	G1	SP213 黑色粘土層				粘土 灰石、1mm以下の粗砂含む 燒成 良好 調査 断続的凹凸有り 色調 7.SY6/3灰褐色	体部上部一部
47	痕痕 灰瓶			9C前	E	G2	箆削土中 追状追焼2			(13.0)	粘土 灰石含む 燒成 良好 調査 断続的凹凸有り 色調 NG/ 灰白色	口縫部1/11 体部一部
48	灰釉陶器 瓶	K-90 各行	東達系	9C後	E	G1	箆削土中 追状追焼2			(7.0)	粘土 灰石含む、黒斑有り 燒成 良好 調査 貼り付け高台 色調 2.5Y7/2灰褐色	体部一部 高台部1/5
49	灰釉陶器 長颈瓶	K-90 各行	助宗	9C後	E	F1 F2 G2	SP166 箆削土中 黑色粘土層				粘土 灰石含む、黒斑有り 燒成 良好 調査 外面洗浄がかかる 色調 素地SY7/1灰白色 釉SY5/3灰褐色	口縫部1/5

開 番 号	器種・ 形態	型式	地質・ 材質	時代	EC	グリッド	層位述縦	上界 (m)	底位・ 高さ差 (m)	沿高 (cm)	胎土・焼成・調製・色調	残 存 率
50	魚切り鏡	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	道状遺構2付近 埴輪土中		(5.6)		胎土 1mm以下の白色粒子含む、黒斑有り、灰 化物付着 焼成 良 調製 道部条切り板 色調 N7/1灰白色	体部一部 底部1/4
51	灰陶陶器 輪花小柄		東造系	11C後	E	G2	紫地壺 道状遺構2	(11.8)			胎土 灰石、2mm以上の細砂含む、黒斑有り 焼成 良好 調製 内面塗ナデ 色調 S5/7/1灰白色	口縫溝1/12 体部一部
52	山形鏡	I-2	東造系	12C前	E	F1 F2	魚切壺 後削面 道状遺構2			7.3	胎土 黑斑の黒色、白色粒子含む 焼成 良好 調製 道部条切り板、脇り付け高台、スノコ 状凹窓、内面重ね施き痕 色調 7.5Y6/1灰色	体下部一部 高台部近形
53	白磁 包花款 合子挂		中国 越州窯系	12C	E	F2 F3	七手伏虎瓶1 道状遺構2付近 埴輪土中 墳地帯	(5.4)		1.85	胎土 敷成 燒成 良好 調製 型造り 色調 出場: S5/8/1灰白色 胎(底)5G1%1 オリーブ灰色 面(底)5G7/1明オリーブ灰色	天井部1/4 口縫部1/15 底部1/5
54	山茶鏡	B-2 ～ III-1	東造系	12C末	E	G2	盤地肩 道状遺構4		(6.2)		胎土 細砂2mm以上の黑色粒子、1mm以下の白 色粒子含む 焼成 良好 調製 道部条切り板、脇り付け高台、スノコ 状凹窓、内面重ね施き痕、底灰輪郭線? 色調 5G5/6/1オリーブ灰色	体下部1/4 高台部1/3
55	灰陶陶器 皿	O-53 併行	粘土	10C初	R	G2 F2	脚削土中 灰色粘土層 道状遺構5			6.1	胎土 3mmの大粒含む 焼成 良好 調製 道部条切り板、内外面灰釉ハケ織り(発 色していない?或隠している?) 色調 S5/7/1灰白色	体下部わずかに残 高台部変形
56	灰陶陶器 直頭瓶	K-14 併行	後段	9C前	D	G2	壁體灰色粘土層 道状遺構6				胎土 粘土、長石含む、わずかに黒斑有り 焼成 良好 調製 内面灰施がかかる、外表面灰釉剥落 色調 直場2.5Y7/1灰白色 斜10Y6/2オリーブ灰色	底の背部分1/5
57	土師器 甕		遼江系	8～9C	E	E2	SD11 灰色粘土層	(22.6)			胎土 2mmの大粒含む 焼成 良好 調製 斧材の為不明 色調 5.5Y3/2灰白色	口縫部1/16
58	土師器 甕?			9C前	E	E2	SD11 灰色粘土層		(4.2)		胎土 2mm以下の細砂、白色粒子含む、高周波 放電有り 焼成 良好 調製 壁側の為不明 色調 内面10Y6/3にぶい黄褐色 外面5Y2/5にぶい黄褐色	体下部1/6 底部1/4
59	灰陶陶器 碗	O-53 併行	東造系	10C初	R	F2	SD11 灰白色粘土層		(7.8)		胎土 磨擦、長石含む 焼成 良好 調製 道部中心条切り板、底端ハラ削り?ナ ダ?内面灰施剥離ハケ織り 色調 底地S7/1灰白色 袋S5/5オリーブ灰色	体下部わずかに残 高台部1/5
60	土師器 甕			9C後	E	E2	SD12 灰色粘土層		(5.2)		胎土 長石、1mmの大粒含む 焼成 良好 調製 斧材の為不明 色調 7.5Y4/1灰色	底部1/3弱
61	土師器			8～9C	E	F2	SD13 灰色粘土層				胎土 磨擦含む 焼成 良好 調製 外面ハケ目 体部径(18.8cm) 10Y8/2灰青褐色	体部一部
62	灰陶陶器 長颈瓶	K-14 併行	後段	9C前	E	F2	SD13 堅削土中 墳地帯				胎土 長石含む、混灰有り 焼成 良好 調製 外表面灰施がかかる、上部一部に釉の無 い部分有り 色調 直地S7/1灰白色 袋S5/2灰オリーブ色	頭部1/5
63	灰陶陶器 盆	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	SD13 堅削土中 墳地帯			6.0	胎土 1mm以下の長石、1mmの大粒含む、わず かに黒斑有り 焼成 良好 調製 底部条切り板、内面裏は焼き痕 色調 裁油2.5Y7/1灰白色 頭地S7/1灰白色	体下部1/3 高台部近形
64	灰陶陶器 瓶	O-53 併行	粘土	10C初	E	F2	SD13 堅地肩		(6.7)		胎土 1mmの大粒、長石含む 焼成 良好 調製 内外面ナデ 色調 S5/7/1灰白色	高台部1/6

河川 番号	岩種・ 層形	岩式	産地・ 材質	時代	IV	グリッド	標位延積	口幅 (cm)	奥深さ・ 高台地 (cm)	面積 (cm)	地土・焼成・鉱物・色調	残 存 率
65	灰釉陶器 陶	K-90 焼行	助宗	9C後	E	F2	SD14 標面土中		(8.6)		地土 硬岩、1mm大の細粒含む 焼成 良好 鉱物 高台へラ削り、貼り付け高台、高台部 欠損 内面自然剥離含む 色調 赤地2.SY7/1灰白色 黒地10Y5/2オリーブ灰色	体下部1/8 体部1/4弱
66	角切り鏡	O-53 焼行	東造系	10C初	E	F2	SD15 滝中? 灰色粘土層		(6.0)		地土 1mm以下の長石含む 焼成 良好 鉱物 磨耗の為不明 色調 5Y7/1灰白色	体下部1/4 高台部1/2弱
67	土師器 瓶				D	G2	SD17 滝中 覆土中		(16.0)		地土 1mm以上の粗砂含む 焼成 良好 鉱物 市民の為不明 色調 5Y7/1に近い褐色	44群部～体上半部 1/16
68	灰釉陶器 輪花瓶	K-90 焼行	助宗	9C後	E	G2	SD21 灰色粘土層 (猿地層上)		(6.0)		地土 1~2mmの長石、1.5mmの粗砂含む 焼成 良好 鉱物 外面下部へラ削り、内面自然剥離含む (つけがけしているが発色していない) 色調 黒地2.SY7/1灰白色 黒2.SY7/2灰白色	11群部～体部1/12
69	灰釉陶器 輪花瓶	O-53 焼行	東造系	10C初	E	G2	灰色粘土層		(13.4)		地土 3mm大の細粒含む、黒度有り 焼成 良好 鉱物 外面に擦痕?あり、内面自然剥離含む 色調 赤地2.SY7/1灰白色 黒5Y5/2 黒オリーブ色	口縁部1/10 体上部1/5
70	角切り鏡	O-53 焼行	東造系	10C初	D	G2	SD21 SP253 滝中 覆土中(猿地層)		(6.0)		地土 1mm以下の長石含む 焼成 不良 鉱物 磨耗の為不明 色調 5Y5/1灰白色	体下部1/8弱 高台部1/8
71	土師器 甕			8~9C	D	G2	燒山面 燒地帶		(17.2)		地土 硬石、2.5mm大の細粒含む 焼成 良好 鉱物 剥離の為不明 色調 10Y87/4に近い黄褐色	口縁部1/15 体部一部
72	灰釉陶器 瓶	O-53 焼行	助宗	10C初	E	G2	燒山面 風化面混粘土層		(12.0)		地土 硬石、細粒、2mm大の粗砂含む 焼成 良好 鉱物 内外面面がかかる(つけがけ) 色調 5Y7/1灰白色	口縫部～体部1/11
73	灰釉陶器 瓶	O-53 焼行	通宗	10C初	E	G2	標面土中		(6.5)		地土 硬密 焼成 良好 鉱物 粘土層へラ削り、貼り付け高台、内面剥 離 色調 黑地5Y5/1灰白色 黒10Y86/2オリーブ灰色	体下部～高台部1/6
74	角切り鏡	O-53 焼行	東造系	10C初	E	G2	標面土中		(12.0)		地土 粗砂含む 焼成 良好 鉱物 内外面ナメ 色調 5Y8/1灰白色	口縫部1/24
75	角切り鏡	O-53 焼行	東造系	10C初	E	G2	標面土中		(5.0)		地土 細粒含む 焼成 良好 鉱物 忽露赤切り瓶 色調 5Y8/1灰白色	体部～底部1/3
76	小甕	I-2	東造系	12C前	D	G2	標面土中 燒面粘土層 SP?		(5.4)		地土 白色粉子含む 焼成 良好 鉱物 貼り付け高台 色調 7.SY7/1灰白色	体部一部 高台部1/4
77	須恵器 环足			7C 牛窓	E	G2	標面土中				地土 1mm以下の長石、粗砂含む 焼成 良好 鉱物 外面へラ削り 捻み径(1.3cm) 色調 N7/1灰白色	捻み1/2 捻み頭部1/3
78	土師器 甕		造江系	8~9C	E	F2	盤面層		(13.0)		地土 1mm大の粗砂含む 焼成 良好 鉱物 剥離の為不明 色調 10Y87/3に近い黄褐色	口縫部1/12 体部一部
79	土師器 甕		通江系	8~9C	E	F2	標面土中		(17.2)		地土 良好、2mm大の粗砂含む 焼成 良好 鉱物 磨耗の為不明 色調 10Y87/3に近い黄褐色	口縫部1/14 体部一部
80	土師器 甕		通江系	8~9C	E	F2	標面土中		(17.5)		地土 3mmの大粒、1mm大の粗砂含む 焼成 良好 鉱物 調査の為不明、口縫部欠損 色調 10Y8/1灰白色	口縫部1/20 体部一部

測量番号	器種・部品	型式	成地・材質	時代	区	グリッド	断面造形	口径 (cm)	底径・ 高台径 (cm)	幅高 (cm)	勘上・純成・調査・色調	残存率
81	上部器蓋		通江系	8~9C	E	G2	整地層 細削土中	(16.0)			粘土 雲母、長石、微粉合む 成形 良好 調査 席机の為不明 色調 2.5Y7/3赤褐色	上部部1/15個
82	上部器蓋の底部				E	F2	SP960 灰色粘土層				粘土 長石、2mm大の粗砂、3mm大の細合む 成形 良好 色調 外面: 5YR5/4に近い褐色 内面: 5YR5/4調和褐色	底部一部
83	灰陶胸器 長颈瓶	K-14 併行	胎土	9C前	E	F2	細削土中	(9.0)			粘土 長石合む、黒斑有り 成形 良好 調査 内面削少し飛び 色調 5Y7/3灰白色 胎土: 5Y7/3灰オーライプ色	上部部1/8
84	灰陶胸器 箱	K-14~ K-90	東達系	9C前 ~ 9C後	E	F3	整地層		(6.2)		粘土 長石合む、黒斑有り 成形 良好 調査 貼り付け面合 色調 5Y6/1灰褐色	体部一部 高台部1/4
85	灰陶胸器 箱	K-90 併行	胎土	9C後	E	F2	細削土中	(13.8)			粘土 1mm以下の粗砂、2mm大の細合む 成形 良好 調査 内面削ナダ 色調 2.5Y7/1灰白色	上部部1/22 体部上1/16
86	灰陶胸器 長颈瓶	K-90 併行	胎土	9C後	E	F2 G2	整地層 細削土中				粘土 2mm大の細合む、黒斑有り 成形 良好 調査 外縁粗粒がかかる 色調 土地: 5Y7/1灰白色 胎土: 5Y7/3灰オーライプ色	調部のみ
87	灰陶胸器 長颈瓶	K-90 併行	胎土	9C後	E	G2 F2	灰色粘土層 細削土中		(8.8)		粘土 2.5mm大の細合む、黒斑有り 成形 良好 調査 底部少切り後ナダ、貼り付け高合 色調 土地: 5Y7/1灰白色 胎土: 5Y7/1灰白色 糊: 5Y6/1調和オーライプ色	体下部1/30 高台部1/8
88	灰陶胸器 長颈瓶	K-90 併行	東達系	9C後	E	F2	整地層		(8.6)		粘土 1mm以下の白色粒子、2.5mm大の細合む、 黒斑有り 成形 良好 調査 部部一部へ剥り、貼り付け高合、内 側削少始陥れ 色調 土地: 5Y7/1灰白色 胎土: 5Y4/2灰オーライプ色	高台部1/4
89	灰陶胸器 箱	O-53 併行	東達系	10C初	E	F2	細削土中		(6.2)		粘土 長石合む 成形 良好 調査 内面削 色調 土地: 5YR7/1灰白色 胎土: 10Y5/2灰オーライプ色	体部~高台部1/5
90	灰陶胸器 箱	O-53 併行	胎土	10C初	E	G2	細削土中				粘土 長石、1mm大の粗砂合む 成形 良好 調査 貼り付け高台欠部 色調 土地: 5Y8/1灰白色	体下部1/9 高台部1/10
91	灰陶胸器 長颈瓶	O-53 併行	東達系	10C初	E	F2	細削土中		(10.0)		粘土 断面、3mm大の白色粗合む、黒斑有り 成形 良好 調査 内外削少剥り ?, 贼り付け高合、高 度削少並み 色調 内面: 5Y7/1灰白色 外面: 5Y8/1灰白色	体下部1/7 高台部1/5
92	舟切り瓶	O-53 併行	東達系	10C初	E	F2	SP176 灰色粘土層		(6.2)		粘土 1mm大の粗砂合む、黒斑有り 成形 良好 調査 底部少切り痕?、原絆の為不明 色調 5Y6/1灰白色	体部一部 底部1/4
93	舟切り瓶	O-53 併行	東達系	10C初	E	F2	細削土中		(4.6)		粘土 断面、1mm大の粗砂合む 成形 良好 調査 底部少切り痕(修純している) 色調 5Y6/1灰白色	体部一部 底部1/4
94	舟切り瓶	O-53 併行	東達系	10C初	E	G2	整地層		(5.2)		粘土 1mm大の粗砂合む 成形 良好 調査 席机の為不明 色調 5Y8/2灰白色	体部一部 底部1/6
95	舟切り瓶	O-53 併行	東達系	10C初	E	F2	被削面		(5.0)		粘土 わずかに黒斑、2mm大の粗砂合む 成形 良好 調査 席机の為不明 色調 2.5Y7/2灰黄色	体部1/8 底部1/8
96	酒甕			10~11C	E	F2	SP85 灰色粘土層				粘土 石斑、長石を多量に含む 成形 良好 調査 内外削少 色調 土地: 10Y6/3灰に近い黄褐色	
97	山瓶	III-1	東達系	13C中	E	F2	細削土中		(5.4)		粘土 白色粒子含む 成形 良好 調査 高合剥久損 色調 7.5Y7/1灰褐色	体部~底部一部

探査 番号	溶植 地形	季式	產地・材質	時代	区	グリッド	断層遺跡	G標 (cm)	断層 高さ・幅 (cm)	断土・洗成・調査・色調	残 存
98 伊万里 安村 墓園		伊万里		18C	E	F2	SF6 断削土中		(5.0)	断土 細密、基石合む 洗成 良好 調査 外面に洗成 色調 地面3/1m白色 基10GY%7明褐色 墓付50cm/1青灰色	体部一部 奥部1/12
99 伊万里 白壁 頃		伊万里		19C前	E	F2	整地層		(9.2)	断土 細密 洗成 良好 調査 外面に軸がかかる 色調 10Y5/1灰褐色	口縁部～体部1/12
100 伊万里 安村 墓園		伊万里		18C	E	F1	整地層上		(10.8)	断土 細密 洗成 良好 調査 外面に洗成 色調 外壁2.5GY7/1明オーラブ灰色 輪(底)5G4/1緑褐色 輪(底)3B5/1青灰色	口縫部～体部 1/8強
101 筑紫園 茶舎		助宗	8～9C	E	E2 F2	灰色粘土層			(5.8)	断土 1m以下の細砂、白色粒子含む、断削多段 洗成 良好 調査 断続の為不明、貼り付け面台 色調 5V6/1灰褐色	体下部～高台部1/2
102 灰動陶器 輪花瓶	K-90	助宗	9C後	E	F2	断削土中 灰色粘土層		(15.0)		断土 2～2.5m大的長石、3mm大的複合む 洗成 良好 調査 外面にヒクサジ正在进行するが白色せず 色調 地面5V6/1灰褐色 墓5Y7/1灰白色	口縫部～体部1/12
103 灰動陶器 碗	K-90 井行	助宗	9C後	E	F2	道状造構1 断削土中		(14.0)		断土 長石、3mm大的複合む 洗成 良好 調査 内面凹凸付有し、外壁無剥不削 色調 地面2.5Y7/1灰白色 墓5Y7/1灰褐色	口縫部1/22 体部一部
104 灰動陶器 輪	O-53 春行	東遠系	10C初	E	F2	直上層 (灰色粘土層)		(14.0)		断土 長石、5mm大的複合む 洗成 良好 調査 内外混融の発色が悪い 色調 5Y7/1灰白色	口縫部1/16 体部一部
105 (灰動) 小皿	宮10	酒井	14C後	E	F2	整地層			(5.2)	断土 1m以下の細砂含む 洗成 良好 調査 断面多孔隙 色調 2.5V7/1灰白色	体部一部 底部1/4
106 鉄物建物		志15号	18C後	E	E2 F2	土手状造構1 断削層 壁削土 中 灰色粘土層				断土 3mm大的複合む 洗成 良好 調査 内外混融 色調 10YR5.3/3に近い灰褐色 輪7.5V7/1灰褐色	
107 土師器 甕		造江系		E	E2	断削土中				断土 長石、1mm大的細砂含む 洗成 良好 調査 断続の為不明 色調 7.5YB7/1褐色	口縫部～体部一部
108 土師器 甕		造江系	8～9C	E	B2	灰色粘土層				断土 1mm大的細砂含む 洗成 良好 調査 断続の為不明 色調 7.5V7/3灰褐色	口縫部～体部一部
109 須志器 壺			SC	E	F2	整地層				断土 1mm以下の長石含む 洗成 良好 調査 内面凹凸ナメ、大井部少ナメ、 筋3mm強2.8mm 色調 外壁2.5Y6/1灰褐色	積み底部1/5
110 旗動灰點 長指指	O-10 井行	猪俣	8C末 9C初	E	E1	断削土中			(9.2)	断土 粗粒、2mm以下の白色粒子含む、混融有り 洗成 良好 調査 贴り付け面台、内面自然剥付有し、一面 開窓あり 色調 素地5.7V4/1灰白色 輪5.7V4/2灰オーラブ色	高台部1/4
111 旗動陶器 後頭	K-90 井行	猪俣	9C後	E	E2	灰色粘土層 黄色粘土層上 (水仙の一番下)		(12.0)		断土 艶感 洗成 良好 調査 内外に粗粒がかかる 色調 2.5V7/3灰褐色	口縫部1/18
112 灰動陶器 甕	K-90 井行	助宗	9C後	E	B2	整地層		(14.0)		断土 粗粒有り 洗成 良好 調査 内面混融/灰褐色 色調 壁5Y5/1灰白色 輪10Y5/2オーラブ灰褐色	口縫部1/10
113 灰動陶器 長距瓶	K-90 井行	東遠系	9C後	E	F2 G2	断削土中 灰色粘土層				断土 細砂含む、粗混多量有り 洗成 良好 調査 外面に粗粒がかかる 色調 地面5V6/1灰白色 輪10Y5/2オーラブ灰褐色	縫隙1/3

測量号	断面・ 変形	型式	盛地・ 材質	時代	区	グリッド	層位・透視	口径 (cm)	底深・ 高台深 (cm)	幅高 (cm)	勘上・ 底成・ 調整・色調	残存率
114	灰陶陶器 窯	K-90 併行	東造系	9C後	E	E2 F2	縦削土中 灰色粘土層		(7.4)		勘上 長石含む 底成 良好 調整 細粒ヘラ削りかずげ、全面灰釉か 色調 素地2.5Y7/1灰白色 窯蓋2.5Y6/5オリーブ色	体部一部 高台部1/4
115	灰陶陶器 具置板	K-90 併行	焼扱?	9C後	E	F2	盤地層		(7.6)		勘上 1m以下の白色粒子含む、黒塵多有り 底成 良好 調整 底面切り、貼り付け高台、内面陥灰釉 色調 素地2.5Y7/1灰白色 窯蓋1.0Y5/3オリーブ灰色	(下部)～高台部 1/5
116	灰陶陶器 長瓶瓶	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	連続溝1 灰色粘土層				勘上 3m以上の纏合む 底成 良好 調整 外部全体に灰釉がかから 色調 素地5Y7/1灰白色 窯蓋1.0Y5/3オリーブ灰色	体部1/12
117	灰陶陶器 長瓶瓶	O-53 併行	東造系	10C初	E	E2	土手状造縫1 縦削土中		(14.0)		勘上 黃石、良好 底成 良好 調整 外部ケラ削り、貼り付け高台 色調 素地2.5Y7/1灰白色	体下部1/8 高台部1/16
118	灰陶陶器 瓶	O-53 併行	東造系	10C初	E	E2 F2	縦削土中 焼出面		(14.0)		勘上 黃石、3m以上の纏合む 底成 良好 調整 内外面浸没し底り 色調 素地2.5Y7/1灰白色 体部2.5Y6/1灰白色	口縫部1/19 体部一部
119	条切り甕	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	縦削土中		(5.6)		勘上 白色細砂含む 底成 良 調整 突起部条切り底 色調 5Y8/1灰白色	体下部1/7 底部1/6
120	条切り甕	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	灰色粘土層 (粘性強い)		(5.4)		勘上 黃石、1m以上の纏合む 底成 良好 調整 突起の為不明 色調 2.5Y7/2灰褐色	体部一部 底部1/5
121	条切り甕	O-53 併行	東造系	10C初	E	F2	灰色粘土層		(5.4)		勘上 1m以下の重複有り 底成 不良 調整 突起部条切り底、突起の為不明 色調 内面7.5Y7/1灰白色 外面10Y1灰白色	体下部1/8 底部1/3
122	山茶碗	I-2	東造系	12C前	E	G2	縦削土中		7.2		勘上 2m以上の長石含む 底成 良 調整 底部条切り底、内面黒ねじれ痕、陥灰釉 色調 素地7/1灰白色 育2.5Y6/3灰褐色	体部1/4 高台部1/2
123	灰陶陶器 瓶		直接	11C末	E	E2	焼出面		(6.0)		勘上 錐形-2mmの黑色粒子、1m以下の白 色粒子含む 底成 良 調整 突起部有り底、貼り付け高台、内面陥 色調 黑ねじれ痕、陥灰釉、貼り付け着 地2.5Y7/1灰白色 窯蓋1.0Y4/2オリーブ灰色 窯蓋2.5Y7/3C灰褐色	体部一部 高台部1/2
124	小甕	I-2	東造系	12C前	E	E2	縦削土中		(4.6)		勘上 黃石、1m以上の纏合む 底成 良好 調整 成部条切り底、貼り付け高台、内面陥灰釉 色調 2.5Y6/1灰褐色	体部わざかに残存 高台部1/6
125	小甕	I-2	東造系	12C前	E	F2	縦削土中		(4.6)		勘上 長石わざかに含む 底成 良好 調整 成部条切り底、貼り付け高台、内面陥灰釉 色調 N7/1灰白色	高台部1/3
126	小甕	II-3	東造系	13C後	E	F2	面上層		(5.6)		勘上 長石、2m以上の纏合む 底成 良好 調整 底部条切り底 色調 N8/1灰白色	底部1/4
127	灰陶 西耳甕	質4 古窯)-前 II		13C前	E	E2	5F2 灰色粘土層 やや砂質				勘上 4-8mmの隙隙、2mm以下の白色粒子含む、 わざかに黒塵あり 底成 良好 調整 窯面に灰釉が滲み込む、焼けヒビがある 色調 2.5Y7/1灰白色	体上部1/10
128	白磁 梅瓶		中国 景德鎮	13C元	E	F2	縦削土中				勘上 磨擦、わざかに開削有り 底成 良好 調整 内面に施釉有る、外表面削り取れ 色調 内面2.5Y7/1灰白色 外面10G7Y1灰褐色	一部破片1/12
129	土師器 壺		古墳	E	E2	縦削土中			(8.8)		勘上 2m以上の纏合む 底成 良好 調整 底部水痕有り、内外面削痕有り、摩耗 の為不明 色調 7.5YR6/6褐色	底部1/4

井跡 番号	添耕・ 施肥	型式	成地・ 材質	時代	区	グリッド	透視遺構	口径 (cm)	直径・ 高さ(倍 (cm))	深さ (cm)	鉄土・焼成・調査・色調	残存 字
130	質面鑿 等分	NW-32 併行	叻宗	8C前	E	E2	焼削面 灰白色土層	(12.0)	(7.8)	3.9	船上 2.5m大の縦合む、温床有り 焼成 良好 調査 底部糸切り底、焼き込みあり、貼り付 色調 内面NA/ 灰色 外面N5/ 灰色	口沿部～高台部1/2
131	傾斜部 跡合			8C末	E	E2	掘削土中	(12.4)			船上 灰石、2.5m大の縦合む 焼成 良好 調査 外面クロマチ 色調 7.5YR6/6灰色	口沿部～体部1/14
132	上部断 坪		奈良 時代		E	E2	灰白色土層			(6.4)	船上 2m大の縦合む 焼成 やや不良 調査 壁面の為不明、底部に段差(ヘリ痕?) 有り 色調 7.5YR7/4に近い褐色	体部一部 底部1/2
133	壁支坪			8～9C	E	E2	青灰色砂岩織 鉄土			(6.5)	船上 1m以下の網状、白色微細粒子含む 焼成 良好 調査 断続的の為不明、底部中心に盛みあり 内面2.5YR6/6灰色 外側10YR5/6に近い黄褐色	体下部1/7 底部1/2
134	土師陶 甕		遼江系	8～9C	E	E2	舊地層	(30.0)			船上 灰石、直角、1m大の網状含む 焼成 良好 調査 外面に爪による圧痕か?、断続的の為不明 色調 10YR7/4に近い黄褐色	口沿部1/16 体部一部
135	土師陶 甕				E	E2	灰色黏土層			(6.0)	鉄土 白色粒子含む 焼成 良好 調査 内面滑面版あり、外側直角あり 色調 2.5YR7/6灰黄色	体部1/7 底部1/5
136	上部断 坪		奈良 時代		E	E2	灰白色土層			(4.8)	船上 3m以下の壁、白色網状含む 焼成 直角 調査 断続的の為不明 色調 7.5YR6/6褐色	体下部1/7 底部1/4
137	土師陶 甕		遼江系	8～9C	E	E2	土手状盛構1 川の覆土			(16.8)	船上 灰石、3m大の縦合む 焼成 良好 調査 断続的の為不明 色調 2.5YR7/4灰黄色	口沿部1/17 体部一部
138	土師陶 S字甕?		遼江系	8～9C	E	E2				(24.0)	船上 1m大の網状含む 焼成 良好 調査 断続的の為不明 色調 10YR7/4に近い黄褐色	口沿部1/10 体部一部
139	土師陶 甕		遼江系	8～9C	E	E2	灰色黏土層				鉄土 3m大の縦合む 焼成 良好 調査 断続的の為不明 色調 10YR7/4に近い黄褐色	口沿部1/27個 口部欠損
140	灰陶陶 甕	K-90 併行	東遼系	9C後	E	D3 E3 E2	土手状盛構1.2 灰白色土層				船上 3m大の網状含む 焼成 良好 調査 全体に火照がかかる 色調 3YR7/7/灰白色 釉10YR7/2オーライプ灰色	体部1/9
141	灰陶陶 甕	K-90 併行	東遼系	9C後	E	E2	SD11 トレン シ内側土中 燒削面 燒地層			(16.2)	鉄土 粒状、2.5m大の縦合む 焼成 良好 調査 内面火照と1m位のへりによる一箇所 有り、空気孔が入って一部膨らむ 色調 7.5YR7/1灰白色	口沿部～体部 1/8個
142	灰陶陶 甕	K-90 併行	東遼系	9C後	E	E2	掘削土中			(12.5)	船上 1m、3m大の縦合む 焼成 良好 調査 内面火照とハケ痕? ?発色悪い 色調 7.5YR7/1灰白色	口沿部1/11 体部一部
143	灰陶陶 甕	K-90 併行	叻宗	9C後	E	E2	焼削面			(16.4)	船上 長石、4m大の縦合む、温床有り 焼成 良好 調査 内面火照とハケ痕 色調 5YR7/1灰白色 6YR5/7/2灰オーライプ色	口沿部1/9 体部約1/9
144	灰陶陶 甕	K-90 併行	東遼系	9C後	E	P2	罐状遺構1 焼削面			(6.7)	船上 粒状、2m大の長石含む 焼成 良好 調査 底部へラ別れ、貼り付け直台、外側直 角、内面焼け付きが、ヘリによる一 箇所火照 色調 5YR7/1灰白色 5YR7/2灰オーライプ色	体下部～高台部1/5
145	灰陶陶 甕	K-90 併行	東遼系	9C後	E	E2	灰白色土層			(7.0)	鉄土 粒状の長石含む、温床有り 焼成 良好 調査 送形糸切り後ナゲ 色調 2.5YR7/1灰白色	体下部一部 高台部1/2

測定番号	器種・形態	型式	产地・材質	時代	K	グリッド	断面連続	口径 (cm)	底径・高台径 (cm)	留出 (cm)	勘上・焼成・調整・色調	残存率
146	灰陶鉢 長脚瓶	K-90 併行	東漢系	9C後	E	E2	輪削上中		(7.1)		勘上 長石、1mm以下の細砂含む、わずかに黒斑有り 焼成 良好 調整 磨耗の為不明、砾り付け高台 色調 2.5Y7/1灰白色	高台部1/8
147	灰陶鉢 長脚瓶	K-90 併行	東漢系	9C後	E	E2	SD11 輪削上中				勘上 長石、粗骨有り 焼成 良好 調整 高台部欠損、内面は灰粒付着、技術あり 色調 地2.5Y6/1灰白色 施7.5Y5/2オリーブ色	体干部1/8 高台部1/7
148	灰陶鉢 長脚瓶 把手	K-90 併行	東漢系	9C後	E	E2	輪削土中				勘上 長石、1mmの大粒含む 焼成 良好 調整 全てがナデている、一部に割れ有り 色調 5Y6/1灰白色	
149	灰陶鉢 圓	K-90 併行	焼設	9C後	E	E2	輪削上中 トレンジ内		(7.1)		勘上 細砂、1mm以下の細砂含む 焼成 及手 調整 基台部欠損 色調 施地2.5Y7/1灰白色 外壁2.5G3V3/1オリーブ色 施7.5Y5/2オリーブ色	底部1/4
150	灰陶鉢 單	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	大手状底碗1 川の底上 灰色粘土層		(8.0)		勘上 白色粒子をわずかに含む 焼成 粗骨 調整 砂利付高台、内面重ね焼き痕、輪付痕 色調 2.5Y7/1灰白色 底2.5G3V3/1オリーブ色	体部一部 高台部1/3
151	灰陶鉢 碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	水田面 輪削上中 土手と邊縁2 透底底碗1		(13.8)		勘上 長石、2mmの大粒含む、わずかに黒斑有り 焼成 良好 調整 内底部灰粒へナギり? 色調 施地5Y5/1灰白色 施10Y6/3時オリーブ色	山腰部1/7 土手部1/5
152	灰陶鉢 盤	O-53	焼設	10C初	E	E2	灰褐色土層		(7.0)		勘上 細砂、1mm以下の細砂含む、わずかに粗骨有り 焼成 良好 調整 底部がナラ割り、内全面灰斑 色調 地5Y7/1灰白色 施10Y6/3時オリーブ色	体部1/8 高台部1/3
153	灰陶鉢 盤	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	灰色粘土層		(7.8)		勘上 1mm以下の細砂含む 焼成 良好 調整 ナデしている 色調 5Y7/1灰白色	高台部1/6
154	灰陶鉢 甕	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	後表面		(7.0)		勘上 長石、2mm以下の細砂含む 焼成 良好、生地付 調整 磨耗の為不明、砾り付け高台、高台部 底部がくつきりと線状になっている 色調 7.5YR7/5豊色	高台部1/4
155	灰陶鉢 甕	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	SD11 灰色粘土層		(8.2)		勘上 2mmの大粒、長石含む、黒斑少有り 焼成 やや不良 調整 磨耗の為不明 色調 5Y6/1灰白色	体部一部 高台部1/4
156	灰陶鉢 甕	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	SD11 灰色粘土層				勘上 長石、白色粒子、1mm以下の細砂含む 焼成 良好 調整 磨耗の為不明 色調 NT/1灰白色	体部一部
157	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	灰褐色土層		(5.7)		勘上 2mmの大粒、甘い、生地付 焼成 磨耗の為不明 調整 磨耗の為不明 色調 2.5Y8/1灰白色	底部1/3
158	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	輪山面		(5.6)		勘上 長石含む 焼成 良好 調整 讐部角削り直し、平した跡に行いた包土 色調 5Y7/1灰白色	体部一部 底部1/3
159	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	灰色粘土層 (磨削ヒリ)	(13.1)	(5.2)	3.5	勘上 1mm以下の長石含む 焼成 良好 調整 底部角削り直し 色調 5Y7/1灰白色	山腰部1/4 体部1/4 底部1/6
160	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	後表面	(11.5)			勘上 1mmの大粒含む、黒斑有り 焼成 良好 調整 5Y7/1灰白色	山腰部1/6 体部一部
161	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	後表面		(5.2)		勘上 2mmの大粒含む 焼成 良好 調整 磨耗の為不明 色調 5Y8/1灰黄色	体部一部 底部1/4
162	赤堀り碗	O-53 併行	東漢系	10C初	E	E2	地山面		(5.2)		勘上 1mmの大粒含む 焼成 良好 調整 磨耗の為不明 色調 5Y6/1灰白色	体部1/3 底部1/2

種別 番号	留種・ 廻形	型式	地質・ 材質	古代	区	クリッド	層位通稱	口壁 (m)	底壁・ 高台便 (m)	器高 (m)	胎土・地底・調整・色調	残存率
163	魚切り鏡 骨行	K-30 骨行	東造系	9C後	E	E2	土手状遺構1 灰色粘土層		(6.9)	胎土 2mm以下の白色粒子多量に含む、黒斑多 数有り 地底 青灰の為不明 色調 3Y7/7灰白色	体下部1/8 高台1/11	
164	魚切り鏡 骨行	O-55 骨行	東造系	10C初	E	E2	灰色粘土層			胎土 1mm以下の細砂、長石含む 地底 青灰 地底外側に褐色、文字不明 色調 2.5Y7/7灰白色	体部1/14	
165	山茶碗	III-1	東造系	13C中	E	F2 G3	SF4 遺状茎構1 黑色粘土層 黑土中			胎土 3mmの粗砂、1mm以下の白色粒子含む、 黒斑有り 地底 良好 調整 内面自然降伏痕の付着痕 色調 7.5Y6/1褐色	体部1/8	
166	小碗	I 2	東造系	13C前	E	E2	黑土中		(4.0)	胎土 2mm以下の白色粒子含む 良好 地底 黒土骨切り痕、貼り付け高台、内面状 色調 黒地2.5Y7/1灰白色 胎7.5Y6/1灰オーブ色	体下部1/12 高台部1/5	
167	山茶碗	II	東造系	13C後	E	E2	黑土中		(5.5)	胎土 黒斑の白色粒子含む 地底 地底の繊維状テクスチャ、貼り付け高台、高台 部、段階になつていて、内面黒は焼き板 色調 外側5Y6/1灰白色 内面7.5Y6/4淡黄色	体一部 高台部1/3	
168	小碗	III	東造系	13C	E	E2	SD12 植山層 黒化泥凝粘土層	(8.2)		胎土 黄石、1mmの粗砂含む 地底 良好 調整 内面海波軸付層 色調 N7/7灰白色	口絶部1/8 体部一部	
169	中国白磁 小皿	IV類 ?	中国	13C 南宋	E	E2	副底土中		(5.4)	胎土 地底 地底 調整 底地のハラ剥り、外面へラ剥り、内面全 体と外面部に青苔感がかかる 色調 底地2.5Y3/1灰白色 内面7.5Y6/7灰白色	体部一部 底部1/6	
170	中国白磁 四耳皿		中国	13C 南宋	E	E2	SD11 擬素土中			胎土 地底 地底 調整 地底の底合痕あり 色調 10Y7/7灰白色	体部1/8時	
171	常滑地 甕		常滑	13C～ 14C	E	E2	土手状遺構1 灰色粘土層			胎土 長石、黒斑、8mmの大粒含む、織多く含む 良好 地底 内面面筋感がかかる 色調 内面ナデ 色調 内面8/5/1褐色 7.5YR5/2褐色	頭部一部	
172	左野燒 鍋物小皿	丸形 IV古 骨行	美濃	13C中	E	D2	土手状遺構1 灰色粘土層	(10.0)		胎土 長石含む、黒斑有り 良好 地底 内面面筋感がかかる 色調 青7.5YR8/10白色 藥7.5Y7.7/1赤褐色	口絶部1/10	
173	須志窯 手盆	○-2 骨行	助宗	9C前	E	F3	副底土中 灰色粘土層	(12.4)		胎土 2mmの大粒含む、黒斑有り 地底 良好 調整 外葉上部へ削り、自然輪付層 色調 青5Y7/7灰白色 藥7.5Y6/3灰オーブ色	口絶部1/5 天井部1/4	
174	須志窯 环身		助宗	9C前	E	F3	灰色粘土層	(12.7)	(8.6)	胎土 4mmの大粒含む 地底 良好 調整 内面無 色調 7.5Y6/3/5褐色	口絶部～体部1/18 遮蔽わざかに発見	
175	須志窯 环身		助宗	9C前	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層		(8.6)	胎土 1mmの大粒含む 地底 不良 調整 岸地の為不明 色調 7.5Y6/1褐色	体部一部 高台部1/4	
176	須志窯 环身		助宗	9C前	E	F3	副底土中		(6.6)	胎土 白色粒子含む 地底 良好 調整 削り出し高台 色調 N4/7褐色	体部一部 高台部1/8	
177	土師器 环				E	G3	副底土中		(9.2)	胎土 基石、1mmの大粒含む 地底 良好 調整 底地の骨未帶り痕、岸地の為不明 (3脚) 5YR6/4に似い褐色	底部1/9	
178	土師器 甕				E	F3				胎土 基石、1mmの大粒含む 地底 良好 調整 内面ナデ 色調 7.5Y6/4に似い褐色	破片	
179	土師器 甕				E	G3	副底土中		(6.4)	胎土 基石、1mmの大粒含む 地底 良好 調整 底地の為不明、内面底部ハケ目あり 色調 10YR5/3に似い黄褐色	体部一部 底部1/6	

順番号	箇所・形態	帶式	成地・材質	時代	K	グリッド	層位連続	口径 (m)	底深・高台性 (m)	層高 (cm)	胎土・焼成・調査・色調	残存率
180	土師器 坑				E	G3	直上		(5.8)		胎土 1m大の細砂含む 焼成 良好 調査 岸辺の為不明 色調 7.SYR7/3に似い黄色	底部1/6強
181	土師器 窓			8~9C	E	F3	海側土中 確認粘土層	(14.0)			胎土 1m以下下の細砂含む 焼成 良好 調査 地表の為不明 色調 7.SYR7/4灰青色	口縁部1/10弱
182	土師器 窓			8~9C	E	F3	土手状遺構1				胎土 5m大のE、2m以下の白色粘土含む 焼成 良好 調査 外面・一部壁の為不明 色調 外面SYR7/6橙色 内面7.SYR8/3強青物色	頂部1/17
183	土師器 窓		遼江系	8~9C	E	F3	土手状遺構1 確認土中	(16.0)			胎土 基石、2m大の細砂含む 焼成 良好 調査 対4の為不明 色調 2.5Y7/3灰色	口縁部1/14 体部一部
184	土師器 窓		遼江系	8~9C	E	F2	調査土中 (灰色粘土層)	(16.4)			胎土 長石、白母、2m大の細砂含む 焼成 良好 調査 壁等の為不明 色調 10YR7/7に似い黃紅色	口縁部1/12強 体部一部
185	土師器 窓		遼江系	8~9C	E	F2	灰色粘土層 (新井付)	(18.4)			胎土 3m大のE、1m大の細砂含む 焼成 良好 調査 壁等の為不明 色調 10YR8/3灰黄褐色	口縁部1/15 体部一部
186	土師器 窓		遼江系	8~9C	E	F3	確認土中 (灰色粘土層)	(17.0)			胎土 長石、2m大の細砂含む 焼成 良好 調査 外面ハケ目? 色調 2.5YR7/3Cに似い黃色	口縁部一部 体部一部
187	土師器 窓				E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層				胎土 3m大の混合む 焼成 良好 調査 外面ハケ目、内面炭化物と柱状物 色調 2.5YR8/2灰色	頂部1/7
188	土師器 窓		遼江系	8~9C	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層		(25.0)		胎土 1m大の細砂含む 焼成 良好 調査 外面に爪による痕跡か?、壁等の為不明 色調 2.5Y8/3灰色	口縁部1/10 体部一部
189	土師器 窓			8~9C	E	F3	土手状遺構1 灰色粘土層		(26.0)		胎土 長石、3m大の混合む 焼成 良好 調査 植物の為不明、外面ハケ目有り、口縫 色調 2.5Y8/2灰白色	口縁部1/14 体部一部
190	土師器 小形窓			8~9C	E	F2	確認土中	(14.0)			胎土 5m大のE、1m以下白色粘土含む 焼成 良好 調査 壁等の為不明、内面口縫から底部にかけてスズ付有 色調 外面SYR7/6橙色 外面SYR7/5/3に似い褐色	口縫部~体部1/12
191	灰陶器 窓	K-90 併行	東遼系	9C後	E	G2	墳頂 暗灰色厚地燒 黏土層 灰色粘土層	(16.0)			胎土 長石、2m大の細砂含む、わずかに黒斑 焼成 良好 調査 内面付はかから(つけがら)、外面輪郭 色調 黒地、5Y7/1灰白色 例SY5/3Hオーラブ色	口縫部~体部1/17
192	灰陶器 窓	K-90 併行	東遼系	9C後	E	F2	擾乱		(6.2)		胎土 1m以下下の細砂含む 焼成 良好 調査 頂部余計な土袋?外側ナナカヘウタ 色調 5Y7/1灰白色	拌混わずかに残存 高台部1/8
193	灰陶器 窓	K-90 併行	東遼系	9C後	E	G2	SD14 潛溝上 中(埴地層)	(14.0)			胎土 長石、4m大の混合む 焼成 良好 調査 内面付輪郭有 色調 2.5Y7/3灰黄色	口縫部1/12 体部一部
194	灰陶器 窓	K-90 併行	塗装	9C後	E	G3	土手状遺構1 灰色粘土層	(13.0)			胎土 硫酸、1m以下下の白色粘土含む、黒斑有り 焼成 良好 調査 外面輪郭ハスリ? 色調 2.5Y7/1灰白色	口縫部1/8 体部一部
195	灰陶器 窓	K-90 併行	塗装	9C後	E	F3	後山面		(3.2)		胎土 1m大の細砂含む 焼成 良好 調査 高台部先端破損、直面へ割り一部ナ ダ、内面付輪郭有り、外側へ割り 色調 黑地、5Y7/2灰白色 例SY6/3ヒート黄色	高台部分1/34

編號 番号	器種・ 器形	式型	產地・ 材質	時代	区	グリッド	層位底緯	口幅 (cm)	底深・ 高台径 (cm)	回高 (cm)	断土・後成・剖鑿・色調	残存率
196	灰陶陶器 甌	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F3	検出面		(8.1)		断土 長石、2mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 底部へラ削り、貼り付け高台 色調 7.5Y7/1灰白色	体下部1/3 高台部1/3
197	灰陶陶器 甌	O-53 併行	説別	10C初	R	G2	灰色粘土層		7.5		断土 3~5mmの大粒合む 焼成 良好 調査 乾用甌?、底部へラ削り被ナゲ 色調 2.5Y7/1灰白色	高台部1/2
198	灰陶陶器 甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F2	灰色粘土層		(6.0)		断土 長石、1mm以下の細砂合む 焼成 良好 調査 高台部へ削、底部へラ削り、内面剥落 色材質 外面へラ削り 色調 5Y7/1灰白色	体下部1/9 底部1/4
199	灰陶陶器 甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G2	粗面土中 灰色粘土層		(12.7)		断土 長石、粗砂、2mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 斧柄の為不明 色調 5Y7/1灰白色	口縁部~体上部1/9
200	灰陶陶器 甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	検出面		(7.2)		断土 長石、1mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 底部あたり被ナゲ、内面剥落被き 色調 粗地10Y7/1灰白色 7.5Y5/2灰オーラー色	体下部1/4 高台部1/3
201	灰陶陶器 甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	十字状透跡 灰色粘土層		(9.6)		断土 4mmの大粒、白色粒子わずかに含む 焼成 良好 調査 貼り付け高台、底部へラ削り 色調 2.5Y7/1灰白色 断面2.5Y7/2灰白色	体部一部 高台部1/4
202	灰陶陶器 甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	粗面土中				断土 2mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 直径 色調 2.5Y8/1灰白色	体部1/6
203	条切り甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	G3	鉢底層		(4.4)		断土 長石合む、黒斑有り 焼成 良好 調査 壁部表面有り 色調 外面2.5Y6/1灰白色 削面のR6/3に付い線色	体部一部 底部ほぼD1/2
204	条切り甌	K-90 併行	東遠系	9C後	E	F3	灰色粘土層		(5.8)		断土 1mm以下の細砂、白色粒子含む 焼成 不良 調査 斧柄の為不明 色調 5Y7/1灰白色	体下部1/3 底部1/5
205	条切り甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	灰色粘土層		(6.0)		断土 1mm以下の長石、1mmの大細砂合む 焼成 甘い 調査 斧柄の為不明 色調 7.5Y7/1灰白色	体下部~高台部 1/422
206	条切り甌	O-53 併行	東遠系	10C初	E	F3	粗面土中 砂礫混じり粘土層		(6.0)		断土 1mm以下の長石、1mmの大細砂、4mmの大 粒合む 焼成 甘い 調査 斧柄の為不明 色調 7.5Y7/1灰白色	体下部1/3 高台1/2
207	山茶碗	III-2	東遠系	13C中	E	F3 G3	粗面土中 灰色粘土層		(6.0)		断土 1mm以下の白色粒子、2~3mmの大粒合む 焼成 良好 調査 底部斜め切り底、貼り付け高台 色調 7.5Y6/1灰白色	体下部~高台部1/7
208	片口甌?		東遠系	13C初	E	G2	灰色粘土層		(11.8)		断土 2mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 黒斑が外れる、高台部にワ タ状斑 色調 10Y7/1灰白色	高台部1/4
209	山茶碗		東遠系	13C	E	G3	粗面土中		(14.0)		断土 長石、3mmの大粒合む 焼成 良好 調査 内外削り底 色調 10Y6/1灰白色	口縁部1/9 体部一部
210	山茶碗		東遠系		E	F3	検出層		(6.4)		断土 1mm以下の白色粒子含む、黒斑有り、灰 化物付着 焼成 良好 調査 底部斜め切り底、貼り付け高台 色調 5Y8/6~7灰白色	体部一部 高台部3/2
211	小瓶		東遠系	13C後	E	G3	粗面土中		(3.7)		断土 自由粒子、2mmの大細砂合む 焼成 良好 調査 底部斜め切り底 色調 5Y6/6/1灰白色	体部一部 底部ほぼ完形
212	青磁 瓶	A2箱	中国 海東系	12C~ 13C	E	G3	粗面土中				断土 青磁 焼成 良好 調査 有光 色調 2.5G7/6/1オーラー灰黑色	体部1/1220

編 番 号	器種・ 部品	型式	産地・ 材質	時代	区	グリッド	透析遮蔽	口径 (m)	底面・ 高さ径 (cm)	型高 (cm)	胎土・焼成・断面・色調	現 存 率
213	青磁 蓮弁紋鏡		中国	13C中	E	G3	トレンチ内 斜利脱じり敷上 易			胎土 焼成 施釉 調整 色調 素面5.7/1灰白色 青磁胎2.5G7/1乳オリーブ灰色	体部一部	
214	かわらけ				E	E3	土手状遺構2 陶質土中		(6.0)	胎土 焼成 施釉 焼成の為不明 色調 7.5YR6/6褐色	体部1/5強	
215	かわらけ				E	G3	陶土層		(7.0)	胎土 2mm以下の細砂含む 焼成 良 施釉 他の為不明、外腹ハケ目あり 色調 5YR7/6褐色	体下部1/11 底部3/4	
216	かわらけ				E	E3	土手状遺構2 陶質土中		(8.0)	胎土 3mmの大粒含む 焼成 不良 施釉 摩耗の為不明、指透度あり 色調 7.5YR7/6褐色	体下部1/6 底部3/12	
217	植木器 坪蓋		船窓	9C前	E	F3	SR8 風化陶質粘土層			胎土 焼成 良 施釉 外腹ハラ張り 挿み径2.4cm 色調 N6/ 灰色	盛み定形 大舟部5/3 口縁部1/3	
218	落窓型 坪身		船窓	9C前	E	D3 D4	SR8 灰色粘土層		(7.0)	胎土 焼成 良 施釉 底部へラ層り、削り出し高台、外腹へ タ割れ 色調 内面7.5YR6/6灰黄色 断面7.5YR6/4にぶい褐色	体部一部 高台部1/8	
219	傾高窓 坪身				E	D3	SR8 焼土面		(9.0)	胎土 焼成 良 施釉 削り出し高台、外腹へラ削り 色調 5Y6/1灰白色	体部一部 高台部1/9	
220	上耕器 輪				E	F3	SR8		(9.0)	胎土 3mmの大粒含む 焼成 良好 施釉 摩耗の為不明 色調 10YR7/2にぶい黃褐色	口縁部1/15弱	
221	土耕器 台座		造江系	8~9C	E	E3	SR8 焼土層			胎土 3mmの大粒含む 焼成 良 施釉 内外面ナダ 色調 2.5Y5/3にぶい黃色	山腰部1/17強 口縁部欠損	
222	土耕器 身				E	F3	SR8			胎土 3mmの大粒含む 焼成 良好 施釉 摩耗の為不明 色調 10YR6/4にぶい黃褐色	体部一部隨片	
223	宿窓器 坪身		船窓	9C前	E	E3	SR8 接触面		(8.0)	胎土 長石、1mm人の細砂含む 焼成 不良 施釉 厚透の為不明 色調 内面5Y6/1灰白色 高台5Y6/1灰白色	体部一部 高台部1/2	
224	延祐向盤 碗	O-53 併行	寛通系	10C初	E	E3	土手状遺構2		(7.0)	胎土 長石、1mm人の細砂含む 焼成 良 施釉 貼付 5Y7/1灰白色	体部一部 高台部1/5	
225	延祐向盤 碗	O-53 併行	助宗	10C初	E	F3	土手状遺構1 陶質土中		(5.0)	胎土 1mm以下の長石含む 焼成 良好 施釉 内面に比較的がかる 色調 2.5Y7/7灰白色	体部わずかに残存 高台部1/7	
226	延祐向盤 碗	O-53 併行	寛通系	10C初	E	D3	灰白色粘土層		(7.0)	胎土 1mm以下~3mmの長石含む、黒斑有り 焼成 良 施釉 底部各切り後ナダ 色調 赤地7.5Y6/1灰白色 断面7.5Y7/1灰13色	体部一部 高台部1/6	
227	糸切り輪	O-53 併行	寛通系	10C初	E	E3	SR8 断面土中		(5.0)	胎土 3mm人の細砂含む 焼成 良 施釉 摩耗の為不明 色調 10YR7/4にぶい黃褐色	体部一部 底部1/3	
228	糸切り輪	O-53 併行	寛通系	10C初	E	E3	SR8 焼土面		(4.0)	胎土 長石含む 焼成 良好 施釉 底部各切り後 色調 10TG4/1灰白色	体部一部 底部1/4	
229	糸切り輪	O-53 併行	寛通系	10C初	E	F3	SR8 焼土面 風化鐵頭灰白色 胎土層	(15.0)		胎土 1mm人の細砂含む 焼成 良 施釉 摩耗の為不明 色調 5Y7/1灰白色	口縫部1/10 体部一部	
230	糸切り輪	O-53 併行	寛通系	10C初	E	D3	褐色粘土層		(5.0)	胎土 長石、1mm人の細砂含む、加藤有り 焼成 良 施釉 底部各切りか? 色調 NS/ 灰色	体部一部 底部1/6	

地図 番号	面積・ 形状	型式	地質・ 材質	時代	区	グリッド	断面追跡	口幅 (m)	底深・ 高台位 (m)	基高 (m)	断土・施城・割塁・色調	残存率
231	赤切り縫 併行	O-53	東造系	10C前	E	E3	SR8		(4.8)	断土 長石、1mmの大網砂合む、黒瓦有り 施成 良好 調整 壁剥の為不規 色調 7.5YR8/4に近い褐色	体部一部 底部1/5	
232	赤切り縫	O-53	東造系	10C前	E	E3	SR8	断面土中	(4.8)	断土 長石、1mmの大網砂合む 廿い 施成 壁剥の為不規 色調 2.5YR7/8灰黄色	体部一部 底部1/5	
233	山形縫	I-2	東造系	12C前	E	D1	SR8	灰色粘土層	(14.0)	断土 2mmの大網砂合む、黒瓦有り 施成 良好 測量 内面陥没崩竹苔、地しきがくれあり 色調 黄土7.5Y7/1灰褐色 灰5Y4/2オオリーブ色	口縁部1/11 体部一部	
234	山形縫	I-2	東造系	12C前	E	F3	SR8	断面土中	(7.4)	断土 瓦網の白色粒子合む、黒瓦有り 施成 良好 調整 施部赤切り後ナデ、貼り付け高台 色調 7.5Y6/4灰褐色	体部一部 高台部1/3	
235	山形縫	I-2	東造系	12C前	E	E3	SR8	断面土中	(7.4)	断土 瓦網の白色粒子合む、黒瓦有り 施成 良好 調整 施部赤切り後ナデ、貼り付け高台 色調 10YR6/1灰褐色	体部一部 高台部1/8	
236	小窓	I-2	東造系	12C前	E	E3	SR8		(3.4)	断土 2.5mmの大網砂合む 施成 良好 調整 貼り付け高台、表わら痕?スノコ痕? 色調 5Y6/1褐色	体下部1/3 高台部完形	
237	小窓	III-2	東造系	13C後	E	C3	SR8	断面土中	(11.6)	断土 4mmの大網砂合む、黒瓦有り 施成 良好 調整 内外面赤切り痕 色調 N6/1灰褐色	体部一部 高台部1/8	
238	山形縫		湖美	13C後	E	D3	灰色粘土層		(18.0)	断土 黄土、4mmの大網砂合む 施成 良好 調整 施剥めたり痕を消す、高台部欠損、内 面剥はれき裂、内外面陥没崩竹苔 色調 5Y7/1灰白色	口縁部～底部1/5	
239	かわらけ			15C	E	D3	SR8	断面土中	(6.2)	断土 3mm大網理、2mmの大網砂合む 施成 良好 調整 施剥の為不規、外延部付近に段化物 付着 色調 10YR7/3に近い黄褐色	體部1/6 体部一部	
240	かわらけ			15C	E	E3	SR8	断面土中	(7.0)	断土 2mmの大網砂合む 施成 良好 調整 施剥の為不規、底部赤切り痕 色調 7.5YR7/6褐色	体下部一部 底部1/6	
241	かわらけ			15C	E	E3	SR8	断面土中	(6.4)	断土 1mm大網砂合む、わずかに黒瓦有り やけ 施成 良好 調整 壁剥の為不規、施剥赤切り痕 色調 10YR8/3灰褐色	体下部1/8 底部1/4	
242	かわらけ			15C	E	E3	断面土中		(6.0)	断土 1mm、2.5mmの大網砂合む 施成 不良 調整 壁剥の為不明 色調 7.5YR6/6褐色	体下部1/4 底部1/4	
243	内耳牆			15C後 ～ 16C前	E	E3	SR8	断面土中	(29.0)	断土 3mmの大網砂合む 施成 良好 調整 施剥の為不明、内面ハケで統調整して いる 色調 10YR8/4に近い黄褐色	口縁部～体下部 1/12	
244	上輪沿 66			16～11C	A	D6	断面土中		(13.0)	断土 2mmの大網砂合む 施成 良好 調整 内外削ナデ 色調 10YR7/4に近い黄褐色	口縁部1/8 体部一部	
245	丸瓦		東造系	破壊	A	E5	断面土中			断土 紗っぽい 施成 良好 調整 一端へら削り 色調 7.5Y7/1灰褐色	-	
246	小窓	上志 戸鳥	志戸鳥	17C前	A	E6	断面土中		(5.6)	断土 瓦網～1.5mmの白色粒子合む 施成 良好 調整 正方形赤切り後ナデ、貼り付け高台、外 面へア所リ? 色調 2.5YR5/1赤褐色	体部一部 高台部1/4	

構造番号	種類・型形	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	部位通稱	口径(cm)	進深・高さ径(cm)	基高(cm)	胎土・焼成・陶質・色調	残存率
247	鉢輪小窓	上芯 戸口	志戸呂	17C前	A	D7	暗灰色粘土層		(7.4)		胎土 真石。2mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 遠部へテラ削り?、外側へテラ削り、鉢輪がかかる 色調 断面SYR5/3にぶい赤褐色 外壁10YR5/3の赤褐色 色面10YR2/2黒褐色	体部一部
248	鉢輪輪郭	三ツ表	志戸呂	15C後	A	D6	トレンチ内		(13.6)		胎土 7mmの大、2mm以下の細砂含む 焼成 良好 調査 調査は切り取る、断面15mm幅か? 色調 内外面7.5YR4/2赤褐色 断面SYR6/6褐色	底部1/8
249	縦列	上芯 戸口	志戸呂	17C前	A	E5	縦列土中		(4.7)		胎土 1mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 内外表面がかかる 色調 断面7.5YR5/2褐色 底SYR4/2オーブー黃色	口縫部1/4
250	青銅輪郭		肥前	17C前	A	E5	縦列土中		(11.6)		胎土 長石、1mm以下の細砂含む 焼成 良好 調査 内外表面に細砂含む 色調 内外面SY4/4のオーブー色 外壁SYR3/3オーブー黃色	口縫部～体部1/16
251	鉢輪輪郭		肥前	18C前	A	D7	縦列土中		(38.0)		胎土 真石 焼成 良好 調査 全体的に細砂がかかる 色調 外壁2.5YR3/3黒褐色 底SY7/1灰白色	口縫部1/20 体部一部
252	染付 磁	伊万里	18C前	A	D7	縦列土中					胎土 真石 焼成 良好 調査 外面に染付、脚部厚(13.0cm) 色調 SYR6/6灰白色	体部1/13
253	染付 磁	伊万里	18C前	A	E5	縦列土中		(11.0)			胎土 漆黒 焼成 良好 調査 口縫部紅口、外壁に染付 色調 外壁SY6/1灰白色 口縫部SYR4/4褐色	口縫部～体部1/12
254	鉢輪上板			18C前	A	E5	縦列土中		(8.9)		胎土 硬化 焼成 良好 調査 天井部に胎を描いている 色調 外壁SY7/2灰白色 脚SY2/1黒色	1/16
255	灰陶脚置	O-53 併行	那須	18C初	B	H4	水田面	(14.0)	6.65	4.5	胎土 1mm以下の細砂含む、量原石有り 焼成 良好 調査 底部へテラ削り、貼り付け高台(三内高台風)、外表面有り 色調 10YR7/1灰白色	口縫部1/3 体部1/4 高台部充形
256	由来痕	1-2	誠美	18C前	B		縦上層		(7.0)		胎土 3mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 底部有り(ラブ江底)、底部やミ痕、内面 追加地有り 色調 SY7/1灰白色	体部下～高台部1/2
257	折輪深皿	後縫 1塗	誠美	14C後	B	F5	ペルト内				胎土 長石、3mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 切削後(22.5cm)、颈部厚(30.0cm) 色調 脱2.5YR3/6褐色 断面2.5YR3/1灰白色	別部～縫部1/16
258	結構輪郭	シブ 波	志戸呂	15C後	B	I16	縦列土中		(30.0)		胎土 4mmの大いな焼合む 焼成 良好 調査 細砂がかかる、片口 色調 2.5YR3/6褐色	口縫部～体部1/16
259	鉢輪 大浮茶碗	大4割	那須-i	16C末	B	G4	縦列土中 (焼付の器)		(13.2)		胎土 長石、2mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 内外表面に粗砂がかかる 色調 粗砂10YR7/2にぶい黄褐色 脚SYR6/3にぶい赤褐色	口縫部1/28 体部1/9
260	灰陶急須			18C前	B	不規	粘土中		(10.4)		胎土 硬化、2mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 剥り出し高台、外表面へテラ削り、灰釉が かかる 色調 断面SY7/2灰白色 脚SYR6/3オーブー黃色	体部一部 近部1/11
261	小碗	1-2	史迹系	12C前	C	D3	胎上 (底付の少し上) 縦列土中		(9.0)		胎土 長石、3mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 内外面ナラ 色調 2.5YR7/1灰白色	口縫部1/9 体部一部
262	熱帶紋跡	後縫 Naka 大1	誠美	15C末	C	I4	椚山面				胎土 3mmの大いな細砂含む 焼成 良好 調査 細砂がかかる 色調 10YR4/4赤褐色 脚SYR6/1灰白色	体部一部

標識 番号	器種・ 種別	型式	面地・ 材質	時代	区	グリッド	層位遺構	口径 (cm)	底径・ 高さ(往 き)(cm)	断面 (cm)	断土・地城・調査・色調	残存率
263	灰陶盤	盤 から 後	焼成	18C末	C	J4	調査K南SP内				胎土 長石、2mm大の細砂含む 燒成 良好 調査 内面に跡がかかる。深部約7.2cm 色調 細2.5Y7/2灰青色 2.5Y6/1灰白色	体部一部
264	白磁花瓶		肥前	19C前	C	I3	検出面				胎土 白磁 燒成 良好 調査 口沿径(4.2cm) 色調 地面NB/ 灰白色 青磁釉3GY7/1明緑灰色	瓶部一部
265	土瓶藏	瓶5か り9		18C後 ～ 19C前	C	I4	壁上 植物土中	(7.8)			胎土 黒褐色有り 燒成 良好 調査 外面に跡がかかる。内外面にナマコ附 がかかる。内面赤み切り底。合せ口 調査 剥離出し 色調 地面2.5Y7/2灰白色 2.5Y6/1灰白色 ナマコ附5GY1/1灰褐色	口縁部1/3 体部一部
266	灰陶輪 甌	O-55 平行	助宗	10C初	D	G2	剖面土中		(7.4)		胎土 1mm以下の中粒粘土含む 燒成 良好 調査 頂部赤み切り甌。貼り付け高台 色調 2.5Y7/1灰白色	体下部1/6 高台部1/2
267	小甌	I-2	東道系	12C中	D	G2	水回面		(5.0)		胎土 白色粘土わずかに含む 燒成 良好 調査 地面赤み切りナデ 色調 7.5Y6/1灰褐色	体部一部 高台部1/5
268	山茶碗	II	東道系	12C後 ～ 13C初	D	G2	水田 耕作灰色粘土層		(7.8)		胎土 長石わずかに含む 燒成 良好 調査 地面赤み切り甌。貼り付け高台 色調 7.5Y6/1灰褐色	体部一部 高台部1/5
269	白磁瓶	瓶類	中壇	12C	D	G2	褐色粘土層				胎土 精密 燒成 良好 調査 内外面に跡がかかる 色調 地面5Y8/1灰白色 白磁釉7.5Y6/1灰白 色	口縁部一部
270	山茶碗	蓋+1	東道系	13C初 ～ 13C中	D	G2	輪溝 耕作灰色粘土層		(6.6)		胎土 2.8mmの大穢。1mm以下の白色・黒色 粒子含む 燒成 良 調査 底部赤み切り底。貼り付け高台、内面草 ね感強 色調 5Y6/1灰褐色	体下部一部 高台部1/2
271	小甌	III	東道系	13C代	C	I4	地中の少し上 植物土中		(8.0)		胎土 長6.2mm以下の細砂含む 燒成 良好 調査 内外面ナデ 色調 SY7/1灰白色	口縫部1/8 体部一部
272	青磁 蓮瓣紋鏡	B1	中国	13C中 ～ 14C前	D	I2	耕作灰色粘土層				胎土 精密 燒成 良好 調査 外面電気文 色調 色2.5Y7/1灰白色 青磁釉10G7/8/1明緑灰色	体部一部
273	鐵鑄 火口茶碗	後期 III	古跡+4	15C前	D	G2	剖面土中		(11.6)		胎土 長石、2mm大の細砂含む 燒成 良好 調査 内外面に斑点がかかる 色調 虹色5Y6/1灰白色 第19TK2/2黒褐色	口縫部1/10 体部一部
274	白磁小皿	B群	中国	15C前	D	G2	植物土中				胎土 1mm以下の細砂含む 燒成 良好 調査 伝統へラ削り、内外面つけかけ 色調 内面SY3/1ヒープ褐色 外面2.5Y6/1灰白色 第2.5V7/2灰褐色	高台部欠損 體部一部
275	甌	中壇9	滑石	15C前	D	G2	埴塗				胎土 長石、3mm大の混合含む 燒成 良好 調査 内面ナデ 色調 内面SY7/1灰白色 外面2.5Y8/3灰白色	口縫部一部
276	黄火丹 茶碗	壺1か 段2に 併行	美濃流	17C初	D	I2	褐色粘土層		(11.6)		胎土 長石、2mm大の細砂含む 燒成 不良 調査 斧刃不良の赤鉄鉱の発色不良(本体は黒 褐色) 色調 2.5V7/1灰褐色	口縫部～体部一部
277	铁製油樽	火4	志戸島	16C末 ～ 17C初	D	G1	褐色粘土上の 灰 褐色粘土層		(19.4)		胎土 長石、2mm大の混合含む 燒成 良好 調査 底部赤み切り底。外側鉄鉱がかかる。… 内部鐵鉱をさかげとす 色調 内面SY6/4に赤い斑点 内面SY2/1墨褐色	体部3/11 底部1/5

標 番号	面積・ 地形	型式	東南・ 材質	時代	EC	グリッド	現地測量	口径 (m)	面積・ 高台性 (m)	標高 (cm)	勘上・焼成・調整・色調	残存率
278	鉢形 大口灰陶	第1か 第2	美濃	17C前	D	G1	褐色粘土層				粘土 良石 焼成 良好 調整 内外面に跡跡がかかる、外側へラ剥り? 色調 赤地2.5Y7/7灰黄色 物7.5Y3/2土リープ黒色	体部一部 標高1/6
279	輪郭鉢	志戸呂	17C前	D	E2		輪郭灰陶粘土層	(28.4)			粘土 2mmの粗砂含む 焼成 良好 調整 内面一部と外側全体に陶片付着、全体に難削がかかる 色調 内面10YR2/2黒褐色 断面10YR6/3C灰褐色	11段部約1/15 体部一部
280	輪郭體鉢	志戸呂	18C末	D E	G2 F2		輪郭土中	(31.6)			粘土 焼成 良好 調整 内面一部付着付着、難削がかかる 色調 赤地7.5YR1/1灰褐色 断面10YR6/3C灰褐色 結節7.5YR5/3C灰褐色	口徑部約1/11 体上部1/19
281	かわらけ		16C	D	H2		輪郭土中		(6.2)		粘土 焼成 良好 調整 内面一部付着付着、難削がかかる 色調 7.5YR7/7灰褐色	底部3/4側
282	かわらけ		16C	D	I1		輪郭土中		(6.4)		粘土 3mmの大粒合む 焼成 良い 調整 所産の為不明 色調 7.5Y8/6灰褐色	体部一部 底部1/7側
283	かわらけ		16C	D	I2		褐色粘土上層				粘土 粗砂含む 焼成 良 調整 摩耗の為不明 色調 7.5Y8/6灰褐色	体部一部
284	鉢形青伊	志戸呂	17C前	E	不明		褐色粘土層	(10.4)			粘土 焼成 良 調整 内面に轟神付近と外側に跡跡がかかる 色調 赤地5YR5/5C灰褐色 断面10YR2/1褐色	口縁部1/9
285	焼成 瓢	伊万里	18C	D E	H1 E2		本田面 輪郭土中	(10.4)			粘土 焼成 良好 調整 外側に付着 色調 5Y7/1IC白色 本田10G6/1青灰色	口縁部1/10側 体上部1/10
286	塗付 瓢	伊万里	18C	D	G19 G2		不明		(12.6)		粘土 焼成 良好 調整 内底面に難削 色調 5Y6/1IC白色 細部10YB1/1灰白色 塗付10G6/1青灰色	口縁部1/35 体上部1/12
287	塗付 丸茶碗	伊万里	18C	D	I2		褐色粘土上層				粘土 焼成 良好 調整 内底面に塗付 色調 赤地10Y5/1IC白 塗付5H4/1明青灰色	体部一部
288	黄褐色 片口鉢	第4	漆戸	18C 中質	D	I2	褐色粘土上層	(13.4)			粘土 焼成 良好 調整 外側面に難がかかる 色調 素地2.5Y7/1灰白色 物2.5Y5/2灰褐色 2.5Y3/2土リープ褐色	口縁部1/1 手口部一部
289	白磁面		19C前	D	I2		褐色粘土の上層		(2.8)		粘土 焼成 良好 調整 内外面に難がかかる 色調 素地NB8/8灰白色 素地2.5Y7/1明オーリー ー色	体下部1/4 高右部1/4
290	原始灰陶 灰陶瓶	O-19 植行	漆挽	AC末	D E	F2 G4	水田面 灰の堆 灰陶粘土層				粘土 焼成 良好 調整 外側灰陶? 附灰陶? がかかる。外側へ 少削り 色調 赤地5Y6/1IC白 物7.5Y5/2M0オーリー色	脚部1/4
291	水田陶器 手付板	K-90 併行	軟焼	9C後	I	G2 G3 F2	輪郭土上 褐色粘土層		(11.4)		粘土 焼成 良好 調整 底部系帶り後ナガ、一部あつり焼へラ 削り 内外面に難付着 色調 7.5Y8/1IC白色	体部一部 高台部1/3
292	灰陶陶器 瓶	O-55 植行	東通系	18C前	E	E2	本田面		(6.0)		粘土 焼成 良好 調整 外側へラ剥り 色調 2.5Y7/1灰黄色 底地2.5Y7/1明オーリー灰褐色	体部一部 高台部1/4
293	灰陶陶器 瓶	O-55 植行	東通系	10C初	E	E2 F2	輪郭土中 褐色粘土層		(8.4)		粘土 焼成 良好 調整 外側へラ剥り 色調 5Y7/1IC白色	底部1/16

件号 登号	器種・ 形態	型式	產地・ 材質	時代	区	グレード	崩傾遺物	口径 (cm)	高台・ 基盤 (cm)	器高 (cm)	胎土・施成・調整・色調	現 状
294	灰陶陶器 瓶	O-53 併行	東道系	10C初	E	E2	壁上		(8.2)		胎土 長石、1mmの大約砂含む 施成 良好 調整 斧立付高台 色調 黒褐色7.5Y7/1灰白色	尚下部1/7
295	系切り瓶	O-53 併行	東道系	10C初	E	E2	水田の一端下層		(5.2)		胎土 1mm以下の無砂含む 施成 良好 調整 重みらしい、外面跡付の為不明 色調 内面5Y6/灰白色 外面5Y7/1灰白色	伴下部～底部1/5
296	各切り瓶	O-53 併行	東道系	10C初	E	E2	壁		(11.7)		胎土 長石、1mmの大約砂含む 施成 良好 調整 内面へ付属り 色調 黒褐色5Y7/1灰白色 口沿部N4/ 灰色	口沿部1/15 全体2/11
297	小瓶	I	東道系	12C初 ～ 12C後	E	F3 E2	陶削上中 水面		(5.2)		胎土 長石、2mm以下の無砂含む 施成 良好 調整 盆底赤切付サケ、斧立付高台 色調 N6/ 灰色	全体一部 高台2/2
298	片口瓶		湖田	13C後	E	G3	水田衝				胎土 3.2mmの大約砂含む 施成 良好 調整 内外へ付属り 色調 10YR7/1灰白色	全体下部1/8 底部わずかに残存
299	青磁蓋面	A-28	中國	12C ～ 13C初	E	G2	焼削土 層削土中				胎土 褐釉 施成 良好 調整 内面に凹模文を有する 色調 黑褐色7.5Y6/1灰白色 青磁釉10Y6/2オリーブ灰色	全体一部
300	青磁 窓透吸 留壁盤	A類	中國	14C末 ～ 15C初	E	F5	層削土中(鉢底)				胎土 褐釉 施成 良好 調整 内外面に削て文様を入れている 色調 SGY6/1オリーブ灰色	口沿部～全体 1/12
301	常滑 賽	小筈 (6a)	常滑	13C後	E	F2	層削土中	(26.0)			胎土 3mmの大約砂含む 施成 良好 調整 内面降低火附着 色調 10R4/1暗赤茶色 割7.5Y6/2オリーブ灰色 黑褐色5Y7/1灰白色	口沿部1/25
302	小瓶	III	東道系	13C代	D E	E2 G2	層削土中 壁上	(8.3)			胎土 1mmの大約砂含む 施成 良好 調整 内面降低火附着 色調 N7/ 灰白色	口沿部1/6 全体1/8
303	青磁瓶頸		中國	14C先	E	F2	層削土中 灰色粘土層	(14.0)			胎土 細密、長石含む 施成 良好 調整 カンニュウが入っている 色調 10Y5/2オリーブ灰色	口沿部～全体1/16
304	黑褐色釉 花瓶	東南 アジア タイ?	17C前	E	F2	焼削面		(8.2)			胎土 長石、1mmの大約砂含む 施成 良好 調整 外面に隙がかかる 色調 黑褐色7.5Y6/2灰白色 第N2/ 黑色	口沿部1/4前
305	青磁瓶頸	A類	中國 同安?	15C後	E	F3	層削土中		(5.2)		胎土 細密、良石、1mmの大約砂含む 施成 良好 調整 刻出し高台、内面全体に模印?がかかる 色調 黑褐色7.5Y6/1灰白色 青磁釉10Y5/2オリーブ灰色	1/3強
306	灰釉平輪 瓶	後期 IV古	瀬戸	15C 中型	E	G3	層削土中	(17.0)			胎土 長石含む 施成 良好 調整 外面に隙がかかる 色調 素地7.5Y6/2灰白色 灰褐色5Y6/1オリーブ灰色	口沿部1/13 全体一部
307	青磁瓶		中國	14C末	E	G3	焼削面	(21.4)			胎土 長石含む 施成 良好 調整 削って文様を入れている 色調 SGY7/1暗オリーブ灰色	口沿部1/12
308	青磁 邊合金 沿縫	B2類	中國	14C末 ～ 15C初	R	E3	陶削上中				胎土 褐釉 施成 良好 調整 重み放逐窓 色調 深褐色N8/1灰白色 油SGY6/1オリーブ灰色	口沿部一部 全体1/12
309	線縫小皿	後期 Ⅳ古	瀬戸	15C前	E	C4	層削土中		(5.4)		胎土 長石含む 施成 良好 調整 底部切切り瓶、外面部石縫?がかかる 色調 2.5Y5/2灰白色	全体一部 底部1/4
310	線縫小皿		瀬戸	15C前	E	E2	層削土中		(5.6)		胎土 1～2mmの大約砂含む 施成 良好 調整 底部切切り瓶、内外面に隙がかかる 色調 2.5Y5/2灰白色	全体下部～底部3/16

測定番号	基準・志形	型式	产地・材質	時代	区	グリッド	裏地調査	口径 (cm)	高台径 (cm)	深さ (cm)	土上・焼成・調査・色調	飛存率
311	灰施瓦院	後期Ⅲ	湖田	15C前	E	F3	面削土中	(20.1)			砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる。内面に火を受けた板あり 色調 赤系SY7/1或白色 細SY6/3オーラーブ黄色	口縁部～土上部1/18 体下部1/9
312	染付小皿		中国	15C中	E	G1	面削土中		(3.5)		砂上 焼成 良好 調査 内外面に施付 色調 赤系 赤系N8/4或白色 染付青色	体部わずかに飛存 高台部1/11
313	油付灰釉 染付片口	中期 Ⅲか IV	古瀬戸	14C 中頃	E	D3	面削土中				砂上 焼成 良好 調査 口縁部附近SY4/4或オーラーブ色 内外面施SY5/3オーラーブ黄色	口縁部附近～体部 1/3
314	灰施 下し皿	後期 Ⅲ	湖田	15C後	E	E2	側削土中	(14.5)			砂上 焼成 良好 調査 内面に施がかかる。外面側面焼成 色調 素地7.5Y7/1或白色 施7.5Y6/3オーラーブ色	口縁部1/36 土上部1/9
315	該物か 底	大小？ 大小？	湖田	不詳	E	E2	側削土中				砂上 焼成 良好 調査 内面に施がかかる。外面へラ削り 色調 7.5TR4/3褐色	体部1/5
316	灰施平皿	後期 IV	湖田	15C中 ～ 15C後	E	C3	壁上		(6.9)		砂上 焼成 良好 調査 近底へラ削り、底化物付着、削り出し 高台、外側へラ削り。内面側面焼成 色調 素地7.5Y7/1或白色 施7.5Y6/3オーラーブ黄色	体部～第一 高台部1/2強
317	鉢付き 大皿	後期 IV古	湖田	15C 中頃	E	E3	側削土中	(27.0)			砂上 焼成 良好 調査 内面に施がかかる 色調 2.5Y5/2或白色	口縁部～体部1/24
318	青磁茶碗		中国	15C	R	D4	水田中層	(13.6)			砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 素地7.5Y8/1或白色 青磁7.5Y5/3或オーラーブ色	口縁部1/20
319	該物小皿	後期 IV新	湖田	15C後	E	E2	側削土中	(10.4)			砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 2.5Y5/3オーラーブ色	口縁部～体部1/6
320	該物漆林	ニフ 沢	志賀島	15C後	E	C4	側削土中	(20.9)			砂上 焼成 良好 調査 全体に絞輪がかかる。外表面施燒有 色調 2.5Y5/3に似い赤褐色	口縁部1/14
321	該物漆林	ニフ 沢	志賀島	15C後	R	R2	側削土中	(17.6)			砂上 焼成 良好 調査 内外面SYR5/4に似い赤褐色 施SYR7/3時相祝色	口縁部1/11 体部～部
322	該物漆林	ニフ 沢	志賀島	15C後	E	F3	機山窯	(26.0)			砂上 焼成 良好 調査 断面に底化物付着 色調 7.5VR6/4或早い褐色	口縁部1/12 体部～部
323	該物漆林	ニフ 沢	志賀島	15C後	E	E2	SY5 砂漬灰色釉土層 側削土中	(29.3)			砂上 焼成 良好 調査 絞輪がかかる 色調 内面SYR4/1赤灰 外表面(絞輪)7.5YR5/3に似い褐色 斜面 SYR6/3に似い褐色	口縁部1/11 体上部約1/20
324	該物漆林	ニフ 沢	志賀島	15C後	E	G2	機山窯				砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 10VRG/4に似い赤褐色 斜7.5YR4/3褐色	
325	該物小皿	ニフ 沢	志賀島	15C後	E	G3	側削土中	(10.3)			砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 5gS/1青灰色	口縁部～体部1/12
326	青磁碗	E種	中国	15C後 ～ 16C前	D E	G1 E2	壁上層 側削土中		(5.0)		砂上 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 青磁7.5Y5/3或オーラーブ色	体部～部 高台1/4

測定 番号	組織・ 樹形	型式	産地・ 材質	時代	区	グリッド	層位選択	口径 (mm)	範囲 (mm)	高台性 (mm)	固有 (mm)	土質・塊成・鉱物・色調	残存率
327	白鶴小頭		中国	15C後	E	G3	樹脂土中		(4.0)			粘土 硬塑 焼成 良好 調査 外面に施がかかる 色調 5Y8/1K白色	体部一部 高台部3/11
328	結節細鉢	後期 N新	瀬戸	15C後	E	F1	樹脂土中	(31.2)				粘土 2mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 合体に施がかかる 色調 油灰10Y7R/1K淡黄色 鉄錆SYR6/1K褐色	口袋部1/20
329	灰輪 堅厚堅膜	後期 N新	古瀬戸	15C後	E	E3	樹脂土中		(4.8)			粘土 砂石、1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 壊壊、外へラブリ。割り出し高台、 内面に跡がある 色調 実地2.5Y7/2K白色 動7.5Y7/2K白色	体側わずかに残存 高台部1/5
330	結節粗鉢	後期 N新	瀬戸	15C末	E	F2	樹脂土中	(25.4)				粘土 繁密 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 5Y8/1K白色 断面2.5Y5/2K白色	口袋部1/30 体側わずかに残存
331	鉄輪 天日焼窯	大1	瀬戸	15C末 ～ 16C初	E	G3	土上層		4.2			粘土 1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 高台全面に施がかかる。割り出し高 台、内面に施がかかる 色調 斜面10Y7R/1K淡黄色 鉄錆SYR6/1K褐色	高台部3/4
332	灰輪 天日焼窯	大1	瀬戸	15C末 ～ 16C初	E	E2	樹脂土中					粘土 1mm以下の白色粒子含む 焼成 良好 調査 合成に施がかかる、外面へラブリ？ 色調 高地2.5Y7/1K白色 鉄錆2.5Y5/2K淡黄色	体部1/5強
333	灰輪丸鉢	大1	美濃	15C末 ～ 16C初	E	F3	椚山面					粘土 3mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 壁り付け高台、高台部欠損 色調 2.0%2K白色 動7.5Y6/3オリーブ色	体部一部 底部3/4
334	端反 丸鉢	大1か 大2	美濃	16C初 ～ 16C中	E	E3	樹脂土中		(6.4)			粘土 1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 剥り出し高台、内面に骨頭跡がかかる 色調 密地3Y7/1K白色 内面GY7/1耐ホリ ープ色 高台部2.5GY7/1明緑灰色	体部一部 高台部1/4
335	結節連鉢	後期 N新	瀬戸	15C末	E	E3	樹脂土中		(9.2)			粘土 繁密 焼成 良好 調査 施工未切り高台、焼成物付着、結構がか かる、二次焼成を受けている可能性あり 色調 斜面SYR6/1K褐色 地面SYR6/1K白色	体下部4/5 底部2/10
336	鉄輪 天日茶碗 加口腹	後期 N新	古瀬戸	15C 中前	E	E3	椚山面		4.2			粘土 着石、1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 壁り付け高台、内面に施がかかる。 火災受けた可能性あり 色調 高地5Y7/1K白色 動5Y2/1黒色	体部一部 高台部ほぼ完形
337	白研 梅花瓶		中国	16C中	D-E	G2	樹脂土中 樹脂土上邊 椚山面	(10.2)	?			粘土 繁密 焼成 良好 調査 内面に竹の剥削、内面削打ち、外面に わざかに凹み有り、口縁部波状にカッ としている 色調 白色	口縫部1/8 体部一部
338	結唐草鉢		唐津	16C後	E	F2	樹脂土中					粘土 4mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 外面剥離へラブリ。内面施がかかる 色調 地面2.5Y6/2Kオリーブ色 外面SYR6/1K褐色	体下部1/8
339	鉄輪丸皿	大3	美濃	16C後	E	G3	壁上		(12.0)			粘土 1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 10Y7R/6褐色	口縫部上半部1/8
340	灰輪丸皿 か・端反丸皿	大1か 大2	美濃	16C後	E	F2	樹脂			(6.0)		粘土 着石、1mmの大網砂含む 焼成 不良 調査 内外間に施がかかる。壁り付け高台、 底面より剥離 色調 壁(3)2.5Y5/3青褐色 底(3)2.5Y4/2青褐色	高台部1/4
341	灰輪丸皿	大4	美濃	16C末 ～ 17C初	D-E	F2	樹脂土中 砂凝り 灰色筋土層 高砂土層	(10.0)	(5.4)			粘土 1mmの大網砂含む 焼成 良好 調査 壁り付け高台、施がかかるか？ 内面にクロ水色 色調 高地2.5Y8/2K白色 地2.5Y4/4にぶい黄色	口縫部～体側1/5 底部1/9

編 番 号	器種・ 形態	型式	成土・ 材質	時代	区	グリッド	層位選択	口徑 (cm)	奥深・ 高台差 (cm)	頂高 (cm)	鉢土・焼成・調製・色刷	後存率
342	灰釉丸皿 か壺灰皿	大1か 大2	美濃 志摩	16C後	E	E3 F3	縦削土中		(6.0)		鉢土 焼成 良好 調製 窓部サヤに入れて焼いた紙、貼り付け 高台 内外面焼がかかる 色調 内底10Y5/2オーブ灰 外底10Y7/2灰 高台部10Y4/2オーブ灰 色調	底部1/2弱 高台部2/5
343	灰釉丸皿 か壺灰皿	大1か 大2	美濃 志摩	16C後	E	E2	縦削土中		(6.2)		鉢土 焼成 良好 調製 削出し尚有、内外剥離がかかる 色調 窓底3Y7/1灰白色 細1.5Y7/1灰白色	高台部1/12
344	灰釉丸皿	大2か 大3	美濃	16C中 ～ 16C後	E	F3	縦削土中		(6.5)		鉢土 焼成 良好 調製 窓部に焼がかかる、貼り付け高台、 高台部欠損 色調 内底10Y6/2オーブ灰 外底10Y7/3淡黄色	底部1/8
345	灰釉丸皿	大2か 大3	美濃	16C中 ～ 16C後	E	F2	縦削土中 堆上		(7.0)		鉢土 焼成 良好 調製 16年春花、削り出し尚有、外縁に青斑 焼がかかる 色調 火照1.5Y7/1灰白色 内底7.5Y6/3オーブ黄 7.5Y5/3オーブ灰	体部一部 高台部1/6
346	淡胎 天目茶碗		志摩・ 四	16C後	E	C4	縦削土中	(12.0)			胎石、2mm以下の細砂含む 焼成 良好 調製 内外剥離がかかる、内面一部剥離 底地5Y7/1灰白色 細1.5YR2/1灰色	口縁部～体上部1/11
347	淡胎 天目茶碗		志摩・ 四	16C後	E	G1 F2	横削土 堆削土中				胎土 焼成 良好 調製 全体に鉢底がかかる 色調 底地10Y6/2灰白色 火照2.5Y7/3暗黒	体部1/10強
348	淡胎 天目茶碗		志摩	16C後	E	E3	縦削土中		(12.5)		胎土 焼成 良好 調製 内外縁に焼がかかる 色調 底地5Y6/1灰白色 細10Y5/2灰青褐色	口縁部1/12 体部1/9
349	淡胎 天目茶碗		志摩	16C後	E	F3	縦削土中		(5.4)		胎土 焼成 良好 調製 南り出し尚有、内面全体に剥離がかかる 色調 外底10Y6/2 淡褐色	高台部1/5
350	淡胎 天目茶碗		志摩	16C後	E	E2 E6	縦削土中 堆の根		(12.0)		胎土 焼成 良好 調製 内外縁に焼がかかる 色調 底地10Y6/1灰白色 細10Y2/1灰白色	口縁部1/15 体部1/9
351	灰釉中皿		志摩	16C後	E	F2	縦削土中		(10.0)		胎土 焼成 良好 調製 内外縁に焼がかかる 色調 10Y6/1灰白色 細10Y4/2淡オーブ色	口縁部1/18 体部一部
352	淡胎 茶人		志摩	16C後	E	E2	縦削土中		(4.0)		胎土 焼成 良好 調製 底部へ剥離り、内外面剥離がかかる 色調 底地5Y6/2灰褐色 細1.5YR2/3暗褐色	底部1/3
353	淡胎小壺 (茎人)		志摩	16C後	E	E3	縦削土中		(4.0)		胎土 焼成 良好 調製 底部へ剥離り、内面剥離がかかる、 外縁へ剥離り? 色調 前頭7.5Y5/1 細1.5Y2/1 黒色	体部一部 底部1/2
354	淡胎小杯		志摩	16C後	E	G2	縦削土中		(8.0)		胎土 焼成 良好 調製 内外縁に焼がかかる、内面剥離がかかる 色調 10YR2/3暗褐色	口縁部～体部1/12
355	淡胎香炉		志摩	16C後	E	F2	土手の縫		(12.0)		胎土 焼成 良好 調製 窓部に溝をかけず内面口縁部と外 面に鉢底がかかる 色調 1.5YR6/4灰褐色 7.5YR6/4灰褐色 7.5YR2/3墨色	口縁部1/10
356	淡胎香炉		志摩	16C後	E	F2	縦削土中 堆削面		(13.4)		胎土 焼成 良好 調製 内面に窓部に焼がかかる 色調 内底7.5Y5/4灰褐色 外底10YR2/3暗褐色 10YR2/3墨色	口縁部1/20

標識 番号	面積・ 形状	型式	草場・ 材質	時代	区	グリッド	断面遺構	口径 (cm)	直径・ 高さ (cm)	周高 (cm)	地盤・地成・調査・色調	残存率
357	鉄輪苦芋		志戸呂	16C後	E	F3	楕円土中	(11.8)			地盤 2mの大の圓筒、長石合む 地成 良好 調査 口部部に鉄輪がかかる 外側に鉄輪がかかる 素地:0YR7/3K白色 埋10YR2/2K褐色 10YR5/1K褐色	口経部1/4
358	鉄輪小屋		志戸呂	16C後	D E	E2	褐色粘土上の上層 粘土土中	(9.6)			地盤 緩密 地成 良好 調査 全体に鉄輪がかかる 色調 10YR4/1K褐色	口経部1/3 本部一部
359	鉄輪利		志戸呂	16C後	E	E2	粘土土中	(6.0)			地盤 1mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 内外全面鉄輪がかかる 色調 素地:5Y7/6K褐色 10Y5/3Kオーライプ色 7.5Y2/3褐色	口経部1/4
360	鉄輪小屋		志戸呂	16C後	E	E2	椭円土中	(8.4)			地盤 1m以下の細砂含む 地成 良好 調査 内外全面鉄輪がかかる 色調 素地:7.5Y6/1K褐色 10Y5/3Kオーライプ色	口経部～本部1/6
361	瓦輪中屋		志戸呂	16C後	E	F3	粘土土中	(6.0)			地盤 長石含む 地成 良好 調査 施工部に反発の指詰痕残存、削り出し高台? 色調 7.5YR3/3にK褐色	高台部1/6
362	口堀Ⅲ		志戸呂	16C後	E	E2	椭円土中		5.4		地盤 3mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 施工部へ削り、削り出し高台、内面直 接引き抜、施は難か? 色調 素地2.5YR5/3K褐色 内面10YR5/3にK褐色	高台部1/2
363	鉄輪 内免壁		志戸呂	16C後	E	E3	椭円土中	(6.0)			地盤 長石含む 地成 良好 調査 内面一部に鉄輪がかかる、削り出し高台? 色調 素地:5Y6/3にK褐色	本部一部 高台部1/7
364	鉄輪小屋		志戸呂	16C後	E	F3	椭円土中	(9.8)			地盤 2mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 内外全面鉄輪がかかる 色調 2.5YR3/3にK褐色	口経部～本部1/8
365	鉄輪臺		志戸呂	16C後	E	F2	楕円面		(9.1)		地盤 1mの大の圓筒、白色粒子含む 地成 良好 調査 外側鉄輪がかかる 色調 素地7.5Y5/3K褐色 埋10Y5/1K褐色	高台部1/5
366	鉄輪底跡		志戸呂	16C後	E	G2	椭円面 風化泥炭褐色 粘土上層				地盤 2mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 鉄輪がかかる 色調 7.5YR3/3にK褐色 素地:10YR7/1K白色	本部一部
367	橋跡		志戸呂	16C後	E	C3	粘土土中	(20.0)			地盤 2mの大の圓筒含む 地成 不良 調査 施工の為不明 色調 10YR7/3にK褐色	口経部1/12
368	鉄輪車		志戸呂	16C後	E	G2	楕円面 粘土土中		(10.6)		地盤 1mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 外側に鉄輪がかかる 色調 素地2.5Y7/1K褐色 埋10YR2/1K黑色	本部わざかに現存 部部1/6
369	鉄輪車跡		志戸呂	16C後	E	D4	椭円土中				地盤 長ら、1mの大の圓筒多く含む 地成 良好 調査 外側に鉄輪がかかる 色調 7.5YR7/6褐色 埋7.5YR4/2K褐色	
370	鉄輪遺跡		志戸呂	16C後	E	E2 F2	粘土土中		(7.5)		地盤 3mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 外側へ削り後ナデ?、一帯に鉄輪が かかる、削り木か? 色調 5YR5/3にK褐色	本部～高台部1/3
371	鉄輪車跡		志戸呂	16C後	E	F3	椭円土中	(22.4)			地盤 4mの大の圓筒含む 地成 良好 調査 内面10YR7/4K褐色 素地7.5YR6/3にK褐色	口経部1/20 本部一部
372	鉄輪車跡		志戸呂	16C後	E	D3	粘土土中	(30.0)			地盤 4.7mの大の圓筒含む 地成 不良 調査 施工の為不明、複雑な作り 色調 10YR7/4にK褐色	口経部～本部1/12

編番	器種・ 部形	型式	成地・ 材質	時代	区	グリッド	断面構造	口径 (cm)	直径・ 高さ(深さ) (cm)	断面 (cm)	断土・成土・調査・色調	残存字	
373	縦隔壁		志戸呂	16C後	E	P2	盛土埋	(27.0)			粘土 焼成 調査 色調	3m以下の中、表面の白色粒子含む 良好 全体に粘土がかかる 表面10YR7/6褐色 深部5YR1/3黒褐色	口縦部1/13
374	鉢物体		志戸呂	16C後	E	E2	調剖土中	(22.0)			粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 内部削鉗跡がかかる、口唇部に重ね堆 き層 内壁: 5Y3/2(赤土) ピーブ色 外底: 2.5Y5/3(赤褐色)	口縦部1/8
375	縦隔壁		志戸呂	16C後	E	E2	調剖土中	(10.0)			粘土 焼成 調査 色調	2m大の調砂、1m以下の長石含む 良好 底部含み切り状、外面部調痕複数、一部 に剥落がかかる 2.5YR5/6(赤褐色)	体部1/12 底部1/8
376	縦隔壁		志戸呂	16C後	Z	C3	块状面より 上の層		(14.2)		粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 底部含み切り状、外面部調痕複数、序盤 の角不規 10YR7/6(赤褐色)	体部-底部1/8
377	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F3	検査面	(10.0)			粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 内面クロコ水模様 色調 断面10YR7/6(赤褐色) 基5Y7/1(赤白色)	口縦部1/11 体部わざかに我存
378	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F3	検査面		(5.0)		粘土 焼成 調査 色調	3m以上に調砂含む 良好 削り出し高台、内面クロコ水模様 色調 断面2.5Y7/1(赤白色) 基2.5Y7/2(赤褐色)	高台部約1/8
379	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F2	調剖土中		(6.0)		粘土 焼成 調査 色調	2m大の調砂含む 良好 削り出し高台、内面クロコ水模様 色調 断面2.5Y7/2(赤白色) 基5Y8/2(赤白色)	体部一部 高台部1/1
380	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	R2	調剖土中		(7.0)		粘土 焼成 調査 色調	4m大の複合む 良好 削り出し高台？ 色調 SV3/1(赤白色)	体部一部 高台部1/8
381	灰釉 志野丸皿	浦15	志野	17C前	E	E2	調剖土中	(11.0)	(6.0)		粘土 焼成 調査 色調	2m大の調砂含む 良好 底部内面单薄 色調 断面10YR8/2(赤白色) 基5Y7/2(赤白色)	口縦部1/15 高台部1/4
382	志野 板輪小皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	E2	調剖土中				粘土 焼成 調査 色調	長石含む 良好 内面鉄粉、底部最大厚 0.6cm 外底: 5Y8/2(赤白) 内面10YR5/2(赤白)	西部一部
383	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F1	横面埋	(12.0)			粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 内底面に粘土がかかる 色調 2.5Y7/2(赤褐色)	口縦部1/16 体部一部
384	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F2 G2	調剖土中	(10.0)			粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂、3m大の長石含む 良好 内外面に粘土がかかる 色調 2.5Y7/2(赤褐色)	口縦部1/17 体部一部
385	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	F5	調剖土中		(6.0)		粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 底部へ傾り、削り出し高台 色調 5Y8/1(赤白色)	体部一部 高台部1/16
386	志野伏輪 板輪小皿	径15+ 壁2	志野	17C前	E	F2 F3	検出面 調剖土中		(6.0)		粘土 焼成 調査 色調	2m大の調砂含む 良好 削り出し高台、内面墨書き？ 色調 10YR7/2(赤褐色)	体部わざかに我存 高台部約1/12
387	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	不規	不規		(0.0)		粘土 焼成 調査 色調	1m大の調砂含む 良好 削り付ける高台？、内外面部がかかる 色調 断面2.5Y7/2(赤白色) 基2.5Y7/3(赤褐色)	高台部1/19
388	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃	17C前	E	E2 G3	検出面 調剖土中	(11.0)			粘土 焼成 調査 色調	長石、2m大の調砂含む 良好 内外面墨書き 色調 断面2.5Y7/1(赤白色) 基2.5Y8/1(赤白色)	口縦部1/7
389	志野丸皿	径15+ 壁2	美濃志野	17C前	E	E2	調剖土中		(5.0)		粘土 焼成 調査 色調	長石、1m大の調砂含む 良好 底部へ傾り？、削り出し高台、内外 面部がかかる、内面底部にビン跡あり 色調 断面2.5Y7/2(赤白色) 基2.5Y7/3(赤褐色)	高台部1/14

序号	固形・ 膠形	型式	底地・ 材質	時代	区	クリップ	基盤追加	口幅 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	断土・地底・調整・色調	残存率
396	志野丸皿 登1分 壁2	?	黄泥志野	17C前	E	F2	掘削土中	(11.5)			断土 長石、1mm以下の粗砂含む 地底 良好 調整 内外面施がかかる 色調 斜面10YR5/6赤褐色 斜7.5YR1/4灰白色	口縁部1/13
397	志野 丸茶碗	登8分 壁9	?	18C末 ~ 19C初	E	G2	掘削土中		(4.4)		断土 1mm以下の粗砂含む 地底 良好 調整 内外面施がかかる 色調 斜面7.5YR1/4灰白色 斜7.5YR1/4灰白色	体下部1/6
398	常滑 瓢	常滑	16C	E	R3 F1 F2	掘削土中		(13.0)			断土 長石、3mmの大塊含む 地底 良好 調整 内外面施がおり 色調 2.5YR6/6褐色 2.5YR3/3C-SV1青褐色	体下部1/8 底部1/8
399	常滑 瓢	常滑	16C?	E	E1 E2	検山面 掘削土中					断土 長石含む 地底 良好 調整 内外面施がかかる 色調 内面10YR1/6灰褐色 外面7.5YR4/2 灰褐色 斜面5.5YR1/4灰白色 斜6YR 8/2灰白色	耳部残存
400	越後那 丸茶碗?	登50+ 壁7?	美濃	18C 中型	E	G2	掘削土中	(10.4)			断土 長石、1mmの粗砂含む 地底 良好 調整 壁部が元えもの、内外面に施がかかる 色調 2.5YR3/4深褐色	口縁部~体部1/8
401	淡輪 天目茶碗	登3	美濃	17C後	E	F1	検山面		(4.8)		断土 長石、1mmの粗砂含む 地底 良好 調整 瓶底へラ削り?、里付け高台、内面 全体に鉄錆がかかる 色調 外面3YR1/4灰白色 斜10YR1/7~ 黑色	体部一部 高台部1/2
402	志野小皿 登1分 壁2	美濃志野	17C前	E	F2	破出面 灰色粘土層	(32.8)				断土 2mmの大塊含む、黒錆有り 地底 良好 調整 内外面施がかかる、外周へラ削り強ナ ギ 色調 5YR1/4灰白色 斜面5YR2/2灰白色	口縫部1/6 体部一部
403	志野丸皿	登1	美濃志野	17C前	E	E2	掘削土中	(12.2)	(12.2)	2.5	断土 3mmの大塊含む、墨錆有り 地底 良好 調整 内外面施がかかる、外周へラ削り強ナ ギ 色調 5YR1/4灰白色	口縫部1/6 体部一部
404	志野小皿	登1分 壁2	美濃志野 の 遊び方	17C後	E	G3 F2	土坑内 焼削面 掘削土中	(12.6)	(6.0)	2.35	断土 長石、2mm以下の粗砂含む 地底 良好 調整 底部へラ削り、傾り出し高台、内外面 施がかかる 色調 斜面2.5YR2/2灰白色 外周底面2.5YR1/4灰白色 斜面5YR3/2青褐色	口縫部1/24 体部~近部1/11
405	鉄輪 天目茶碗	登3	瀬戸	17C中	E	F2	土坑内 焼削面 掘削土中	(11.1)			断土 長石、2mm以下の粗砂含む 地底 良好 調整 底部へラ削り、傾り出し高台、内外面 施がかかる 色調 斜面10YR4/2 斜面10YR4/3C-SV1深褐色N2/ 黑色	口縫部~体部1/6 高台部1/4
406	鉄輪 天目茶碗	?	?	17C初	E	G2 G3	柱土				断土 3~9mmの大塊含む 地底 良好 調整 施がかかる、体部と底部柱点無し 色調 5YR5/2深褐色 斜面5YR5/4青褐色	体部一部 底部1/6
407	鉄輪番舟	志戸焼	17C前	E	E3	掘削土中			(11.0)		断土 長石、2mmの大塊含む 地底 良好 調整 施がかかる、外周へラ削り、鉄錆が かかる (色調 素面2.5YR6/1灰褐色 斜N1.5/ 黑色	体部一部 底部1/9
408	鉄輪番舟	志戸焼	17C前	E	F2	検山面 掘削土中	(9.4)				断土 長石の大塊含む 地底 良好 調整 内外面錆一部と外周鉄錆がかかる 色調 素面2.5YR6/1灰褐色 斜N1.5/ 黑色	口縫部1/8
409	鉄輪番舟	志戸焼	17C前	E	F2	検山面 掘削土中 焼地層	(12.3)	(5.2)	3.2	断土 1mm以下の粗砂含む 地底 良好 調整 斜面へラ削り、内外面施がかかる、 外周一部へラ削り 色調 素面2.5YR3/3C-SV1青褐色	口縫部~体部1/6 高台部1/4	

測量 番号	測量 部位	型式	成地・ 材質	時代	K	Gリッド	層位選択	口径 (cm)	底質・ 底材特 (cm)	層高 (cm)	動土・施成・ 調査・仁刷	現存率
405 鉄輪 堆反復	壁1	美國	17C前	E	F2	G2	純砂面 黒油面 灰色粘土等黄色 砂面じり	(11.7)			動土 2m大の細砂含む 施成 良好 調査 内面に鉄筋がかかる。外面一部へラ削り 色調 黒7.5Y5/3底オーラブ色	口縦部1/11 体部1/7
406 灰袖丸皿	壁5か 壁6	美國	18C前	E	E2		粗削土中		(7.4)		動土 磐石、1m以下の細砂含む 施成 良好 調査 亂れへラ削りか？ 指標歴史保存 色調 水色2.5Y7/7灰白色 黒5Y6/3オーラブ色	体部～高台部1/7 底部1/8
407 灰袖丸皿	壁5か 壁6	美國	18C前	E	G1		砂利層	(9.4)	(4.2)	2.4	動土 1m大の細砂含む 施成 良好 調査 底部へラ削り、削り出し面台、内外面に鉄筋がかかる(つけかけ)。内面裏は底 面あり、外側一部へラ削り 色調 黒地2.5Y7/7灰白色 黒5Y7/7灰白色	体部1/9 高台部1/4
408 鉄輪 堆反復	逆扇4 か5	海戸	17C後 ～ 18C初	E	F3		水削面 粗削土中	(11.0)			動土 2m大の細砂含む 施成 良好 調査 内外面に鉄筋がかかる 色調 黒地2.5Y5/2灰白色 基7.5Y4/2灰褐色	口縦部1/20 体部1/10
409 鉄輪 天日茶碗	池2号4	海戸	17C後 第4層	E	C3		粗削土中			5.15	動土 3m大の細砂含む 施成 良好 調査 底部へラ削り、内外面鉄筋がかかる 色調 黒地2.5Y7/7灰白色 黑5Y1.7/71底色	高台部ほほ突形
410 鉄輪招林	壁6 小間	海戸	18C 前後	E	F3		粗削土中	(30.0)			動土 2m大の細砂含む 施成 良好 調査 鉄筋がかかる 色調 黒地2.5YR3/1暗赤紅色 所有10YR8/2灰白色	口縦部1/32
411 鉄輪丸皿		志戸呂	17C前	E	G3		粗削土中			(5.4)	動土 1.5m大の細砂含む 施成 良好 調査 粘り付け高台、内外面と底部一部に鉄 筋がかかる 色調 黒地2.5Y7/1 灰白色 鉄筋YR3/3底赤褐色	体部1/7 高台部1/4
412 鉄輪招林	発2	海戸	17C 第2 小期	E	E2		粗削土中	(27.0)			動土 磐石、1m以下の細砂含む 施成 良好 調査 全体的に鉄筋がかかる 色調 黒地2.5Y8/3底黄色 黑N1.5/ 墓色	口縦部1/23
413 鉄輪 天日茶碗	壁5	美國	18C初	E	E2		粗削土中	(10.0)			動土 磐石、2m大の細砂含む 施成 良好 調査 内外面に鉄筋がかかる 色調 黑地2.5Y8/3底黄色 黑N1.5/ 墓色	口縦部1/21 体部1/4
414 鉄輪招林		志戸呂	17C後	E	E2		擾乱				動土 磐石、3m大の礫含む 施成 良好 調査 全体に鉄筋がかかる 色調 10YK6/3に似い黄褐色	
415 表瀬塗 黄瀬戸 發里	壁5	高瀬 海戸	18C初	E	E2	F2	粗削土中			(6.2)	動土 2m大の細砂含む 施成 良好 調査 底部へラ削り、削り出し高台。内面 鉄筋がかかる。外面筋が飛れた痕あり、指 標歴史保存 色調 黒地2.5Y7/1灰白色 黑5Y6/6オーラブ色	体部1/5 高台部2/3
416 鉄輪 天日茶碗	壁1か 壁2	美國	17C前	E	G2		粗削土中				動土 2m大の細砂含む 施成 良好 調査 内面含むと外側一部に鉄筋がかかる 色調 黒地2.5Y7/1灰白色 黑N2/ 黒色	体部一帯
417 粗削文具			肥前	17C後	E	F2	粗削土中			(12.0)	動土 磐石 施成 良好 調査 内面に青鉄筋がかかる。指標歴史文 あり、外側へラ削り？ 色調 黒地5Y7/1灰白色 青鉄筋SYR3/2灰オーラブ色	口縦部1/19 体部一部
418 かわらけ				17C	E	E2	地上			(5.3)	動土 1m大の細砂含む 施成 良好 調査 地下の鉄筋不明、回転クロ板 色調 内面2.5Y7/6黄色 外面2.5YR7/6褐色	体下部1/5底 底部1/7
419 塗付 茶碗		伊万里	18C	E	E2		粗削土中				動土 磐石 施成 良好 調査 外面に染付 色調 黒地5Y7/1灰白色 基10Y7/1底白色	体部一帯
420 焼付 茶碗		伊万里	18C	E	E2	F2	粗削土中				動土 磐石 施成 良好 調査 外面に染付 色調 黒GYY7/1底オーラブ色 染付 接合部	体上部1/11

順位 番号	面積・ 高さ	形式	成地・ 材質	時代	区	グリッド	基盤地盤	口深 (m)	底深・ 高さ合 (m)	器高 (cm)	出土・ 地城・ 洞窟・ 色調	残存率
421	染付 壁		伊万里	18C	E	E2	粘土土中				粘土 硬密 焼成 良好 調査 外面に染付 色調 外面7.5Y7/1灰白色 断面2.5Y7/1灰白色 染付10Y5/1灰白色	全体1/10
422	染付 小皿		伊万里	18C後	E	F3 G2	粘土土中 灰褐色土層 板岩層		(3.0)		粘土 硬密 焼成 良好 焼成 粘り付け高台、外間に染付 色調 土地2.5Y5/1灰白色 断面10Y5/1灰白色 染付10BG5/1青灰色	全体部1/3 高台部1/2
423	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F3	粘土土中	(7.0)			粘土 硬密 焼成 良好 調査 外面に染付 色調 外面5Y5/1灰白色 断面7.5GY7/1暗灰色	全体部1/16 全体一部
424	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F3	粘土土中	(6.6)			粘土 硬密 焼成 良好 焼成 外面に染付 色調 5GY7/1灰白色	全体部～全体1/8
425	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F2 G3	粘土土中	(11.5)			粘土 硬密 焼成 良好 調査 外面に染付 色調 断面10Y8/1灰白色 染付薄青色 染付10BG5/1暗青灰色	全体部1/23 全体上部1/25 全体下部4/23
426	染付 茶碗		伊万里	18C	E	F2	粘土土中		(4.0)		粘土 硬密 焼成 良好 焼成 外面に染付 色調 断面8/1灰白色 断面7.5GY8/1暗綠灰色 染付10BG7/1暗青灰色	全体一部 高台部1/3強
427	染付 茶碗		伊万里	18C	R	G3	粘土土中		(8.8)		粘土 硬密 焼成 良好 調査 内面に指痕複数 色調 5GY7/1明オリーブ灰 白色 染付SG5/1青灰色	全体部～全体上部1/19
428	腰錠茶碗	登7か 登8	瀬戸	18C後	E	G3	粘土土中		(6.6)		粘土 10cmの細砂含む 焼成 良好 調査 内面と外面上部に衝撃痕がある 色調 断面SY7/2灰白色 外面7.5YR4/3褐色	全体下部1/10 高台部1/8
429	腰錠茶碗	登8か 登9	瀬戸	18C後 ～ 19C前	E	E2	粘土土中				粘土 10cmの細砂含む 焼成 良好 調査 内面と外面上部に衝撃痕がある 色調 断面SY7/2灰褐色 内面SY7/2灰白色 外面7.5YR4/3褐色	全体下部1/8強
430	腰錠茶碗	登8か 登9	瀬戸	18C後 ～ 19C前	E	F3	粘土土中				粘土 10cmの細砂含む 焼成 良好 調査 内面衝撃痕あり、外面淡褐色がかかる 色調 断面7.5Y3/3灰褐色 内面SY7/2灰白色	全体下部1/8弱
431	腰錠茶碗	登9か 登10	瀬戸	18C末 ～ 19C初	E	H2	粘土土中		(4.4)		粘土 10cm以下の細砂含む 焼成 良好 調査 外面に染付高台、外壁低部、内面側深井 色調 5GY7/1灰白色 内面SY7/2灰褐色	全体下部1/9 高台部1/12
432	執鍼微利		志戸戸	18C後 ～ 19C初	E	F2	粘土土中	(3.8)			粘土 10cm以下の細砂含む 焼成 良好 調査 内面に染付がかかる 色調 断面SY3/3灰褐色 内面SY7/2灰褐色	全体部～全体1/6
433	染付 茶碗		伊万里	18C初	E	F2	土手上				粘土 硬密 焼成 良好 調査 外面に染付 色調 10Y2/1灰白色 断面(墨)灰色 断面(墨)青色	全体上部1/9
434	萬宝齋 火入れ			18C初	E	G3	粘土土中				粘土 硬密 焼成 良好 調査 角形(八角) 色調 断面2.5Y7/1灰白色	全体一部
435	染付 茶碗		伊万里	18C前	E	F2	粘土土中		(4.8)		粘土 硬密 焼成 良好 調査 外面に染付 色調 白色 染付蓝色	全体一部 底部1/10

順序号	器種・形態	型式	産地・材質	時代	区	グリッド	断面構造	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土・施成・調製・色調	残存率
436	染付 丸玉柄		P万葉	19C前	E	F2	整地層		(3.7) ?		胎土 焼成 焼成 調整 色調 高台部欠け、外側に染付 高台10Y7/1灰白色 蛇10BG7/1明青灰 色 染付SB3/1明青灰色	底部1/5
437	染付 茶碗 (小鉢)		伊万里	19C前	E	G2	粗面土中		(3.6)		胎土 焼成 良好 調整 外側に染付 色調 蛇10Y7/1灰白色 染付青色	底下部一部 高台部1/6強
438	猪輪體鉢		瀬戸	19C後	E	F3	施上面		(27.0)		胎土 焼成 良好 調整 色調 全体に猪輪状の凹かる 去地2.5Y8/3灰白色 猪輪2.5YRA/2灰白色	口縁部1/21
439	猪輪體鉢	登8	瀬戸	18C後	E	G2	直上面		(28.0)		胎土 1mm以下の細粒含む 焼成 良好 調整 色調 内側面7.5YR4/3褐色 断面2.5Y7/3灰黄色	口縁部1/7
440	胎動 片口鉢	登6	瀬戸	18C 前の 迷い方	E	G2 G3	粗面土中				胎土 2mmの大粒の粗粒含む 焼成 良好 調整 全体に施釉されている、角部がかなり 剥離している 色調 断面2.5Y7/3灰白色 断面2.5Y8/1灰白色	往口部3/5
441	鉄鍔鉢	盤10 か 盤11	瀬戸	19C前	E	F3	粗面土中		(16.5)		胎土 1mm以下の粗粒含む 焼成 良好 調整 内側面に施釉の文様あり 色調 素地2.5Y8/3灰白色 断面2.5Y8/2灰白色 鉄鍔2.5Y3/3灰白色	体部一部 口縁部1/11
442	色絵茶碗 (小鉢?)			19C前	E	F2	粗面土中		(4.2)		胎土 焼成 良好 調整 削り出し高台 色調 素地7Y8/1灰白色 胎5GY8/1灰白色	体部一部 高台部1/12
443	染付 茶碗		伊万里	19C前	E	F2	粗面土中				胎土 焼成 良好 調整 外側に染付 色調 外折2.5GY7/1明オーブ灰褐色 細(薄) 5GYS/1研磨灰褐色 斜(薄)5G6/1骨灰色	口縁部~全体1/16
444	染付 茶碗		伊万里	19C前	E	E2	粗面土中				胎土 焼成 良好 調整 外側に染付 色調 白色 染付青色	体部一部
445	弦紋土瓶			19C前	E	G2	涅乱		(18.0)		胎土 焼成 良好 調整 外側に弦紋の文様あり 色調 黒地10Y8/1灰白色 8G2.5Y8/2灰白色 鉄錆2.5Y3/1オリーブ黒色	体部一部 山森前1/8強
446	伝統型 甕(?)	甕(?) 甕(?)		18C後 ~ 19C前	E	F5	粗面土中		(5.6)		胎土 1mmの大粒の粗粒含む 焼成 良好 調整 陶器 色調 2.5Y8/2灰白色	体部一部 高台部1/2
447	染付 小壺	?		19C前	E	F3	粗面土中		(5.0) ?		胎土 焼成 良好 調整 外側に染付 色調 赤地5Y8/1灰白色 染付青色	体下部一部 高台部1/5個
448	染付 茶碗			19C前	E	F2	粗面土中		(4.0)		胎土 焼成 良好 調整 削り出し高台 色調 素地5GY7/1灰白色 胎2.5Y7/3灰黄色	体部一部 高台部1/3強
449	白磁茶碗			19C前	E	F3	粗面土中		(3.8)		胎土 焼成 良好 調整 2.5Y8/1灰白色 白磁胎10Y8/1灰白色	1/4個
450	染付 茶碗		伊万里	19C後	E	F2	粗面土中				胎土 焼成 良好 調整 外側に染付 色調 10BG7/1骨灰色	口縁部~全体1/12
451	青磁 仏事器			19C後	E	G3	粗面土中		(3.6)		胎土 焼成 良好 調整 外側に加くからし、青磁胎が2本入る 内側5Y7/1灰白色 外側10Y8/1灰白色 青磁2.5YK3/4暗赤褐色	脚部1/3

編 番 号	縦横・ 断面形	表記	產地・ 材質	時代	区	グリッド	基盤造構	口括 (cm)	高さ・ 高台性 (cm)	幅員 (cm)	地上・底盤・鋼筋・色調	残 存 率
452	唐脚彌 詠林			10C ～ 11C			表土中				粘土 長石を多量に含む、石灰含む 焼成 良好 調査 ナゲでいる 色調 2.5%V/2灰白色	
453	白組小皿		中国	15C後			表土中		(6.8)		粘土 細密 焼成 良好 調査 内外表面に施がかかる 色調 5%V/1灰白色	体部わずかに残存 高台部1/6強
454	忠野走馬	忠	美濃走野	16C末 ～ 17C初			表土中	(13.2)	(8.2)	2.8	粘土 長石、3mmの粗粒含む 焼成 良好 調査 内外曲面がかかる、削り出し高台 色調 断面2.5%V/2灰白色 壁2.5%V/2灰白色	山段第1/14 体部1/7
455	鉄輪 天日蒸器 加工完成	天4 諸名	美濃	16C末			表土中		1.2		粘土 1mmの大粒砂含む 焼成 良好 調査 刈り出し高台、内面に鉄輪がかかる 色調 吉地5%V/1灰白色 断面10%V/3鉄輪色	体部一部 高台部ほぼ完形
456	鉄輪 天日蒸器	天4 諸名	美濃	16C末			表土中		(5.6)		粘土 長石、3mmの大粒砂含む 焼成 良好 調査 高台底部切り底、削り出し高台、内 側全体に鉄輪がかかる 色調 断面2.5%V/2灰白色 断面N/2 黒色	体部一部 高台部1/4
457	鉄輪 天日蒸器	天2か 島3 小舟	酒井	17C中			表土中				粘土 1mmの大粒砂含む 焼成 良好 調査 高台部欠損、内外面に鉄輪がかかる 色調 吉地2.5%V/1灰白色 断面2.5%V/2灰黑色	露胎第1/6
458	鉄輪 天日蒸器	天5	美濃	18C初			表土中		(4.3)		粘土 1mmの大粒砂含む 焼成 良好 調査 刈り出し高台？内面全体に鉄輪がかかる 色調 断面2.5%V/2灰白色 鉄輪2.5%V/1灰黑色	体部一部 高台部1/5
459	長石彌 丸瓶	登8か 豊9	瀬戸	18C後 ～ 19C前			表土中	(12.0)			粘土 1mmの大粒砂含む 焼成 良好 調査 内外面に施がかかる 色調 3%V/2灰白色 断面5%V/1灰白色	口段第1/20 体部一部
460	筒付 瓢		伊万里	18C			表土中				粘土 植物、2mmの粗粒含む 焼成 良好 調査 外面に筒付 色調 吉地2.5%V/1灰白色 断面2.5%V/2灰白色	体部一部
461	片口鉢		尾張	18C前	A		表土中		(16.0)		粘土 3mmの大粒、3mmの粒を含む 焼成 良好 調査 内面と高台部ナダ、外盛ヘラ削り 色調 2.5%V/3	高台部1/3
462	小皿		東近畿	18C前	A		3個	8.1	4.6	1.85	粘土 3mmの大粒砂を含む 焼成 良好 調査 内面に陥没感、重ね焼き底 色調 5%V/1灰	口段第1/2 底盤2/3
463	長石彌 染付共頭		伊万里?	19C前	C		抹土中層		(4.0)		粘土 植物 焼成 良好 調査 外部和紙貼り後ヘラ削り、内盛 色調 生地7.5%V/1糊糊灰 断面6%V/1糊 断面10%V/1糊	高台部1/2 体部下部1/2
464	染付 茶碗			19C前	C		抹土中層		(3.8)		粘土 焼成 良好 調査 内面、外壁に染付 色調 5%V/1灰白色	高台部1/2/弱 体部一部
465	灯明燈籠			19C前	C		抹土中 屋?	(9.05)	(4.0)		粘土 硫酸、空気が入って一部穴があいてい る 焼成 良好 調査 皮部、外表面ヘラ削り、内面過がか から 色調 外面7.5%V/1灰白色 内面7.5%V/1灰	露胎1/4 口段第1/8
466	青磁 迷寺紋		中国 龍泉窯系	15C前	C		表様焼		(5.8)		粘土 焼成 良好 調査 腹部和紙貼り後ヘラ削り、内面・外 面に施釉、底部内面に印文有? 色調 断面2.5%V/1オーブ灰 断面5%V/1灰 白	高台部1/5 体部1/5
467	土鋸彌 片			8～9C	平明				(5.0)		粘土 1mmの大粒、長石を作む 焼成 良好 調査 オリーブ灰の為不明、体部内面にくぼみあり 色調 N/4/灰	露胎4/5 体部下半

表6 木製品一覧表

種類番号	器種	時期	樹種	木取り	区	グリッド	造體・脚位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
1	付札状木製品	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6N	無削上中	19.1	3.9	0.8	上部左右に抉りあり
2	付札状木製品	16C末~19C前	スギ	板目	B	H4S	SR2	28.4	5.4	0.5	上部に1.8×1.4cmの彫部を作り出す
3	付札状木製品	16C末~19C前	スギ	板目	B	I5N	水田面(楕円)	29.8	4.3	0.45	両端の板材 上端2×2.3cmの彫部を作り出す
4	鉤	16C末~19C前	スギ	板目	E	E2S	楕円土中	4.2	3.3	3.2	
5	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	I5S	楕円土中	7.4	0.7		
6	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H5S	水田面(楕円)	8.9	0.6	0.5	
7	斧	16C末~19C前	スギ	斜め板目	B	H4S	無削上中	10.1	0.7	0.5	
8	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6N	無削土中	10.3	0.6	0.6	
9	斧	16C末~19C前	スギ	斜目	B	I5S	無削土中	10.7	0.6	0.5	
10	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H4S	SR2	11.9	0.85	0.5	
11	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	I6N	楕円土中	12.3	0.7	0.5	
12	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H4N	無削上中	29.6	1.1	0.75	
13	斧	16C末~19C前	スギ	斜目	B	I5N	水田面(楕上)	21.1	0.6	0.65	
14	斧	16C末~19C前	スギ	斜目	B	G4S	水田面	19.7	0.7	0.4	
15	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6N	楕円土中	20.8	0.95	0.5	
16	斧	16C末~19C前	スギ	板目	B	H5S	ベルト内	18.1	0.8	0.6	
17	斧	16C末~19C前	スギ	板目	D	I2N	褐色粘土	5.5	0.8	0.45	
								4.5	0.8	0.45	
18	漆屏	16C末~19C前	シオジ	斜目	E	C4S	水田面		1.9	高台形 6.5cm 内面尖棱	
19	漆桶	16C末~19C前	シオジ	板目	E	D4N	SK16				内面尖棱 外面底邊に朱漆の文様一部残存
20	漆桶	16C末~19C前	シオジ	板目	E	H3N	無削土中	4.4	9.6		外面部漆に朱漆の文様一部残存
21	漆瓶	16C末~19C前	ケヤキ	板目	E	C3S	無削上中	2.6	2.7	0.5	内面尖棱 外面底邊に朱漆の文様一部残存
22	漆桶	16C末~19C前	クリ	板目	E	C4S	無削上中	2.05	2.7	3.5	内面尖棱 外面黑漆
23	漆桶	16C末~19C前	クリ	板目	E	D3N	無削土中				内面尖棱
24	曲物底板	16C末~19C前	ヒノキ	板目	E	G3S	無削土中	6.6	2.35	9.4	
25	曲物底板	16C末~19C前	スギ	斜目	B	H4S	水田面(楕圓)	9.2	5.0	0.85	表面に欠陥部焼痕残存 下部斜みに加工?
26	曲物底板	16C末~19C前	スギ	板目	E	C3S	水田面(楕圓)	20.7	3.5	1.2 4mm×6mmの円形孔3ヶ所 右側面斜孔?一ヶ所	
27	箱蓋板	16C末~19C前	スギ	芯持ち	C	J4S	水田面(楕上)	63.0	14.2	3.8	芯持ち材 黒化著しい 従元社天保: 93.6cm
28	板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6S	無削上中	14.8	3.0	0.6	
29	板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6N	楕円土中	17.1	3.1	0.6	右側面に抉りあり
30	板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H5N	無削上中	21.5	4.4	1.3	
31	板材	16C末~19C前	スギ	板目	C	I3N	無削土中	18.2	4.2	0.8	
32	板材	16C末~19C前	ヒノキ	板目	C	I3S	水田面	12.7	3.3	0.5	黒化著しい
33	鋸板	16C末~19C前	スギ	板目	D	H2S	無削土中	10.8	3.6	0.8	
34	板材	16C末~19C前	クリ	板目	B	I5N	ベルト内	55.8	4.9	1.7	
35	板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	I5N	無削土中	67.2	14.2	1.1	
36	漆狀板材	16C末~19C前	ヒノキ	板目	D	H2S	黒漆表面灰白土中	15.2	1.4	0.7	下層後灰 等か?
37	漆狀板材	16C末~19C前	スギ	板目	C	I4S	水田面	17.5	2.5	0.9	上塗地直 漆面に一部剥落痕
38	漆狀板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H4N	無削土中	25.2	2.1	0.5	上層から7cm削削れ目を入れる
39	漆狀板材	16C末~19C前	クリ	板目	D	I1N	褐色粘土	30.2	1.7	1.1	表面黒化著しい
40	漆狀板材	16C末~19C前	スギ	板目	C	J4N	水田面	25.0	1.0	0.85	
41	漆狀板材	16C末~19C前	ヒノキ	板目	E	H4S	トレサナ内	24.5	1.6	0.9	風化している
42	漆狀板材	16C末~19C前	スギ	板目	E	H6N	無削土中	23.0	1.8	0.8	伴状板材 下端イキ
43	漆狀板材	16C末~19C前	ヒノキ	板目	B	G4S	水田面	16.7	1.2	0.9	下端痕跡残存
44	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H4N	SK11	11.5	3.8	0.8	9mm幅の円形孔あり
45	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	H6N	無削土中	9.1	3.35	1.0 15mm程度の孔があり 表面調査底残存	
46	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	I5S	無削土中	8.3	4.3	0.5	中央が寄りに5mm程度の円形孔あり
47	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	I6S	無削土中	8.1	5.2	0.7	5mm程度の孔があり 右側面イキ 上下を側面 異な板材 多数の分離あり
48	有孔板材	16C末~19C前	クヌキ	斜め板目	E	E2S	無削土中	6.2	6.3	0.9	黒化著しい 中央に1.2×1.0の孔
49	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	B	I5	ベルト内	8.1	6.1	0.6	4mm幅の円形孔あり 左側、下部板痕あり
50	有孔板材	16C末~19C前	スギ	板目	C	K4N	水田面	24.2	6.4	1.2	中央に2.5mm幅の円形孔 上に1.7mm幅の孔、下に1.2mm幅の孔残存 中央と下部の孔の周間に圧痕
51	有孔板材	16C末~19C前	カガミ亞麻	板目	E	H5N	水田面(楕圓)	17.3	4.9	1.3	3mm幅の方孔あり 風化著しい 下部欠損
52	漆版	12C前	シャンシンボ	芯持	E	G2N	SP251	24.1	13.0		底面 深: 9.0cm 厚: 13.0mm

第7表 金属製品一覧表

種類番号	器種	鋼材	区	グリッド	居位 濾過	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
1	鉄錠	鉄	E	F2	水田面	9.70	1.50	1.00	15.1	定角形	
2	角钉	鉄	D	I2	褐色粘土	6.50	0.60	0.50	3.5		
3	釘	鉄	E	E3	水田面	5.10	0.50	0.40	1.5	合釘	
4	角釘	鉄	E	D4	濾削土中	2.45	0.50	0.20	10.0		
5	釘	鉄	E	E2	濾削土中	2.85	0.60	0.60	1.0	近代か	
6	角釘	鉄	E	G2	水田面	8.00	0.90	0.90	1.4		
7	角釘	鉄	E	G2	水田面	5.70	0.60	0.45	3.0		
8	角釘	鉄	E	G2	水田面	5.80	0.60	0.45	4.2		
9	不明鉄製品	鉄	E	E3	濾削土中(杭判横)	10.70	2.30	0.55	10.9		
10	鉄砲玉	鉛	A	D6	濾削土中	—	1.15	1.15	7.7		
11	鉄砲玉	鉛	A	E5	濾削土中	—	1.20	1.20	9.9		
12	鉄砲玉	鉛	A	E6	濾削土中	—	1.20	1.15	9.2		
13	鉄砲玉	鉛	A	E6	水田面(壁上)	—	1.20	1.10	8.8		
14	鉄砲玉	鉛	B	G4	濾削土中(蛙模)	—	1.20	1.20	9.8		
15	鉄砲玉	鉛	C	K4	水田面(壁上)	—	1.20	1.20	9.0		
16	鉄砲玉	鉛	C	J4	濾削土中(蛙模)	—	1.15	1.10	7.4		
17	鉄砲玉	鉛	D	H1	濾削土中	—	1.25	1.15	8.5		
18	鉄砲玉	鉛	D	H1	褐色粘土	—	1.15	1.10	7.9		
19	鉄砲玉	鉛	D	I2	褐色粘土	—	1.10	1.10	5.6		
20	鉄砲玉	鉛	E	E3	濾削土中	—	1.25	1.25	7.4		
21	鉄砲玉	鉛	E	E3	濾削土中	—	1.30	1.30	8.5		
22	鉄砲玉	鉛	E	E2	濾削土中	—	1.30	1.20	7.9		
23	鉄砲玉	鉛	E	F3	濾削土中	—	1.20	1.25	7.9		
24	鉄砲玉	鉛	E	F3	濾削土中	—	1.30	1.30	11.3		
25	鉄砲玉	鉛	E	F3	水田面	—	1.20	1.25	8.6		
26	鉄砲玉	鉛	E	F3	濾削土中	—	1.20	1.25	8.4		
27	鉄砲玉	鉛	E	F3	SR1	—	1.20	1.30	2.2		
28	鉄砲玉	鉛	E	G2	濾削土中	—	1.10	1.10	7.0		
29	鉄砲玉	鉛	E	G2	濾削土中	—	1.10	1.10	7.1		
30	鉄砲玉	鉛	E	G2	濾削土中	—	1.25	1.20	9.3		
31	鉄砲玉	鉛	E	G3	水田面	—	1.25	1.25	9.8		
32	鉄砲玉	鉛	E	G2	水田面	—	1.10	1.15	8.2		
33	鉄砲玉	鉛	E	G3	水田面	—	1.25	1.25	9.2		
34	火薙	鉄	C	J4	濾削土中(時櫻)	20.20	0.70	0.70	39.1		
35	刀子	鉄	E	G2	濾削土中	15.35	1.40	0.50	17.9		
36	刀子	鉄	C	J4	濾削土中	12.40	1.40	0.45	12.5		
37	刀子	鉄	D	I2	褐色粘土	8.10	1.40	0.50	9.5		
38	不明鉄製品	鉄	E	G2	水田面	4.20	1.30	1.10	4.1		
39	火打金	鉄	A	E5	濾削土中	4.80	1.90	0.60	12.5	短冊形	
40	火打金	鉄	E	G3	水田面	3.10	7.20	0.40	9.1	山形	
41	火打金	鉄	E	F3	水田面(壁上)	8.15	2.10	0.45	14.0	山形か?	
42	キセル懸首	真鍮	E	E2	濾削土中	3.20	0.70	—	4.5	懸首高さ3.20cm	
43	キセル懸首	真鍮	E	E2	濾削土中	6.00	1.00	—	9.1		
44	キセル懸首	真鍮	E	G2	濾削土中	4.60	0.80	—	5.4	懸首高さ1.80cm	
45	キセル懸首	真鍮	E	G2	濾削土中	5.20	1.10	—	6.8	懸首高さ2.00cm 全数 47と対	
46	キセル懸首	真鍮	D	G3	濾削土中	7.50	1.40	—	9.2	懸首高さ2.15cm	
47	キセル懸口	真鍮	B	G4	濾削土中(蛙模)	7.30	0.95	—	6.4	懸首 45とセット	
48	キセル懸口	真鍮	E	F3	濾削土中	4.50	1.10	—	3.5		
49	キセル懸口	真鍮	E	G2	灰色粘土上(風化端)	6.10	1.00	—	5.7		
50	キセル懸口	真鍮	E	F2	集落面	4.50	1.10	—	3.8		
51	キセル懸口	真鍮	E	F2	濾削土中	7.20	1.10	—	9.9		
52	キセル懸口	真鍮	E	F2	濾削土中	5.80	0.90	—	3.8		
53	キセル懸口	真鍮	E	G3	濾削土中	4.40	0.80	—	3.9		
54	こうがい		E	F3	濾削土中	—	5.80	0.70	0.40	1.5	
55	こうがい		E	G2	濾削土中	7.70	0.30	0.30	3.7		
56	土瓶の栓?		E	F2	濾削土中	9.50	1.10	0.90	7.2	再考の余地あり	

第8表 錫貨觀察表

辨認番号	種別	被 貨 名	書体	國名	鋳年	区	グリッド	刷抜・造幣	直径 (mm)	重量 (g)	特 殊 標	
1	銅錢	元通寶	真書	西	621年	E	C4	羅削土中	22.4	2.8	被熱、背の輪と郭が不明瞭、薄肉、字の周りが深い凹所があるため、模擬銭と思われる。	
2	銅錢	皇宋通寶	篆書	北宋	1057年	D	I2	羅削皮色粘土	24.7	3.1	背の輪と郭が不明瞭、穿が丸みを帯びている。	
3	銅錢	聖宋元宝	真書	北宋	1068年	E	C4	羅削土中	23.6	3.2	被熱、背の輪と郭が不明瞭、穿の両端所に焼けりが残る。兩の郭の一部が削れている例抜けビタ。	
4	銅錢	聖宋元宝	真書	北宋	1068年	E	E2	羅削土中	24.0	2.5	被熱、わずかに凹み、字の周りが浅く不清晰、穿は比較的明瞭だが穿は丸くなっている。模擬銭。	
5	銅錢	聖宋元宝	真書	北宋	1068年	E	C4	羅削土中	24.1	2.5	被熱、穿の輪が深く凹んで、ほとんど平ら、穿は丸みを帯びている。模擬銭。	
6	銅錢	元豐通寶	行書	北宋	1078年	E	G2	羅削土中	25.0	2.5	背の輪と郭が不明瞭、穿の輪が不均一。	
7	銅錢	元豐通寶	篆書	北宋	1078年	E	C4	羅削土中	25.0	3.1	被熱。	
8	銅錢	元豐通寶	篆書	北宋	1078年	C	I3	絞出面 磁上	23.7	2.2	被熱、背の輪と郭が不明瞭で、ほとんど平ら、穿は丸みを帯びている。模擬銭。	
9	銅錢	元祐通寶	篆書	北宋	1086年	E	C4	羅削土中	24.0	3.2	被熱、表面に白い付着物。背の輪と郭が不明瞭。背の輪が不均一、面の郭は比較的明瞭だが穿は丸みを帯びて、穿バリが残る。模擬銭。	
10	銅錢	紹聖元宝	行書	北宋	1094年	E	E2	羅削土中	23.4	2.6	被熱、背の輪と郭が不明瞭で、ほとんど平ら、穿は丸みを帯びて、穿バリが残る。模擬銭。	
11	銅錢	元符通寶	篆書	北宋	1094年	E	E3	羅削土中	24.1	2.3	背の輪と郭が不明瞭、穿が丸みを帯びている。模擬銭？	
12	銅錢	聖宋元宝	行書	北宋	1101年	E	G3	絞出面	23.7	2.0	背の輪と郭が不明瞭でほとんど平ら、背の輪が不均一、面の郭の一部が削れ、穿が丸くなっている例抜けビタ。	
13	銅錢	政和通寶	分相	北宋	1111年	E	C4	羅削土中	23.7	2.9	被熱、背の郭が不明瞭。穿の郭は頗るだが、穿は丸くなっている。模擬銭。	
14	銅錢	崇寧通寶 背一統	真書	明	1368年	E	E3	羅削土中	21.3	3.3	直径が小さいが、字が極明瞭で野毛もはっきりしており穿みもある。背の「一」の人形舟も鋭明なので、小量の本錢ともみるべきである。	
15	銅錢	嘉永通寶 四文銭	日本	1769年	E	G2	羅削土中(海色粘土)	28.2	4.6	背一統		
16	銅錢	嘉永通寶 四文銭	日本	1769年	E	G3	羅削土中	27.7	4.6	背十・流、わずかに歪み。		
17	銅錢	嘉永通寶 古寛永	日本	1636年	E	G3	絞出面	24.7	2.3	背にヤスリ痕		
18	銅錢	嘉永通寶 古寛永	日本	1636年	E	G2	唯上	24.5	2.1	被熱？		
19	銅錢	嘉永通寶 古寛永	日本	1636年	E	G3	絞出面	24.4	3.1			
20	銅錢	嘉永通寶 新寛永	日本	1697年	A	E5	羅削土中	24.0	2.2	被熱？背の輪が不明瞭		
21	銅錢	嘉永通寶 新寛永	日本	1697年	E	F2	絞出面	23.0	2.2	被熱？		
22	銅錢	寛永通寶 新寛永	日本	1697年	C	I3	羅削土中	22.7	2.1	被熱、穿が入っている。背の輪と郭が不明瞭で、ほとんど平ら。		
23	銅錢	寛永通寶 新寛永	日本	1697年	E	F3	羅削土中	23.0	1.9	背にヤスリ痕		
24	銅錢	寛永通寶 古寛永	日本	1636年	E	F3	羅削土中	不規	1.2	歪み、右面4/7欠け。		
25	銅錢	成化元寶	真書	南宋	1255年	E	E2	羅削面	不規	0.8	1/4欠け、風化して二つに割れている。	
一	銅錢	無文銭		日本	16世紀	E	E2	水出面	19.6	0.8	直径19.2mm。一辺8ミリの方孔。槽内では出土例はほとんどない。	

第9表 石器・石製品一覧表

辨認番号	器 種	材 質	区	グリッド	刷抜選択	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考
1	打製石斧	頁岩	D	G2	羅削土中	8.5	2.8	1.0	
2	スクレイバー	頁岩	E	E2	唯上	3.1	5.8	0.6	折れた打製石斧の先端部を転用
3	スクレイバー	頁岩	E	E1	羅削土中	4.6	3.0	1.0	折れた打製石斧の先端部を転用
4	礫石	凝灰岩	E	G3	絞出面	6.5	3.2	1.6	
5	砾石	砂岩	C	J4	絞出面	11.3	2.8	1.8	

第10表 捷立柱建物(SH)計測表

造 建 物 名	グリッド	横 方 向	桁 行×梁 行(m)			平均桁行柱間 (m)
SH1	G2・F2	N-7°-E	6.50×4.46			4間×3間
SH2	G2・F2	N-57°-E	6.65×2.95			5間×3間
SH3	G2・F2	N-44°-E	3.20×3.30			3間×2間
SH4	G2	N-7°-E	6.80×5.90			4間×3間
SH5	F2	N-40°-E	4.30×4.15			4間×3間
SH6	G2	N-111°-E	3.55×1.20			4間×1間
						0.9

第11表 溝(SD)計測表

道標名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方 向
SD 1	A	D 6	4.4	0.4~0.6	N-78° -W
SD 2	A	E 6 · D 6	8.4	0.4~0.7	N-90° -W→N-2° -W
SD 3	A	E 6	15.0	0.2~0.6	N-13° -E
SD 4	A	E 6	6.0	0.3~0.5	N-71° -W
SD 5	B	H 6	9.0	0.4~0.8	N-45° -W
SD 6	B	H 6	9.0	0.4~0.8	N-74° -W
SD 7	B	I 6 · H 5	16.0	0.4~1.0	N-43° -W→N-32° -W
SD 8	D	I 2	9.0	0.2~1.0	N-79° -W→N-32° -E
SD 9	E	C 3	3.6	0.4~0.8	N-77° -E
SD 10	E	D 3	6.2	0.3~0.4	N-63° -E
			4.1	0.9~1.3	N-73° -E
		D 2 · E 2	12.0	0.5~0.6	N-54° -E
		E 2	3.7	0.5~0.6	N-80° -E
SD 11	E	E 2	19.3	0.4~2.1	N-35° -W→N-2° -W
SD 12	E	E 2 · F 2	18.5	0.4~1.4	N-16° -W
SD 13	E	F 2	6.9	0.4~0.7	N-82° -W
SD 14	E	F 2 · G 2 · G 3	35.4	0.4~1.9	N-26° -W→N-35° -W→N-5° -W
SD 15	E	F 2	5.5	0.4~0.6	N-82° -W
SD 16	E	G 2	5.2	0.1~0.2	N-65° -W
SD 17	E	G 2	3.1	0.4~0.8	N-55° -W
SD 18	E	G 2	1.2	0.2~0.3	N-19° -W
SD 19	E	G 2	2.8	0.2~0.3	N-2° -E
			6.0	0.2~0.7	N-52° -E
		G 2	1.4	0.2~0.3	N-5° -E
SD 20	E	G 2	2.5	0.1~0.2	N-66° -E
SD 21	E	G 2	4.2	0.1~0.7	N-82° -E
			6.6	0.3~0.6	N-71° -E
SD 22	E	G 2	4.9	0.2~0.6	N-13° -W
			2.9	0.4~0.8	N-84° -W

第12表 流路(SR)計測表

道標名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方 向
SR 1	B	G 4 · H 4	18.0	0.4~4.2	N-55° -E→N-20° -E
SR 2	B	H 4	12.0	0.8~1.2	N-8° -E
SR 3	B	H 4 · H 5 · I 4	12.8	0.8~1.0	N-25° -E
SR 4	B	G 6 · H 6 · I 6	27.0	0.6~2.0	N-17° -W→N-20° -E
SR 5	C	H 3 · I 3	15.8		N-70° -E→N-5° -E
SR 6	D	I 1 · I 2	8.0	0.6~1.0	N-66° -W
SR 7	E	E 2 · D 3 · D 4	48.0	0.2~1.1	N-57° -E
SR 8	E	D 3 · D 4 · E 3 · F 3	55.0	20以上	N-7° -E→N-24° -W

第13表 土手状造構計測表

道標名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方 向
上手状造構 1	E	D 2 · E 2 · F 2 · F 3 · G 3	56.0	0.3~2.1	N-12° -W→N-40° -W→N-4° -W
		E 2 · D 2 · D 3	15.0	0.7~1.5	N-35° -E
下手状造構 2	E	D 3 · E 3 · F 3	44.0	0.8~1.5	N-27° -W→N-11° -E

第14表 道状造構計測表

道標名	区	グリッド	長さ(m)	幅(m)	方 向
道状造構 1	E	E 2 · F 2	12.2	0.6~1.2	N-17° -W→N-43° -W
		F 2	5.5	0.7~1.3	N-22° -E→N-71° -E
道状造構 2	E	G 2 · H 2	12.0	0.3~1.2	N-26° -E
道状造構 3	E	G 2	18.5	0.4~0.9	N-76° -E→N-45° -E→N-7° -E
道状造構 4	E	G 2	6.2	0.4~0.8	N-65° -E→N-32° -W
道状造構 5	E	G 2	6.5		N-23° -E→N-2° -E
道状造構 6	E	G 2	10.3	0.6~1.3	N-34° -E→N-43° -W

第15表 小穴(SP)計測表

番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考	番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
SP1	E2	59×47	27.6	楕円形	複合む	SP70	F2	50×46	27.0	円形	SH5
SP2	E2	60×54	16.0	椭円形	複合む	SP71	F2	43×38	32.0	円形	SH5
SP3	E2	61×45	35.0	椭円形	複合む	SP72	F2	外56×55 内30×28	39.0 26.0	円形	SH5
SP4	E2	44×41	17.0	円形	SH1	SP73	F2	54×50	30.0	円形	SH5
SP5	E2	39×38	14.0	円形	SH1	SP74	F2	36×34	25.0	円形	SH5
SP6	E2	42×42	15.0	円形	SH1	SP75	F2	34×34	23.0	円形	SH5
SP7	E2	43×43	15.0	円形	SH1	SP76	F2	34×25	40.0	不定形	SH5
SP8	G2	45×43	33.0	円形	SH1	SP77	F2	42×41	33.0	円形	SH5
SP9	G2	41×40	17.0	円形	SH1 領域類似(4)	SP78	F2	36×32	24.0	円形	SH5
SP10	G2	37×37	18.0	円形	SH1	SP79	G2	41×34	18.0	椭円形	SH6 複合む
SP11	G2	42×38	12.0	円形	SH1 地盤調査用口版(14)	SP80	G2	34×31	22.0	円形	SH6
SP12	G2	49×42	22.0	円形	SH1	SP81	G2	35×33	27.0	円形	SH6 複合む
SP13	G2	45×48	21.0	円形	SH1	SP82	G2	32×30	14.0	円形	SH5
SP14	G2	58×53	22.0	椭円形	SH1	SP83	G2	38×32	28.0	椭円形	SH5
SP15	G2	53×44	17.0	円形	SH1 地盤調査用(10)	SP84	G2	32×27	26.0	不定形	SH5 複合む
SP16	G2	38×35	24.0	円形	SH1	SP85	E2	36×29	47.0	不定形	SH5 複合む
SP17	G2	41×39	23.0	円形	SH1	SP86	E2	56×36	51.0	椭円形	SH5
SP18	G2	39×36	25.0	円形	SH1	SP87	F2	27×25	13.0	円形	SH5
SP19	G2	42×39	27.0	円形	SH1	SP88	F1	28×26	14.0	円形	SH5
SP20	G2	47×49	21.0	円形	SH1	SP89	F2	34×29	13.0	円形	SH5
SP21	G2	39×38	22.0	円形	SH1	SP90	F1	43×20	19.0	不定形	SH5
SP22	G2	39×37	15.0	円形	SH1	SP91	F1	48×25	19.0	不定形	SH5
SP23	G2	43×39	23.0	円形	SH1	SP92	F1	27×21	15.0	不定形	SH5
SP24	G2	41×37	31.0	円形	SH1	SP93	F2	38×32	19.0	不定形	SH5
SP25	G2	41×42	28.0	円形	SH2 複合む	SP94	F2	26×15	6.0	不定形	SH5
SP26	G2	39×38	25.0	円形	SH2	SP95	F2	51×38	12.0	不定形	SH5
SP27	G2	55×32	19.0	円形	SH2	SP96	F2	38×34	5.0	円形	SH5
SP28	G2	39×35	35.0	不定形	SH2	SP97	F2	32×30	10.0	円形	SH5
SP29	G2	34×33	16.0	円形	SH2	SP98	F2	29×25	8.0	円形	SP50の中
SP30	G2	35×33	20.0	円形	SH2 土師器窓(21)	SP99	F2	38×35	10.0	円形	SH5
SP31	G2	60×51	30.0	不定形	SH2	SP100	F2	30×28	9.0	円形	SH5
SP32	G2	54×40	26.0	不定形	SH2	SP101	F2	34×32	20.0	円形	SH5
SP33	G2	31×19	25.0	不定形	SH2 土師器窓(22)	SP102	F2	22×19	3.0	円形	SH5
SP34	G2	38×36	30.0	円形	SH2	SP103	F2	47×46	23.0	円形	SH5
SP35	G2	47×39	29.0	椭円形	SH2	SP104	F2	20×17	3.0	不定形	SH5
SP36	G2	45×41	28.0	円形	SH2	SP105	F2	30×30	38.0	円形	SH5
SP37	G2	38×35	17.0	円形	SH2 複合む	SP106	F2	38×35	22.0	円形	SH5
SP38	F2	53×33	22.0	円形	SH3	SP107	F2	38×36	27.0	円形	SH5
SP39	F2	50×49	19.0	円形	SH3 地盤調査用(14), 山脈調査	SP108	F2	55×44	17.0	椭円形	SH5
SP40	F2	50×45	16.0	円形	SH3	SP109	F2	36×34	15.0	円形	SH5
SP41	F2	41×39	17.0	円形	SH3 地盤調査用(35)	SP110	F2	23×14	13.0	不定形	SH5
SP42	F2	38×38	11.0	円形	SH3	SP111	F2	25×24	20.0	円形	SH5
SP43	F2	36×31	21.0	円形	SH3	SP112	F2	40×49	7.0	円形	SH5
SP44	F2	26×33	17.0	円形	SH3	SP113	F2	48×36	9.0	不定形	SH5
SP45	F2	63×60	17.0	円形	SH4	SP114	F2	42×25	4.0	不定形	SH5
SP46	F2	59×33	8.0	不定形	SH4	SP115	F2	35×33	4.0	円形	SH5
SP47	F2	65×61	8.0	円形	SH4	SP116	F2	33×31	4.0	円形	SH5
SP48	F2	60×60	11.0	円形	SH4	SP117	F2	34×33	10.0	円形	SH5
SP49	F2	68×65	13.0	円形	SH4	SP118	F2	42×38	6.0	円形	SH5
SP50	F2	58×56	7.0	円形	SH4 土師器窓(37)	SP119	F2	30×28	13.0	円形	SH5
SP51	F2	68×44	4.0	不定形	SH4 地盤調査用(40)	SP120	F2	18×19	17.0	不定形	SP48の中
SP52	F2	65×65	5.0	円形	SH4	SP121	F2	40×34	9.0	不定形	SP48の下
SP53	F2	60×60	10.0	円形	SH4	SP122	F2	28×25	14.0	円形	SH5
SP54	F2	64×66	13.0	円形	SH4	SP123	F2	32×21	12.0	円形	SH5
SP55	F2	62×58	19.0	円形	SH4	SP124	F2	34×23	7.0	円形	SH5
SP56	F2	57×25	10.0	不定形	SH4	SP125	F2	45×36	9.0	不定形	SH5
SP57	F2	65×90	9.0	円形	SH4 複合む	SP126	F2	10×38	7.0	円形	SH5
SP58	F2	60×33	11.0	円形	SH4	SP127	F2	44×42	14.0	円形	SH5
SP59	F2	66×64	16.0	円形	SH4	SP128	F2	10×38	7.0	円形	SH5
SP60	F2	72×68	15.0	円形	SH4	SP129	F2	34×34	17.0	円形	SH5
SP61	F2	61×61	7.0	円形	SH4	SP130	F2	26×25	24.0	円形	SH5
SP62	F2	54×59	11.0	椭円形	SH4	SP131	F2	26×22	22.0	円形	SH5
SP63	F2	61×58	5.0	円形	SH4 複合む	SP132	F2	38×56	18.0	円形	SH5
SP64	F2	64×62	11.0	円形	SH4	SP133	F2	14.0×13	3.0	円形	SH5
SP65	F2	44×43	30.0	円形	SH5	SP134	F2	45×42	14.0	円形	SH5
SP66	F2	34×23	23.0	円形	SH5 複合む	SP135	F2	44×42	5.0	不定形	SP70の下
SP67	F2	45×43	22.0	円形	SH5	SP136	F2	70×59	8.0	椭円形	SP70の下
SP68	F2	43×46	16.0	円形	SH5	SP137	F2	26×24	4.0	円形	SH5
SP69	F2	42×36	16.0	円形	SH5	SP138	F2	38×38	2.0	円形	SH5

番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考	番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
SP127	F2	26×25	7.0	円形		SP207	G2	26×25	14.0	円形	
SP128	F2	49×47	4.0	円形		SP208	G2	21×20	7.0	円形	
SP129	F2	24×23	9.0	円形	縫合む	SP209	G2	45×45	30.0	円形	
SP140	F2	44×40	10.0	円形		SP210	G2	34×34	21.0	円形	
SP141	F2	26×25	4.0	円形		SP211	G1	27×23	39.0	円形	
SP142	F2	31×29	6.0	円形		SP212	G1	34×31	14.0	不定形	
SP143	F2	25×25	5.0	円形		SP213	G1	28×27	26.0	円形	土師器蓋(45)
SP144	F2	31×21	8.0	円形	縫合む	SP214	G1	31×29	13.0	円形	縫合む
SP145	F2	45×38	9.0	円形		SP215	G1	51×38	18.0	不定形	
SP146	F2	28×28	12.0	円形		SP216	G1	27×23	17.0	円形	
SP147	F2	45×43	15.0	円形	縫合む	SP217	G1	24×24	17.0	円形	
SP148	F2	23×22	15.0	円形		SP218	G1	19×17	19.0	円形	
SP149	F2	20×18	13.0	方形		SP219	G1	27×25	14.0	不定形	
SP150	F2	26×24	4.0	円形		SP220	G1	26×27	13.0	円形	
SP151	F2	28×25	7.0	円形		SP221	G1	23×21	10.0	円形	
SP152	F2	27×24	5.0	円形		SP222	G2	23×21	12.0	円形	
SP153	F2	24×24	12.0	不定形		SP223	G2	28×24	17.0	椭円形	
SP154	F2	23×23	5.0	円形		SP224	G2	19×18	15.0	円形	
SP155	F2	47×42	8.0	円形		SP225	G2	23×22	12.0	円形	
SP156	F2	31×30	6.0	円形		SP226	G2	27×26	22.0	円形	
SP157	F2	30×31	36.0	円形		SP227	G2	27×24	16.0	円形	
SP158	F2	30×30	5.0	円形		SP228	G2	41×37	25.0	円形	
SP159	F2	32×31	22.0	円形		SP229	G2	32×28	10.0	円形	
SP160	F1・2	52×47	44.0	円形	上師器蓋(82)・縫合む	SP230	G2	31×27	6.0	円形	
SP161	F2	28×27	27.0	円形		SP231	G2	37×34	27.0	円形	縫合む
SP162	F2	27×19	9.0	不定形		SP232	G2	35×32	13.0	円形	糸切り痕(36)
SP163	F2	22×21	9.0	不定形		SP233	G2	35×31	14.0	不定形	
SP164	F2	33×28	19.0	円形		SP234	G2	35×31	9.0	円形	
SP165	F2	22×21	12.0	円形		SP235	G2	34×34	32.0	不定形	
SP166	F2	29×29	24.0	円形	灰輪其類瓶(49)	SP236	G2	31×31	32.0	円形	灰輪陶器袋(24)
SP167	F2	31×27	27.0	円形		SP237	G2	31×31	34.0	円形	
SP168	F2	31×29	21.0	円形		SP238	G2	38×38	31.0	方形	糸切り痕(28)
SP169	F2	31×30	12.0	円形		SP239	G1	26×15	?	椭円形	
SP170	F2	23×21	20.0	円形		SP240	G1・2	31×28	15.0	椭円形	
SP171	F2	31×29	24.0	円形		SP241	G2	32×29	20.0	円形	
SP172	F2	36×30	18.0	円形		SP242	G2	25×26	23.0	円形	縫合む
SP173	F2	34×29	21.0	円形		SP243	G2	28×28	33.0	円形	
SP174	F2	39×25	24.0	不定形		SP244	G2	34×26	?	不定形	
SP175	F2	34×32	25.0	円形		SP245	G2	26×18	22.0	不定形	
SP176	F2	44×36	23.0	椭円形	糸切り痕(92)	SP246	G2	34×32	25.0	不定形	
SP177	F2	28×26	23.0	円形	油脂瓶(34)	SP247	G2	21×19	8.0	円形	
SP178	F2	33×31	24.0	円形		SP248	G2	23×21	22.0	円形	
SP179	F2	28×25	27.0	円形		SP249	G2	32×31	15.0	円形	
SP180	F2	35×33	25.0	円形	赤朱土罐(33)	SP250	G2	38×35	14.0	円形	縫合む
SP181	F2	31×25	15.0	円形		SP251	G2	83×56	63.0	不定形	柱軸残存
SP182	F2	29×29	13.0	円形		SP252	G2	35×34	32.0	円形	
SP183	F2	42×36	16.0	円形		SP253	G2	37×34	29.0	円形	
SP184	F1・2	29×28	15.0	円形		SP254	G2	39×37	22.0	円形	
SP185	F1・2	32×32	25.0	円形		SP255	G2	35×33	21.0	円形	
SP186	F2	24×19	18.0	円形		SP256	G2	30×27	27.0	不定形	
SP187	G1	36×28	21.0	円形		SP257	G2	48×33	22.0	椭円形	
SP188	G2	36×29	13.0	円形		SP258	G2	27×25	31.0	円形	
SP189	G2	35×34	18.0	円形	山茶碗(18)	SP259	G2	33×30	32.0	不定形	
SP190	G2	38×19	15.0	円形		SP260	G2	45×41	23.0	円形	
SP191	G2	43×40	20.0	円形		SP261	G2	39×32	27.0	方形	
SP192	G2	44×42	24.0	円形	上師器蓋(5)	SP262	G2	27×25	20.0	円形	
SP193	G2	32×30	16.0	円形		SP263	G2	26×26	24.0	不定形	
SP194	G2	39×39	11.0	円形	上師器蓋(3)	SP264	G2	27×23	23.0	不定形	
SP195	G2	27×25	13.0	円形		SP265	G2	27×21	22.0	方形	
SP196	G2	31×29	13.0	円形		SP266	G2	39×37	22.0	不定形	
SP197	G2	40×49	10.0	円形		SP267	G2	40×29	30.0	椭円形	
SP198	G2	41×39	10.0	円形		SP268	G2	31×31	22.0	円形	
SP199	F2	38×36	15.0	円形		SP269	G2	27×24	18.0	不定形	縫合む
SP200	F2	44×42	13.0	円形		SP270	G2	31×28	23.0	不定形	縫合む
SP201	G2	30×29	21.0	円形	上師器蓋(7)	SP271	G2	38×37	26.0	円形	縫合む
SP202	G2	34×32	16.0	円形		SP272	G2	47×47	16.0	円形	
SP203	G2	32×31	21.0	円形		SP273	G2	46×39	52.0	椭円形	
SP204	G2	23×23	16.0	円形		SP274	G2	48×46	59.0	方形	
SP205	G2	25×25	15.0	円形		SP275	G2	45×42	18.0	円形	縫合む
SP206	G2	31×30	18.0	円形		SP276	G2	37×32	27.0	円形	縫合む

番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考	番号	グリッド	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	形 状	備 考
SP277	G2	45×41	40.0	円形		SP317	G2	29×29	24.0	円形	
SP278	G2	39×29	16.0	梢円形		SP318	G2	32×28	21.0	円形	
SP279	G2	40×38	33.0	方形		SP319	G2	38×34	9.0	方形	
SP280	G2	41×40	27.0	方形	適合む	SP320	G2	32×31	13.0	円形	
SP281	G2	38×38	31.0	不定形	皮剥離面積20.0、無切り端(?)	SP321	G2	24×20	23.0	方形	
SP282	G2	24×23	28.0	方形		SP322	G2	36×34	36.0	方形	
SP283	G2	36×26	18.0	不定形	無切り端(?)・適合む	SP323	G+H2	40×39	29.0	円形	
SP284	G2	43×39	22.0	方形	適合む	SP324	G2	39×37	19.0	不定形	
SP285	G2	51×36	47.0	不定形		SP325	G2	29×24	28.0	方形	
SP286	G2	40×38	25.0	不定形	適合む	SP326	G2	27×23	26.0	方形	
SP287	G2	43×40	13.0	円形	適合む	SP327	G2	40×34	31.0	梢円形	
SP288	G2	33×32	36.0	円形		SP328	G2	61×60	28.0	円形	適合む
SP289	G2	46×42	27.0	方形	適合む	SP329	G2	28×28	20.0	不定形	
SP290	G2	40×38	13.0	円形		SP330	G2	37×23	27.0	不定形	
SP291	G2	36×35	40.0	円形		SP331	G2	30×29	36.0	円形	
SP292	G2	35×32	16.0	円形		SP332	G2	35×32	28.0	円形	
SP293	G2	36×32	20.0	円形		SP333	G2	30×29	24.0	円形	適合む
SP294	G2	34×32	13.0	円形		SP334	G2	37×35	25.0	不定形	
SP295	G2	38×33	27.0	不定形		SP335	G2	33×29	32.0	不定形	
SP296	G2	22×22	22.0	方形		SP336	G2	27×23	36.0	不定形	
SP297	G2	32×31	15.0	不定形		SP337	G2	28×26	20.0	円形	
SP298	G2	41×39	20.0	円形		SP338	G2	25×24	19.0	円形	
SP299	G2	72×65	42.0	方形	礫石	SP339	G2	29×26	17.0	円形	
SP300	G2	41×38	17.0	円形	適合む	SP340	G2	25×24	14.0	方形	適合む
SP301	G2	45×41	19.0	円形		SP341	G2	26×25	24.0	方形	
SP302	G2	37×35	21.0	円形		SP342	G2	39×36	32.0	不定形	
SP303	G2	34×30	18.0	円形		SP343	G2	35×34	20.0	方形	適合む
SP304	G2	32×24	16.0	円形		SP344	G2	27×23	20.0	円形	
SP305	G1	46×34	25.0	不定形		SP345	G2	30×30	25.0	円形	
SP306	G1	26×25	23.0	不定形		SP346	—	—	—	—	欠番
SP307	G1	27×18	21.0	不定形		SP347	G2	33×50	16.0	円形	適合む
SP308	G1・2	29×27	18.0	円形		SP348	G2	33×29	35.0	不定形	
SP309	—	—	—	—	SP349	G2	29×28	16.0	円形		
SP310	G1	35×32	17.0	円形		SP350	G2	40×32	21.0	梢円形	
SP311	—	—	—	欠番	SP351	G2	21×30	25.0	不定形		
SP312	G2	31×26	12.0	不定形		SP352	G2	26×25	34.0	円形	
SP313	G2	25×25	21.0	円形		SP353	G2	37×34	21.0	円形	
SP314	G2	30×27	12.0	不定形		SP354	G2	25×22	36.0	円形	
SP315	G+H2	28×25	13.0	不定形		SP355	G2	25×25	14.0	円形	
SP316	G2	29×38	21.0	円形	適合む	SP356	G2	24×22	27.0	円形	

第16表 畜跡(SK)計測表

道筋名	区	タ	リ	ツ	ド	長さ(cm)	幅(m)	方	向	
SK 1	A	D 7	- D 8			26.4	0.3~0.5	N=80°	-W	
SK 2	A	D 9				13.0	0.8~1.2	N=75°	-W	
SK 3	A	D 6	- E 6			11.2	1.0~1.2	N=18°	-E	
SK 4	A	D 7	- E 7			10.6	0.2~0.5	N=60°	-W→N=72°	-W
SK 5	A	D 7	- D 8	- E 7		18.5	—	N=28°	-E	
SK 6	A	E 7				19.0	0.4~2.0	N=68°	-W	
SK 7	A	F 7				7.4	—	N=70°	-W	
SK 8	A	E 4	- E 5	- E 6	- F 5	30.0	0.2~1.2	N=38°	-E→N=75°	-W
SK 9	A	F 6				12.0	0.4~0.8	N=75°	-W	
SK10	B	G 6	- H 6			10.4	0.7~1.0	N=26°	-E	
SK11	B	H 4	- H 5	- H 6		37.0	0.5~1.2	N=80°	-E	
SK12	B	H 5	- I 5			7.9	0.2~0.7	N=44°	-W	
SK13	B	I 5	- J 5			8.4	0.5~0.8	N=35°	-W	
SK14	C	I 3	- I 4			8.6	0.25~0.9	N=65°	--E	
SK15	C	J 4	- K 3	- K 4		13.4	0.2~0.5	N=87°	-E→N=70°	-E
SK16	C	I 3				15.8	0.3~0.6	N=82°	-E	
SK17	D	I 1	- I 2			16.2	0.3~0.8	N=80°	-W	
SK18	E	C 3	- D 3	- D 4		15.8	0.3~0.6	N=62°	-W	
SK19	E	D 3	- D 4			13.0	0.25~0.6	N=70°	-W	
SK20	E	E 2	- E 3			12.0	0.2~0.5	N=70°	-W	
SK21	E	E 3	- F 3			24.2	0.3~0.5	N=75°	-W	
SK22	E	F 3				15.0	0.3~1.3	N=61°	-W	
SK23	E	F 3				10.4	0.2~0.6	N=77°	-W	
SK24	E	G 3				7.0	0.1~0.6	N=85°	-W	
SK25	E	E 2	- F 2	- D 3	- E 3	37.1	0.4~1.1	N=35°	-W→N=8°	-E
SK26	E	G 2	- G 3			7.6	0.2~0.4	N=3	-E	
						17.3	0.2~0.4	N=75°	-E	

第3章 栗ヶ沢遺跡(第二東名No.74-2地点)

第1節 位置と環境

1 位置と地理的環境

栗ヶ沢遺跡は、静岡県静岡市葵区小瀬戸・飯間の、標高131～169mの丘陵上に位置する。この丘陵は、標高301mの南東方向へ延びる山塊から北東へ派生する尾根であり、およそ2.3kmで末端へ至る。この分岐点からおよそ1kmの範囲にある尾根上には、幅60～70mのやや平坦な面が連続している。今回調査を行った栗ヶ沢遺跡B区の南側で尾根は二股に分かれ、北側に派生したものは小瀬戸遺跡の南端に至っている。北東側の尾根は深さ40～50mとなる大きな谷をいくつか挟みながら更に1.5kmほど北東へ延びる。北東側の尾根は、先端に至るまでに、ところどころを痩せ尾根に挟まれながらも比較的広い平坦面を尾根上に持ちづける。尾根の末端にある小瀬戸城跡の本曲輪と、先の分岐点との比高差はおよそ150mとなる。

この丘陵上はスギの植林や茶畑、竹林に多くを利用されている。近世の史料には、この付近の集落の特徴は街であると記している。近世段階から地域の生活を支える役割を、大いに担ってきたことが窺える。

2 歴史的環境と調査歴

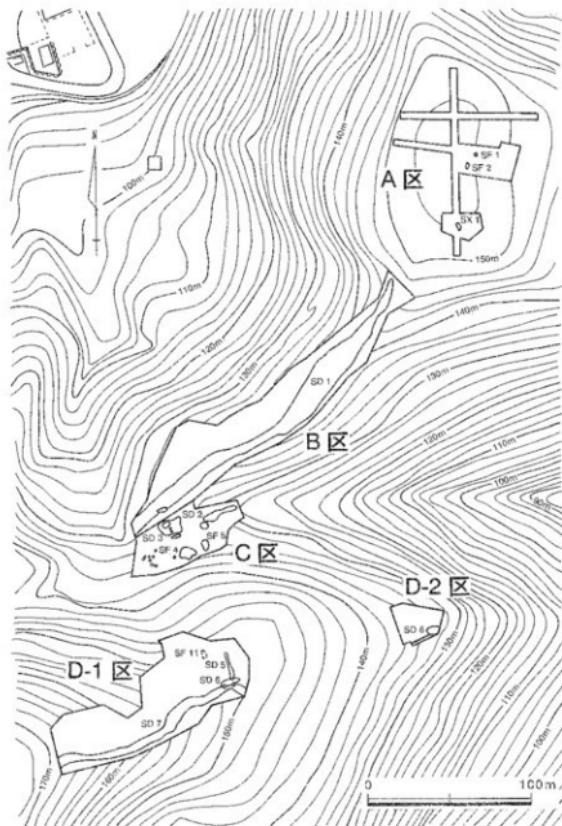
栗ヶ沢遺跡は、第二東名事業に伴って把握された新発見の遺跡である。したがって本事業に着手する以前の調査歴は皆無である。今回の事業に際して実施された確認調査により、栗ヶ沢遺跡とその周辺にも小規模な縄文時代遺跡が把握されたことは、小瀬戸谷の入り口近くにある養源山遺跡とともにこの地域の縄文時代像を再現するためには貴重な発見となった。今回調査対象となった範囲については、第81図を参照願いたい。

栗ヶ沢遺跡ののる丘陵末端には、小瀬戸城が築かれている。この城は、安倍城の一支城として位置付けられているが、築城年代等定かでない部分が多く管見の限りでは史料にも記されていないので、実態はよく分からぬ。ただし、本曲輪東側に二重の堀切が築かれるところをみると、恐らく今川氏の退去後にあたる元亀～天正年間に武田氏などの手によって改修されているのであろう。

第2節 調査の方法と経過

1 発掘調査の方法と経過

本調査に先立つて、平成13年4月10日から9月6日までに、調査対象範囲の南側およそ4分の3に対し試掘・確認調査を実施した（確認調査その1）。この一部は、前年度に静岡市教育委員会が確認調査を実施しており、実質的にはその残部分を引き継ぐ形となつた。確認調査は人力で行い、掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなつた。実測は主にトータルステーションを使用し、トレンチ設定図、遠隔検出状況図、土層断面図を図化した。写真撮影は35mm判のカラーネガを使用した。この範囲の本調査は、確認調査と並行して6月11日から遠隔検出された部分を中心に調査範囲を拡張するかたちで実施した。この本調査は7月25日の飛び地部（以下D-2区として報告する。）から開始され、8月9日に南尾根部（同D-1区）、9月27日に堀部II（同B区南西側SD1部分）、10月3日に堀部I（同B区北東側



第81図 周辺地形と各調査区

SD 1部分)、10月29日に谷部(同C区)へそれぞれ着手した。本調査においては、表土の除去をバックホーとクローラーダンプを用いて実施し、遺構の掘削は人力で実施した。遺構番号は調査の進展に合わせて、各調査区ごとに付けていった。ただし、追加して実施した精査によって検出されたものについては、発見時で最も若い番号を付けて整理した。遺構内の出土遺物については、元位置にあると思われるものは1/10~20の縮尺で出土状況を図化して取り上げ、混入したと思われるものについては、遺構ごとに取り上げた。また、遺構外出土遺物は、グリッドごとに取り上げた。本調査の終了はD-1区が10月29日、B区が11月29日、D-2区とC区が12月17日となり、撤収を含めて12月25日までにすべてを終了した。

調査範囲の北側4分の1にあたる範囲については、平成14年11月6日より試掘・確認調査を開始した(確認調査その2)。以下この範囲をA区と

して報告する。)。確認調査は表土除去をバックホーとクローラーダンプを用い、清掃は人力で行った。記録の採取は掘削作業と併行して実測と写真撮影をおこなった。実測は主にトータルステーションを使用し、トレチ設定図、遺構検出状況図、土壟断面図を図化した。写真撮影は35mm判のカラーネガを使用した。この範囲の本調査は、確認調査によって遺構が検出された範囲を拡張するかたちで実施した。記録の採取は、平成13年度調査の方法を踏襲している。

2 資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業(出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測・写真整理・図面整理・修正・各種台帳作成等)は、栗ヶ沢遺跡の現地調査終了後、

他の現地調査と並行して実施した。

平成15年度末の時点で静岡工区静岡地区の現地調査がほぼ終了したことから、平成16年度から静岡工区藤枝地区と一部の遺跡を除いた静岡工区の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、栗ヶ沢遺跡は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。遺構図、遺物実測図の修正・編集・トレース、遺物の写真撮影、報告の執筆等を行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は 6×7 判のモノクロ及びカラー用紙を用いた。なお、整理作業の過程で調査区名称をアルファベットに変更した。また、各調査区ごとに付けられていた遺構番号をA区からの通し番号に整理した。

第3節 概要

1 地形と土層

栗ヶ沢遺跡が営まれる丘陵は、瀬戸川層群の中に縞状に入る砂岩を主体とした層を基盤とする。斜面は侵食が進み60%前後の急峻な地形をつくり出しているが、丘陵頂部から尾根上には、前述のようなやや平坦な場所を広く持つことが特徴的である。尾根上には部分的に大きな谷が入るもの、尾根上の末端までの傾斜は頂部の平均でおよそ9%と緩やかである。

遺跡はA区が尾根の頂部、B・D-1・D-2区が尾根上、C区が尾根の鞍部にある。いずれの区でも基盤層は黄褐色の岩盤である。この上層に風化礫を含む褐色から黄色のシルト～粘土層が堆積し、その上が表土となる。尾根や鞍部では、より上位にあるこれらの層が風化・崩壊した堆積物が頻繁にみられるようになる。

2 遺構・遺物の概要

遺構は、縄文時代の土坑や小穴、近世の林業用の作業道と思われる大きな溝が検出されている。

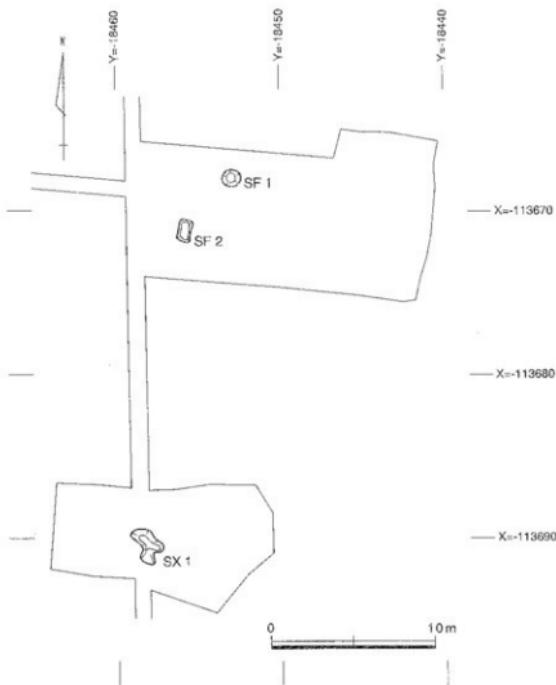
縄文時代の遺構・遺物は、A・C・D-1区で検出されている。遺構は土坑や小穴であり、土坑は焼土を含むものが目立つ。小穴は、特に鞍部にあるC区でまとめて検出されている。竪穴住居としては特定できなかったが、簡易な居住施設があったことは想像に難しくない。遺物はA区とD-1区を主体に縄文時代早期の土器や石器が出土している。石器は石鏃がD-1区から複数出土している。居住施設の比較的近くで使用されたものだろうか。

近世の遺構は主にB・D-1区で検出されている。尾根上に掘りこまれた大きな溝が目を引く。近世の遺物としては錢貨やかんざしなどが出土している。

第4節 遺構と遺物

1 A区の遺構と出土遺物

A区は尾根の頂部にあり、南北130m、東西110m程と比較的平坦な面を広く持つ。ここからは3基の土坑が検出された。遺構内からの出土遺物がないため明確な時期は分からぬが、周囲の包含層の出土遺物から、縄文時代早期頃のものである可能性がある。



第82図 A区遺構分布図

SF 1 直径1m程の円形の土坑である。深さは56cmを測る。炭を多く含む黒味を帯びる褐色土を覆土とする。遺構内からの出土遺物はない。

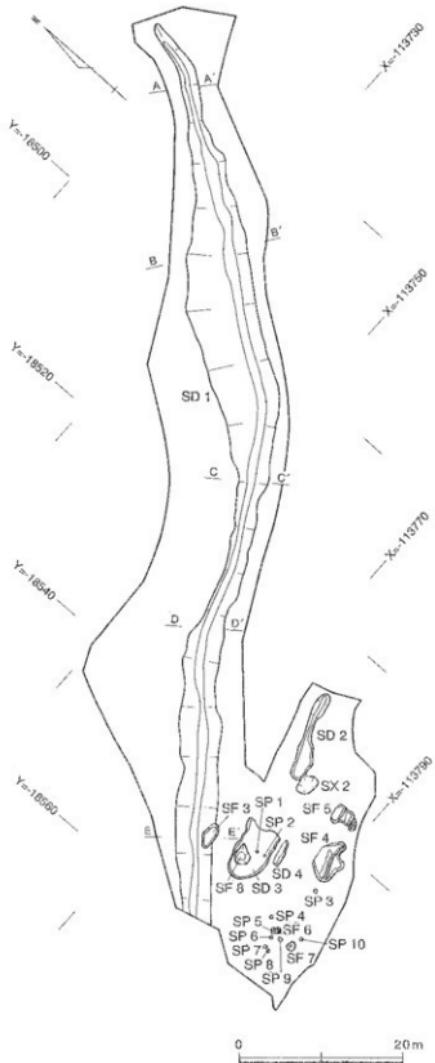
SF 2 南北幅1.3m、東西幅0.7mの長方形形状を呈する土坑である。深さは28cmを測る。黒味を帯びる褐色土を覆土とする。遺構内からの出土遺物はない。

SX 1 最大幅2.3mを測る不定形の土坑である。深さは18cmを測る。内部は焼土上で満たされていた。遺構内からの出土遺物はない。

A区からは縄文時代早期のものと思われる土器4点、石器15点（製品4点）が出土している。いずれも表土直下に堆積する粘性のある褐色土からの出土である。

土器（第87図1～4）は深鉢の口縁～体部片である。胎土は緻密で、直径1～2mm程の砂粒や雲母を少量含んでいる。特に1・4の内面は、器面の残りがよく横方向に細かな擦痕が認められる。表面はいずれも本来無文の部分であったと考えられるが、風化して器面の剥落が著しい。

石器（10～13）はいずれも風化の進む頁岩製である。（10）は、筋面を打面として得た矩形の剥片の末端に刃部を作り出している。（12）は、原礫面を打面として得た三角形状の剥片を利用したものである。背面に残ったバルブを三方向からの大きな調整で取り去った後、側縁に刃部を作り出している。背面左側の調整は右側に比べ荒く、調整中におよそ半分に折れているものと思われる。（13）は表面に原礫面を広



第83図 B・C区遺構分布図

業に伴う木材搬出路と考えたい。

B区出土の遺物は極めて少ない。(第87図14)のかんざし1点が表土から出土したのみである。軸の部分は銅製で、二叉を呈する。飾りのはまる軸末端は、直径1.4mmほどの棒状となる。飾りは赤褐色のガラス

く残す縦長剥片を利用し、両側線に細かな調整を加え刃部を作り出す。表面右側の調整は細かく、刃済し状に施されることから、左側側縁が刃部であると考えられる。同(11)は、石匙である。末広がりの剥片を利用しているものと思われ、裏面中央部に素材の面を残している。左右対象で側縁からの調整により薄く仕上げている。基部は特に付け根に両面から調整を加えることによって作り出されている。

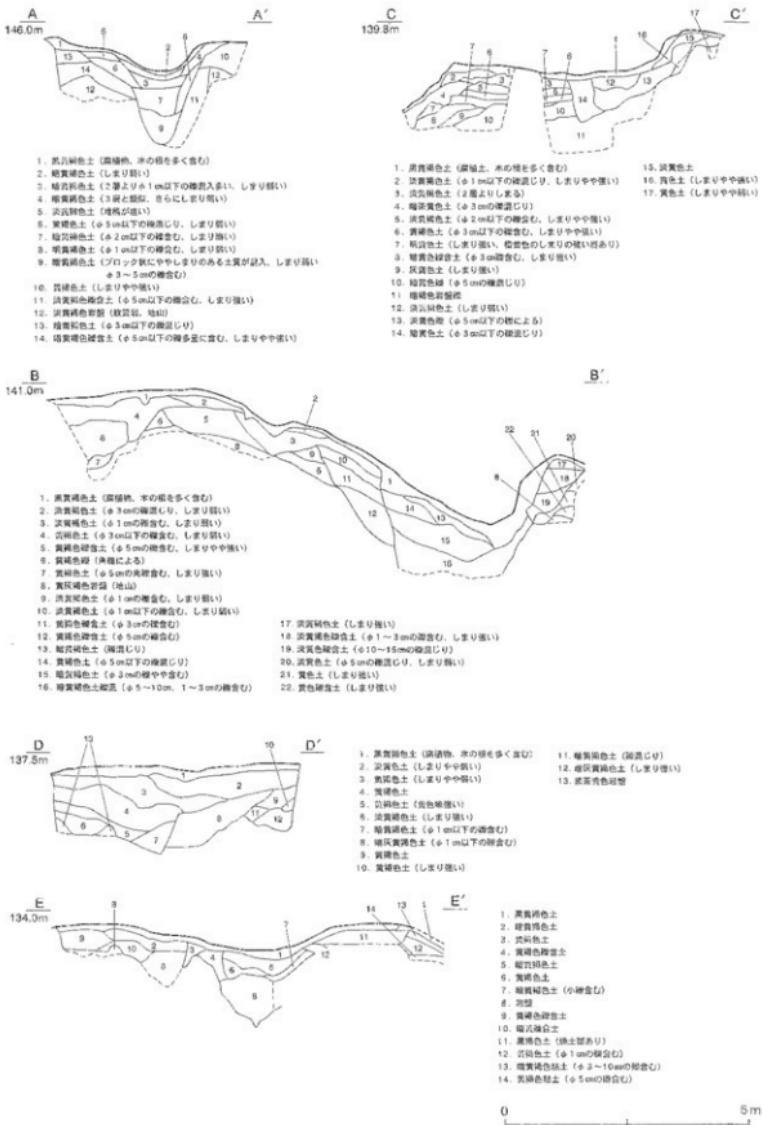
2 B区の遺構と出土遺物

B区はA区から南西に下りる尾根上にあり、尾根に平行する大きな溝SD 1が検出されている。この尾根は平均13%程度の勾配をもっているが、A区に接する上位のほうがおよそ18%ときつくなる。

SD 1 A区からC区に至る尾根上に、110mにわたって検出された大きな溝である。幅はA区よりも最も狭く1.6m、ここより概ね34m下位まで徐々に幅を広げて最大で10.3mとなる。C-C'断面・D-D'断面間では2.4m前後を測り、これ以下では4~5.2mとなる。深さはB-B'断面付近で3.3m、C-C'断面以下で50~60cm程度となる。溝内部の傾斜は、大きく三つに分けられる。まず、A区に接する始点から下位に26mの範囲では、一気に11m下る(勾配42%)。ここから31m間は、後半の11mで70cmほど下る他はほぼ平坦である。これ以降、末端に至るまではおよそ6m下る斜面(勾配17%)を構成する。

SD 1の掘削廃土は、現況地形でも把握されていたように、両側に搔き掻げられ土手状になっていた。C-C'断面までの幅が広く取られている部分が最も厚く、旧表土から1m前後の高さが残存していた。

遺物は出土していない。溝の位置や形状から、小瀬戸城に伴う堀とするよりは近世の林



第84図 B-E SD1 土層断面図

製で、中央に穴の開く小さな梅花状の銅板とともに柄の実を表現している。軸にクッション材となる丈夫な紙を巻きつけた上、差し込まれる。端部の耳搔きは基部の軸が1mmと細く、身となる軸末端に飾りをはめ込んだ上、しっかりと差し込まれている。このかんざしは、近世末～近代のものと思われる。

3 C区の遺構と出土遺物

C区は尾根の斜面に挨まれた鞍部にある。ここには東に開いた最大幅25m程度を測る三角形状の平坦面があり、土坑、小穴、溝などが検出されている。遺物は確認調査トレンチで出土した刺片以外はみられない。

(1) 土坑

土坑は不定形なものが多い。内面に焼土を含むSF 8は溝SD 3の下位に位置する。覆土は炭が多く入る黒色土で下位に焼土を伴っており、SD 3の覆土と類似することから同一組成である可能性が高い。このような内部に炭や焼土を多く含む点では不定形な土坑SF 4も同様であり、近世以降の所産である可能性が高い。不定形な土坑はSF 3や5である。時期を示すものはないが、SF 4や8に類するものであろう。

小土坑であるSF 6や7は、前者と異なり平坦面の奥側（西側）の、小穴が集中する部分に含まれる。時期は判然としないが、小穴と同じ組成と考えたい。

SX 2は一面を焼土で覆われる。確認調査でこの南側に掘られた17トレンチからは、縄文時代に遡る頁岩の剥片が出土している。縄文時代の住居等に伴っていた炉と考えたい。

(2) 溝

溝はSD 2～4の3ヶ所が検出されている。SD 2・3は同一延長線上にあり、覆土の組成も類似することから、元来は一つの遺構であった可能性もある。SD 4は小規模であるので説明は割愛する。

SD 2 幅4.5m、長さ7m、深さ4～17cmを測る。覆土である炭が混じる黒褐色土は表土から掘りこまれているため、近世以降の山仕事の際に掘られたものと考えられる。

SD 3 幅0.7～2m、長さ11m、深さ6～10cmを測る。検出面までの表土は5cm前後で、覆土は上位が炭を多く含んだ黒色土、下位が炭の層となる。SD 4の北側近くには、B区方面からの斜面が迫っているため、SD 3の位置に比べて表土の堆積が促進されているものと考えられる。

(3) 小穴

小穴はC区の西側に集中して検出されている。直径30～50cmの円形～梢円形を呈するものが多く、深さは10～40cmほどとばらつきがある。中には、縄文時代の住居に伴う柱穴が含まれると思われるが、組み合わせの特定はできない。

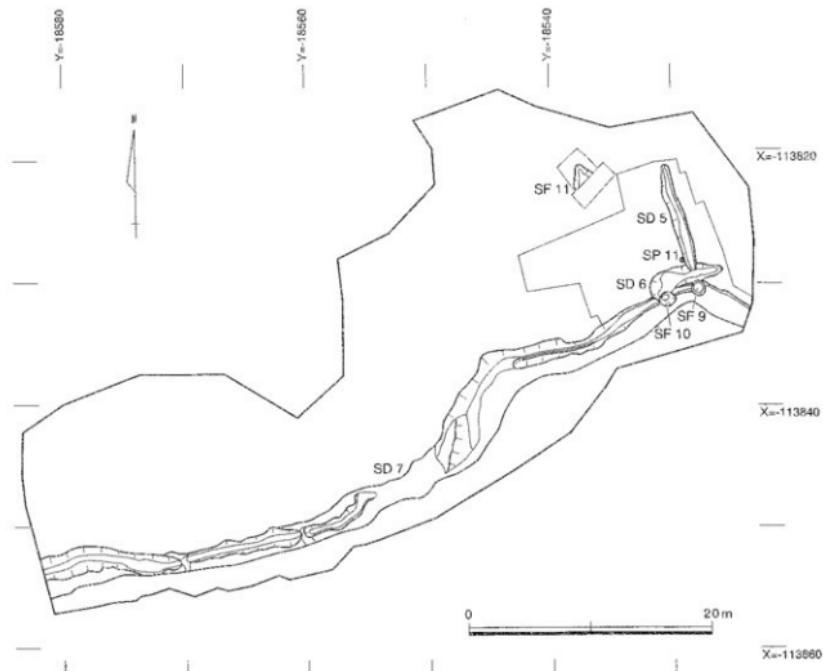
4 D-1区の遺構と出土遺物

D-1区は、今回の調査範囲で最も南側にある。C区を北側に望む北東方向へ下る尾根上にある。遺構は平坦面をつくる調査区東端付近に集中する傾向がある。土坑、小穴、溝が検出され、縄文時代遺物等を含む包含層の堆積が確認された。

(1) 土坑・小穴

土坑は円形のもの（SF 9・10）、不定形なもの（SF11）の3基が検出されている。小穴は1基（SP11）のみである。

SF 9・10 溝SD 7の底面で検出された円形の土坑である。SD 6やSD 7と切り合うが、SD 7より古く、SD 6より新しいものと思われる。SF 9が直径1.1m、深さ50cm前後、SF10が直径1m、深さ30cm前後と



第85図 D-1区遺構分布図

SF10のほうがやや小ぶりである。それぞれは1.6mの間隔をもつ。

SF11 調査区の北東側で検出された不定形の土坑である。最大幅2m、深さ15cm前後の規模がある。覆土の上位は炭の多く入る黒色土、下位は淡黄褐色土である。比較的遺存状態のよい牛か馬の脚部の骨片が出土しているため、近代の所産と考えられる。

小穴SP11はSD 5とSD 6の交点西側で検出された。直徑35cmの円形である。

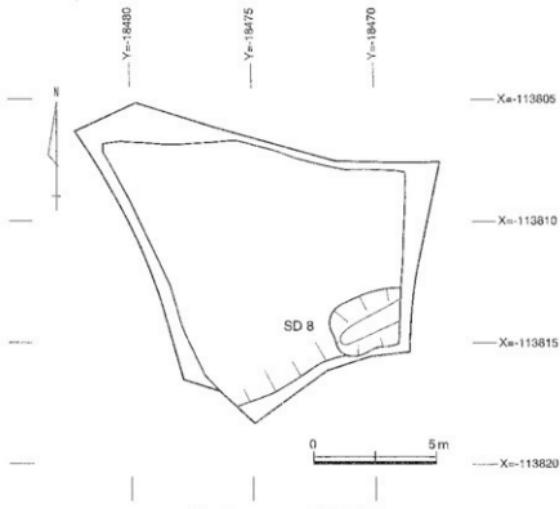
(2) 溝

溝は尾根に沿う大規模なSD 7、調査区東側でこれに切り合うSD 6、SD 6に直交するSD 5の3条が検出されている。

SD 5 幅0.6~1.2m、長さ9m、深さ30cm前後を測る細長い南北方向の溝である。

SD 6 幅2m、長さ6.4m、深さ65cm前後を測る太く短い東西方向の溝である。東にいくにしたがって徐々に細くなる。末端付近で縄文時代早期にあたる深鉢の体部片（第87図5）が出土している。胎土は緻密で、直徑1~2mm程の砂粒や雲母を少量含んでいる。内面は器面の残りがよく、横方向の擦痕が観察される。表面は本来無文であった部分と思われるが、風化により剥落が著しい。

SD 7 D-2区に至る尾根上に、68mにわたって検出された大きな溝である。幅は半ばより下側で最も太く4.2m、調査区上端から9m付近で最も狭く1.6mとなる。溝内部の傾斜は、調査区東端の平坦面に至るまではほぼ同一で、西から47m間で16m下る（勾配34%）。調査区東端の平坦面では勾配12%程度と



第86図 D-2区遺構分布図

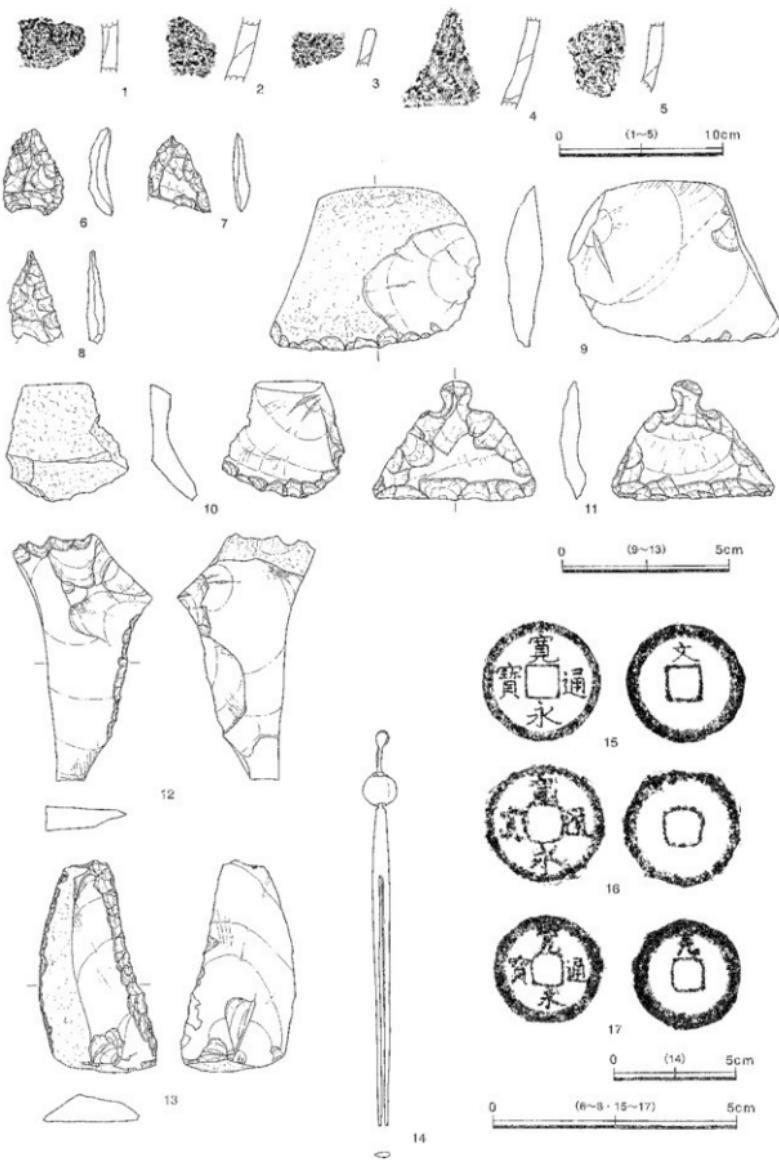
急に緩くなる。この溝は、B区SD 1と同様な性格のものと思われる。

(3) 包含層

調査区東側の平坦面西よりで、現地表から20cm程度下に堆積する黄～赤褐色土が縄文時代早期頃の遺物包含層となっていた。この層位の上面では銭貨（寛永通寶）や金属製品（やっこ）も出土しているが、後世の植林等により搅乱された過程で混入したものと理解した。寛永通寶は3点出土しているが、いずれも新寛永である。（第87図15）はいわゆる文銭であり、肉厚で保存状態も良好である。17は背元、18は薄手のうえ腐食が進み、所々穴が空く。

包含層から出土しているのは石器3点である。頁岩製のスクレイパー（第87図9）は、表面の多くに原礫面を残す縦長の剥片の一側縁に、両面から細かな調整を加えて刃部を作り出すものである。4分の1ほどは折れて失われている。全体的に風化して白色味を帯びている。他の2点は頁岩の剥片である。

この区画からは、元来この包含層中にあったと思われる石器が、表土に混入して10点出土している。石質は頁岩が4点、黒曜石が3点、チャートが3点である。頁岩の中には、先のスクレイパーのように表面が風化するものが含まれないため、これらの間には時期差があるのかもしれない。製品は岡化した小型の石鏃3点のみで、他は剥片や石核である。黒曜石製の石鏃（同6）は、側縁からの細かな調整のうち、基部を凹基に作り出している。背面に素材の面を多く残し、厚みがあるため荒削りな印象を受ける。チャート製の石鏃（同7）は、底辺の短い二等辺三角形状を呈する。細かな調整により、両側縁に緩やかなふくらみをもたせ、基部を凹基に作り出している。一方の逆刺が節理に沿って折れて失われる。チャート製の石鏃（同8）は、薄手であり、左右対象に整えられるため、他よりも洗練された印象を受ける。細かな調整により、両側縁に緩やかなふくらみをもたせ、基部を凹基に作り出している。一方の逆刺が折れによって失われる。



第87図 出土遺物実測図

5 D-2区の遺構

D-2区は、D-1区から下がった同じ尾根上にある。調査区の南東隅から遺構が検出されている。検出されたのは幅2.2m、長さ3.4m、深さ約60cmの規模である。B区SD 1やD-1区SD 7と同様な溝の始点であると解釈し、溝SD 8とした。なお、この調査区からの出土遺物はない。

第17表 土器観察表

件目 番号	種別・器種	部位	時代	区	層位・遺構	粘土・焼成・調整・色調				
						1	2	3	4	5
1	縄文土器 深鉢	体部断片	前期	A	2層	粘土 1mm以下の白色砂粒を少量、石英を微量含む 焼成 良 調整 外面は麻耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調 SYR4/8赤褐色～7.5YR3/2黒褐色				
2	縄文土器 深鉢	体部断片	前期	A	2層	粘土 1mm以下の白色砂粒をやや多く、石英を微量含む 焼成 良 調整 外面は麻耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調 SYR4/6赤褐色				
3	縄文土器 深鉢	口縁部断片	前期	A	3層	粘土 1mm以下の白色砂粒をやや多く、石英を微量含む 焼成 良 調整 外面は麻耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調 7.5YR4/4褐色				
4	縄文土器 深鉢	体部断片	前期	A	3層	粘土 1mm以下の白色砂粒をやや多く、石英を微量含む 焼成 良 調整 外面は麻耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調 7.5YR3/1～3/2黒褐色				
5	縄文土器 深鉢	体部断片	前期	D-1	SD 2	粘土 1mm以下の白色砂粒を少量、石英を微量含む 焼成 良 調整 外面は麻耗のため不明、内面はナデ後微細な擦痕を付ける 色調 SYR4/6赤褐色～SYR3/4にぶい赤褐色				

第18表 石器・石製品一覧表

件目 番号	器種	材質	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
									6	7
6	石鏃	黒曜石	D-1	表土	1.8	1.2	0.5	0.7		
7	石鏃	チャート	D-1	表土	1.6	1.2	0.3	0.4		
8	石鏃	チャート	D-1	田端土塁上	1.9	1.1	0.4	0.5		
9	スクレイバー	頁岩	D-1	黄褐色土面上	6.5	5.0	1.7	63.2	白色に風化する	
10	スクレイバー	頁岩	A	耕土	3.6	3.8	1.3	10.1		
11	石匙	頁岩	A	検出面層	3.7	5.0	0.7	9.9	白色に風化する	
12	スクレイバー	頁岩	A	検出面層	7.5	4.3	1.2	27.4	白色に風化する	
13	スクレイバー	頁岩	A	耕土	6.5	3.2	1.3	25.6	白色に風化する	

第19表 金属製品一覧表

件目 番号	器種	素材	区	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
									14	かんざし
14	かんざし	真鍮・ガラス	B	表土	16.2	0.7	0.2	10.9		玉幅1.4cm

第20表 銭貨観察表

件目 番号	種別	銭貨名	国名	初騎年代	区	層位・遺構	直径(mm)	重量(g)	特徴	
									15	16
15	銅銭	寛永通寶 新寛永	日本	1668年	D-1	掘削上中	25.0	3.3		背文
16	銅銭	寛永通寶 新寛永	日本	不明	D-1	表土	24.0	1.5	腐食が進む	
17	銅銭	寛永通寶 新寛永	日本	1741年	D-1	黄褐色土面上	22.9	1.8		背元

第4章 まとめ

今回の報告では、小瀬戸遺跡と栗ヶ沢遺跡の地域的には近接した2遺跡を報告した。興味深い成果は、低湿地（小瀬戸遺跡）における平安時代を中心とした遺構群（下層遺構）、戦国時代の水田遺構（上層遺構）、丘陵部（栗ヶ沢遺跡）で検出された縄文時代の遺構に絞られる。

1 E区下層遺構の性格と年代

ここでは、検出遺構（第11・33図）について検討する。E区下層部で検出された建物跡を概略すると、9世紀後半から10世紀代の建物と、12世紀前半から12世紀後半の建物に大別される。こうした建物群と遺跡の立地などを考慮する必要があろう。

a. E区の南西から南東にかけての建物群と流路や溝を検討すると、9世紀後半から10世紀代には、建物群に対して南東部から北側の低地を流れていた大きな流路のSR8があったと思われる。その後12世紀前半から12世紀後半になると、南側の丘陵部や発掘区外西側から流れてくるSD10などの河川の氾濫があったと考えられる。この水害から建物群を守るような構造に整えられていたと思われる。

b. SR8の氾濫からSH1・SH4などの建物群を守るために、9世紀後半から10世紀代に土手状遺構1・2を構築している。この遺構はSR8の堤防的な機能を持たせるように構築したと思われる。このような、建物群を洪水から守るシステムは12世紀前半から後半にかけてSH5の北側の部分にも作られる。12世紀代にはSD10・SD13の間に一時期窪地になっていたと考えられる。この部分は、建物群へ北側から流れ込む洪水などの水害を防ぐために作られた窪地で、調整池的な役割を果たしていた可能性がある。SD10から浸水した水はこの窪地に溜まり、もう一度SD10に戻り排水されるようなシステムになっていたと思われる。

c. 12世紀代にはE区の南の山側から湧き出る水を北側に流すための水路のSD14が作られた。これには窪地の部分の排水溝の働きもあり、こうした水はSD10に合流して排水されたと思われる。

d. 12世紀代に作られたと思われるE区下層の建物群の南側と北側の凹地は、輪中の機能を持たせていると考えられる。SR8はE区の南東部山側から流れ出る大量の湧き水や、雨水を集めて下流部に流していると思われる。

e. 12世紀代には、建物群とその近くを東西方向に流れるSD13・SD15・SD21と、SH2を囲んで流れるSD17・SD19などの水路が作られている。

f. 静岡県埋蔵文化財調査研究所が今回調査したE区下層の西側区域は、静岡市文化財課で発掘調査を行っており、E区下層の西側からも建物群が検出（註1）されているようだ。こうした点を考慮すると、今回当研究所が調査したE区下層の遺構は、平安時代から鎌倉時代にかけての小瀬戸遺跡全体からすると、中心地域ではないと思われる。むしろ、小瀬戸遺跡全体のうち、この時代の建物群の東側先端部を調査した可能性が強い。

このように、台風や大雨が続いた時などにはSH1からSH3などの建物群の東側にある窪地（第11・33図）や、SH4・SH5の東側と北側の部分の窪地が大きく池状になったと思われる。また、SR8の氾濫による水害を防ぐために、土手状遺構1・土手状遺構2が9世紀後半から10世紀代にかけて構築されたと考えられる。この土手状遺構1・土手状遺構2は、その後、12世紀後半以降にもSR8の氾濫を防ぐための堤防的な役割を果たしていたと考えられる。さらに溝状遺構は川状遺構と関係するとも思われる。SD10はE区北部で検出され北へ向かって流れており、E区のすぐ西側にある静岡市文化財課の発掘区か

ら伸びてくる川と同一であると考えられる。溝状遺構を見るとSD13やSD21のようにE区の東西方向に伸びるものと、SD14のようにE区の南北方向に伸びるものがある。

さて、前述したように、E区下層の遺構は掘立柱建物がSH 1からSH 6まで6棟検出されている。このうちSH 1とSH 4の2棟は総柱建物であり、SH 6も総柱建物であった可能性がある。これら以外のSH 2・SH 3・SH 5の3棟は掘立柱による側柱建物であった。この中で、SH 1は道状遺構2・道状遺構3・道状遺構4に囲まれた状況で検出されており、SH 1と道状遺構2・道状遺構3・道状遺構4はセット関係をなすものと考えられる。掘立柱建物跡SH 1からSH 6までの6棟について時期を検討すると、次のような第Ⅰ期から第Ⅲ期の3時期に分けられると考えられる。

第Ⅰ期に区分されるのはSH 1・SH 4の総柱建物跡である。SH 1は方向がN-7°-Eであり、桁行4間、梁行3間である。建物の年代は9世紀後半から10世紀初頭と思われる。SH 4は方向がN-7°-Eであり、桁行4間、梁行3間である。建物の年代は9世紀後半から10世紀初頭と思われる。したがって第Ⅰ期の建物はSH 1・SH 4の総柱建物跡で9世紀後半から10世紀初頭と考えたい。また、SH 6は遺物が出土しなかったが総柱建物跡の可能性がある。SH 6は方向がN-111°-Eであり、第Ⅰ期の建物群との関係から10世紀代の建物と考えておきたい。

第Ⅱ期に区分されるのは側柱建物SH 2である。SH 2は方向がN-57°-Eであり、桁行5間、梁行3間である。建物の年代は12世紀前半と考えられる。

第Ⅲ期に区分されるのは側柱建物SH 3・SH 5である。SH 3の方向はN-44°-Eであり、12世紀後半の建物と思われる。SH 5はN-40°-Eであり、桁行5間、梁行4間である。SH 4の柱穴との切り合いや建物の方角から12世紀後半の建物と思われる。

建物群は以上3期に分けられ、第Ⅰ期が総柱建物跡SH 1とSH 4の2棟と総柱建物の可能性のあるSH 6、第Ⅱ期が側柱建物SH 2の1棟、第Ⅲ期が側柱建物SH 3とSH 5の2棟であった。

また、SH 1を囲むように道状遺構2から道状遺構4が巡っており、建物を囲む道状の遺構と考えられる。今後、9世紀後半から10世紀初頭の建物跡と道状遺構との関係を想定できる事例についても検討する必要がある。

この時期の当遺跡の性格については不明である。小瀬戸地域の中心的な遺跡と考えられ志太平野と結ぶ間道が脇を通り、交通的にも重要な遺跡であったと思われる。

2 E区下層遺構出土遺物について

下層遺構出土の灰釉陶器 小瀬戸遺跡出土の灰釉陶器と生産地の関係を検討したい。この遺跡から出土した灰釉陶器とその関係資料を年代的に分けると次のようになろう。

第Ⅰ期は8世紀末から9世紀初頭の猿投窯生産品でO-10号窯式併行の原始灰釉陶器の長頸瓶（註2井上、110・290）が搬入品として出土している。

第Ⅱ期は9世紀前半の猿投窯生産品でK-14号窯式併行の灰釉陶器の長頸瓶（8・9・56・62）や、K-14号窯式の広口瓶（14）が出土しており、小瀬戸遺跡では9世紀前半に長頸瓶や広口瓶などの特別な器種を猿投窯から搬入したことになる。この時期の碗形の使用状況については不明な点があるが、K-14号窯式からK-90号窯式の東遠系の碗（84）が出土している。

第Ⅲ期は9世紀後半の猿投窯生産品でK-90号窯式併行の陶器の使用状況を検討すると、猿投窯生産の縁釉陶器の稜碗（111）、猿投窯生産の縁釉陶器の碗（149）、猿投窯生産の手付瓶（291）、猿投窯生産の長頸瓶（115）、猿投窯生産の碗（10・194・195）を搬入し使用している。他にこの時期には、東遠系で窯跡が不明な灰釉陶器の碗（11・48・114・141・142・144・145・191～193・196）、助宗窯生産の長頸

瓶（49・86・147）、東遠系の長頸瓶の把手（148）、助宗窯生産の皿（43）、助宗窯生産の碗（41・65・68・85・112・143）、助宗窯生産の輪花碗（102）、東遠系の長頸瓶（88・113・140・146）などがある。小瀬戸遺跡でのこの時期の出土状況をみると、特殊な器種として猿投窯生産の綠釉陶器の稜碗・綠釉陶器の碗・手付瓶・長頸瓶が搬入されている。この第Ⅲ期の9世紀後半には東遠での窯業生産が始まり、駿河国志本地域でも助宗窯で灰釉陶器の生産が始まる。今回の小瀬戸遺跡発掘調査で、助宗窯の生産品が検出できたことは重要である。この他に窯跡は特定できない東遠系の製品もある。

第IV期は10世紀初頭のO-53号窯式併行の陶器でこれを検討すると、猿投窯からの搬入品が極めて少なくなる。助宗窯や旗指古窯などの灰釉陶器生産品でその多くがまかなわれたことがわかる。まず、この時期の出土陶器を見ると猿投窯生産のO-53号窯式の碗（152）が出土している。助宗窯生産の碗（12・64・72・73・90・197・225・255・266）、旗指古窯生産の碗（13）、東遠系の碗（28・35・59・63・104・118・151・153・154・198～202・224・226・294）、助宗窯生産の皿（55）、東遠系の皿（150・155・292）、東遠系の長頸瓶（116・293）などの出土品もある。この段階になると小瀬戸遺跡では、長頸瓶、碗、皿などのほとんどを在地の生産品でまかなっていることがわかる。出土の灰釉陶器を検討すると、第IV期とした10世紀初頭のO-53号窯式併行の時期以降使用が一時途切れる傾向にある点が注目される。

さて、前述したように小瀬戸遺跡の発掘調査では藤枝市助宗窯で生産されたK-90号窯式の灰釉陶器の製品が出土している。消費遺跡において助宗窯で生産されたK-90号窯式の灰釉陶器（註3）を確認できたことは大きな成果と思われる。助宗窯でK-90号窯式併行の灰釉陶器を生産していることは、菅原雄一（註4）の報告と助宗窯出土資料を観察して明らかとなってきた。助宗窯で生産されたK-90号窯式併行の灰釉陶器を窯跡と消費遺跡の双方で確認できることになる。また、島田市旗指古窯の灰釉陶器生産はO-53号窯式併行の末期（註5）からスタートし、その生産の中心が広久手窯期以降から山茶碗の初期段階と考えられる。その点からすると、助宗窯と旗指古窯との関係はさらに重要な関係になる。須恵器生産の伝統のあった助宗窯に、その後、灰釉陶器の工人集団が移住したり技術を伝えて、K-90号窯式の段階から灰釉陶器の生産をスタートさせることになる。そして、O-53号窯式の段階で工人集団の分散と移動があったと思われ、その移動した集団が旗指古窯で灰釉陶器の生産を始めたとも考えられる。この点は島田市船木の向山古窯（註6）2区2号窯でもK-90号窯式の末には灰釉陶器を生産しているので、合わせて今後検討しなければならない。

下層遺構出土の糸切り碗について 小瀬戸遺跡からは比較的多くの糸切り碗（註7）が出土している。糸切り碗の生産地としては島田市船木向山2区2号窯（註6）、向山3区1号窯や旗指古窯第14号窯跡や同第17号窯跡（註5）など旗指古窯群（註5）もあり、助宗窯での生産も考えられる。糸切り碗の用途は不明な点があるが、消費遺跡である島田市大津の居倉遺跡（註8）からは糸切り碗が多く出土しており、その中に「酒杯」と墨書きされた糸切り碗（註9）がある。糸切り碗のいくつかの用途の中に「酒杯」として使用したものがあったことは認めるべきであろう。この他に居倉遺跡出土の糸切り碗には「尺」などの人名（註9）と考えられる墨書き資料もある。

小瀬戸遺跡出土の糸切り碗については器形、器高、口径、焼成などから検討すると大きく2時期に分けられると思われる。SH 1の検出面から出土した9世紀後半のK-90号窯式併行と思われる東遠系の資料（16）がある。同じく9世紀後半のK-90号窯式併行の東遠系と思われる糸切り碗（204）が出土している。次のO-53号窯式併行にあたる10世紀初頭には、東遠系の糸切り碗の出土量が多くなってくる傾向にある。このO-53号窯式併行の糸切り碗は（17・25～27・29・30・38・50・66・70・74・75・92～95・119～121・157～162・164・203・205・206・227～232・295・296）などが出土している。圧倒的に10世紀初頭の糸切り碗の使用が多いことがわかる。

下層遺構出土の山茶碗・小碗・小皿について 山茶碗と小碗、小皿について検討すると、山茶碗の I

期では渥美窯の12世紀前半（256）と思われる搬入品が1点出土した。他の山茶碗は東遠系で12世紀前半と思われる資料（註10、52・122・233～235）がある。東遠系の小碗は、12世紀前半の資料（19・31・76・124・125・236・261・267）がある。また、東遠系の小碗で12世紀中葉から12世紀後半と思われる資料（297）も出土している。山茶碗のⅡ期では12世紀後半の資料（36・167）がある。他に山茶碗で12世紀代と考えられる資料（209）、同じく山茶碗でⅡ—2からⅢ—1期の12世紀末と思われる資料（54）、同じく山茶碗でⅢ—1期の13世紀前半と考えられる資料（18）、同じく山茶碗でⅢ—1期の13世紀中頃と思われる資料（97・165）同じく山茶碗でⅢ—2期の13世紀中頃と考えられる資料（207）、小碗・小皿でⅢ期の13世紀代の資料（168・271・302）、東遠系の小皿でⅢ—3期の13世紀後半の資料（126）、小碗・小皿で13世紀後半の資料（211・237）などが出土している。

3 戦国時代の水田遺構

戦国時代以降に開かれた水田遺構は、小瀬戸遺跡の全区画に渡って検出されている。水田面からは、戦国期～近世後半の遺物が出土していることから、16世紀後半の開田以来、およそ300年間にわたりほぼ同一な土を繰り返し耕作していたことが明らかになった。小瀬戸谷は、総じて南から北へ下がる地形である。等高線に平行する方向の大畦畔に普遍的にみられた杭や横木による保護施設は、田面を水平に整えて下位に流出しないように囲むためのものである。したがって、大畦畔の上下では大きく段差を持つ個所がいたるところに観察されている。また、山際のB区を中心に、畦畔の方向が山に沿う方向に崩れてくる傾向がある。このことから、限られた空間を最大限利用して、生産効率を向上させようとする意図が色濃く窺える。

近世の小瀬戸村は天領である。寛永年間で約65石、元禄年間で約195石、天保年間で206石の村高が郷帳などに記載されており、小瀬戸谷の水田は、寛永年間以降およそ半世紀で3倍の収益を上げるにいたり、それ以降はほぼ横ばいであったことがわかる。これは、農業技術の進歩とともに耕地が谷の隣々まで急速に広げられたことを示唆しているのだろう。ところが、これらの水田遺構は、多くの部分が砂礫によって被覆されている。これは、河川の氾濫がもたらした堆積物によって、水田が一気に埋没したことを見ている。この洪水堆積物の上面にしばしば見られるラミナは、洪水後しばらくの間水が引かず、湿地化したままであったことを示している。このことは、谷の入り口がせり出す尾根によって狭められているために、谷全体の排水効率があまり高くなかったことが原因のひとつであろう。

近世の洪水で記録に残るものとしては、文政11年（1827）の薊科川の氾濫がある。この際には、小瀬戸村の田畠は洪水堆積物によって広い範囲で川成（砂利によって耕作不能となる状態）となってしまったようである。今回調査を行った水田からは19世紀前半までの遺物が出土しているので、調査によって検出された水田はあるいは文政11年の水害によって埋没したものとも想定される。

しかし、水が引いた後は洪水堆積物の上面を利用して、再度水田を営んでいる。水害からさほど時を経ない天保年間には、すでに元禄年間以上の生産高までの復旧を果たしている。耕作域の復旧には生活と命がかかっているので、小瀬戸の人々は必死だったのだろう。このように、小瀬戸谷の人々は常に水と戦っており、洪水のたびに粘り強く耕地を復旧させていたことが窺える。

4 丘陵部の縄文時代遺構

丘陵部にある栗ヶ沢遺跡では、縄文時代早期にあたる遺構と遺物が検出されている。得られた資料はごく少量であるが、近在の縄文時代遺跡の内容が判然としない現状においてはきわめて意味深いものと

いえる。幾度も述べてきたように、安倍川・薬科川流域には縄文時代の遺跡が点在している。遺跡の多くは狭い範囲のもので、河川から一段上がった丘陵裾部に位置することが多い。遺跡が大規模化しなかった要因のひとつは大井川にみられるような河岸段丘が発達しなかったことが挙げられる。この地域の沖積地から急峻な丘陵がせりあがる地形が、縄文人の暮らしを規制していたのであろう。

今回調査が実施された栗ヶ沢遺跡は、従来知られていた遺跡の立地と異なる丘陵上に営まれた遺跡である。この地域の丘陵は、いずれも小河川による開削が激しいため、尾根も狭く細長い。調査範囲においても、もっとも広いA区、狭いながらも山の陰となるC区から遺構・遺物が検出されたことは、限られた条件の中で最も生活に適した地域を選び出していることを示している。

現状では、ごく限られた所見しか得られないが、当該期の遺跡が、丘陵上にも存在することを知るきっかけとなったことは確かである。資料の増加を捉えて、この地域の縄文時代像を地理的な特異性を見据えた上で構築していくことは今後の課題である。

文末となったが、報告をまとめるにあたって菊田 宗・鈴木悦之・大川敬夫・新井正樹（静岡市文化財課）、八木勝行・岩木智絵（藤枝市博物館）の各氏にはさまざまご教示をいただきました。記名して感謝する次第です。

註

1：平成17年度静岡市文化財課の調査による。菊田宗氏（静岡市文化財課）のご厚意により、現地を実見させていただいた。

2：O-10号窯式併行の「原始灰釉陶器」については、井上喜久男氏からご教示いただいた。

3：平成17年2月に八木勝行・岩木智絵両氏（藤枝市博物館）のご厚意で、濫谷と河合が助宗窯産の灰釉陶器を実見した。この中にK-90号窯式期に併行すると考えらえる、体部に回転ヘラ削りを施す碗が存在することを確認した。

4：菅原2005による。

5：松澤1976、濫谷1982・83による。

6：鷗野1997による。ここでは旗指古窯跡生産の灰釉陶器より古い段階の陶器が生産されている。向山2号窯からは多くの「糸切り碗」が出土しているが鷗野雄康氏は報告していない。今後再整理する必要があると考えられる。

7：濫谷1983では、この器種を「底部を切り離している無高台碗」としたが、今回は井上喜久男氏のご教示により「糸切り碗」の用語を使用することとした。

8：濫谷1987による。

9：濫谷1987・94による。

10：河合2001・03による

参考・引用文献

- 静岡県 1930『静岡縣史』第1卷
- 静岡県 1988『静岡縣史』資料編5中世1
- 静岡県 1990『静岡県史』資料編1考古1
- 静岡県 1990『静岡県史』資料編2考古2
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編3考古3
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編6中世2

- 静岡県 1994『静岡県史』資料編7中世3
- 静岡県 1997『静岡県史』通史編2中世
- 静岡県教育委員会 1981『静岡県の中世城館跡』
- 静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳—個別報告編一』
- 静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳—総括編一』
- 静岡県土木部 2004『雨量・水位年表』平成15年
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『宮下遺跡』(遺構編)
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986『神明原・元宮川遺跡 大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1986『内荒遺跡』(遺構編)
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988『内荒遺跡』(遺物編)
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989『大谷川IV』(遺物・考察編)
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991『宮下遺跡』(遺物編)
- 財静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999『元島遺跡I』
- 静岡市役所 1931『静岡市史』第1巻
- 静岡市 2003『静岡市統計書』平成14年度版
- 静岡市立登呂博物館 1990『特別展 静岡・清水平野の古墳時代—新出土品にみるまつりとくらし』
- 静岡市教育委員会 2001『ふちゅへる』No.9
- 静岡市教育委員会 2005『ふちゅへる』No.13
- 大澤和夫 1935「有波山塊の考古学的調査」『静岡県郷土研究』第5輯 静岡県郷土研究協会
- 大塚淑夫 1994「いははらの君—静岡県中部地方の古墳時代・首長権の推移—」『地域と考古学』向坂誠二先生還暦記念論集刊行会
- 小和田哲男 1981「V安倍城跡」『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会
- 河合 修 2001「青灰色のうつわ—藤原郡金谷町横岡字笠谷の灰釉系陶器についてー」『研究紀要』第8号 貢静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 河合 修 2002「建物の規格と組み合わせ—静岡県内の事例からー」『第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集、東海の中世集落を考える、一考古学から中世のムラをどう読み解くかー』
- 河合 修ほか 2003「東海」「シンポジウム中世土器研究の今日的課題」日本中世土器研究会
- 瀧谷昌彦 1982「旗指古窯陶器生産の年代について」『静岡県考古学研究』13 静岡県考古学会
- 瀧谷昌彦 1983「第IV章 旗指古窯跡焼成陶器の編年と様式について」『旗指古窯発掘調査報告書』島田市教育委員会
- 瀧谷昌彦 1987「②出土した灰釉陶器の生産地について」「居倉遺跡」島田市教育委員会
- 瀧谷昌彦 1994「旗指古窯跡群と居倉遺跡の関係についてー「尺」などの文字資料を中心としてー」『地域と考古学』向坂誠二先生還暦記念論集刊行会
- 嶋野雄康 1997「第2区・2号窯焼成陶器」・「第3区1号窯焼成陶器」「向山遺跡」島田市教育委員会
- 菅原雄一 2005「助宗古窯跡群における灰釉陶器・山茶碗生産の様相」『藤枝市文化財年報—平成15年度—』
- 鈴木公延 2002『銭の考古学』吉川弘文館
- 鈴木道之助 1991『図録 石器入門事典』絶文 柏書房
- 竹内理三編 1982『角川日本地名大辞典』22静岡県
- 沼館愛三 1933「安倍城の研究」『静岡県郷土研究』第1輯 静岡県郷土研究協会
- 松澤 修 1976「器種と変遷」『旗指古窯址群(本文編)』島田市教育委員会ほか

写 真 図 版

小瀬戸遺跡 図版 1

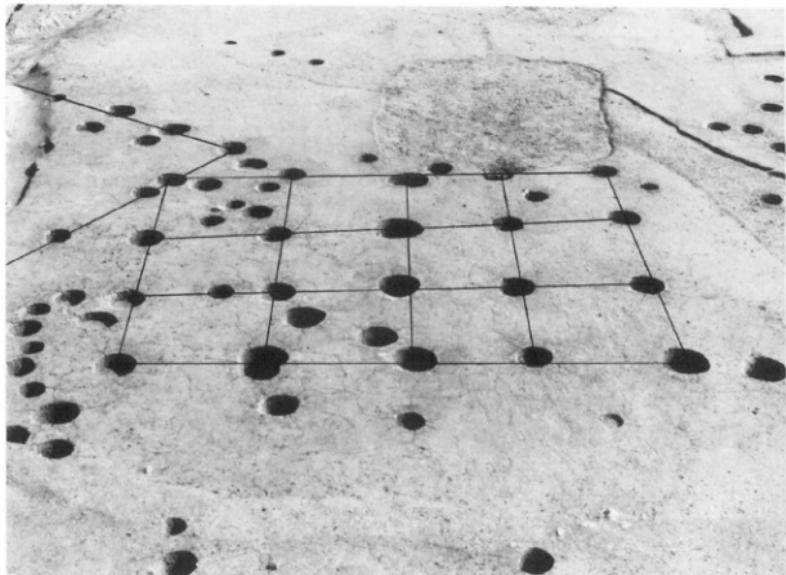


小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡遠景(南より)



下層遺構全景

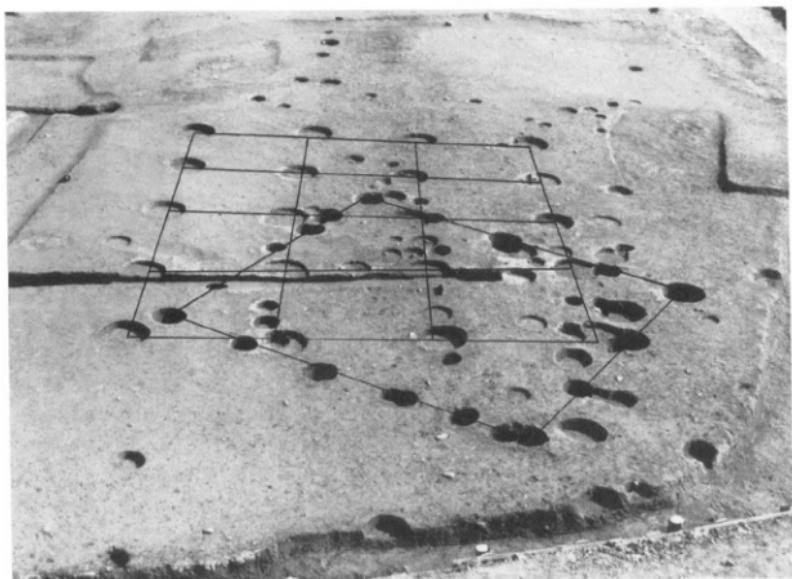
図版 2 小瀬戸遺跡



SH1・3、道状遺構2(西より)



SH2、SD16~22、道状遺構3(北西より)

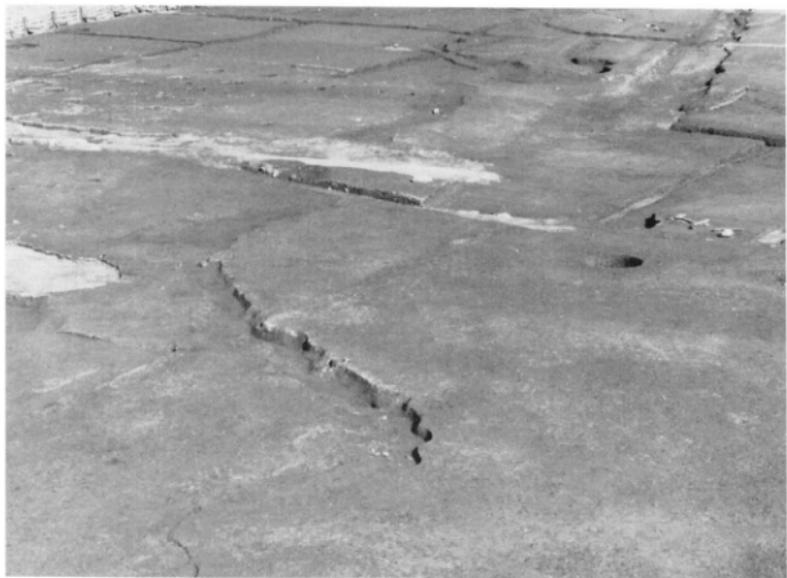


SH4・5(西より)



SH6、SD21、道状遺構6(西より)

図版 4 小瀬戸遺跡



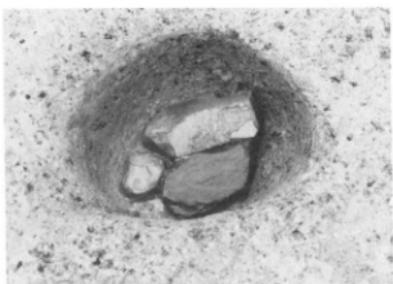
SD14(西より)



土手状遺構 1・2、SR 8 (南東より)



SP251半截状況(南より)



SP299完掘状況



遺物出土状況(灰釉陶器)



遺物出土状況(灰釉陶器)



遺物出土状況(鉄縫)

図版 6 小瀬戸遺跡



A区水田面全景



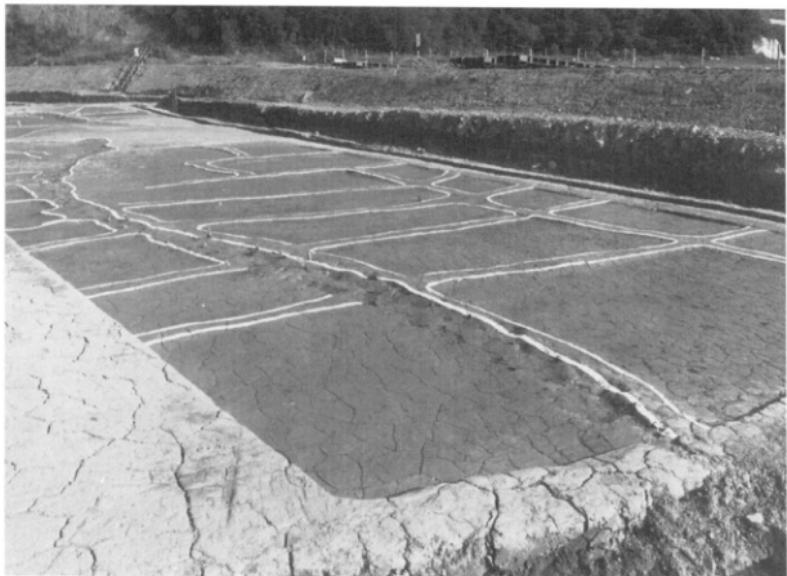


SK 2・3、SD 1～3(西より)

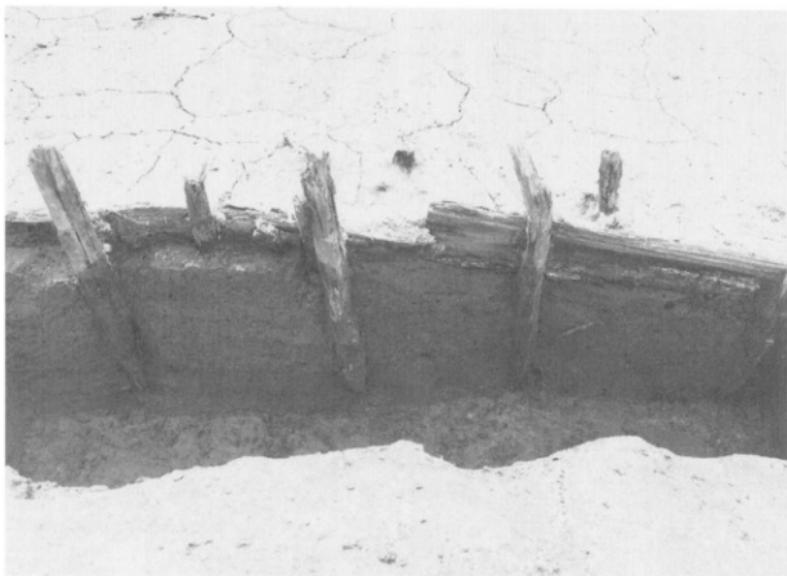


SR 9、SD 4(南より)

図版 8 小瀬戸遺跡



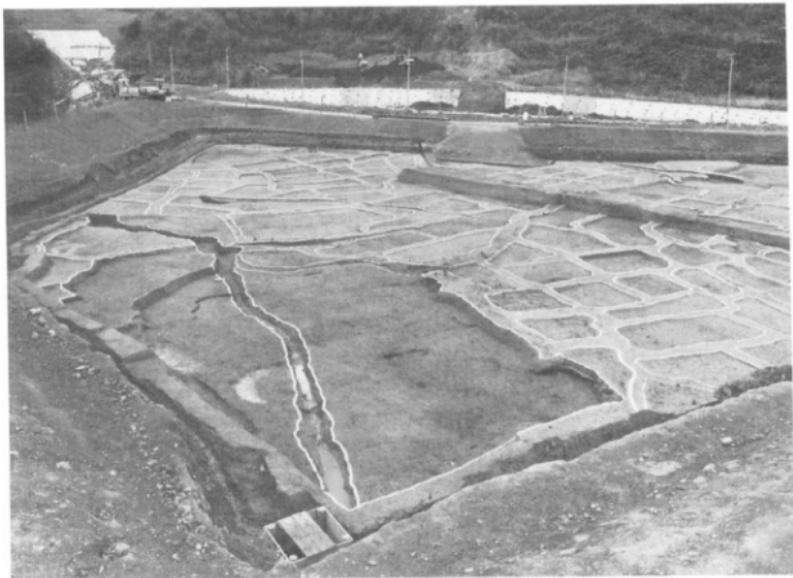
SK 8(西より)



杭列断面(北より)

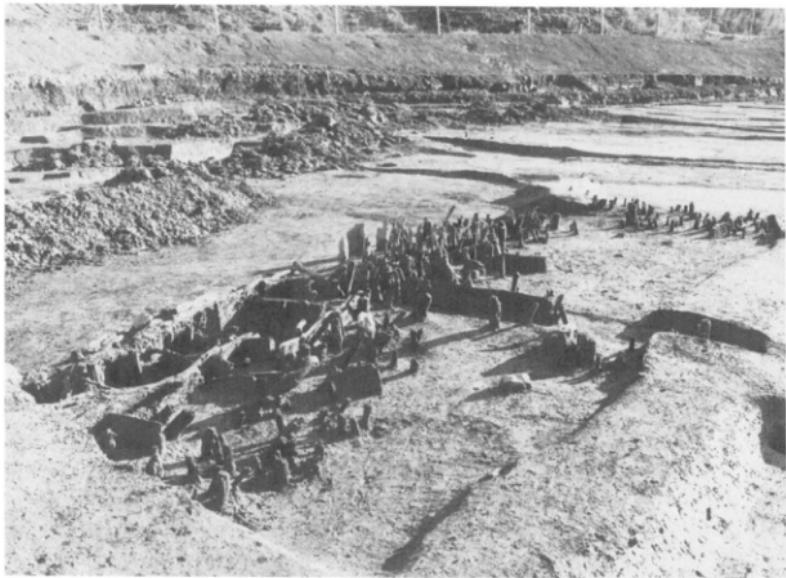


B区水田面全景



SK10・11、SR4、SD5～7(東より)

図版10 小瀬戸遺跡





SK10 桁列断面



遺物出土状況(漆椀)



遺物出土状況(付札状木製品)

図版12 小瀬戸遺跡



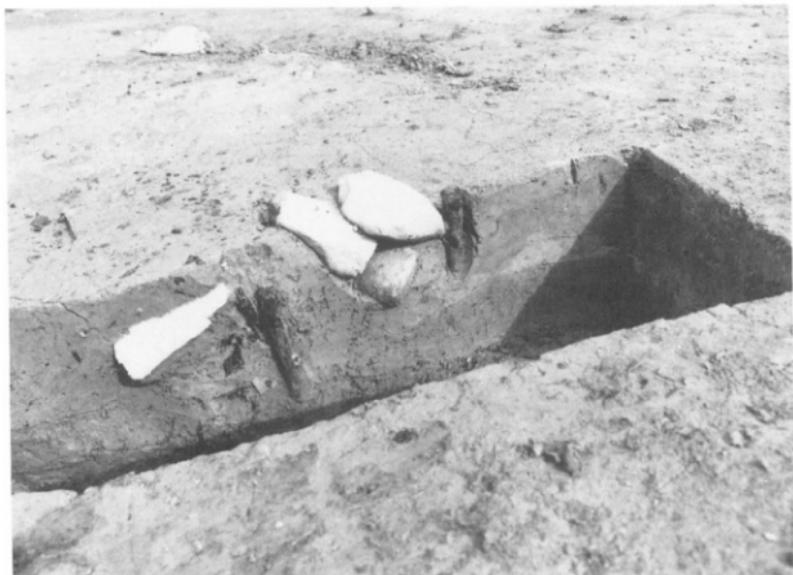
C区水田面全景



SK14・15(東より)



SK16、SR5



杭列断面(南東より)

図版14 小瀬戸遺跡



D区水田面全景



SR 6、SK17(北より)



SK17、SD8(東より)



E区水田面全景

図版16 小瀬戸遺跡



E区南端部水田発掘状況(西より)



SR7(西より)



E区北端部水田完掘状況(東より)



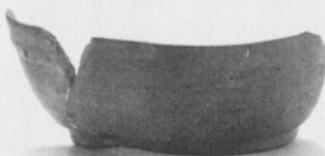
SF 1貯水穴、SD 9導水溝(南東より)

図版18 小瀬戸遺跡

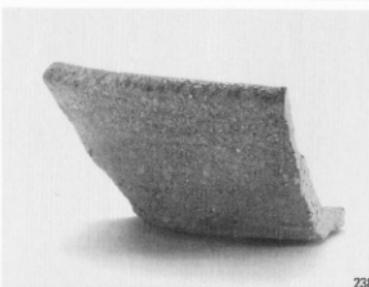
SH 1



13



130



238



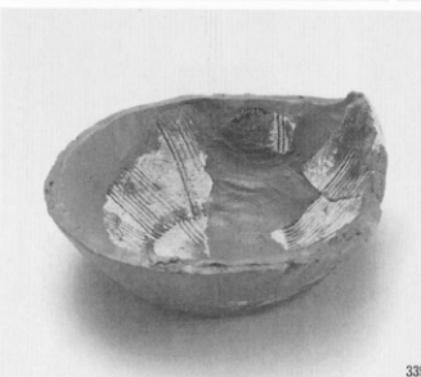
462



255



404



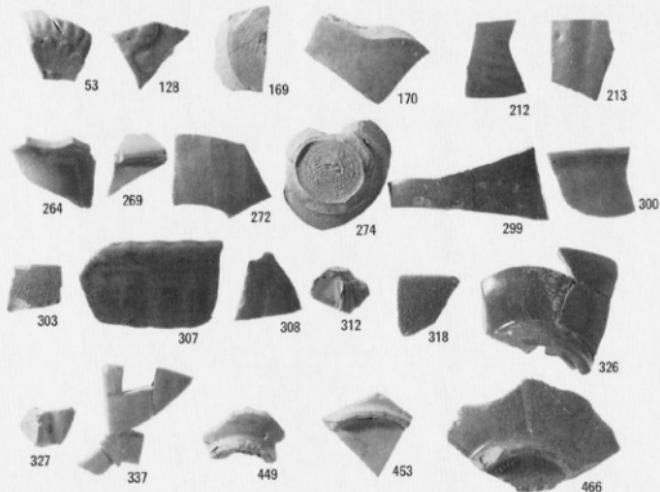
335



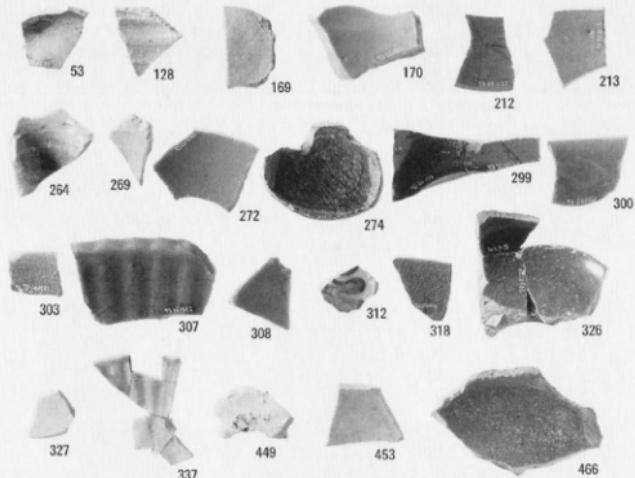
370

出土遺物 1(土器 1)

(外面)

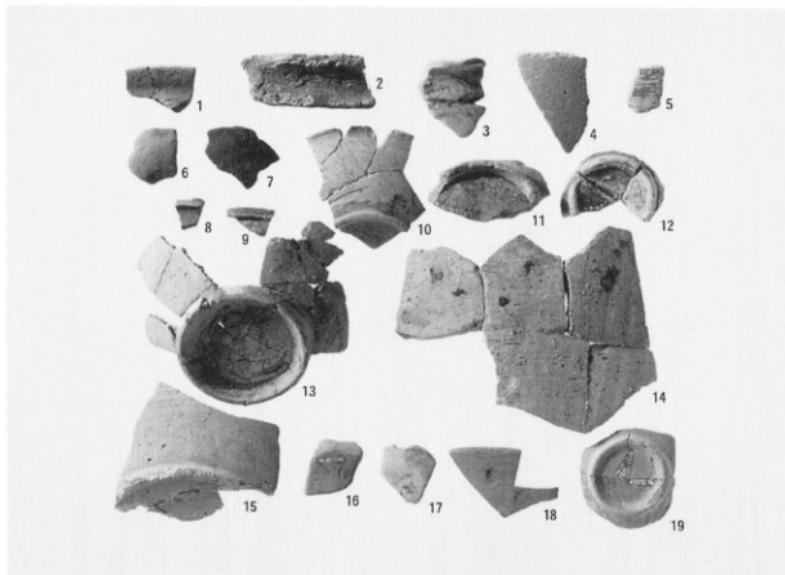


(内面)

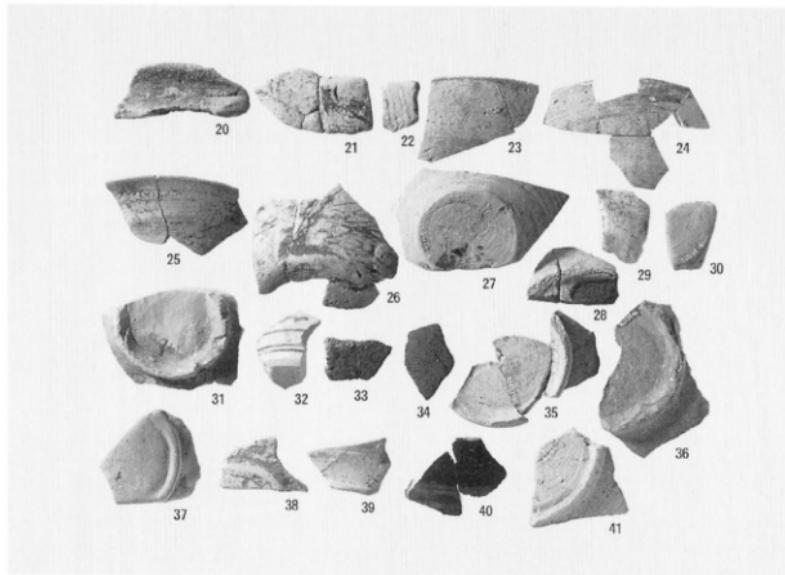


出土遺物2(貿易陶磁)

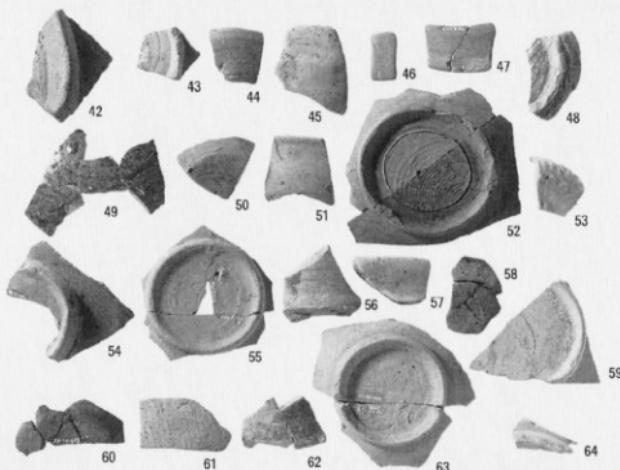
図版20 小瀬戸遺跡



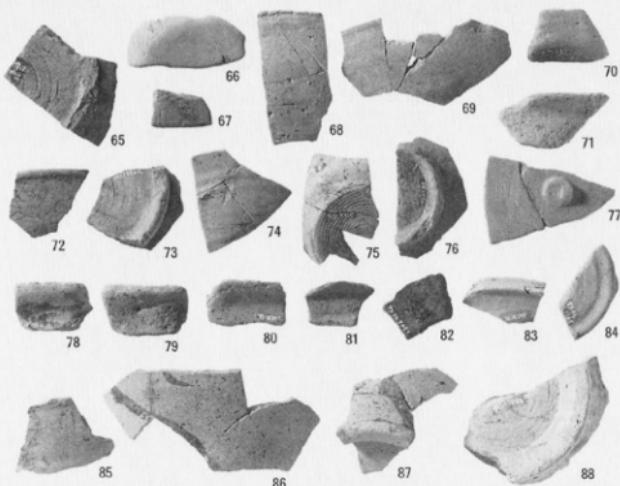
出土遺物3(土器2)



出土遺物4(土器3)

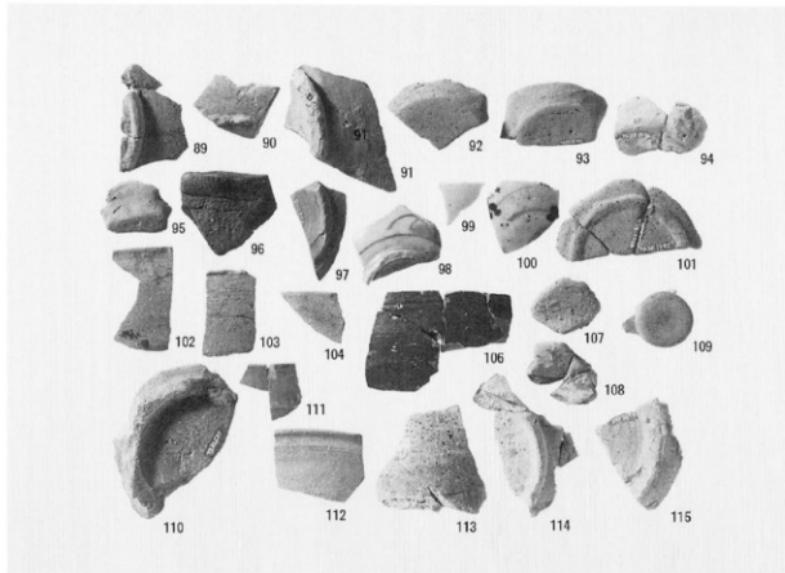


出土遺物5(土器4)

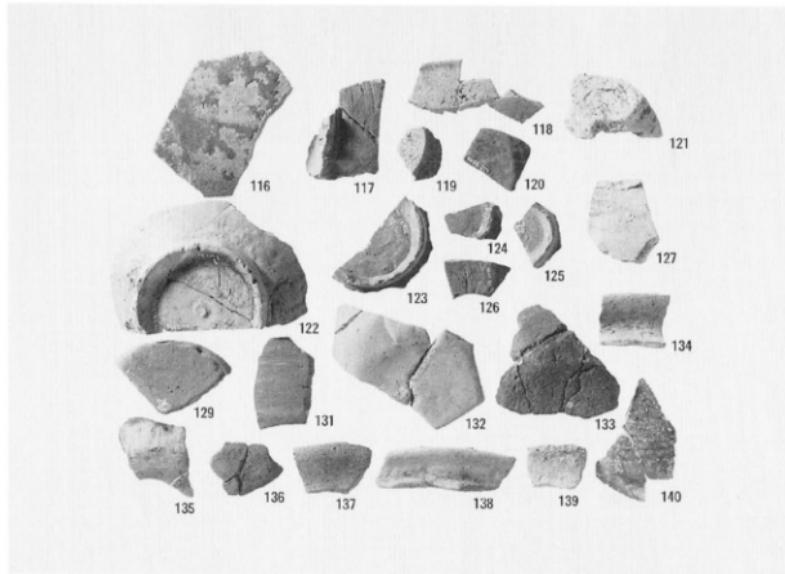


出土遺物6(土器5)

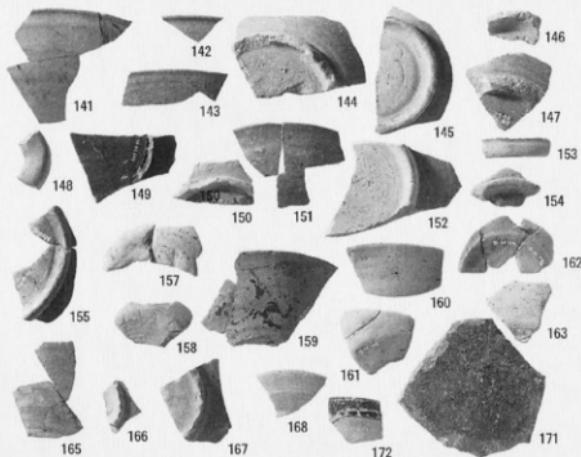
図版22 小瀬戸遺跡



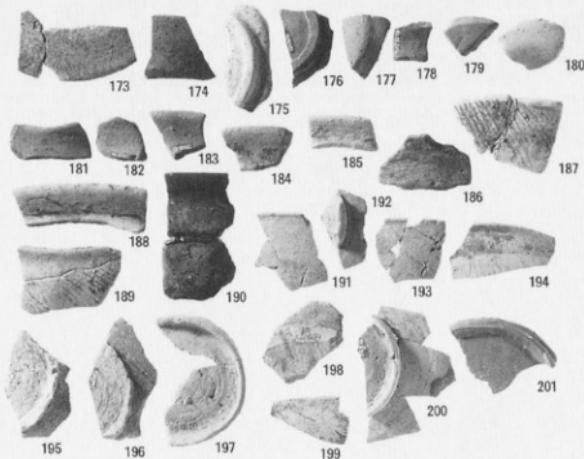
出土遺物7(土器6)



出土遺物8(土器7)

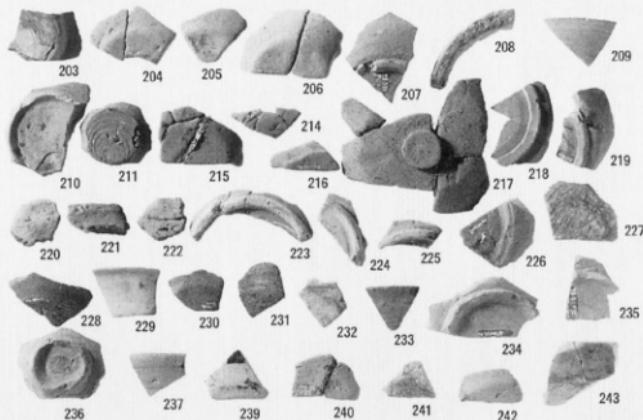


出土遺物9(土器8)

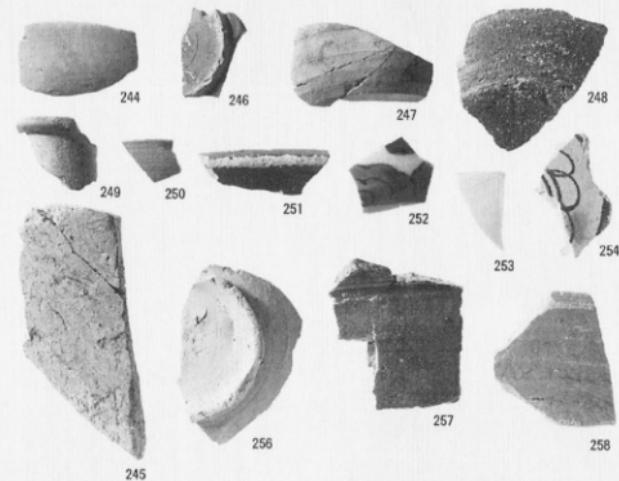


出土遺物10(土器9)

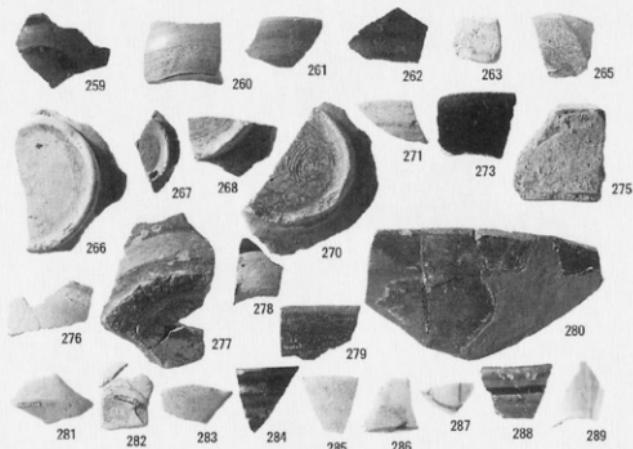
図版24 小瀬戸遺跡



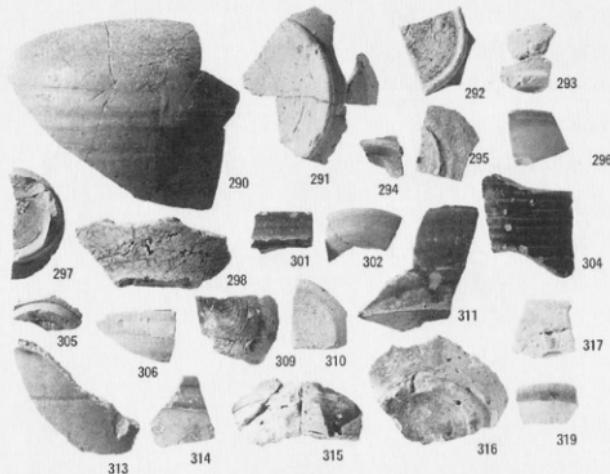
出土遺物11(土器10)



出土遺物12(土器11)

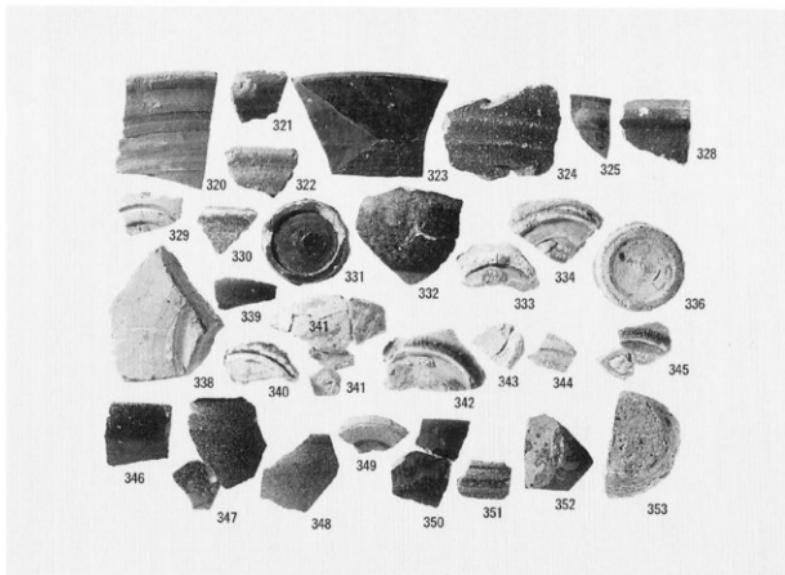


出土遺物13(土器12)

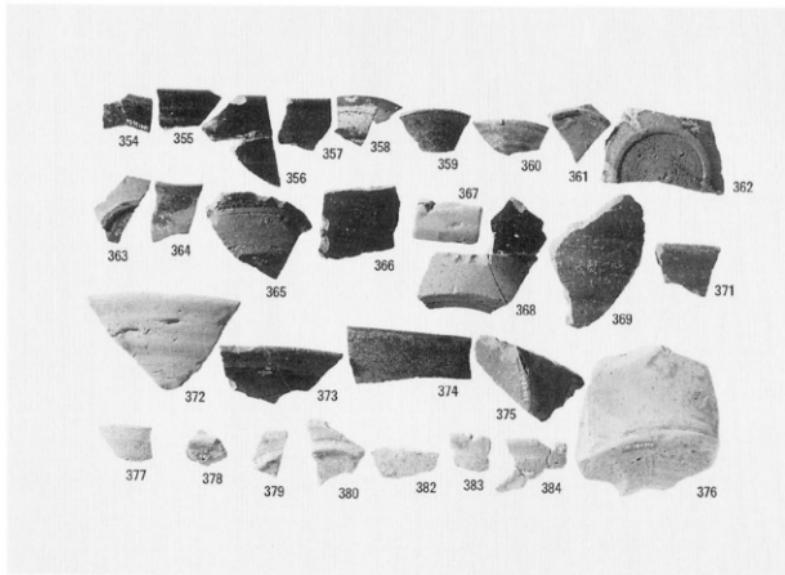


出土遺物14(土器13)

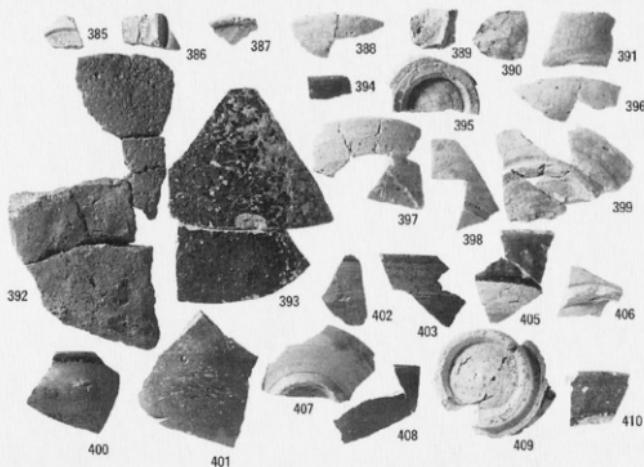
図版26 小瀬戸遺跡



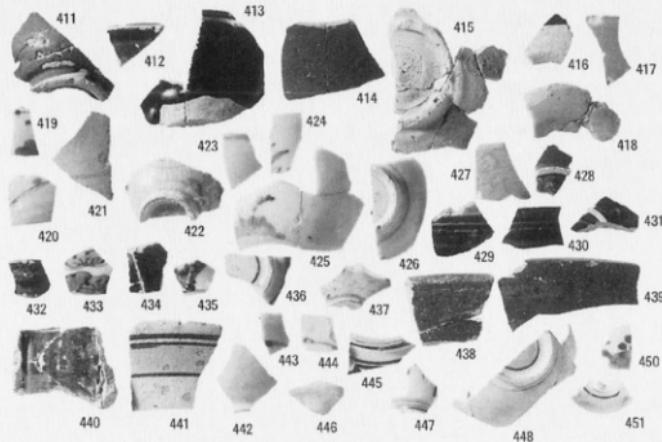
出土遺物15(土器14)



出土遺物16(土器15)

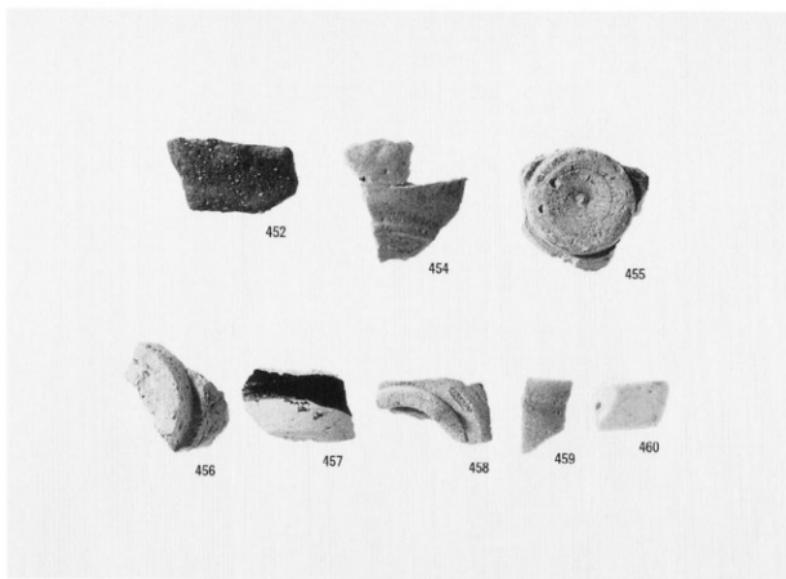


出土遺物17(土器16)

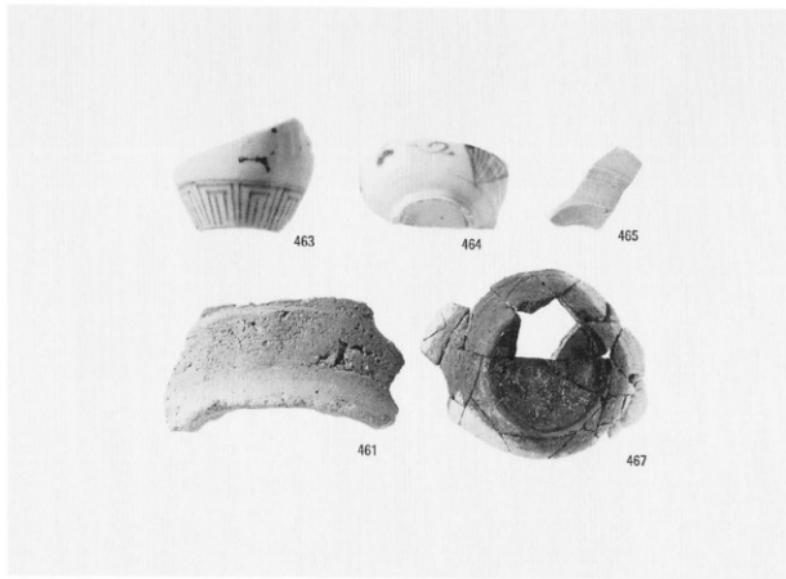


出土遺物18(土器17)

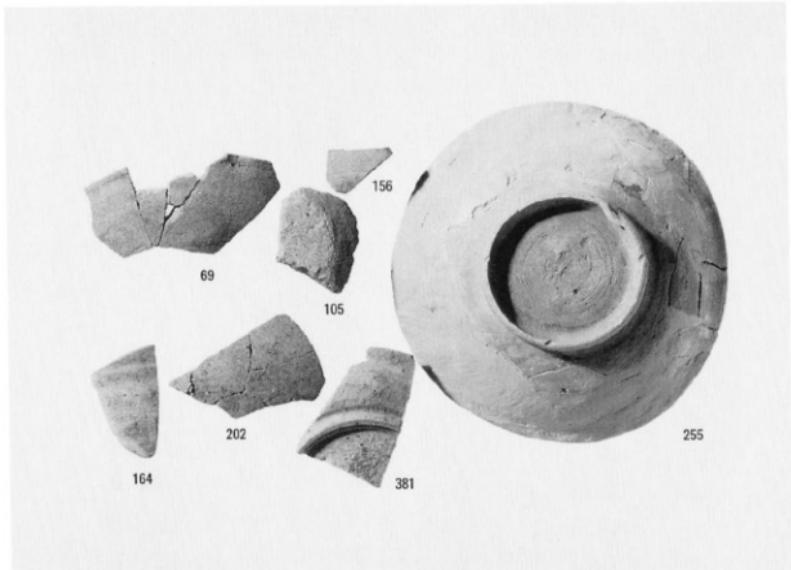
図版28 小瀬戸遺跡



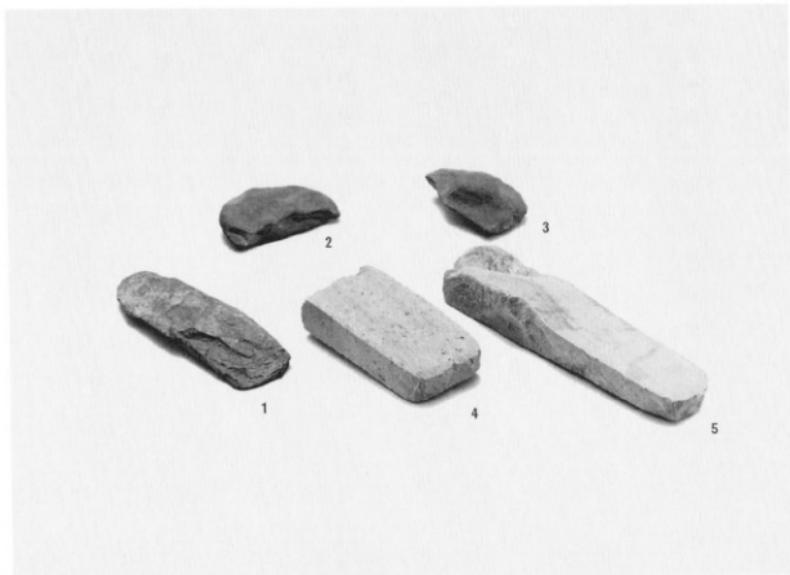
出土遺物19(土器18)



出土遺物20(土器19)

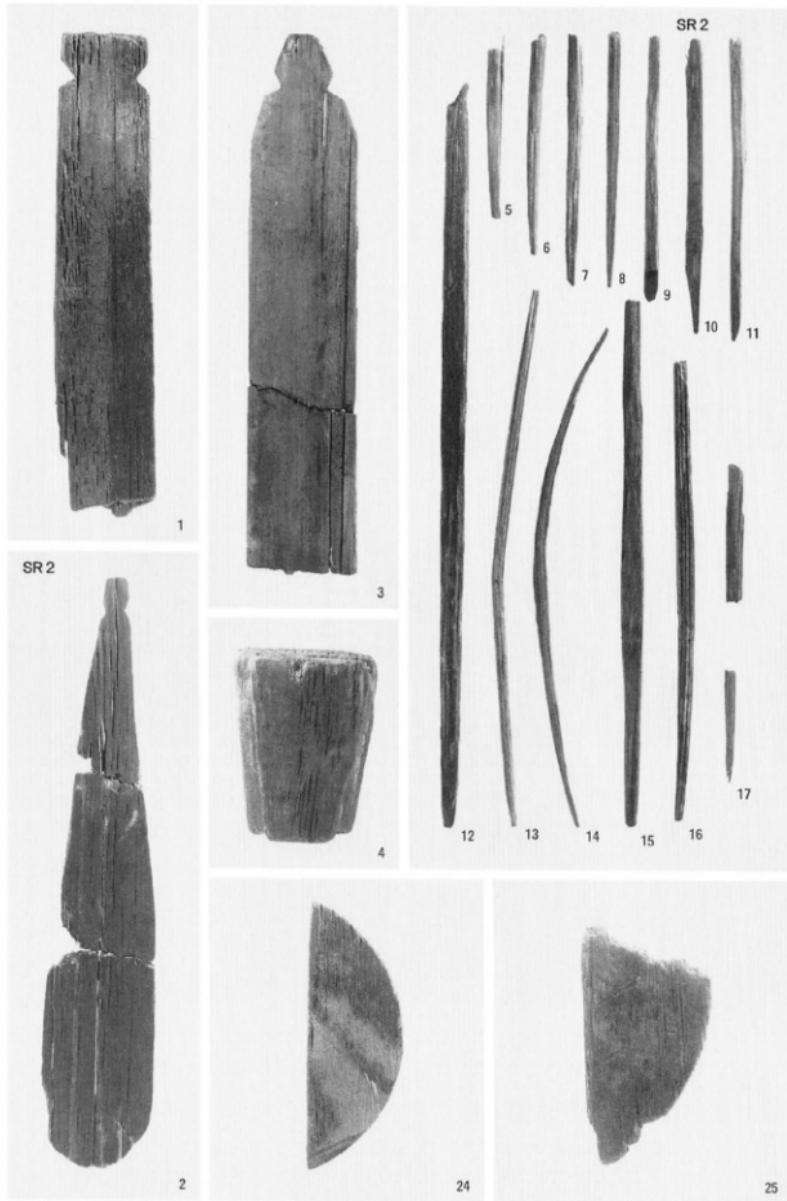


墨書き土器

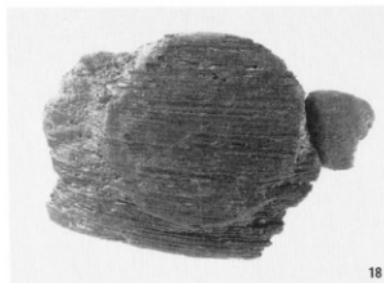


石器・石製品

図版30 小瀬戸遺跡



木製品(付札状木製品・栓・箸・曲物)



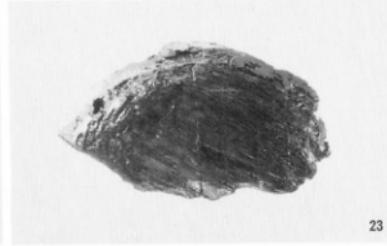
18



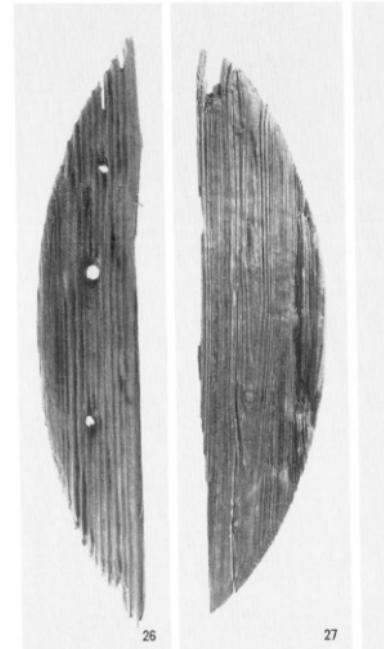
20



19



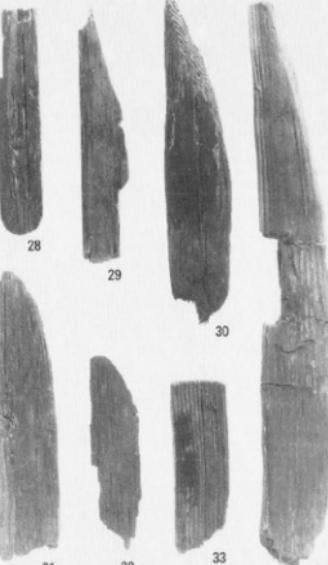
23



26



27



28

29

30

31

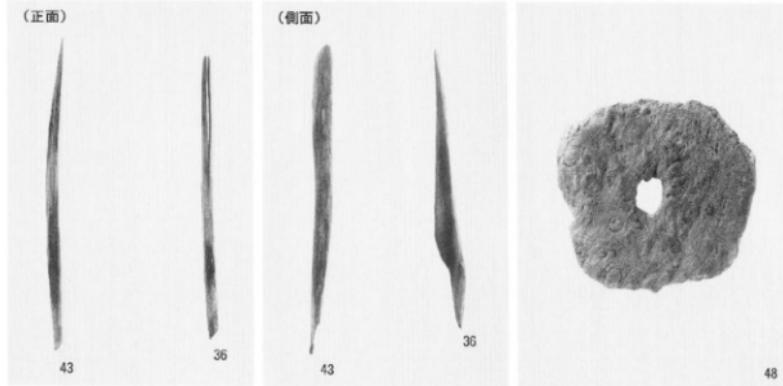
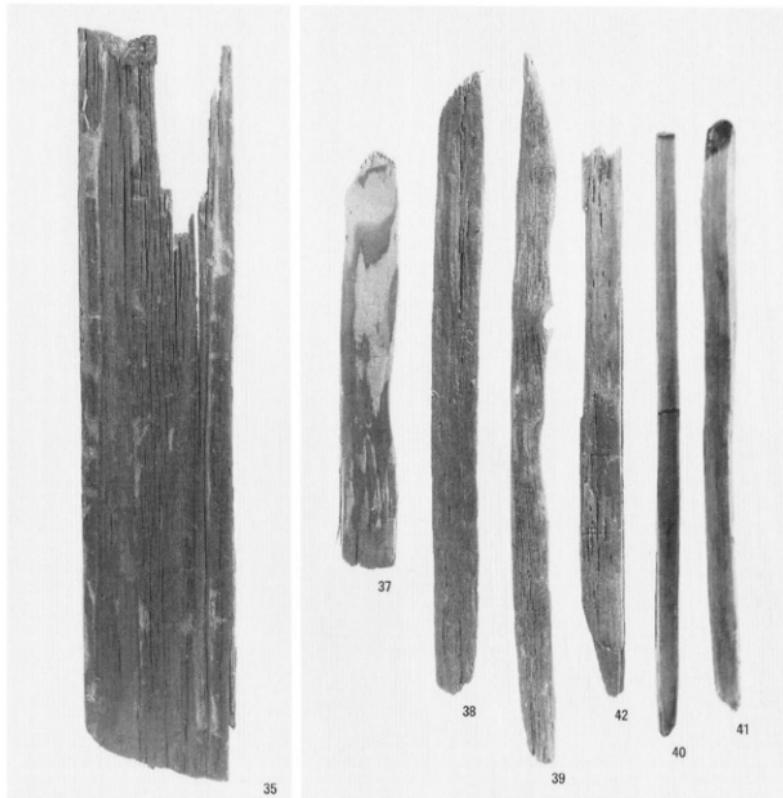
32

33

34

木製品(漆桶・桶・板材)

図版32 小瀬戸遺跡



木製品(板材)

SK11



44



45



46



47



49

SP251



50



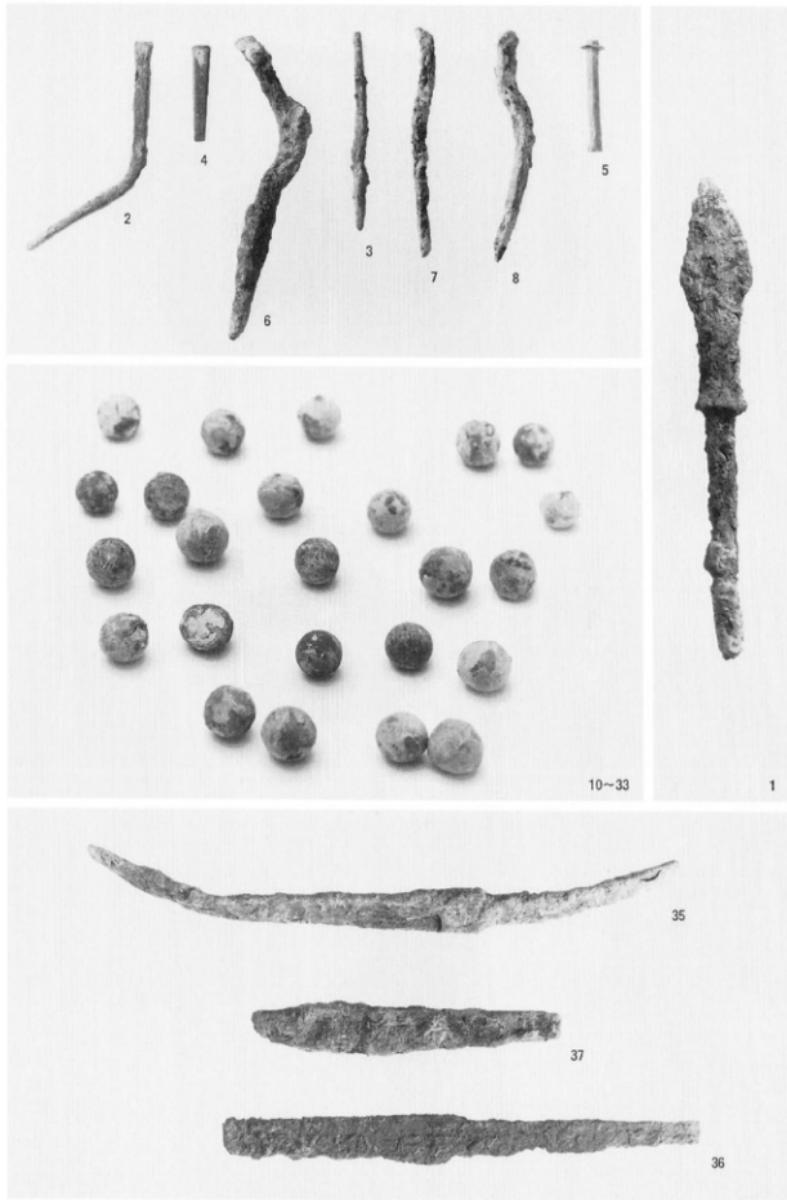
51



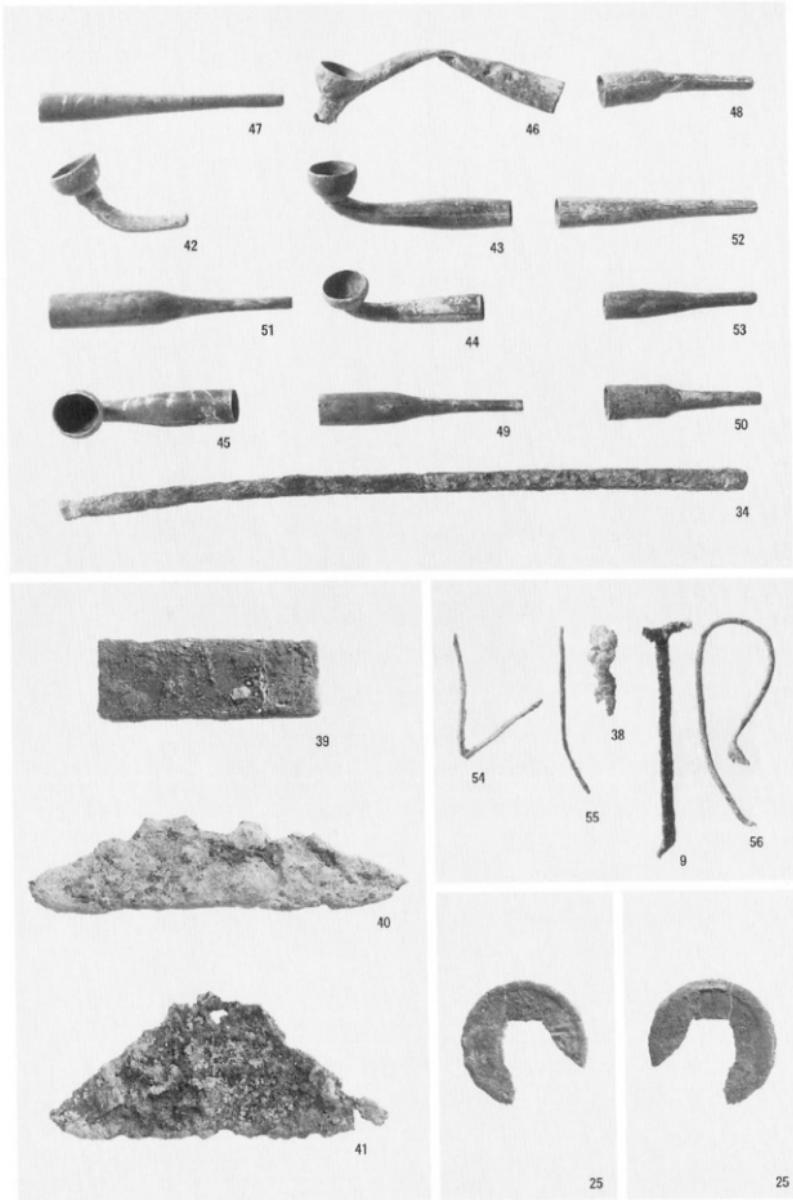
52

木製品(板材・柱根)

図版34 小瀬戸遺跡

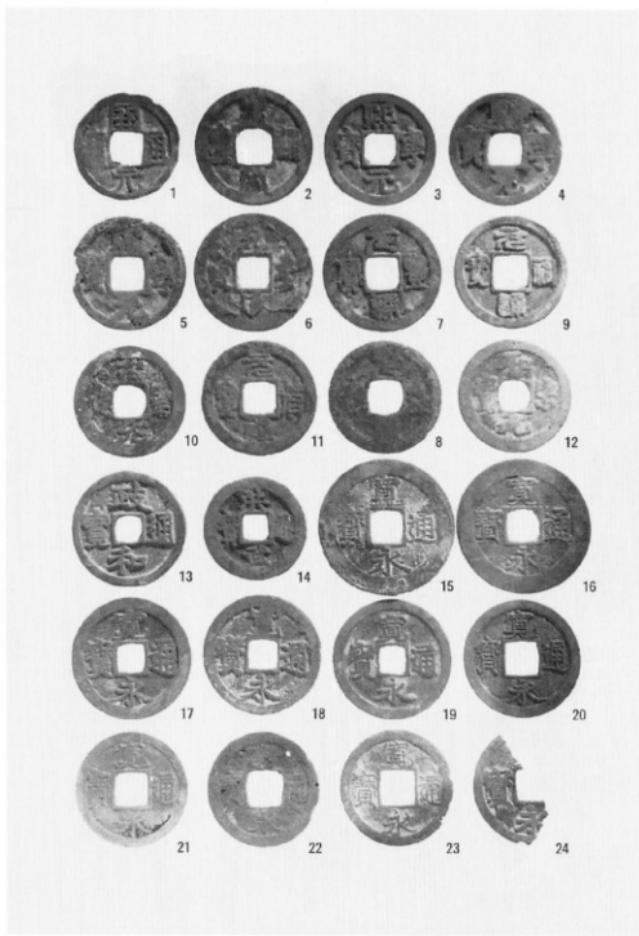


金属製品(鉄鏃・釘・鉄砲玉・刀子)

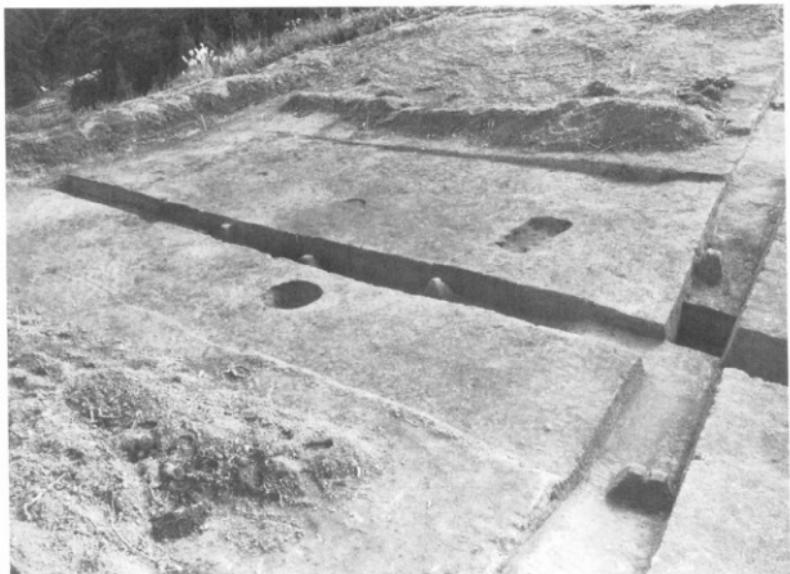


金属製品(キセル・火打金・火箸・釘・こうがい・鉄貨)

図版36 小瀬戸遺跡



錢 貨



SF 1・2(西より)



SX 1(西より)

図版38 栗ヶ沢遺跡



SD 1 遠景(西より)



SD 1 近景(北より)

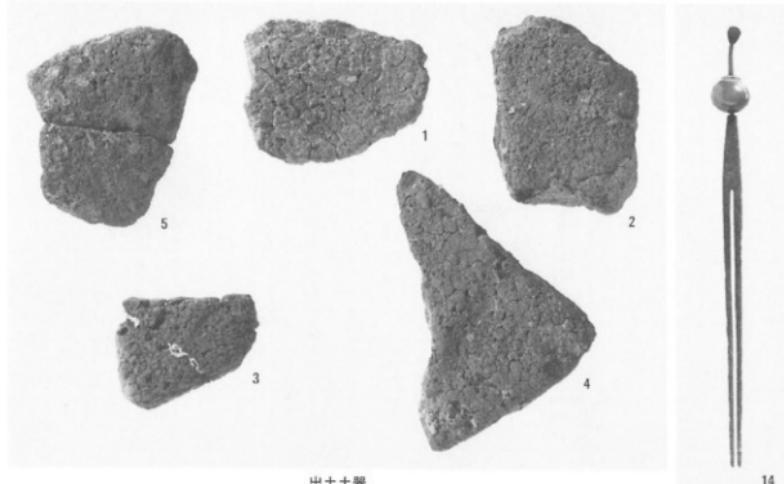


SD 2(東より)

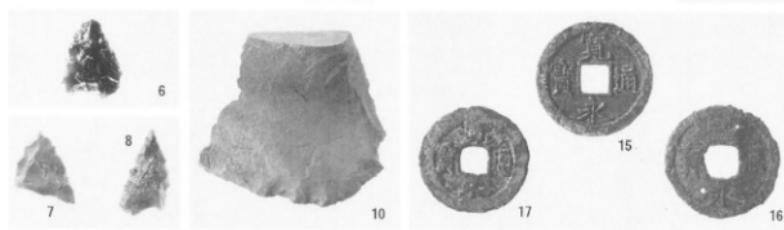


SF 5(北西より)

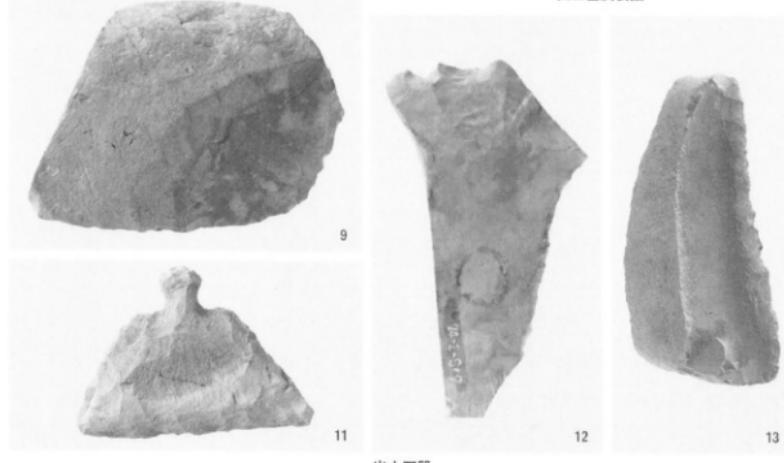
図版40 栗ヶ沢遺跡



出土土器



出土金属製品



出土石器

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第176集

小瀬戸遺跡・栗ヶ沢遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡市一1

平成19年3月26日発行

編集・発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹
FAX 054-262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹

